岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第131集

荒尾南遺跡B地区Ⅱ
(第５分冊)

２０１５
岐阜県文化財保護センター

荒尾南遺跡B地区Ⅱ
（第５分冊）

２０１５
岐阜県文化財保護センター

目次（第５分冊）

第５章　東部域の調査成果　……………………（藤田・河瀬・吉田・山本・小野木）……… 1
第１節　弥生時代前期の遺構と遺物……………………………………………………… 1
１　墓……………………………………………………………………………………… 2
２　溝状遺構……………………………………………………………………………… 10
３　土坑…………………………………………………………………………………… 16
第２節　弥生時代中期の遺構と遺物……………………………………………………… 18
１　方形周溝墓…………………………………………………………………………… 19
２　溝状遺構……………………………………………………………………………… 116
３　土坑…………………………………………………………………………………… 123
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物………………………………… 134
１　建物跡・柵跡………………………………………………………………………… 135

第１分冊目次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の方法と経過
第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境
第３章　調査の成果
第１節　基本層序
第２節　遺構の概要
第３節　遺物の概要
第４章　西部域の調査成果
第１節　縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構と遺物
第２節　弥生時代中期の遺構と遺物
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第２分冊目次

第４章　西部域の調査成果
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第３分冊目次

第４章　西部域の調査成果
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第４分冊目次

第４章　西部域の調査成果
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物
第４節　古墳時代中期以降の遺構と遺物
第５節　遺物包含層出土遺物
遺構一覧表
遺物観察表

第６分冊目次

第５章　東部域の調査成果
第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物
第４節　古墳時代中期以降の遺構と遺物
第５節　遺物包含層出土遺物

第７分冊目次

第５章　東部域の調査成果
遺構一覧表
遺物観察表
遺構全体図分割図

第８分冊目次

第６章　自然科学分析
第１節　分析の概要
第２節　放射性炭素年代測定
第３節　赤色顔料分析
第４節　花粉分析
第５節　プラント・オパール分析
第６節　堆積物粒度分析
第７節　樹種同定
第８節　種実同定
第９節　鍛冶関連遺物分析
第 10 節　金属製品分析
第 11 節　白色塊分析
第 12 節　粘土塊分析
第 13 節　昆虫遺体群集分析
第 14 節　地形環境
第７章　総括
第１節　方形周溝墓の様相
第２節　Ｂ地区における建物跡等の概観
第３節　土器組成の概観
第４節　土器の時期細分
第５節　石器類
第６節　木製品
第７節　金属製品
第８節　遺跡の変遷

第９分冊目次

写真図版

挿図目次

図 1527　東部域の弥生時代前期の遺構分布図 …… 1
図 1528　SZ170 遺構図 …… 2
図 1529　SZ170 遺物実測図 …… 3
図 1530　SZ171 遺構図 …… 4
図 1531　SZ171 遺物実測図 …… 5
図 1532　SZ174 遺構図 …… 5
図 1533　SZ174 遺物実測図 …… 6
図 1534　SZ192 遺構図 …… 6
図 1535　SZ192 遺物実測図 …… 7
図 1536　SZ221 遺物実測図 …… 7
図 1537　SZ221 遺構図 …… 8
図 1538　SZ177 遺構図 …… 9
図 1539　SZ177 遺物実測図 …… 9
図 1540　SZ193 遺構図 …… 10
図 1541　SZ193 遺物実測図 …… 10
図 1542　SD1085 下層遺構図（１） …… 11
図 1543　SD1085 下層遺構図（２） …… 12
図 1544　SD1085 下層遺構図（３） …… 13
図 1545　SD1085 下層遺物実測図（１） …… 14
図 1546　SD1085 下層遺物実測図（２） …… 15
図 1547　SK06080 遺物実測図 …… 16
図 1548　SK06080 遺構図 …… 16
図 1549　SK06082 遺構図 …… 17
図 1550　SK06082 遺物実測図 …… 17
図 1551　東部域の弥生時代中期の遺構分布図 …… 18
図 1552　東部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図 …… 19
図 1553　SZ066 遺構図（１） …… 20
図 1554　SZ066 遺構図（２） …… 21
図 1555　SZ071・SZ072 遺構図（１） …… 22
図 1556　SZ071・SZ072 遺構図（２） …… 23
図 1557　SZ071 遺物実測図 …… 24
図 1558　SZ075 遺構図（１） …… 25
図 1559　SZ075 遺構図（２） …… 26
図 1560　SZ075 遺物実測図 …… 27
図 1561　SZ078 遺構図 …… 28
図 1562　SZ083 遺構図 …… 29
図 1563　SZ083 遺物実測図 …… 30
図 1564　SZ085 遺構図 …… 30
図 1565　SZ172 遺構図 …… 32
図 1566　SZ172 遺物実測図 …… 32
図 1567　SZ173 遺構図 …… 33
図 1568　SZ173 遺物実測図 …… 34
図 1569　SZ175 遺構図（１） …… 35
図 1570　SZ175 遺構図（２） …… 36
図 1571　SZ175 遺構図（３） …… 37
図 1572　SZ175 遺物実測図 …… 38
図 1573　SZ176 遺物実測図 …… 39
図 1574　SZ176 遺構図 …… 39
図 1575　SZ178 遺構図 …… 40
図 1576　SZ178 遺物実測図 …… 40
図 1577　SZ179 遺構図（１） …… 41
図 1578　SZ179 遺構図（２） …… 42
図 1579　SZ179 遺物実測図 …… 42
図 1580　SZ180 遺構図 …… 45
図 1581　SZ180 遺物実測図 …… 46
図 1582　SZ181 遺物実測図 …… 47
図 1583　SZ181 遺構図 …… 47
図 1584　SZ182 遺構図 …… 48
図 1585　SZ182 遺物実測図 …… 49
図 1586　SZ183 遺構図 …… 50
図 1587　SZ183 遺物実測図 …… 50
図 1588　SZ184 遺構図 …… 51
図 1589　SZ184 遺物実測図 …… 51
図 1590　SZ185 遺構図（１） …… 53
図 1591　SZ185 遺構図（２） …… 54
図 1592　SZ185 遺物実測図 …… 54
図 1593　SZ186 遺構図 …… 55
図 1594　SZ186 遺物実測図 …… 55
図 1595　SZ187 遺構図 …… 56
図 1596　SZ188 遺構図 …… 57
図 1597　SZ188 遺物実測図 …… 58
図 1598　SZ189 遺構図 …… 59
図 1599　SZ189 遺物実測図 …… 60
図 1600　SZ190 遺構図（１） …… 62
図 1601　SZ190 遺構図（２） …… 63
図 1602　SZ190 遺物実測図（１） …… 64
図 1603　SZ190 遺物実測図（２） …… 65
図 1604　SZ190 遺物実測図（３） …… 66
図 1605　SZ191 遺構図 …… 67
図 1606　SZ191 遺物実測図 …… 68
図 1607　SZ194 遺構図 …… 68
図 1608　SZ194 遺物実測図 …… 69
図 1609　SZ195 遺構図（１） …… 71
図 1610　SZ195 遺構図（２） …… 72

図 1611　SZ195 遺物実測図 …… 72
図 1612　SZ196 遺構図 …… 74
図 1613　SZ196 遺物実測図 …… 75
図 1614　SZ197 遺構図（１） …… 75
図 1615　SZ197 遺構図（２） …… 76
図 1616　SZ197 遺物実測図 …… 76
図 1617　SZ198 遺構図 …… 77
図 1618　SZ199・SZ200 遺構図 …… 78
図 1619　SZ200 遺物実測図 …… 79
図 1620　SZ201 遺構図 …… 80
図 1621　SZ201 遺物実測図 …… 80
図 1622　SZ202 遺構図 …… 81
図 1623　SZ202 遺物実測図 …… 82
図 1624　SZ203 遺構図 …… 83
図 1625　SZ203 遺物実測図 …… 83
図 1626　SZ204 遺構図 …… 84
図 1627　SZ204 遺物実測図 …… 85
図 1628　SZ205 遺構図 …… 85
図 1629　SZ206 遺構図 …… 86
図 1630　SZ206 遺物実測図 …… 87
図 1631　SZ207 遺構図 …… 87
図 1632　SZ208 遺構図（１） …… 88
図 1633　SZ208 遺構図（２） …… 89
図 1634　SZ208 遺物実測図 …… 89
図 1635　SZ209 遺構図 …… 90
図 1636　SZ210 遺構図 …… 91
図 1637　SZ211 遺構図 …… 91
図 1638　SZ211 遺物実測図 …… 92
図 1639　SZ212 遺構図（１） …… 93
図 1640　SZ212 遺構図（２） …… 94
図 1641　SZ212 遺構図（３） …… 95
図 1642　SZ212 遺物実測図 …… 96
図 1643　SZ213 遺構図 …… 97
図 1644　SZ213 遺物実測図 …… 98
図 1645　SZ214 遺構図 …… 99
図 1646　SZ214 遺物実測図 …… 99
図 1647　SZ215 遺構図（１） …… 100
図 1648　SZ215 遺構図（２） …… 101
図 1649　SZ215 遺構図（３） …… 102
図 1650　SZ215 遺物実測図 …… 103
図 1651　SZ216 遺構図 …… 105
図 1652　SZ217 遺構図（１） …… 106
図 1653　SZ217 遺構図（２） …… 107
図 1654　SZ217 遺物実測図 …… 108
図 1655　SZ218 遺物実測図 …… 109
図 1656　SZ218 遺構図 …… 109
図 1657　SZ219 遺構図 …… 110
図 1658　SZ219 遺物実測図（１） …… 111
図 1659　SZ219 遺物実測図（２） …… 112
図 1660　SZ220 遺構図 …… 113
図 1661　SZ220 遺物実測図 …… 114
図 1662　SZ222 遺構図 …… 114
図 1663　SZ222 遺物実測図 …… 115
図 1664　SZ223 遺物実測図 …… 115
図 1665　SZ223 遺構図 …… 115
図 1666　東部域の弥生時代中期の
土坑・溝状遺構分布図 …… 116
図 1667　SD1098 遺構図 …… 117
図 1668　SD1098 遺物実測図 …… 117
図 1669　SD1099 遺構図 …… 117
図 1670　SD1099 遺物実測図 …… 118
図 1671　SD1119 遺構図 …… 118
図 1672　SD1139 遺構図 …… 119
図 1673　SD1163 遺構図 …… 119
図 1674　SD1163 遺物実測図 …… 120
図 1675　SD1166・SD1176 遺構図 …… 120
図 1676　SD1176 遺物実測図 …… 121
図 1677　SD1175 遺構図 …… 121
図 1678　SD1270 遺物実測図 …… 122
図 1679　SD1270 遺構図 …… 122
図 1680　SK05717 遺構図 …… 123
図 1681　SK05717 遺物実測図 …… 123
図 1682　SK06034 遺構図 …… 124
図 1683　SK06034 遺物実測図 …… 124
図 1684　SK06041 遺物実測図 …… 124
図 1685　SK06041 遺構図 …… 124
図 1686　SK06045 遺物実測図 …… 125
図 1687　SK06045 遺構図 …… 125
図 1688　SK06168 遺構図 …… 126
図 1689　SK06168 遺物実測図 …… 126
図 1690　SK06287 遺構図 …… 127
図 1691　SK06287 遺物実測図 …… 128
図 1692　SK06547 遺構図 …… 129
図 1693　SK06547 遺物実測図 …… 129
図 1694　SK06554 遺構図 …… 129
図 1695　SK06554 遺物実測図 …… 130
図 1696　SK06558 遺物実測図 …… 130
図 1697　SK06558 遺構図 …… 130

図 1698　SK06584 遺構図 …… 130
図 1699　SK06584 遺物実測図 …… 131
図 1700　SK07284・SK07285 遺構図 …… 133
図 1701　SK07284 遺物実測図 …… 133
図 1702　SK07285 遺物実測図 …… 133
図 1703　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の
　　遺構分布図 …… 134
図 1704　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の
　　竪穴住居跡分布図（１） …… 135
図 1705　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の
　　竪穴住居跡分布図（２） …… 136
図 1706　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の
　　竪穴住居跡分布図（３） …… 137
図 1707　SB114 遺構図 …… 138
図 1708　SB114 遺物実測図 …… 139
図 1709　SB116 遺構図（１） …… 139
図 1710　SB116 遺構図（２） …… 140
図 1711　SB455 遺物実測図 …… 141
図 1712　SB455 遺構図 …… 142
図 1713　SB456 遺構図 …… 143
図 1714　SB457 遺構図 …… 144
図 1715　SB458 遺構図 …… 145
図 1716　SB458 遺物実測図 …… 146
図 1717　SB459 遺構図 …… 146
図 1718　SB460 遺構図 …… 147
図 1719　SB461 遺構図 …… 148
図 1720　SB461 遺物実測図 …… 149
図 1721　SB462 遺構図 …… 149
図 1722　SB462 遺物実測図 …… 150
図 1723　SB463 遺構図 …… 151
図 1724　SB464 遺構図 …… 152
図 1725　SB464 遺物実測図 …… 152
図 1726　SB465 遺構図 …… 153
図 1727　SB465 遺物実測図 …… 154
図 1728　SB466 遺物実測図 …… 154
図 1729　SB466 遺構図（１） …… 155
図 1730　SB466 遺構図（２） …… 156
図 1731　SB467 遺構図 …… 157
図 1732　SB468 遺構図 …… 158
図 1733　SB469 遺構図 …… 158
図 1734　SB470 遺構図（１） …… 159
図 1735　SB470 遺構図（２） …… 160
図 1736　SB470 遺物実測図 …… 161
図 1737　SB471 遺構図 …… 162
図 1738　SB471 遺物実測図 …… 162
図 1739　SB472 遺構図 …… 163
図 1740　SB473 遺物実測図 …… 164
図 1741　SB473 遺構図 …… 164
図 1742　SB474 遺物実測図 …… 165
図 1743　SB474 遺構図 …… 165
図 1744　SB475 遺構図（１） …… 166
図 1745　SB475 遺構図（２） …… 167
図 1746　SB475 遺物実測図 …… 167
図 1747　SB476 遺構図 …… 167
図 1748　SB476 遺物実測図 …… 168
図 1749　SB477 遺物実測図 …… 168
図 1750　SB477 遺構図 …… 169
図 1751　SB478 遺構図 …… 169
図 1752　SB478 遺物実測図 …… 170
図 1753　SB479 遺構図（１） …… 170
図 1754　SB479 遺構図（２） …… 171
図 1755　SB479 遺物実測図 …… 172
図 1756　SB480 遺構図 …… 173
図 1757　SB480 遺物実測図 …… 173
図 1758　SB481 遺構図 …… 174
図 1759　SB481 遺物実測図 …… 174
図 1760　SB482 遺構図 …… 175
図 1761　SB482 遺物実測図 …… 176
図 1762　SB483 遺構図（１） …… 178
図 1763　SB483 遺構図（２） …… 179
図 1764　SB483 遺物実測図（１） …… 179
図 1765　SB483 遺物実測図（２） …… 180
図 1766　SB484 遺構図 …… 181
図 1767　SB484 遺物実測図 …… 182
図 1768　SB485 遺構図 …… 182
図 1769　SB486 遺構図（１） …… 183
図 1770　SB486 遺構図（２） …… 184
図 1771　SB486 遺構図（３） …… 185
図 1772　SB486 遺物実測図 …… 186
図 1773　SB487 遺構図（１） …… 188
図 1774　SB487 遺構図（２） …… 189
図 1775　SB487 遺物実測図 …… 189
図 1776　SB488 遺構図 …… 190
図 1777　SB488 遺物実測図 …… 190
図 1778　SB489 遺構図 …… 191
図 1779　SB489 遺物実測図 …… 192
図 1780　SB490 遺構図 …… 192
図 1781　SB490 遺物実測図 …… 193

図 1782　SB491 遺構図 …… 193
図 1783　SB491 遺物実測図 …… 194
図 1784　SB492 遺構図（１） …… 195
図 1785　SB492 遺構図（２） …… 196
図 1786　SB492 遺物実測図 …… 196
図 1787　SB493 遺構図（１） …… 197
図 1788　SB493 遺構図（２） …… 198
図 1789　SB493 遺物実測図 …… 198
図 1790　SB494 遺構図（１） …… 199
図 1791　SB494 遺構図（２） …… 200
図 1792　SB494 遺物実測図 …… 201
図 1793　SB495 遺構図 …… 202
図 1794　SB495 遺物実測図 …… 202
図 1795　SB496 遺物実測図 …… 203
図 1796　SB496 遺構図 …… 203
図 1797　SB497 遺構図 …… 204
図 1798　SB497 遺物実測図 …… 204
図 1799　SB498 遺構図 …… 205
図 1800　SB498 遺物実測図 …… 205
図 1801　SB499 遺物実測図 …… 206
図 1802　SB499 遺構図 …… 206
図 1803　SB500 遺構図 …… 206
図 1804　SB500 遺物実測図 …… 207
図 1805　SB501 遺構図（１） …… 208
図 1806　SB501 遺構図（２） …… 209
図 1807　SB501 遺物実測図 …… 210
図 1808　SB502 遺構図 …… 211
図 1809　SB502 遺物実測図 …… 212
図 1810　SB503 遺構図（１） …… 213
図 1811　SB503 遺構図（２） …… 214
図 1812　SB503 遺物実測図 …… 215
図 1813　SB504 遺構図 …… 216
図 1814　SB504 遺物実測図 …… 216
図 1815　SB505 遺構図 …… 217
図 1816　SB506 遺構図（１） …… 218
図 1817　SB506 遺構図（２） …… 219
図 1818　SB506 遺物実測図 …… 220
図 1819　SB507 遺構図 …… 221
図 1820　SB508 遺構図 …… 222
図 1821　SB508 遺物実測図 …… 223
図 1822　SB509 遺物実測図 …… 223
図 1823　SB509 遺構図 …… 224
図 1824　SB510 遺構図 …… 225
図 1825　SB510 遺物実測図 …… 226
図 1826　SB511 遺構図（１） …… 226
図 1827　SB511 遺物実測図 …… 227
図 1828　SB511 遺構図（２） …… 227
図 1829　SB512 遺構図 …… 228
図 1830　SB512 遺物実測図 …… 229
図 1831　SB513 遺構図 …… 229
図 1832　SB514 遺構図 …… 230
図 1833　SB515 遺物実測図 …… 231
図 1834　SB515 遺構図 …… 231
図 1835　SB516 遺物実測図 …… 231
図 1836　SB516 遺構図 …… 232
図 1837　SB517 遺構図（１） …… 233
図 1838　SB517 遺構図（２） …… 234
図 1839　SB517 遺物実測図 …… 234
図 1840　SB518 遺構図 …… 235
図 1841　SB518 遺物実測図 …… 236
図 1842　SB519 遺構図（１） …… 237
図 1843　SB519 遺構図（２） …… 238
図 1844　SB519 遺物実測図 …… 238
図 1845　SB520 遺構図 …… 239
図 1846　SB520 遺物実測図 …… 240
図 1847　SB521 遺構図 …… 241
図 1848　SB521 遺物実測図 …… 242
図 1849　SB522 遺構図（１） …… 242
図 1850　SB522 遺構図（２） …… 243
図 1851　SB522 遺物実測図 …… 243
図 1852　SB523 遺構図 …… 244
図 1853　SB523 遺物実測図 …… 245
図 1854　SB524 遺構図 …… 246
図 1855　SB524 遺物実測図 …… 247
図 1856　SB525 遺構図 …… 248
図 1857　SB525 遺物実測図 …… 248
図 1858　SB526 遺構図 …… 249
図 1859　SB527 遺構図 …… 249
図 1860　SB527 遺物実測図 …… 250
図 1861　SB528 遺構図 …… 250
図 1862　SB528 遺物実測図 …… 251
図 1863　SB529 遺構図 …… 251
図 1864　SB529 遺物実測図 …… 252
図 1865　SB530 遺構図 …… 253
図 1866　SB531 遺構図（１） …… 254
図 1867　SB531 遺構図（２） …… 255
図 1868　SB531 遺構図（３） …… 256
図 1869　SB531 遺物実測図 …… 257

図 1870　SB532 遺構図 ･････････････････････････ 259
図 1871　SB532 遺物実測図 ･････････････････････ 260
図 1872　SB533 遺構図 ･････････････････････････ 261
図 1873　SB533 遺物実測図 ･････････････････････ 262
図 1874　SB534 遺構図（１）･････････････････････ 262
図 1875　SB534 遺構図（２）･････････････････････ 263
図 1876　SB534 遺構図（３）･････････････････････ 264
図 1877　SB534 遺物実測図 ･････････････････････ 265
図 1878　SB535 遺構図 ･････････････････････････ 266
図 1879　SB536 遺構図 ･････････････････････････ 267
図 1880　SB536 遺物実測図 ･････････････････････ 268
図 1881　SB537 遺構図（１）･････････････････････ 269
図 1882　SB537 遺構図（２）･････････････････････ 270
図 1883　SB537 遺物実測図（１）･････････････････ 272
図 1884　SB537 遺物実測図（２）･････････････････ 274
図 1885　SB537 遺物実測図（３）･････････････････ 275
図 1886　SB538 遺構図（１）･････････････････････ 276
図 1887　SB538 遺構図（２）･････････････････････ 277
図 1888　SB538 遺物実測図 ･････････････････････ 277
図 1889　SB539 遺構図（１）･････････････････････ 278
図 1890　SB539 遺構図（２）･････････････････････ 279
図 1891　SB539 遺物実測図 ･････････････････････ 279
図 1892　SB540 遺構図（１）･････････････････････ 281
図 1893　SB540 遺構図（２）･････････････････････ 282
図 1894　SB540 遺物実測図 ･････････････････････ 283
図 1895　SB541 遺構図（１）･････････････････････ 285
図 1896　SB541 遺構図（２）･････････････････････ 286
図 1897　SB541 遺物実測図 ･････････････････････ 287
図 1898　SB542 遺構図（１）･････････････････････ 289
図 1899　SB542 遺構図（２）･････････････････････ 290
図 1900　SB542 遺物実測図 ･････････････････････ 291
図 1901　SB543 遺構図 ･････････････････････････ 293
図 1902　SB543 遺物実測図 ･････････････････････ 293
図 1903　SB544 遺物実測図 ･････････････････････ 294
図 1904　SB544 遺構図 ･････････････････････････ 294
図 1905　SB545 遺構図（１）･････････････････････ 295
図 1906　SB545 遺構図（２）･････････････････････ 296
図 1907　SB545 遺物実測図 ･････････････････････ 296
図 1908　SB546 遺物実測図 ･････････････････････ 297
図 1909　SB546 遺構図 ･････････････････････････ 297
図 1910　SB547 遺構図 ･････････････････････････ 298
図 1911　SB547 遺物実測図 ･････････････････････ 299
図 1912　SB548 遺構図 ･････････････････････････ 300
図 1913　SB548 遺物実測図 ･････････････････････ 300
図 1914　SB549 遺構図 ･････････････････････････ 301
図 1915　SB549 遺物実測図 ･････････････････････ 302
図 1916　SB550 遺構図 ･････････････････････････ 302
図 1917　SB550 遺物実測図 ･････････････････････ 302
図 1918　SB551 遺物実測図 ･････････････････････ 303
図 1919　SB551 遺構図 ･････････････････････････ 303
図 1920　SB552 遺構図 ･････････････････････････ 304
図 1921　SB552 遺物実測図 ･････････････････････ 305
図 1922　SB553 遺物実測図 ･････････････････････ 305
図 1923　SB553 遺構図（１）･････････････････････ 306
図 1924　SB553 遺構図（２）･････････････････････ 307
図 1925　SB554 遺構図（１）･････････････････････ 308
図 1926　SB554 遺構図（２）･････････････････････ 309
図 1927　SB554 遺構図（３）･････････････････････ 310
図 1928　SB554 遺構図（４）･････････････････････ 311
図 1929　SB554 遺物実測図 ･････････････････････ 312
図 1930　SB555 遺構図（１）･････････････････････ 314
図 1931　SB555 遺構図（２）･････････････････････ 315
図 1932　SB555 遺構図（３）･････････････････････ 316
図 1933　SB555 遺構図（４）･････････････････････ 317
図 1934　SB555 遺物実測図（１）･････････････････ 318
図 1935　SB555 遺物実測図（２）･････････････････ 319
図 1936　SB556 遺構図（１）･････････････････････ 321
図 1937　SB556 遺構図（２）･････････････････････ 322
図 1938　SB556 遺物実測図 ･････････････････････ 323
図 1939　SB557 遺構図 ･････････････････････････ 324
図 1940　SB557 遺物実測図 ･････････････････････ 325
図 1941　SB558 遺構図（１）･････････････････････ 326
図 1942　SB558 遺構図（２）･････････････････････ 327
図 1943　SB558 遺物実測図 ･････････････････････ 328
図 1944　SB559 遺構図（１）･････････････････････ 330
図 1945　SB559 遺構図（２）･････････････････････ 331
図 1946　SB559 遺物実測図 ･････････････････････ 332
図 1947　SB560 遺構図（１）･････････････････････ 333
図 1948　SB560 遺物実測図 ･････････････････････ 334
図 1949　SB560 遺構図（２）･････････････････････ 334

第５章　東部域の調査成果

第１節　弥生時代前期の遺構と遺物

東部域の弥生時代前期（Ⅰ期）の遺構として、墓７基、溝状遺構１条、土坑２基について、以下に報告する。

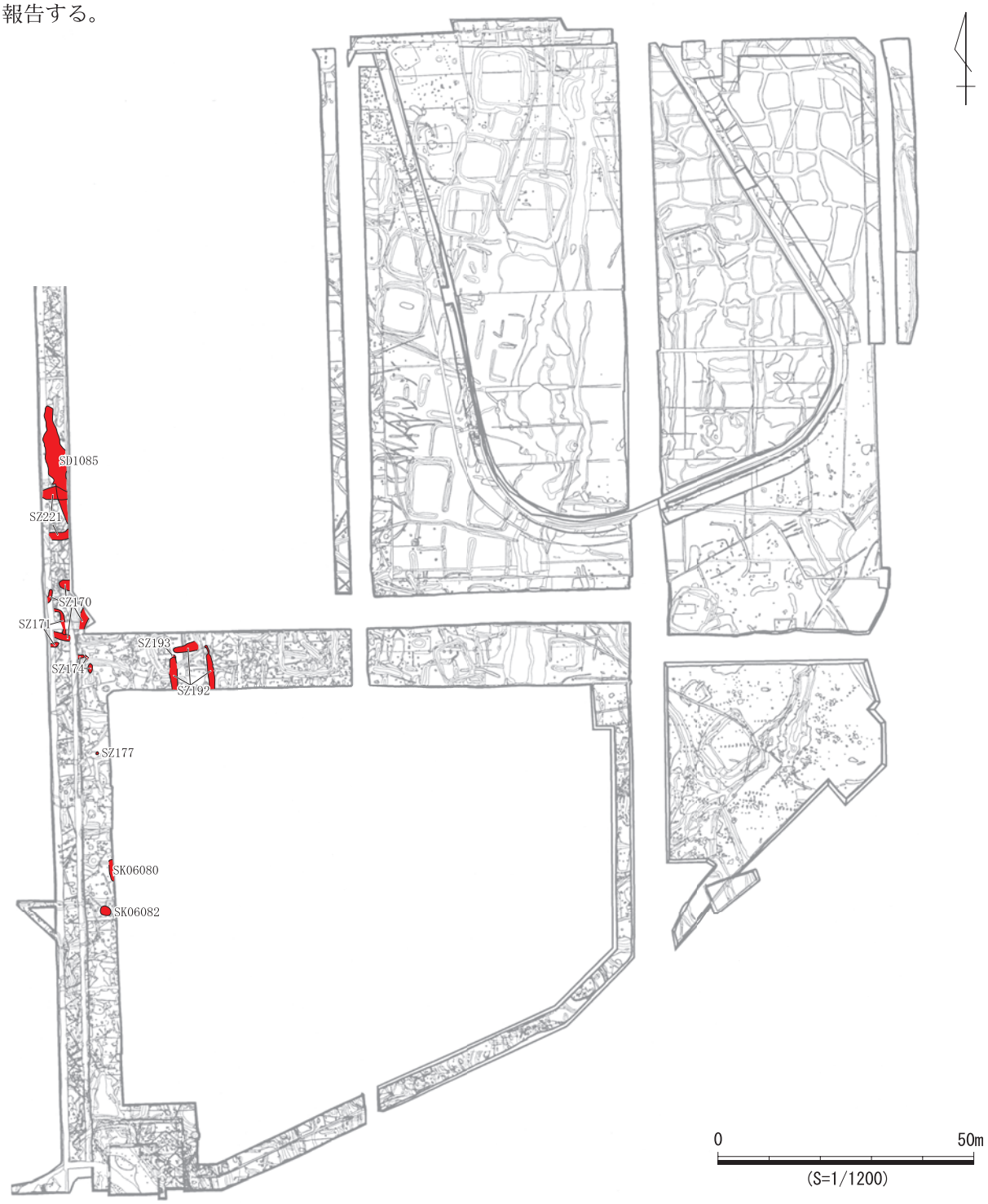


図 1527　東部域の弥生時代前期の遺構分布図

１　墓

方形周溝墓５基、土器棺墓２基を検出した。以下、順に記載する。

(1)　方形周溝墓

SZ170（遺構：図 1528、遺物：図 1529）

検出状況　東部西側中央に位置し、南西側と北東側は調査区域外にある。本遺構付近は方形周溝墓が密集する範囲であり、東溝はSZ172に、南溝はSZ171に切られ、遺構の重複関係では時期的に最も古

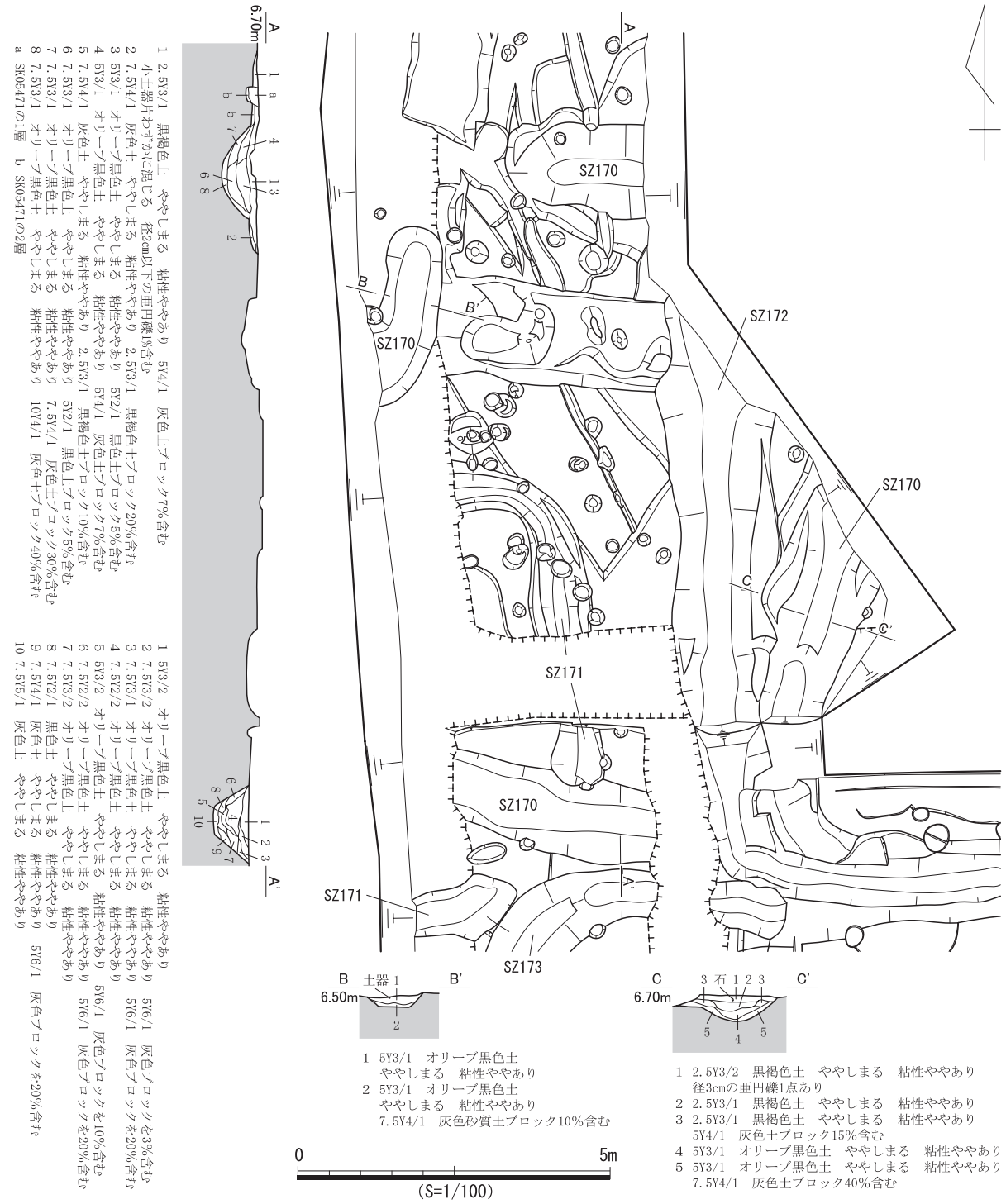


図 1528　SZ170 遺構図

い。南溝の平面形は明瞭であったが、東溝はSZ172との切り合い関係の把握に手間取った。なお、北溝と西溝の隅部は途切れており、南溝の東端は南溝が切られるSZ172の西壁面に南溝の断面形が確認できなかったことから、南溝と東溝の隅部も途切れていると判断した。以上のことから、本遺構は南北に長い四隅切れの方形周溝墓と判断した。

方台部　南北長約10.0ｍ、東西長約7.0ｍの南北に長い不整方形を呈し、主軸はやや東へ振っている。北辺と南辺はおよそ直線的であり、北溝と西溝との間は約1.5ｍ離れている。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.9ｍ～1.9ｍ、深さ約0.2ｍ～0.6ｍであり、東溝の幅が広い。断面形は逆台形、もしくは底面が丸みを帯びて壁面の傾斜が緩い形状である。底面は北溝と西溝がほぼ平坦であるのに対し、東溝は南端が、南溝は東端が深くなる。特に南溝は西端が東端よりも約40㎝高く、これは西端付近の基底面がⅥ層、東端付近の基底面がⅤ層であり、基底面の硬度差によるものと考えられる。埋土は２～10層に分層でき、南北溝はブロック土を含む壁面崩落土の堆積が顕著である。

遺物出土状況　北溝から土器135点、東溝から土器196点、石器類１点、南溝から土器77点、西溝から土器55点が出土した。出土土器はⅠ期遠賀川系土器が目立ち、中には初期のものも含まれる。また、縄文時代晩期、Ⅳ期、Ⅵ期、Ⅶ期の土器片も上層からわずかに出土した。供献土器と判断できる遺物は出土していない。

出土遺物　5524は縄文晩期後半の深鉢。口縁部はほぼ直立し、端部が丸く、肥厚する。外面にはケズリが認められる。5525はⅠ期壺口縁部で、緩やかに外反する。外面には、２条１組の半截竹管による太い沈線が認められ、端部直下から斜行する。現状では、左下がり方向と右下がり方向の施文が認められる。5526はⅠ期壺の胴部片。３条１組と考えられる太い沈線が認められる。5527～5529はⅠ期遠賀川系土器の壺。5527は口縁部で、弱く外反する。肥厚する端部には沈線が１条認められる。5528は胴部で、頸部と胴部の境に削り出し段が認められる。5529は底部。5530はⅠ期甕底部。外面に縦方向のハケ目が残る。5531、5532はⅠ期甕。5531は口縁部が弱く外反し、内外面には摩耗しているが条痕が認められる。

時期　出土遺物の時期と、四隅切れの方形周溝墓であること、Ⅰ期と考えられるSZ171に切られることなどから、Ⅰ期と考えられる。

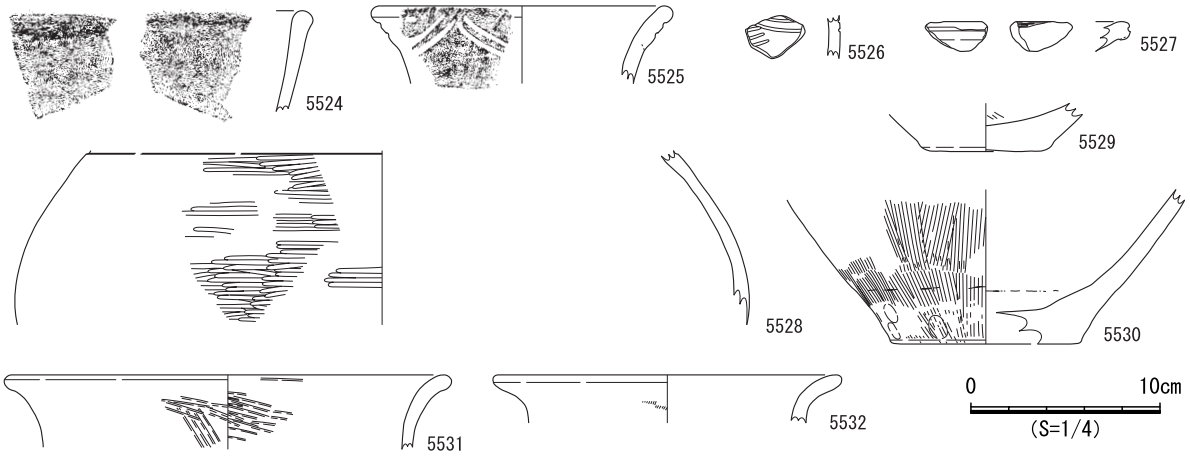


図1529　SZ170遺物実測図

SZ171（遺構：図 1530、遺物：図 1531）

検出状況　東部西側中央に位置し、西側は調査区域外にのびる。東溝はSZ170を切っており、南溝はSZ173と接している。検出時の埋土は基盤層（Ｖ層）と明確に識別できたものの、平面形は漸移的であった。

方台部　南北長約6.4ｍであり、およそ方形状を呈する。東辺はわずかに湾曲しており、南溝と東溝との間は約1.8ｍ離れている。中央付近には周溝と類似する埋土を有するSK05478が位置する。SK05478は掘形が浅く、底面が平坦で、埋土が単層である。出土遺物が少なく小片であるため時期や性格は不明であるが、遺構埋土が弥生時代後期以降のものとは明らかに異なり、主体部である可能性もある。なお、墳丘盛土は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～0.9ｍ、深さ約0.2ｍ～0.4ｍであり、南東隅は途切れ、北東隅はやや幅が狭く、丸みを帯びている。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかで、北溝と東溝は掘形上方が大きく開く。底面の高さは北溝、東溝、南溝ともにほぼ同じであり、南東隅の溝が途切れる部分の壁面の傾斜は緩やかである。埋土は２～４層に分層でき、東溝南端に亜円礫がわずかに混入する。

遺物出土状況　北・東溝から土器45点、南溝から土器４点が出土した。縄文時代晩期、Ⅰ期、Ⅴ～Ⅶ期の土器片が出土しているが、割合としてはⅠ期遠賀川系土器が多い。また、Ⅱ期～Ⅳ期の土器片は確認できず、供献土器と判断できるものはなかった。

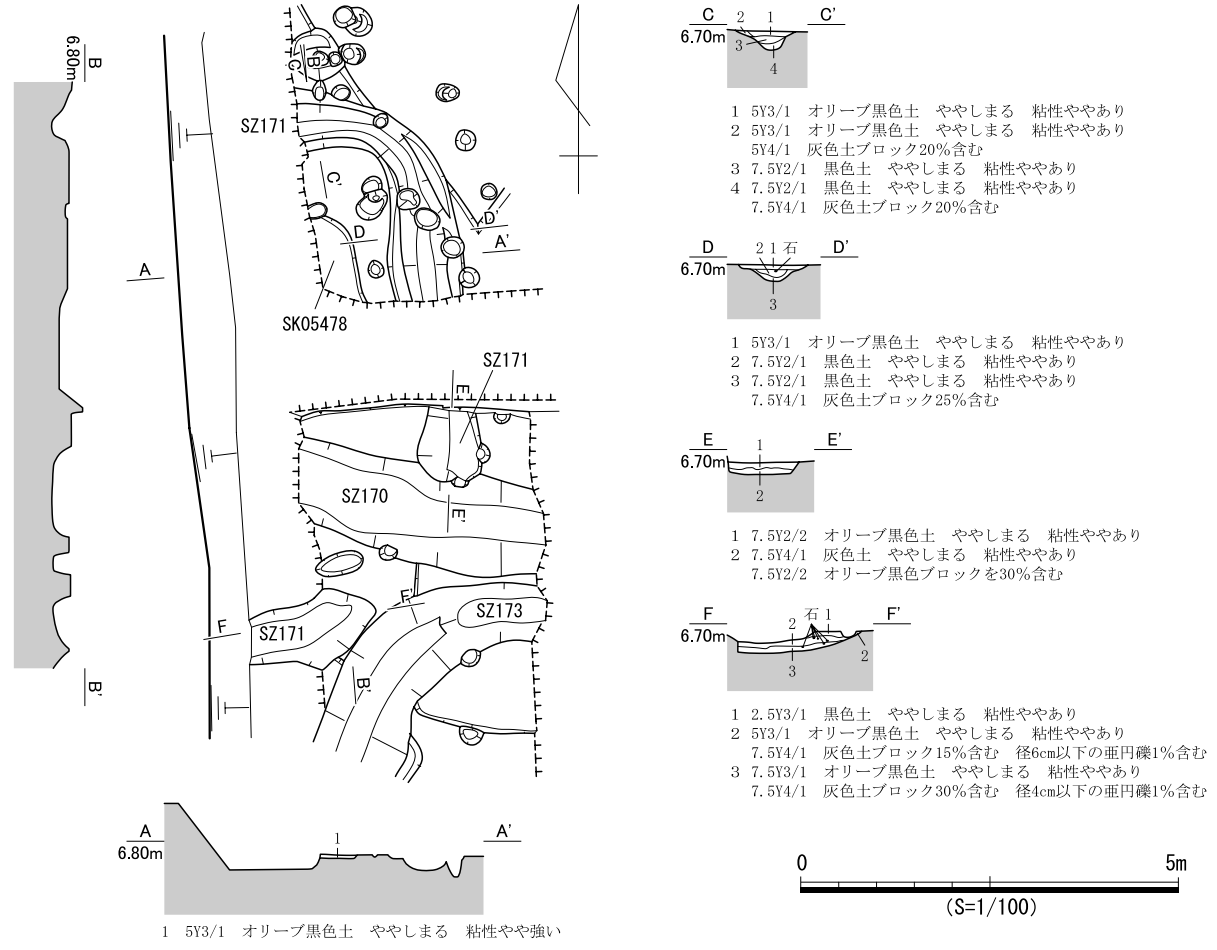


図 1530　SZ171 遺構図

出土遺物　5533、5534はともにⅠ期遠賀川系の土器片である。5533は壺胴部。木葉文が認められる。5534は甕。口縁部が逆Ｌ字状に強く屈曲し、端部には刺突を加える。

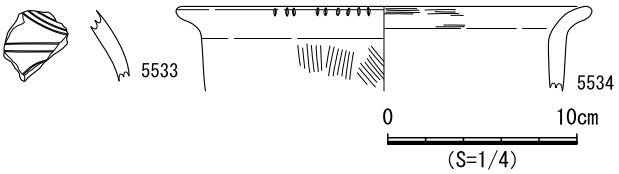


図 1531　SZ171 遺物実測図

時期　供献土器が出土していないため不明であるが、出土遺物はⅠ期の土器片が多いことからⅠ期の遺構として報告する。

SZ174（遺構：図 1532、遺物：図 1533）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。SZ173とSZ175に切られ、北溝の西端は撹乱により失われている。また、東溝とSK06019との関連性をサブトレンチにて調査した結果、両者の連続性を確認できなかったため、東溝の南端はSK06019の北側で収束すると判断した。なお、平面形は不明瞭であり、西溝と南溝は検出できなかった。

方台部　遺構の重複が著しく、各辺及び隅部の形状や規模は不明である。しかし、周溝の配置から、方台部はおよそ方形を呈すると考えられる。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～1.0ｍ、深さ約0.3ｍである。隅部はSZ173とSZ175に切られて詳細は不明だが、わずかに北東壁面を確認できたことから、本来は北溝と東溝は途切れていないと考えられる。その断面形は北溝が逆台形状であるが、東溝は底面がわずかに丸みを帯び、壁面の傾斜も緩やかである。埋土は３～５層に分層し、北溝はブロック土の混入が目立つものの、東溝は最下層においてわずかに含まれる程度である。

遺物出土状況　北溝から土器14点、東溝から土器29点が、埋土中から散在して出土した。遺物の出土数は少なく、大半は破片であり、供献土器の出土は確認できなかった。縄文時代晩期～Ⅰ期、Ⅵ期～Ⅶ期の土器片が出土した。

出土遺物　5535はⅠ期遠賀川系甕。頸部下方に、現状で３条の沈線が認められる。5536は縄文時代

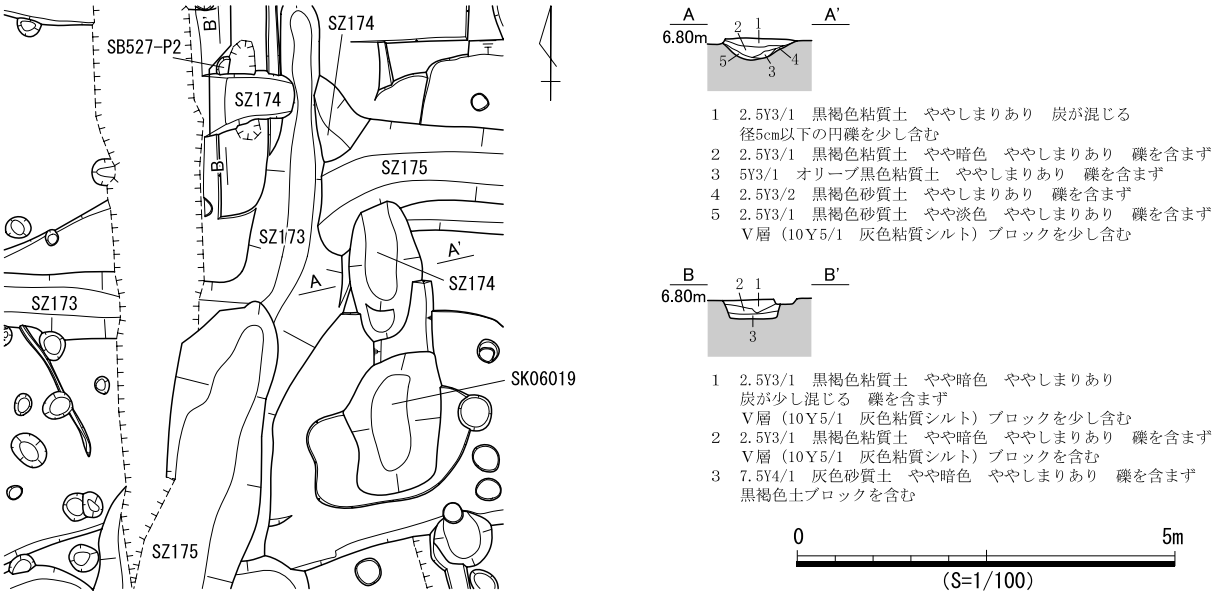


図 1532　SZ174 遺構図

晩期後半の深鉢。口縁部外面には条痕が残り、端部には二枚貝によるキザミが認められる。端部内面には沈線が１条認められる。

時期　Ⅲ期～Ⅳ期のSZ175、Ⅳ期のSZ173に切られることと出土遺物の時期から、Ⅰ期と考えられる。

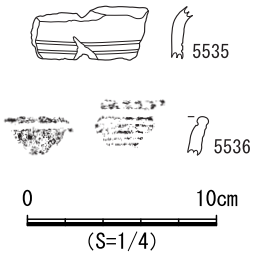
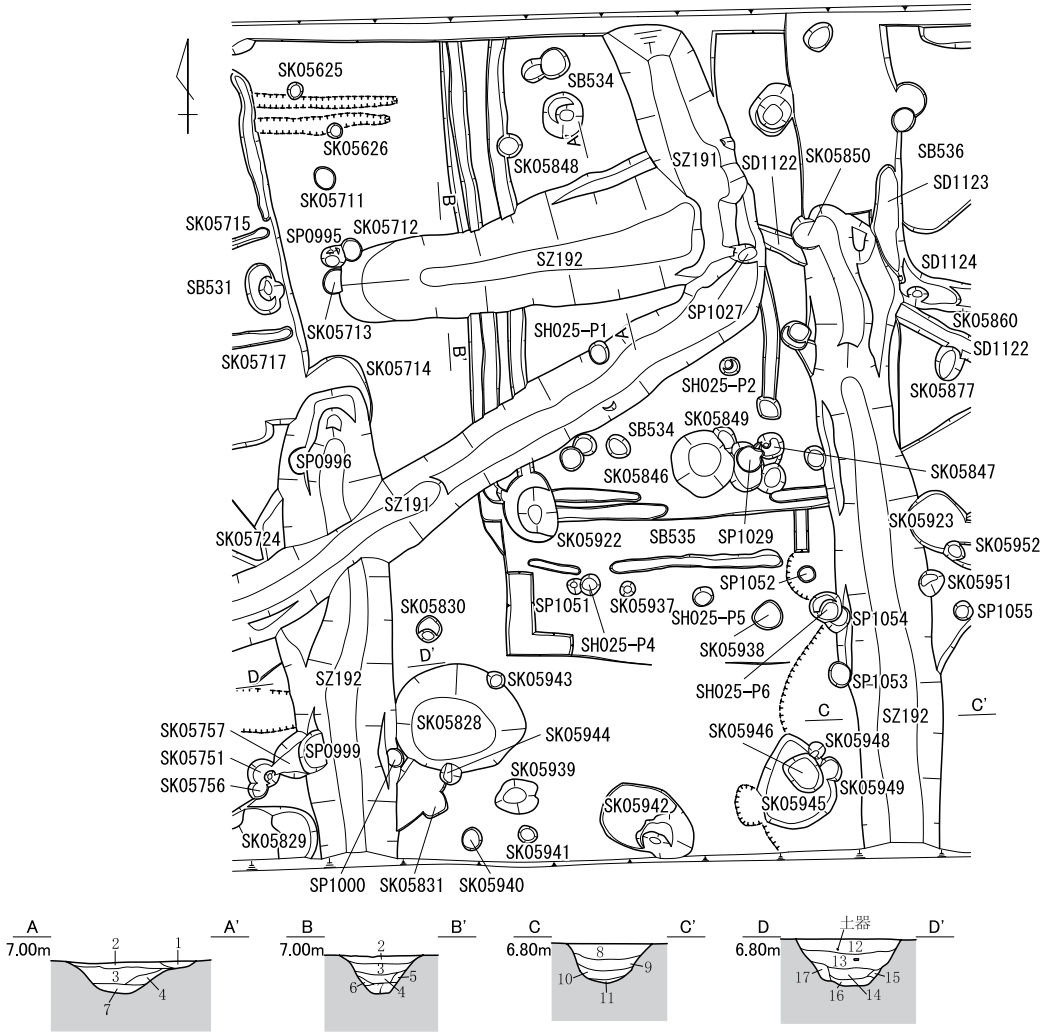


図 1533　SZ174 遺物実測図

SZ192（遺構：図 1534、遺物：図 1535）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、南溝は調査区域外にある。遺構の重複が著しいため平面形は不明瞭であり、北・西溝はSZ191に切られている。

方台部　各辺ともに直線的に延びる。その規模は東西長約6.8ｍ～7.0ｍ、南北長7.8ｍ以上であり、平



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる
　径3cm以下の円礫を少し含む
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
4　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり
　炭が少し混じる　礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
7　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　砂が混じる　礫を含まず
8　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
　径3cm以下の円礫を少し含む
9　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が少し混じる 礫を含まず
10　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
11　7.5Y4/1　灰色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
12　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　礫を含まず
　黒土ブロックを少し含む
13　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
14　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
15　7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
16　5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　砂が混じる　礫を含まず
17　7.5Y4/1　灰色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　砂が混じる　礫を含まず

0　5m
(S=1/100)

図 1534　SZ192 遺構図

面形は南北に長い方形を呈する。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.1ｍ～1.8ｍ、深さ約0.5ｍ～0.6ｍであり、四隅が途切れる周溝である。溝の幅は東溝がほぼ一定で、北・西溝は部分的に広い箇所がある。東溝は北端が浅く、南側ほど深い。また、東溝の底面は部分的にⅥ層が表出し、完掘時に湧水が生じた。断面形は逆台形状を呈し、各溝は部分的に壁面に狭い平坦面を有する。埋土は５～６層に分層した。壁面沿いに崩落土が確認できるが、およそ中央が緩やかに窪む堆積で、ブロック土の混入が少ない。

遺物出土状況　西溝から土器291点、北溝から土器168点、東溝から土器14点が、埋土中から散在して出土した。供献土器と考えられる土器は確認できない。出土土器の大半がⅠ期遠賀川系土器の小片であり、他の時期のものはほぼ認められない。

出土遺物　5537～5539はいずれもⅠ期遠賀川系土器の壺。5537は口縁部が大きく外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。5538は胴部上半に削り出し段を形成し、下方に沈線を２条施文する。段及び沈線の間には円形刺突文が認められる。5539は器面に複数条からなる沈線が三角形状に施文される。5540はⅠ期遠賀川系土器の鉢。口縁部が短く外反し、端部に平坦面を形成する。

時期　供献土器は出土していないが、Ⅳ期のSZ191に切られることと出土遺物の時期から、Ⅰ期と考えられる。

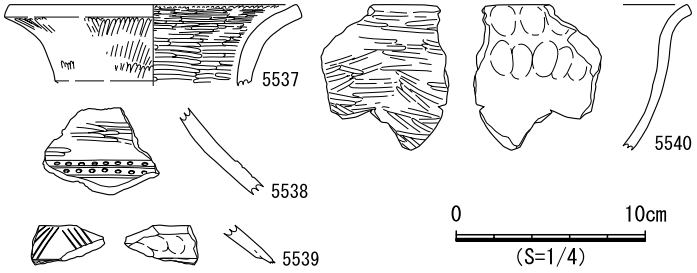


図1535　SZ192 遺物実測図

SZ221（遺構：図1537、遺物：図1536）

検出状況　東部西側中央に位置する。東西側は調査区域外へのび、南溝はSZ222に切られる。南溝は竪穴住居跡下で、北溝はSD1085底面での検出であり、平面形は明瞭であった。

方台部　北辺と南辺はおよそ直線的であり、隅部は検出できていない。規模は南北長約7.6ｍ～7.8ｍであり、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.6ｍ～3.0ｍ、深さ約0.3ｍ～0.7ｍである。南溝よりも北溝の方が広く、断面形は底面が緩やかな丸みを帯びて、壁面の傾斜も比較的緩やかである。なお、北溝の南壁面には帯状に幅狭の平坦面がある。底面は南北溝ともにほぼ水平であるが、北溝西端はわずかに底面が高くなるため、隅部が切れるか、あるいは陸橋部を形成している可能性がある。埋土は５～９層に分層でき、溝底面付近では南北両側から壁面崩落土と考えられるブロック土を多く含む土が堆積している。また、埋土全体にもブロック土の混入が認められることから、人為的に埋め戻している可能性がある。

遺物出土状況　北溝から土器1,215点、石器類１点、南溝から77点が出土した。石器類１点は北溝埋土３層中から出土した五角形鏃（5541）である。出土土器の多くは上層から出土したⅤ期～Ⅶ期のもので、わずかに縄文時代晩期の土器片が含まれる。しかし、Ⅰ期～Ⅳ期の土器は確認できず、供献土器と判断できる土器も出土していない。

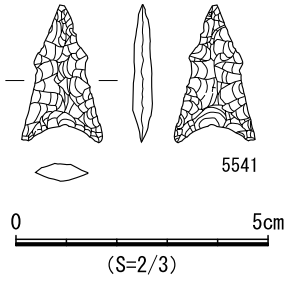


図1536　SZ221 遺物実測図

出土遺物　5541は打製石鏃である。鏃身は五角形を呈し、側辺上方が外側に突出する。基部は丸みを帯びた抉りが入る。

時期　出土遺物の時期から掘削時期の推定は困難である。Ⅰ期のSD1085底面で検出したことから掘削時期はⅠ期の可能性が高いと考えられるものの、当該時期の土器が出土しておらず、切り合い関係のみからの判断であることも留意すべきである。

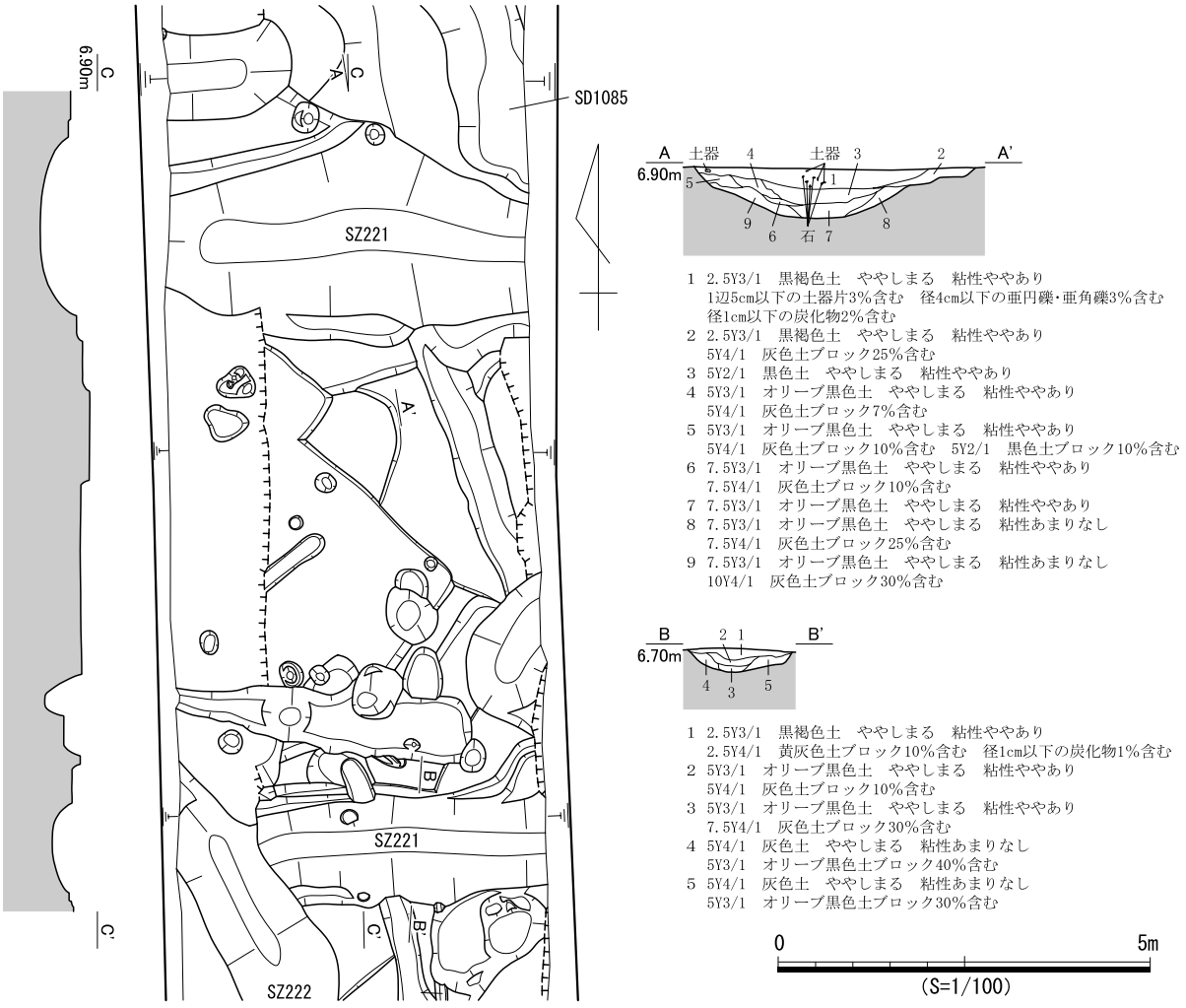


図 1537　SZ221 遺構図

(2)　土器棺墓

SZ177（遺構：図 1538、遺物：図 1539）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。SK05797に切られており、検出時に土器が表出していた。なお、平面形は不明瞭であった。

埋土　土器底面の土層しか把握できなかった。Ⅴ層ブロック土や黒色ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

形状　南北に長い楕円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

遺物出土状況　土器808点が出土した（しかし、調査当初はSK05797との識別ができていなかったため、808点はSK05797とSZ177の合計数値を示す）。土器はⅠ期の壺（5542）が横位で潰れた状態で出土した。

検出時は胴部外面を上にした面が確認でき、それを取り上げると残り半分の胴部片や口縁部片が出土した。最下面では口縁部から胴部までの破片が内面を上にして出土した。これらを接合すると大型壺１個体に復元できたため、土器棺墓と判断した。

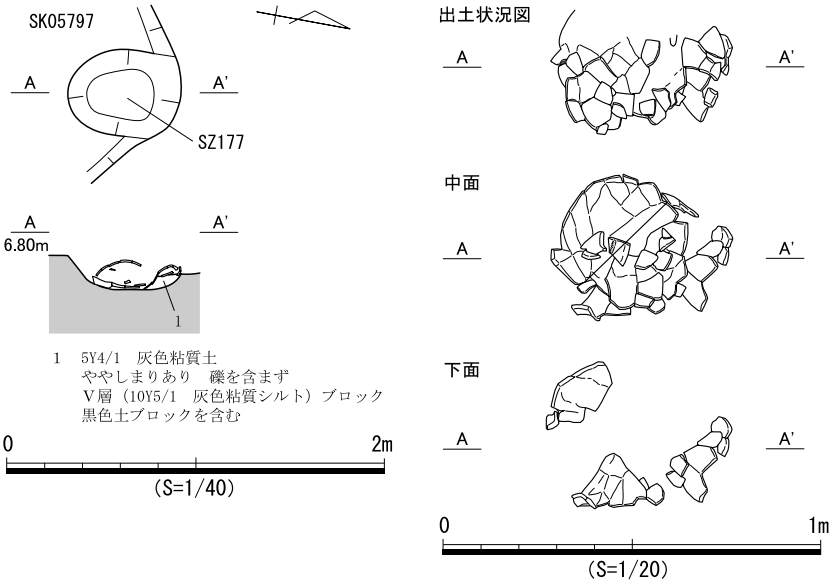


図 1538　SZ177 遺構図

出土遺物　5542はⅠ期遠賀川系土器の壺。胴部の一部を欠損するもののそれ以外の部位はほぼ完存し、器形全体を復元できた稀少な資料である。口縁部は短く外反し、端部を丸く収める。頸部には削り出し突帯がやや高く形成され、右上がりのキザミを施す。調整のために突帯の上部、下部にそれぞれ沈線状の凹みを作り出す。さらに胴部と頸部の境に１条の削り出し突帯を形成するが、頸部突帯に比して低くなる。胴部最大径は中央付近に位置し、やや細身の器形となる。頸部の１箇所には横に並んだ２孔の小孔が認められるものの、その反対側には確認できない。

時期　出土遺物の時期から、Ⅰ期と考えられる。

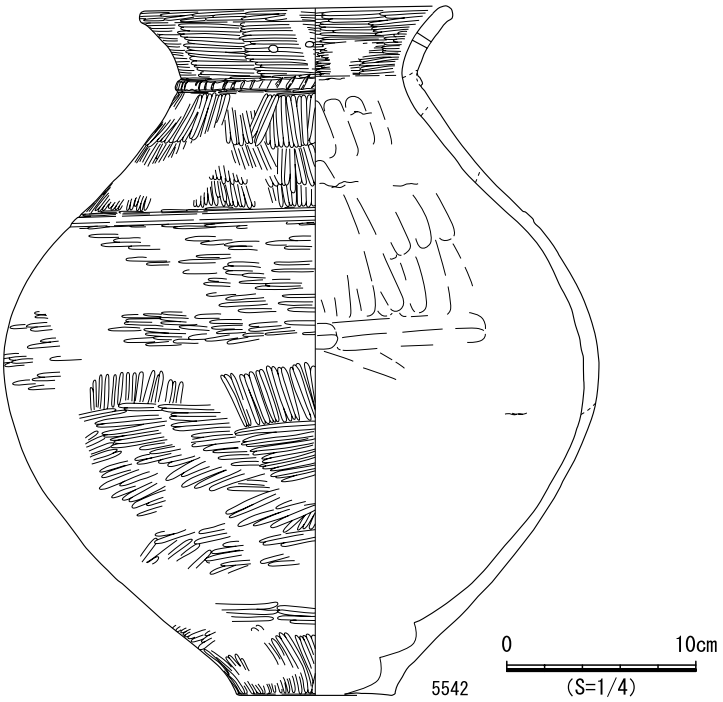


図 1539　SZ177 遺物実測図

SZ193（遺構：図 1540、遺物：図 1541）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、SZ192 西溝の北端で検出した。検出時は楕円形の土坑として把握していたが、遺構を半割し、土層を確認した段階で３基の遺構が重複していると判断した。

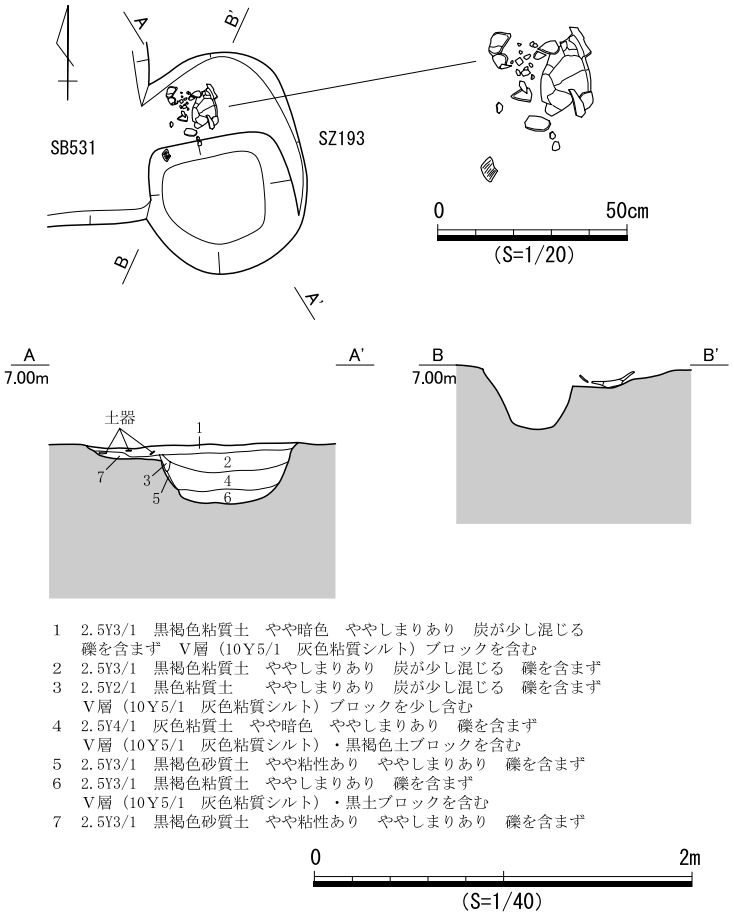
埋土　７層に分層した。このうち、１層と７層の層界付近にて残りのよい土器が横位で出土し、土器の遺存状況から土器棺墓と考えた。埋土の様相から２～６層はSZ192の一部である可能性が高く、１層は検出面で確認した楕円形プランの土層であるためSZ192の埋土ではない。そのため、７層が土器棺墓SZ193に伴う埋土であり、１層はSK05714の埋土とした。

形状　本遺構はSB531、SK05714、SZ192に切られており、その平面形は不明である。底面は平坦であり、残存している遺構の壁面は緩やかである。

遺物出土状況　埋土中から土器285点が出土した（SK05714、SZ192の一部の遺物を含む）。底面付近にてⅠ期壺（5544）が内面を上にして横位置で出土し、それとともに条痕文のある甕の破片（5543）が出土した。これらの破片と同一個体と考えられる破片がSZ192埋土中から出土しているため、SZ192構築時にSZ193を破壊している可能性がある。出土土器はⅠ期のものが大半を占め、Ⅳ期、Ⅵ～Ⅶ期のものが少量確認できる。

出土遺物　5543、5544はⅠ期壺。5543は条痕文系土器の壺胴部。外面に右下がりの貝殻による条痕が残る。5544は遠賀川系土器の壺底部。平底で、胴部は直線的である。

時期　出土遺物の時期から、Ⅰ期と考えられる。



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が少し混じる
　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを少し含む
4　2.5Y4/1　灰色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）・黒褐色土ブロックを含む
5　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　やや粘性あり　ややしまりあり　礫を含まず
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）・黒土ブロックを含む
7　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　やや粘性あり　ややしまりあり　礫を含まず

図 1540　SZ193 遺構図

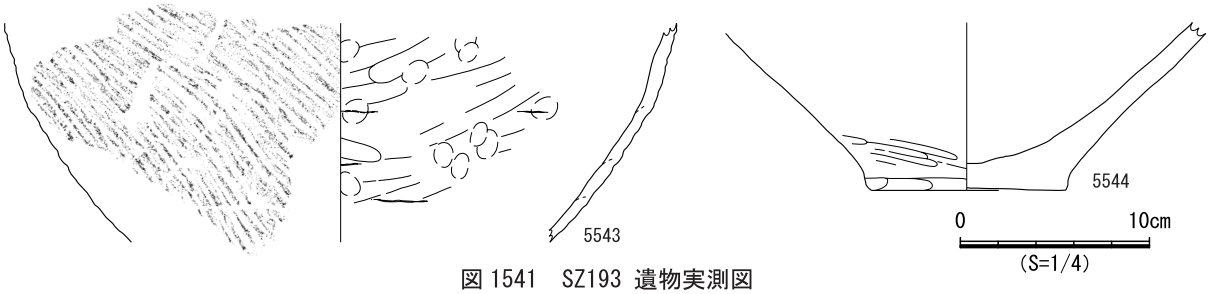
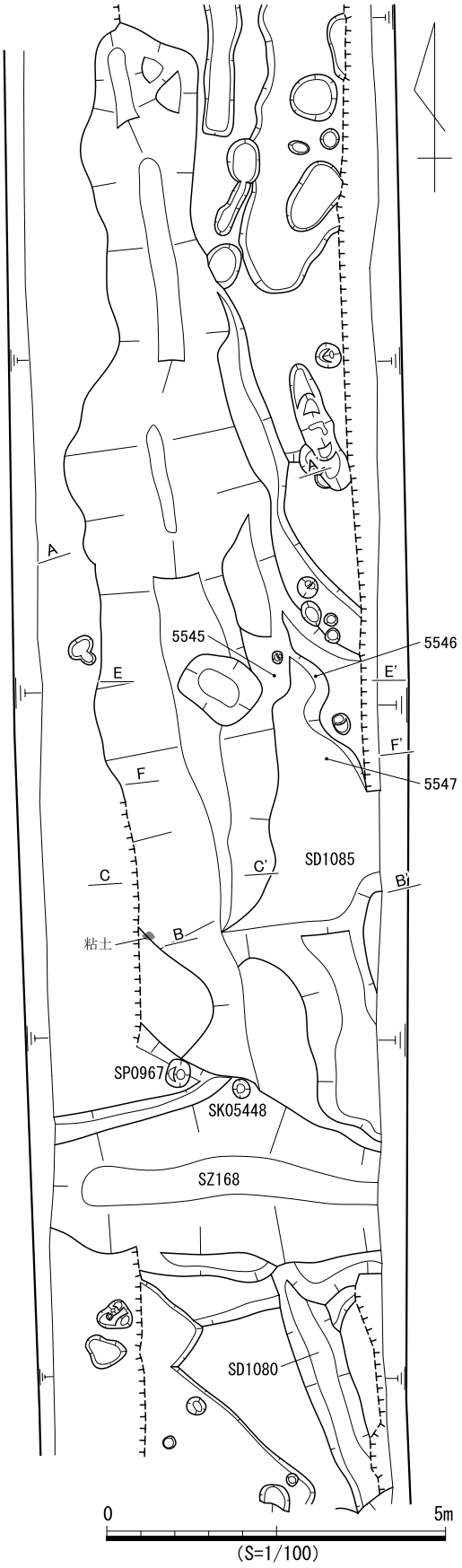


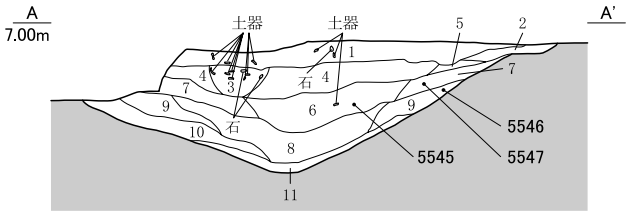
図 1541　SZ193 遺物実測図

2　溝状遺構

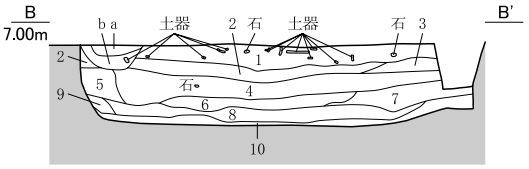
SD1085下層（遺構：図1542～1544、遺物：図1545・1546）

検出状況　東部西側中央に位置する。埋土上面をSD1080に切られるものの、竪穴住居跡との重複はなく、平面形は明瞭であり、溝底面にてSZ221北溝を検出した。なお、本遺構の出土遺物はおよそ上層（図1542A-A′_1～５層、B-B′_1～５層、C-C′_1～３層）と下層（図1542A-A′_6～11層、B-B′_6～10層、C-C′_4層）に分かれ、上層はⅤ期～Ⅶ期の遺物が、下層はⅠ期の遺物が出土している。そのた

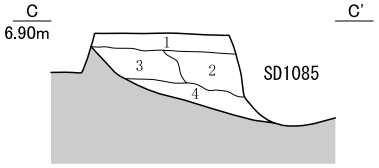




1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり
　1辺5cm以下の土器片2%含む　径4cm以下の亜円礫1%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あまりなし
　5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
3　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり　1辺5cm以下の土器片7%含む
　径2cm以下の亜円礫・亜角礫3%含む　径5mm以下の炭化物2%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
6　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック15%含む　1辺4cmの土器片1点あり
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
9　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
10　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
11　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あまりなし
　7.5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック10%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり
　1辺10cm以下の土器片7%含む　径6cm以下の亜円礫1%含む
　径5mm以下の炭化物1%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土(やや暗い)　ややしまる　粘性ややあり
　1辺3cm以下の土器片1%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック40%含む
8　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック30%含む
9　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック40%含む
10　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あまりなし
　7.5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック5%含む
a　SD1080の1層
b　SD1080の2層



1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック7%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む

0　2m
(S=1/50)

図 1542　SD1085 下層遺構図（１）

め、遺構の概要は本節で記述し、遺物出土状況や出土遺物については上層と下層に分けて（本節と第３節に分けて）報告する。

形状　北北西から南南東に主軸を持ち、最大幅約3.3ｍ、深さ約0.9ｍの大規模な溝である。北端は調査区内で収束しており、南東端は不明瞭ながらも溝底面が東側に屈曲して、調査区域外へのびている。断面形は場所によって異なり、中央北寄り（図1542A-A′）では底面中央が尖り気味となる逆三角形

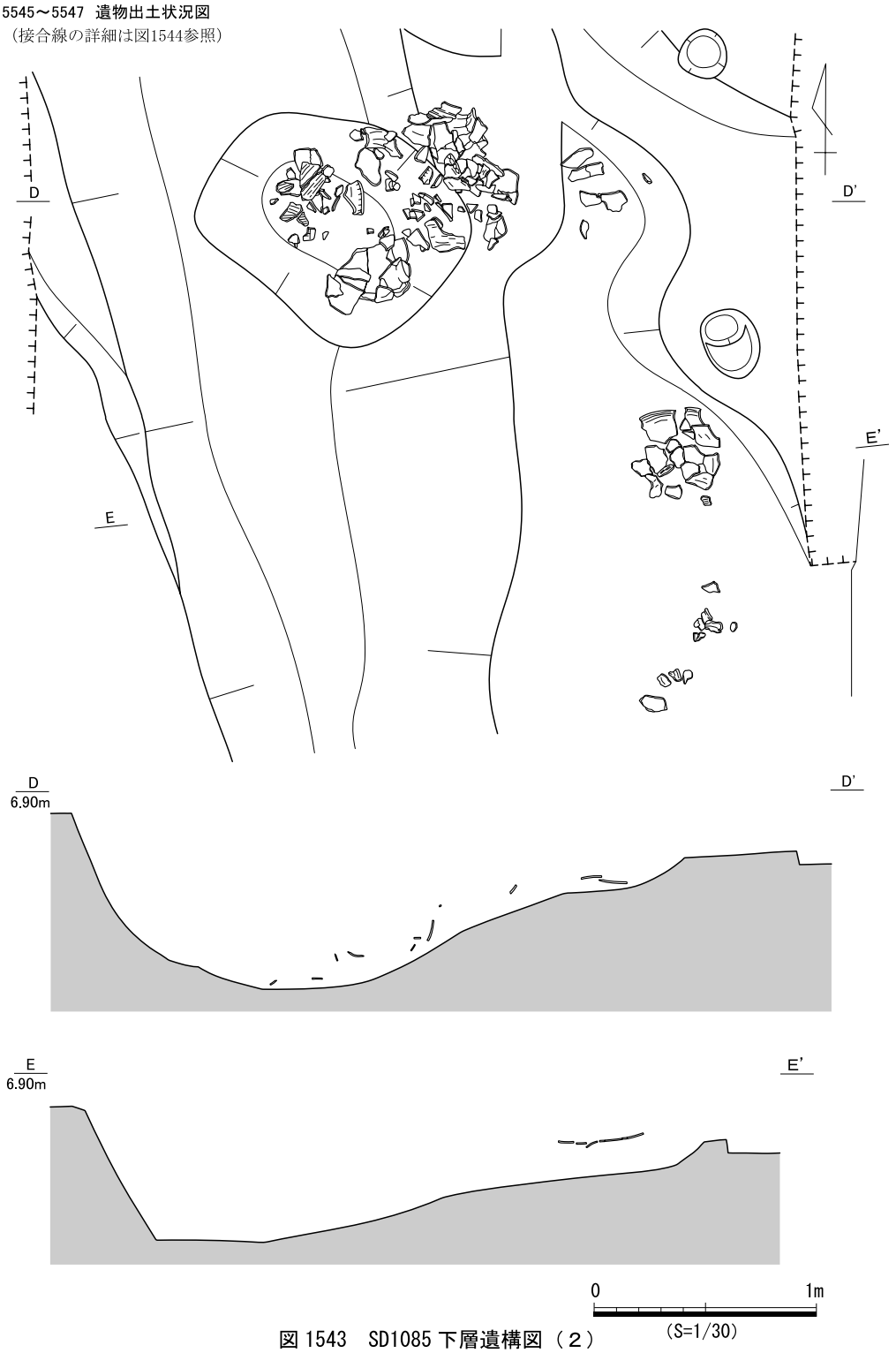


図 1543　SD1085 下層遺構図（２）

状を呈するが、中央南寄り（図 1542B-B′）では底面がほぼ平坦となる。なお、中央から北側の東壁面には、幅狭の平坦面がある。

埋土　10～11 層に分層した。中央北寄り（図 1542A-A′）は底面形状に沿うように中央が緩やかに窪む堆積であり、壁面沿いに崩落土が堆積している。中央南寄り（図 1542B-B′）はほぼ水平堆積であるが、西壁沿いに崩落土が確認できた。なお、埋土上層には土器が多数出土し、ブロック土も混入していることから、最終的には人為的に埋められたと考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器 13,551 点、石器類 212 点が出土した（遺物点数は上層遺物を含む）。埋土下層の出土遺物のまとまりは大きく２箇所あり、北側（図 1543D-D′）では２個体の土器片（5545、5546）が溝底面で検出した土坑状の窪み内から、溝の東壁面に沿って混在して横位から斜位で出土した。また南側（図 1543E-E′）では１個体の土器片（5547）が東壁面の平坦面でまとまって出土し、北側の 5545 の破片がわずかに混在していた。

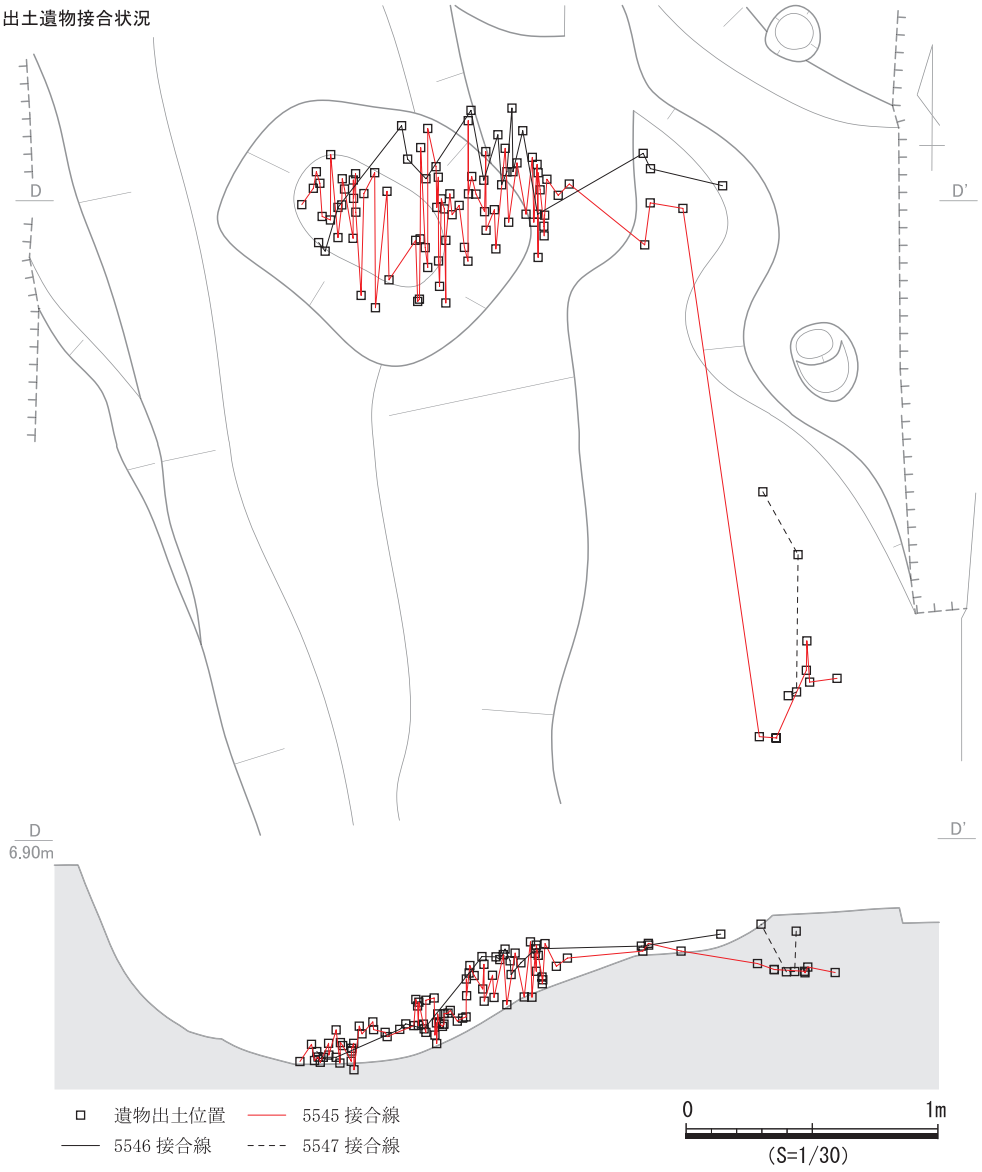


図 1544　SD1085 下層遺構図（３）

出土遺物　5545はⅠ期条痕文系壺。口径約25㎝、胴部最大径約45㎝になる大型品。頸部がやや直立気味となり、口縁部は大きく緩やかに外反する。端部を肥厚し、丸くおさめる。端部下端には突帯を貼り付け、指先による押圧を加える。頸部直下には低突帯を貼り付け、指先の押圧を加える。押圧の底面には爪の圧痕が残る。突帯の低さと押圧の強さが相まって、指頭押圧による凹みは本来の器面を抉るように深くなる。胴部上半は主に斜め方向、下半は主に横方向の貝殻条痕が強く残り、最大径はやや胴部上半に寄る。胴部の大きさに対して平底の底部は小さく、直径は10㎝に満たない。器高約70㎝の大型品であるにもかかわらず器壁が薄い点も特筆すべきである。器形が示す特徴から在地のものとは考えにくく、三河地方からの搬入品と考えられる。5546はⅠ期変容壺。口径約20㎝、胴

図1545　SD1085下層遺物実測図（１）

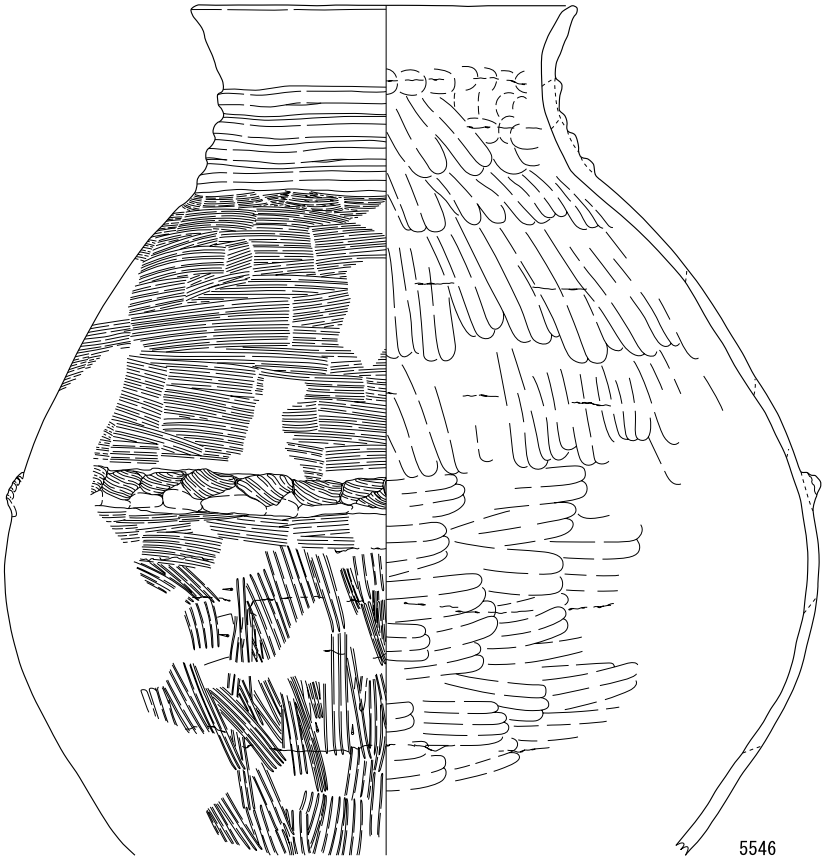


図 1546　SD1085 下層遺物実測図（２）

部最大径約45㎝になる大型品。口縁部が緩やかに外反し、肥厚気味の端部を丸くおさめる。頸部以下に４条の素文突帯を貼り付け、ヨコナデ調整を施す。素文突帯以下は横方向の貝殻条痕が強く残り、部分的に吹きこぼれ状の痕跡にもみえる黒色部が認められる。最大径部には太い突帯を１条貼り付け、貝殻によるＯ字状の押圧を残す。突帯以下の胴部下半は貝殻条痕が痕跡的で、ケズリによる調整痕が残る。下半の大半を欠損するが、器高約60㎝前後になると思われ、頸部以下胴部上半がやや膨らむ。5547はⅠ期条痕文系甕。口径約40㎝になる大型品で、口縁部が短く外反する。端部をさらに外反させ、外面に粘土がはみ出す部分も認められる。屈曲部には突帯１条を貼り付け、ヨコナデによって断面が三角形状になるように尖らせる。口縁部内面はおそらく、貝殻条痕の後にナデによる調整を加えて器面を整えていると考えられる。最大径は胴部上半に寄り、口径とほぼ変わらない。やや赤みの強い胎土には砂粒が多く含まれ、器面には横方向の貝殻条痕が強く残る。一方、胴部下半は貝殻条痕ではなく、ケズリによる調整が認められる。胴部内面は摩耗が著しいが、部分的にケズリ痕が認められる。外面最大径部以下には一面に煤が付着する。

時期　出土遺物の時期から掘削時期はⅠ期で、Ⅵ期～Ⅶ期頃には浅い窪地であったと考えられる。

３　土坑

SK06080（遺構：図1548、遺物：図1547）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SZ180北溝の掘削後に、その壁面にて埋土を確認し、平面精査後に検出した。東側は調査区域外にあり、SZ180に切られる。

形状　長軸長約4.2ｍの不整形を呈する。深さは約0.2ｍで、底面は平坦であり、南壁面に広い平坦面を有する。また、西側の壁面は直線的で、その傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、層界の凹凸が認められる。

遺物出土状況　埋土中から土器34点が出土した。上層の出土遺物はⅥ期～Ⅶ期のものがあり、下層の出土遺物はⅠ期の遠賀川系土器である。遺構の重複関係から、Ⅵ期～Ⅶ期の遺物は混入と考えられる。

出土遺物　5548はⅠ期遠賀川系土器の壺。口縁部が短く外反し、端部には沈線状の凹みが認められる。

時期　Ⅳ期のSZ180に切られることと下層出土遺物の時期から、Ⅰ期と考えられる。

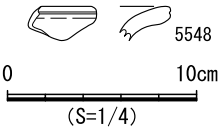


図1547　SK06080遺物実測図

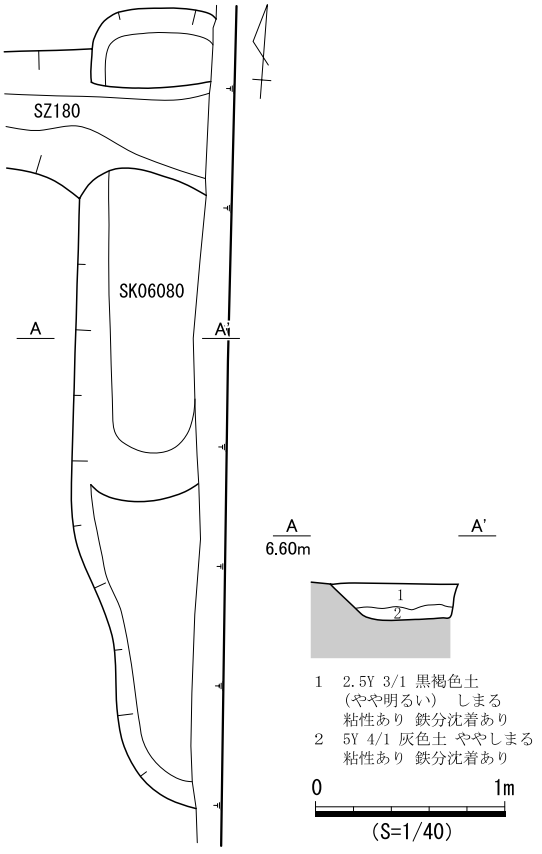


図1548　SK06080遺構図

SK06082（遺構：図 1549、遺物：図 1550）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SB517 と SB518 の底面において検出した。

形状　長軸長約 2.1ｍ、短軸長約 1.8ｍの、東西にやや長い不整楕円形を呈する。深さは約 0.8ｍで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　５層に分層した。全体的に中央が窪む堆積であり、下層には壁面崩落土が堆積している。上層から中層にかけて埋土の粘性が高く、炭化物をわずかに含む。

遺物出土状況　埋土中から土器 249 点、石器類 11 点が出土した。土器は小片が多いものの、埋土から散在して出土した。また、Ⅰ期の遠賀川系土器が多く、Ⅳ期とⅥ期～Ⅶ期の小片もわずかに出土している。

出土遺物　5549、5550 はⅠ期遠賀川系土器の壺。5549 は口縁部が大きく外反する。5550 は胴部に木葉文らしき文様が認められる。5551 はⅠ期遠賀川系土器の鉢。口縁部が緩やかに開く大型品で、端部には顕著な平坦面を形成する。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期の SB517、SB518 に切られることと出土遺物の時期から、Ⅰ期もしくはⅣ期と考えられる。

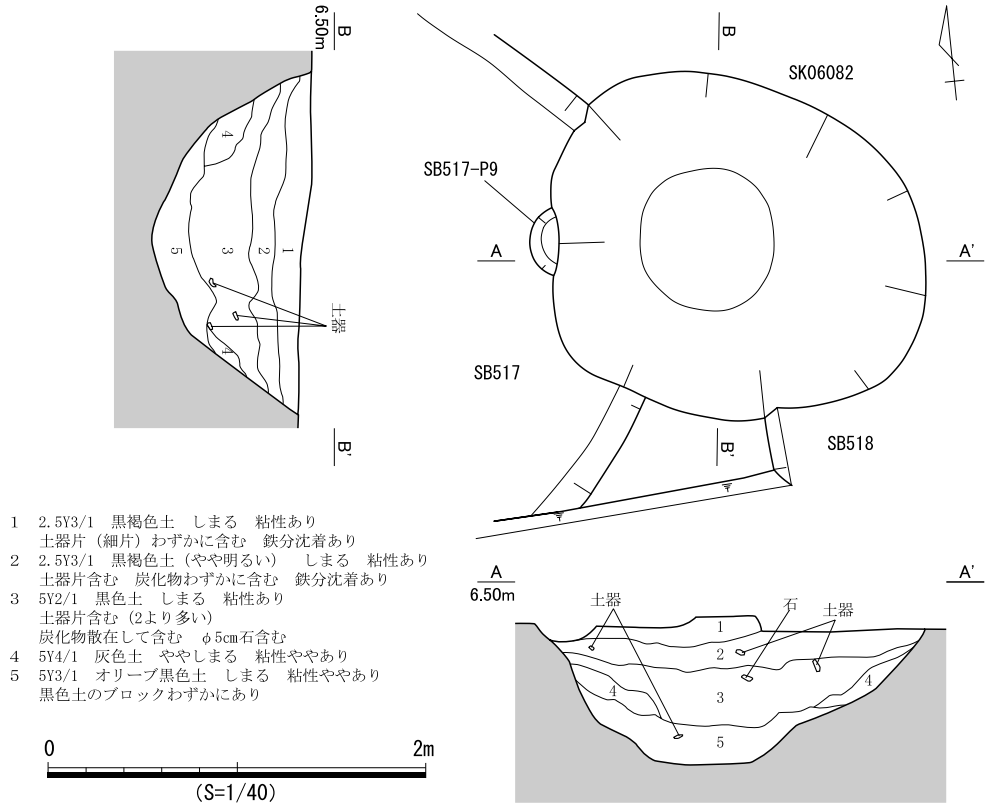


図 1549　SK06082 遺構図

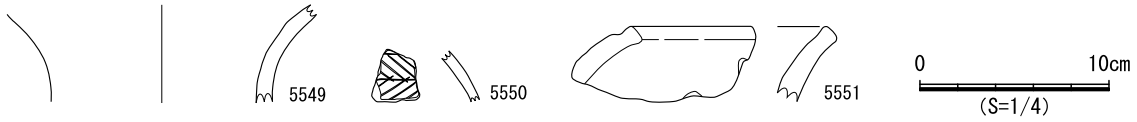


図 1550　SK06082 遺物実測図

第２節　弥生時代中期の遺構と遺物

東部域の弥生時代中期（Ⅱ期～Ⅳ期）の遺構として、方形周溝墓54基、溝状遺構10条、土坑12基について、以下に報告する。その分布は中央に南北に通るSD0381（大溝）があり、その東西側に方形周溝墓が展開するものの、北東側は遺構の広がりがほとんど認められない。

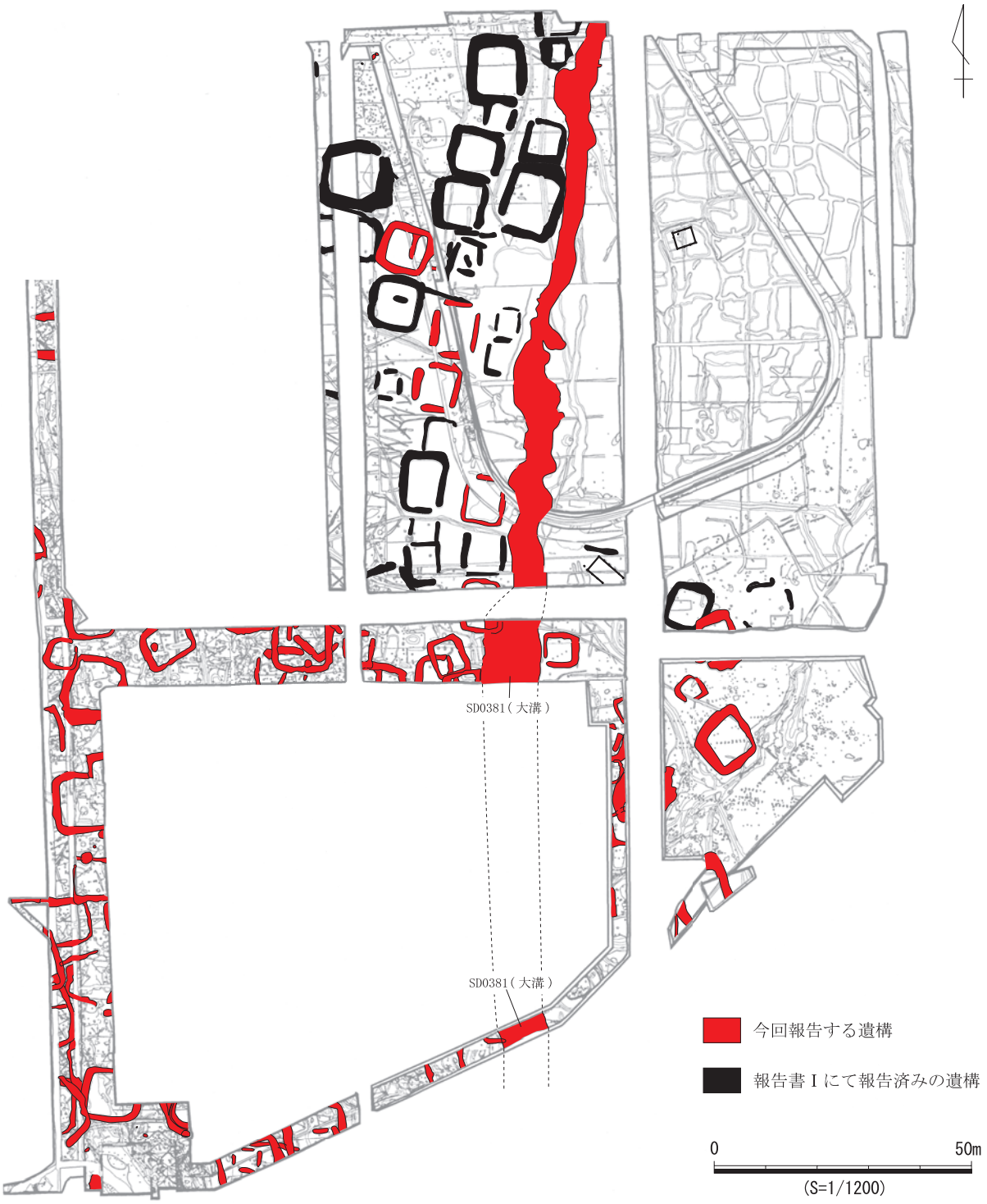


図 1551　東部域の弥生時代中期の遺構分布図

１　方形周溝墓

Ｂ地区における方形周溝墓の分布は北側と南側で大きく異なり、北側は方形周溝墓列を形成し、それぞれが重複しないか、あるいは周溝を共有する場合が多い。一方、南側は北側のような墓列は明瞭でなく、方形周溝墓が複数重複している。

以下、遺構ごとに記述する。

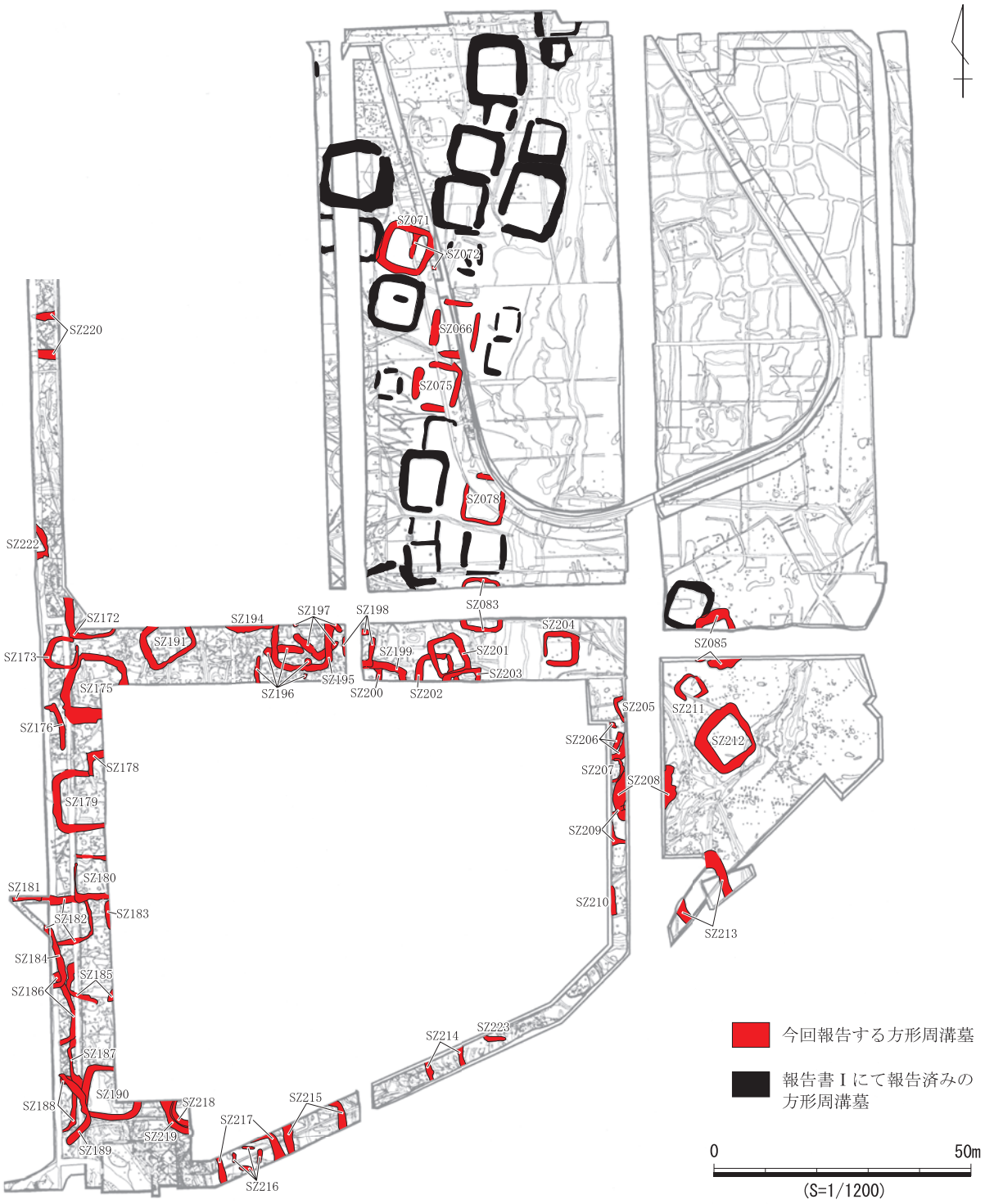
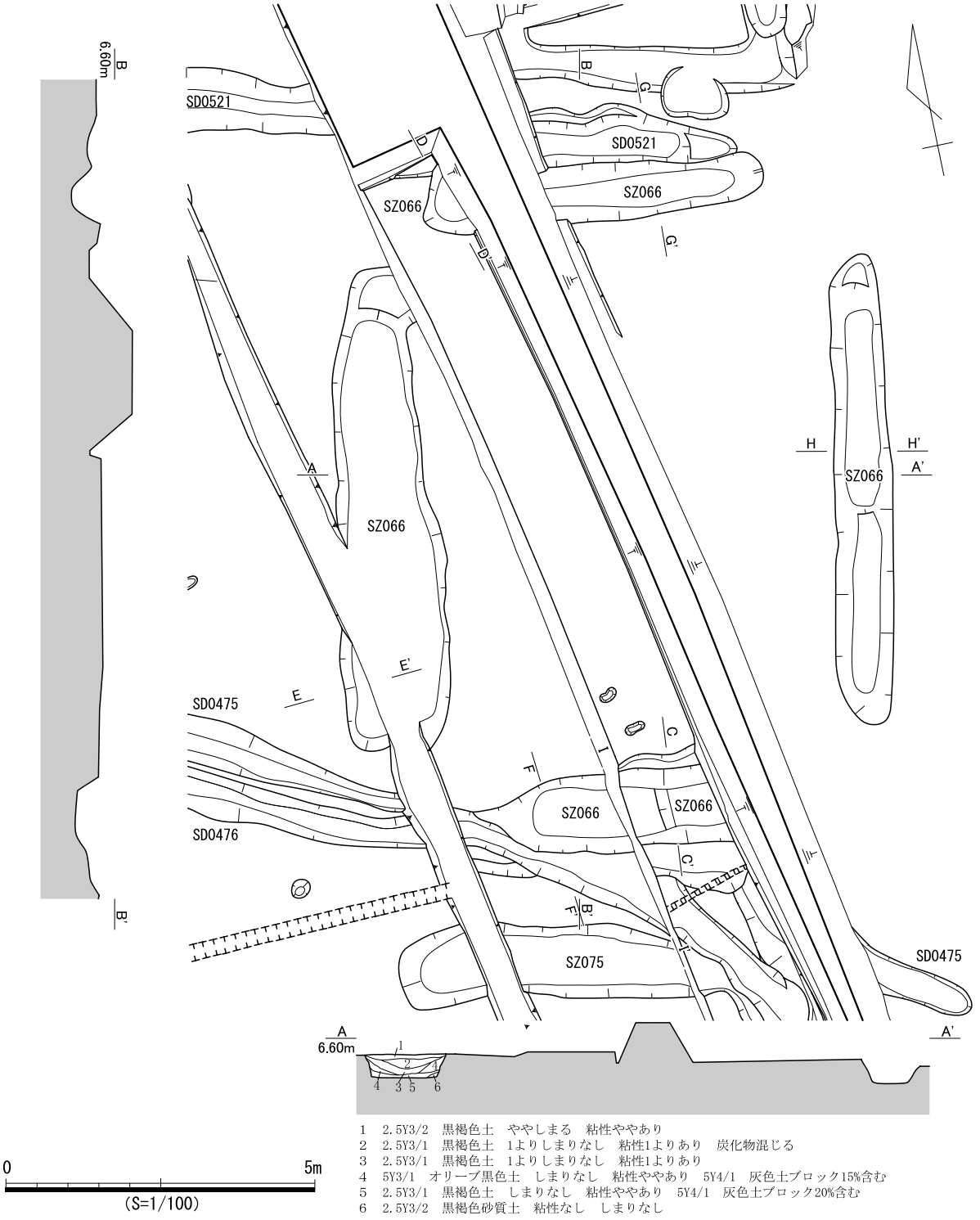


図 1552　東部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図

SZ066（遺構：図 1553・1554）

検出状況　東部中央に位置する。東西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は中央の幅約 1.0 ｍの区域である。北溝の平面形は明瞭であったが、南溝は SD475 に切られており不明瞭であった。

方台部　方台部の各辺は直線的で、四隅は周溝が途切れている。その規模は東西長約 6.6 ｍ～ 7.1 ｍ、



1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　1よりしまりなし　粘性1よりあり　炭化物混じる
3　2.5Y3/1　黒褐色土　1よりしまりなし　粘性1よりあり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
6　2.5Y3/2　黒褐色砂質土　粘性なし　しまりなし

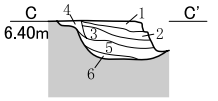
図 1553　SZ066 遺構図（１）

南北長約9.5ｍで、南北にやや長い方形を呈する。墳丘や主体部は確認できなかった。

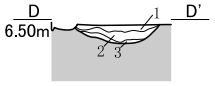
周溝　幅約1.0ｍ～1.6ｍ、深さ約0.4ｍ～0.5ｍであり、方台部の四隅の周溝は途切れ、陸橋部を形成する。北溝と東溝に比べて南溝と西溝の幅が広く、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北溝と南溝の東側と東溝の北側がいずれも深く掘り込まれている。また、西溝の南北端と北溝の東西端の壁面傾斜は急である。埋土は３～９層に分層し、埋土中の炭化物は北溝が多く、東西溝がわずかであり、南溝はほとんど確認できなかった。また、全ての溝底面には崩落土と考えられるブロック土を含む土が堆積しており、特に北溝と南溝では顕著であった。

遺物出土状況　今回の報告箇所の埋土中から、遺物は出土しなかった。

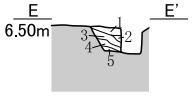
時期　今回の報告箇所からは言及できないが、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』で検討したように、Ⅱ期～Ⅲ期と考えられる。



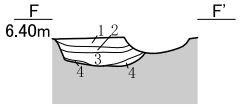
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
4　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/2　オリーブ黒色ブロックを30%含む　（盛土崩落土か）
5　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを40%含む（盛土崩落土か）
6　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む（盛土崩落土か）



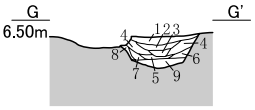
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
3　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/2　オリーブ黒色土のふみ込みを多く含む



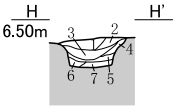
1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着わずかにあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり　炭化物ごくわずかに含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　灰色土のブロック20%含む
5　5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり
　下部にて灰色砂質土30%含む　（湧水が激しい層である）



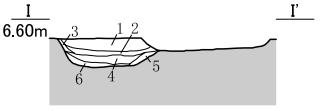
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック40%含む
4　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック7%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土（やや明るい）しまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり　径2mmほどの炭化物2%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり　径1mm～2mmほどの炭化物7%含む
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着あり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック5%含む　径1mm～3mmの炭化物2%含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり
6　7Y3/1　オリーブ黒色砂質土　ややしまる　粘性ややあり
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり　7.5Y4/1　灰色土ブロック3%含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
9　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あり　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック3%含む
　7.5Y3/1　オリーブ黒色砂ブロック40%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性ややあり　径1mm～5mmの炭化物2%含む
4　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり　砂が少し混じる
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック15%含む 5Y3/2　オリーブ黒色土ブロック15%含む
6　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック10%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性あり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック20%含む



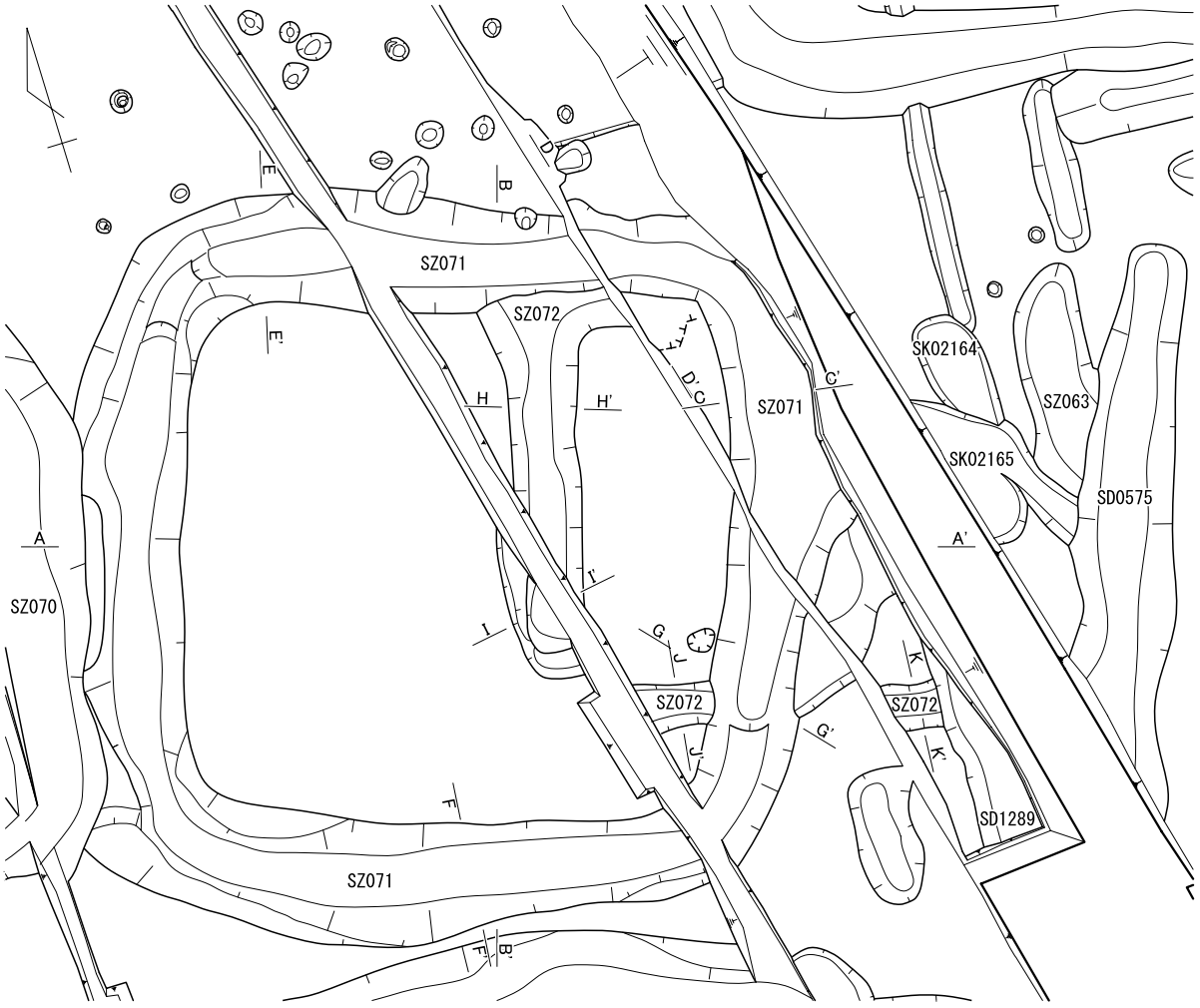
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック25%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック40%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
6　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック10%含む

0　5m
(S=1/100)

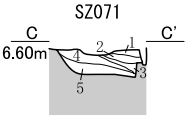
図 1554　SZ066 遺構図（２）

SZ071（遺構：図 1555・1556、遺物：図 1557）

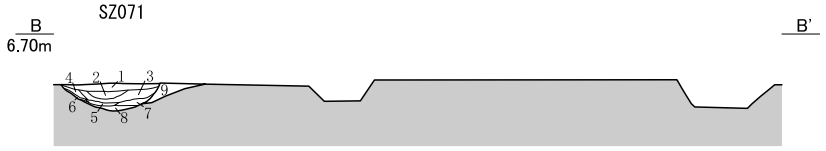
検出状況　東部中央に位置する。西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は周溝北東隅の幅約1.0ｍの区域である。なお、平面形は比較的明瞭であった。



1　2.5Y3/1　黒褐色土　やや茶色　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着わずかにあり
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり（強い）　炭化物散在して含む
4　5Y2/1　黒色土　やや茶色が入る　ややしまる　粘性あり
5　5Y2/1　黒色土　やや淡い　ややしまる　粘性あり（強い）　炭化物わずかに含む
6　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり（強い）　灰色土のブロック20%含む
8　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　黒色土のブロック10%含む
9　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり　黒色土のブロック10%含む
10　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり（強い）　炭化物わずかに含む　(SZ070埋土)
11　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり　黒色土のブロック40%含む　(SZ070埋土)



1　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり
5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる
粘性ややあり　炭化物を含む
4　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり
5　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり
5Y6/1　灰色ブロックを10%含む



1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物混じる
3　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/2　灰オリーブ色土ブロック30%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
6　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
7　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック40%含む
8　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック7%含む
9　2.5Y3/2　黒褐色　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり(SZ072埋土)

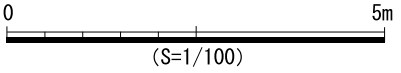
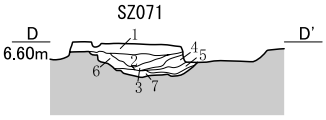


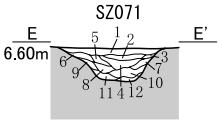
図 1555　SZ071・SZ072 遺構図（１）

方台部　方台部の各辺は直線的で隅部は丸みを帯び、その規模は東西長約7.9ｍ、南北長約7.3～7.6ｍで、東西にやや長い方形を呈する。墳丘や主体部は確認できなかった。

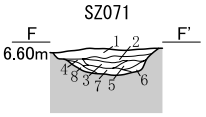
周溝　幅約1.2ｍ～1.6ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍであり、全周する。南溝と西溝は中央付近が最も広く、隅部に向かうにつれて狭くなる。東溝は東壁面に緩斜面が認められるものの、他遺構との重複関係は認められなかった。底面はほぼ平坦であるが、北西隅と北東隅の底面がわずかに高い。溝の断面形は逆台形状もしくは深い皿状を呈する。埋土は５～12層に分層でき、いずれの場所でも埋土中に炭化物もしくは炭化粒を含む黒色土～オリーブ黒色土が見られ、底面付近には崩落土と考えられる



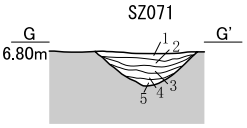
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり　垂下斑鉄多い
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
3　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
6　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを30%含む
　5Y2/1　黒色ブロックを10%含む
7　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む



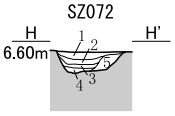
1　2.5Y3/1　黒褐色土　やや茶色　ややしまる　粘性あり
　炭化物ごくわずかに含む　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　やや暗色　ややしまる　粘性あり　炭化物わずかに含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　やや淡い　ややしまる　粘性あり　灰色土のブロックわずかに含む
4　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり（強い）
　炭化物散在して含む(炭粒径5㎜程のものあり)
5　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり（強い）　炭化物わずかに含む
6　2.5Y3/1　黒褐色土　やや淡い　ややしまる　粘性ややあり　灰色土のブロック10%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　炭化物ごくわずかに含む　灰色土のブロック10%含む
8　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　炭化物ごくわずかに含む
9　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　灰色土のブロック（細かい）30%含む
10　5Y3/1　オリーブ黒色土　やや淡い　ややしまる　粘性あり
　炭化物わずかに含む（炭粒5㎜程ものあり）
11　5Y3/1　オリーブ黒色土　やや暗色　ややしまる　粘性あり
　灰色土のブロック(Ｖ層）20%含む
12　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり　黒色土のブロック30%含む



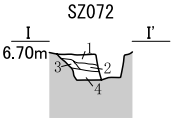
1　2.5Y3/1　黒褐色土　やや茶色　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着わずかにあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　やや暗色　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着ごくわずかにあり
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり(強い)　炭化物散在して含む
4　5Y2/1　黒色土　やや淡色　ややしまる　粘性あり　灰色土のブロック20%含む
5　5Y2/1　黒色土　やや淡色　ややしまる　粘性あり　炭化物ごくわずかに含む
6　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　灰色土のブロックわずかに含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり(強い)
　下部にて灰色土のブロック10%含む
8　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ごくわずかにあり
　オリーブ黒色土のブロック20%含む



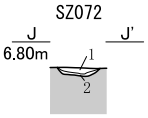
1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物混じる
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性1,2よりあり
　5Y4/2　灰オリーブ色土ブロック10%含む
4　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック30%含む
5　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック3%含む



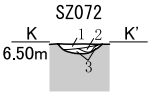
1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物わずかに混じる
　5Y4/2　灰オリーブ色土5%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/2　灰オリーブ色土20%含む
4　7.5Y4/2　灰オリーブ色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック3%含む
5　5Y4/2　灰オリーブシルト　ややしまる　粘性あまりなし



1　2.5Y3/1　黒褐色土　やや茶色　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
　炭化物ごくわずかに含む　鉄分沈着あり
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　灰色土のブロック20%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　5Y4/2　灰オリーブ色土ブロック7%含む
2　5Y4/2　灰オリーブ色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック15%含む



1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む

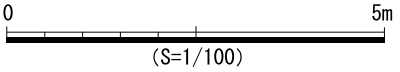


図 1556　SZ071・SZ072 遺構図（２）

ブロック土を含む土が堆積している。

遺物出土状況　今回の報告箇所の埋土中から、土器34点が散在して出土した。また、底面よりやや上位でⅣ期の壺Ｄ類（5553）が出土した。

出土遺物　5552、5553はⅣ期壺Ｄ類。ともに内面にはハケ目が残る。5552の外面には円形刺突文が複数帯認められる。5553には波状文が認められる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

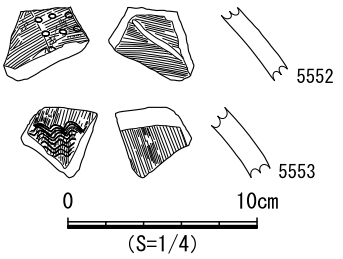


図 1557　SZ071 遺物実測図

SZ072（遺構：図 1555・1556）

検出状況　東部中央に位置する。西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は土層断面K-K’付近の幅約1.0ｍの区域である。SZ071とSD1289に切られ、平面形は不明瞭であった。

方台部　方台部の各辺は直線的で北西隅は丸みを帯びる。規模は不明であるが、南溝の状況から東西にやや長い方形を呈すると考えられる。墳丘や主体部は確認できなかった。

周溝　西溝と南溝を確認し、北溝は西端のわずかな範囲のみを確認できた。西溝は幅約0.9ｍ、深さ約0.3ｍ、南溝は幅約0.6ｍ、深さ約0.1ｍであり、西溝と南溝は途切れている。南溝の中央部分は確認できなかった。溝の断面形は西溝が逆台形状、南溝が浅い皿状を呈する。埋土は３層～５層に分層し、西溝と南溝ともに底面付近には崩落土の可能性があるブロック土を含む土が堆積していた。

遺物出土状況　今回の報告箇所の埋土中から、遺物は出土しなかった。

時期　今回の報告箇所からは言及できないが、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』で検討したように、Ⅱ期と考えられる。

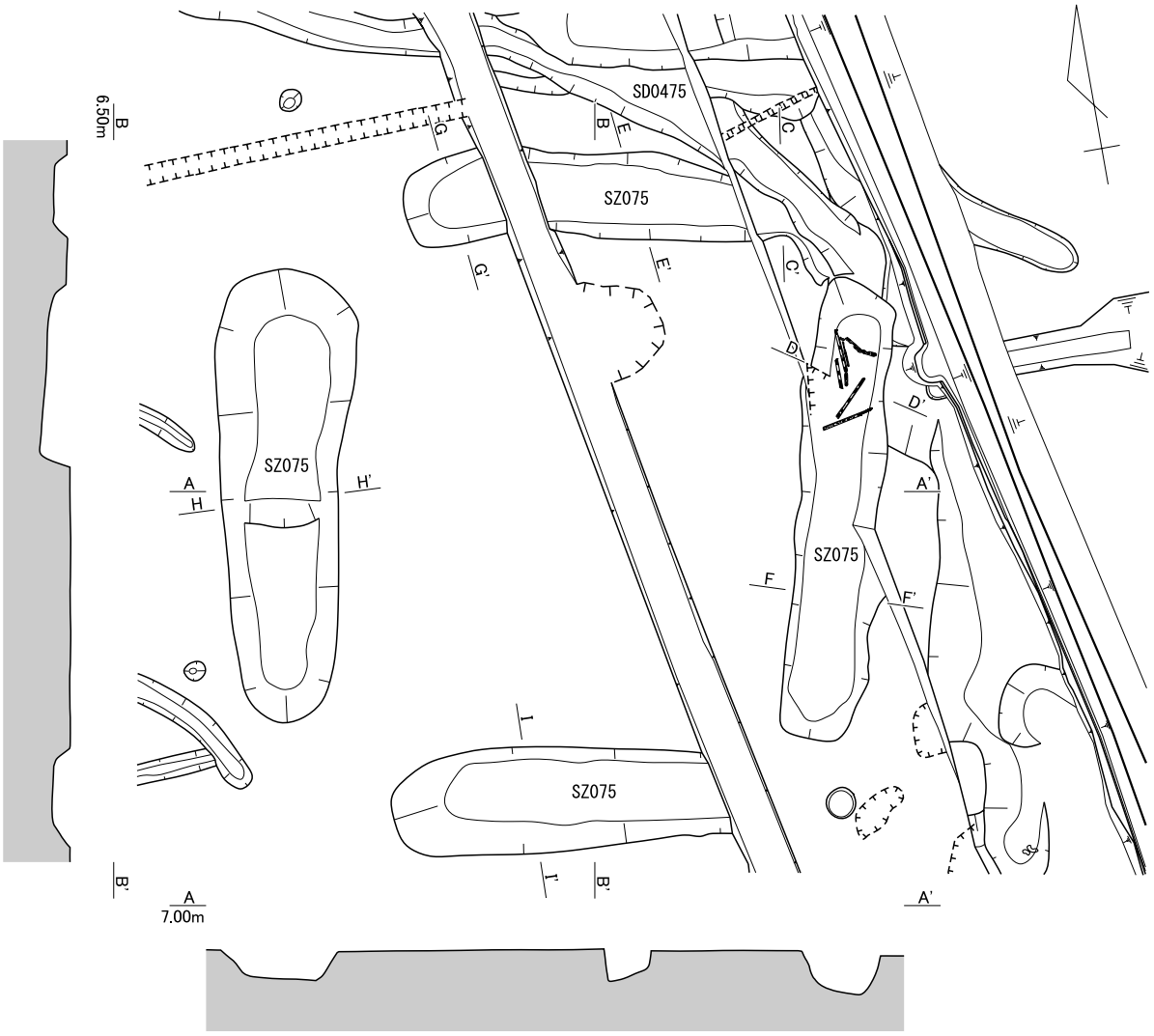
SZ075（遺構：図 1558・1559、遺物：図 1560）

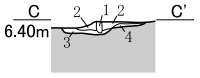
検出状況　東部中央に位置する。西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は周溝北東隅の幅約1.0ｍの区域である。なお、東溝の平面形は明瞭であったが、北溝はSD0475に切られ不明瞭であった。

方台部　方台部の各辺は直線的で、四隅は北東隅を除いて周溝が途切れている。その規模は東西長約6.6ｍ～6.9ｍ、南北長約7.3ｍで、南北に長い方形を呈する。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

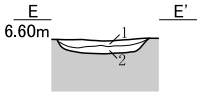
周溝　幅約1.2ｍ～1.9ｍ、深さ約0.2ｍ～0.6ｍであり、方台部の四隅に当たる部分は北西、南東、南西側は明確に途切れ、北東側は極めて浅いものの、平面的には連続している。北溝と東溝に比べて南溝と西溝の幅が広く、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北溝の西側と西溝の北側、東溝の北側がいずれも深く、東溝の北側では先端が炭化した棒状材が数点出土した。また、東溝は他の溝と比べて全体的に深く、南北端の壁面傾斜は急である。埋土は２層～10層に分層でき、埋土中の炭化物は東溝に多く、全ての溝底面にはブロック土を含む崩落土が堆積している。

遺物出土状況　今回の報告箇所の埋土中から土器５点、木製品18点が出土した。東溝北端では、底面よりわずかに上位の７層上面にて、先端が炭化した棒状材が数本出土した。材はいずれもほぼ水平に出土したが、その周辺に炭化物集積などの特異な状況はみられなかった。

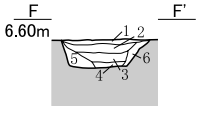




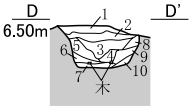
1　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　ややしまる
　粘性ややあり　カクラン土
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
4　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/2　オリーブ黒色ブロックを3%含む



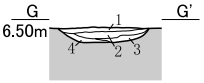
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる
　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック30%含む



1　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性2よりあり　炭化物混じる
4　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性3よりあり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
6　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック10%含む



1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む　炭化粒をわずかに含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む　炭化粒を多く含む
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
5　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
6　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
7　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを3%含む
8　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
9　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
10　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを10%含む



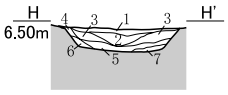
1　2.5Y3/1　黒褐色土 やや茶色 ややしまる　粘性あり 鉄分沈着わずかにあり
2　5Y3/1 オリーブ黒色土 やや明るい ややしまる　粘性あり 3のブロック10%含む
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あり　2のブロック20%含む
4　7.5Y4/1 灰色土　しまりなし　粘性ややあり

0　5m
(S=1/100)

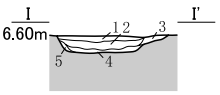
図 1558　SZ075 遺構図（１）

出土遺物　5554、5555は建築部材であるが、いずれも腐食による劣化が著しい。5554は方形孔が１箇所穿たれている。5555は上下の接点がないものの、断面形状や材質から同一個体と考えた。２箇所に孔があり、下方は方形、上方は楕円形状を呈する。また、下端が炭化している。5556～5559は板材であり、いずれも下端が炭化している。5556は表面に斜め方向の圧痕が残るものの、使用時によるものかは定かでない。5559は炭化範囲の上端が直線的であることから、他の部材と組み合っていた可能性がある。5560はその他の加工材。上端が欠損している。

時期　今回の報告箇所から出土した遺物からは言及できないが、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』で検討したように、Ⅱ期と考えられる。



1　2.5Y3/1 黒褐色土　やや暗い　ややしまる　粘性あり　鉄分沈着あり
2　2.5Y2/1 黒色土　ややしまる　粘性あり（やや強い）
炭化物をわずかに含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり（やや強い）
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
5　5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり
底近く灰色土のブロック20%含む
6　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
7　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　灰色土のブロック10%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土 やや茶色 ややしまる 粘性あり 鉄分沈着わずかにあり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 灰色土のブロック20%含む
3　5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり　鉄分沈着わずかにあり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり（やや強い）
5　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり

0　5m
（S=1/100）

遺物出土状況

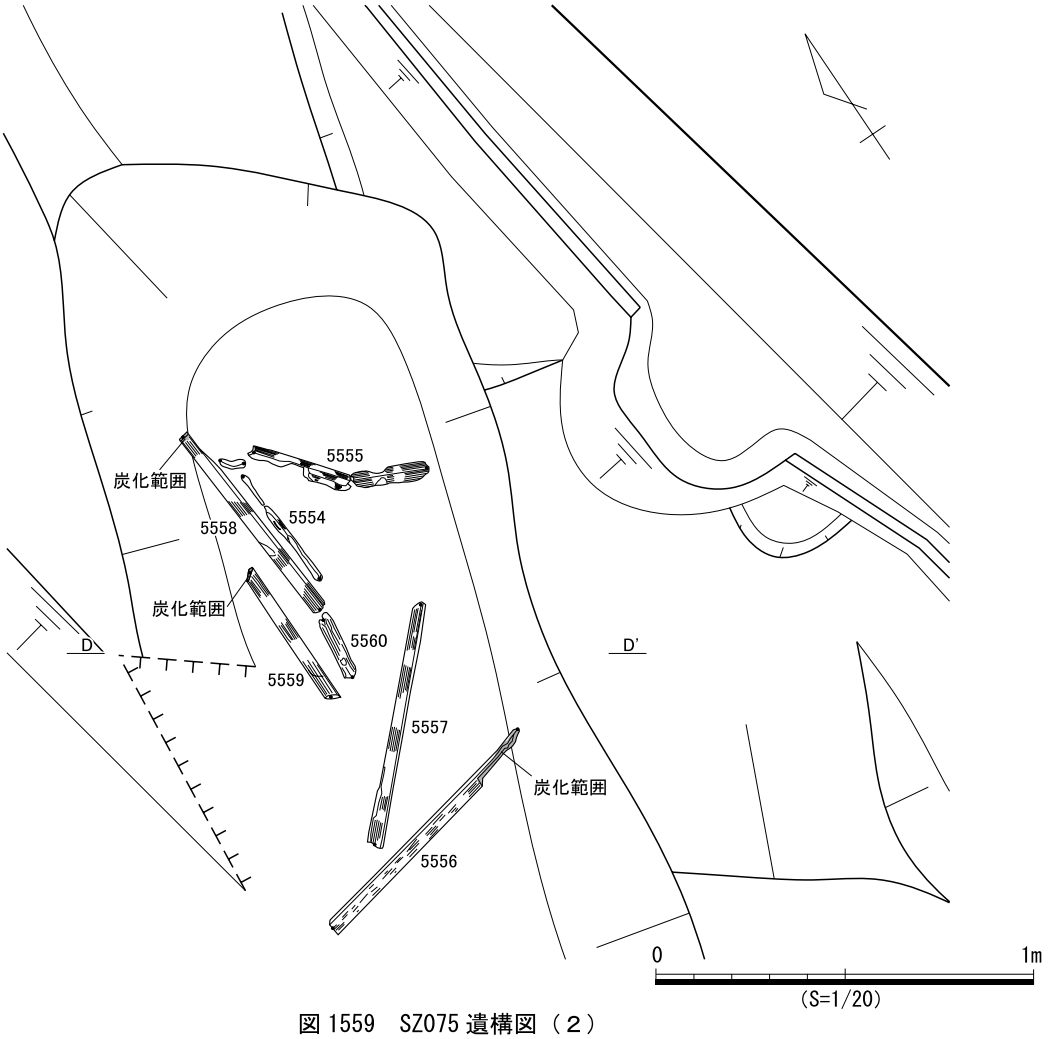


図 1559　SZ075 遺構図（２）

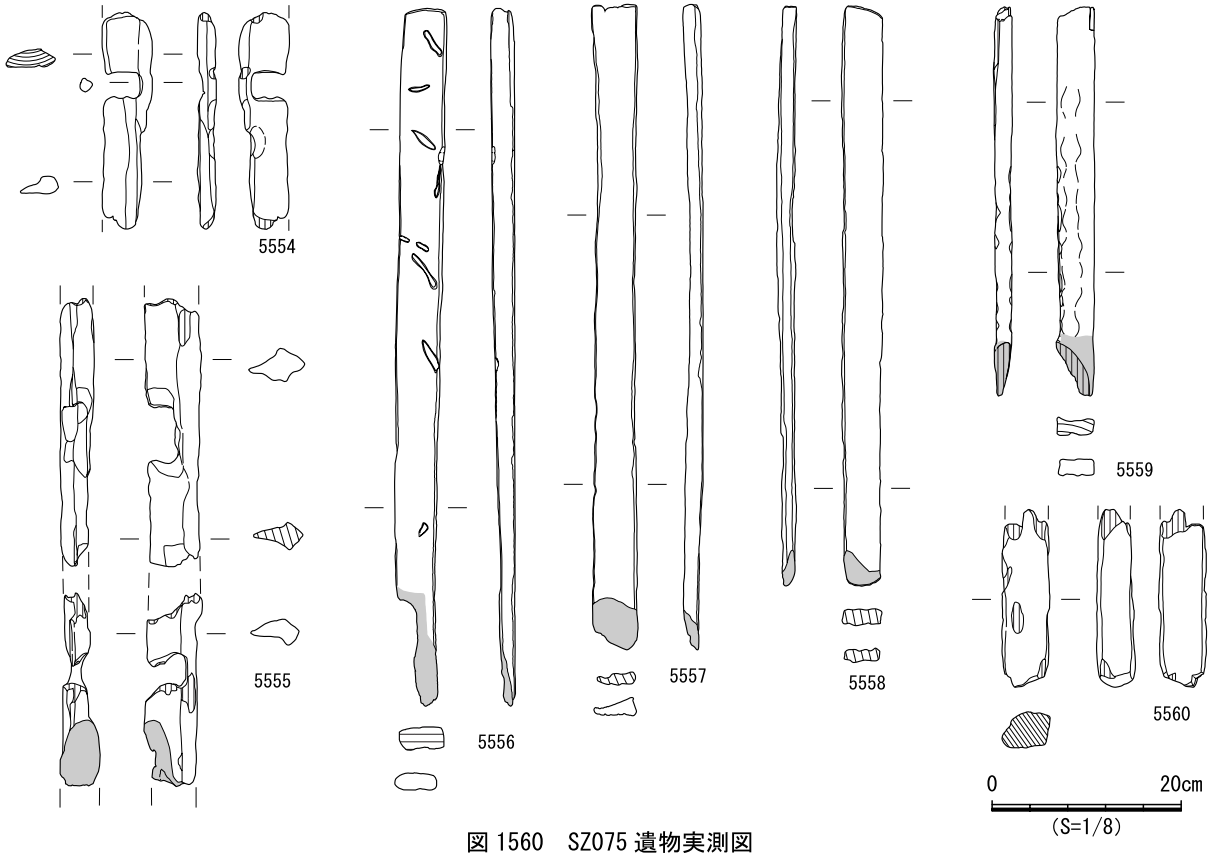


図 1560　SZ075 遺物実測図

SZ078（遺構：図 1561）

検出状況　東部中央に位置する。南西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みであり、今回の報告箇所は土層断面C-C’、D-D’付近の幅約1.0ｍの区域である。北東隅は調査区域外に位置する。遺構検出面は微砂層であり、検出時や遺構掘削時には湧水が著しかった。なお、遺構の平面形は不明瞭であった。

方台部　方台部の各辺は直線的で南東隅は丸みを帯びる。その規模は東西長約6.8ｍ～6.9ｍ、南北長約8.0ｍで、南北にやや長い方形を呈する。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.5ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍであり、確認した範囲では北西隅が途切れる。西溝と南溝に比べて北溝と東溝の幅が広く、断面形はいずれも逆台形状もしくは浅い皿状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、南溝の東西両端はわずかに高い。埋土は４層～７層に分層し、北溝は埋土中層に炭化物を多く含み、全ての溝底面にはブロック土を含む崩落土が堆積していた。

遺物出土状況　今回の報告箇所では、北溝から土器159点、木製品２点、東溝から土器10点、木製品８点が出土した。北溝の２層と４層の境で炭化した板材が出土し、上層からはⅥ期以降の土器片が散在して出土した。また、東溝では底面より３㎝上位で木片が出土した。しかし、いずれも小片であり図示していない。

時期　今回の報告箇所からは言及できないが、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』で検討したように、Ⅳ期と考えられる。

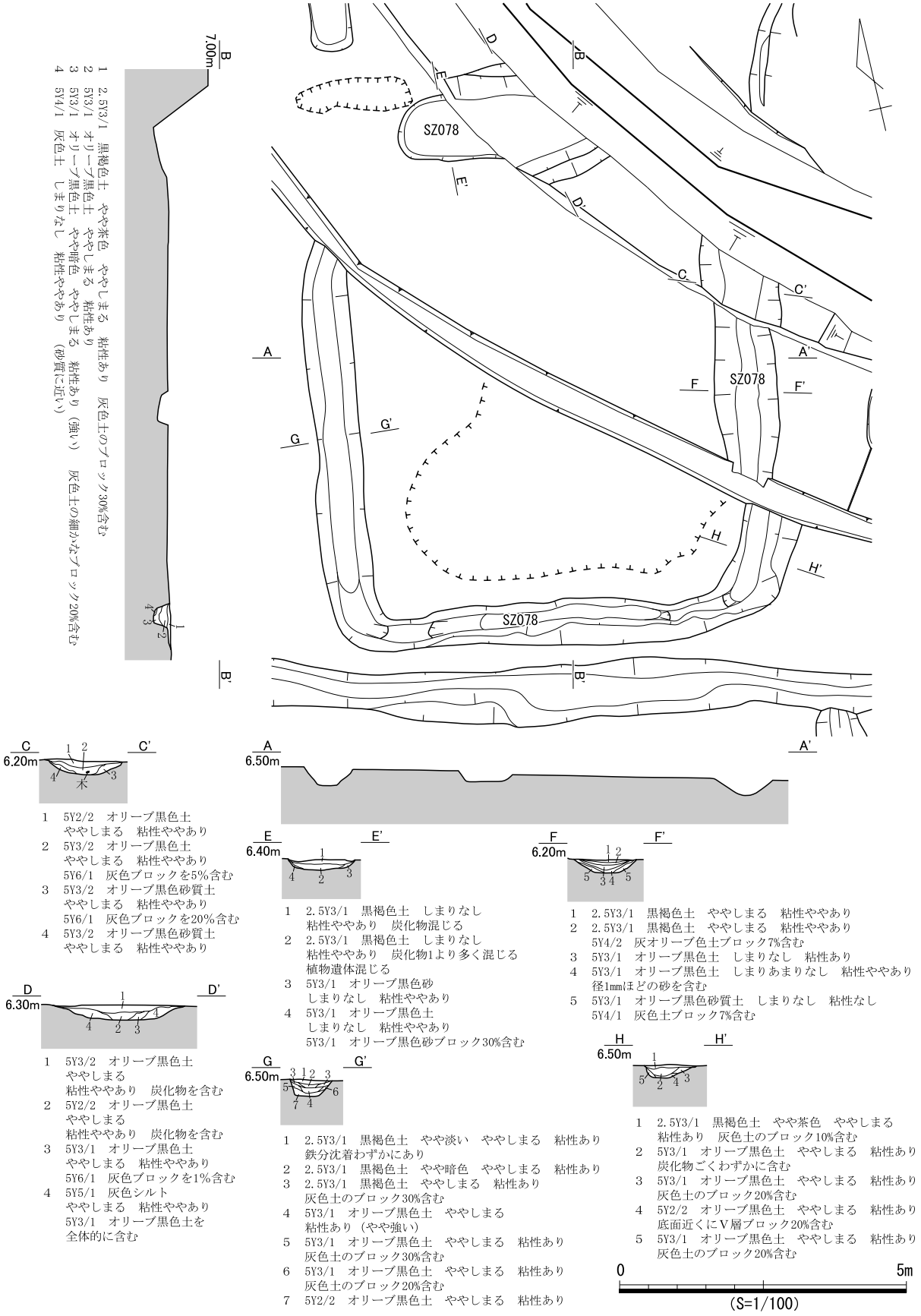


図 1561　SZ078 遺構図

SZ083（遺構：図 1562、遺物：図 1563）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。方形周溝墓の北溝と南溝を検出し、方台部中央は調査区域外にある。東側でSD0381の上層埋土に切られ、南溝の中央付近まで失われている。平面形は北溝が明瞭で、南溝は中央から西側にかけて不明瞭であった。また、周溝は四隅ともに途切れることなく屈曲している。

方台部　大半が調査区域外にある。北辺と南辺はおよそ直線的であり、北東・北西隅は丸みを帯び、南東隅は角があり、南西隅は撹乱のため不明である。その規模は東西長約6.5ｍ、南北長約8.6ｍ～9.2ｍで、南北に長い長方形を呈する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.9ｍ～1.1ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍであり、全周する。平面形は北溝中央付近が南北にやや膨らむが、それ以外はほぼ均一な幅で巡っている。溝底面は南東と南西隅が高く、断面形は北溝が逆台形、南溝は底面から壁面にかけて丸みを帯びている。埋土は４～５層に分層でき、埋土全体にブロック土やＶ層（灰色砂質シルト）の土を含む。壁面から底面にかけては、崩落土が堆積していると考えられる。

遺物出土状況　南溝から土器41点、北溝から土器７点が出土した。いずれも小片であり、供献土器は出土していない。

出土遺物　5561はⅣ期壺Ｈ類。胴部上半に直線文が２帯認められる。黒褐色の胎土からなる古井式

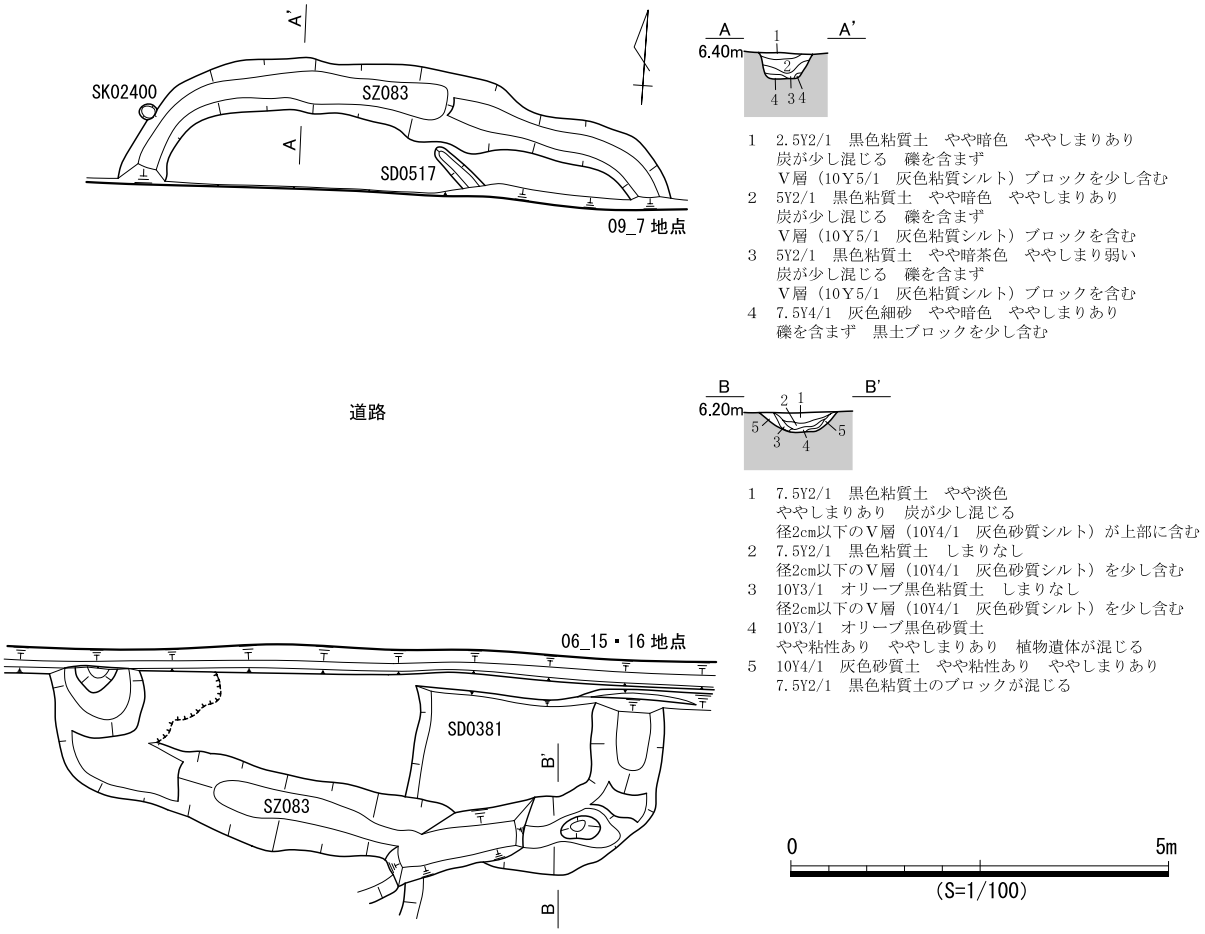


図 1562　SZ083 遺構図

土器の小片である。

時期　供献土器の出土はないが、周溝が全周することとⅣ期の土器片が出土していることから、Ⅳ期と考えられる。

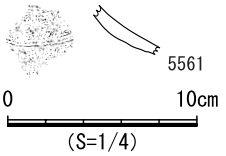


図 1563　SZ083 遺物実測図

SZ085（遺構：図 1564）

検出状況　東部東側の中央から南寄りに位置する。北溝と東溝の北半分は06_10・11地点にあり（『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』にて報告済み）、10_5地点では南溝と西溝の南端を検出した。中央部分は調査区域外となり全容は不明であるが、平面的な位置関係から同一の方形周溝墓の周溝と判断した。なお、

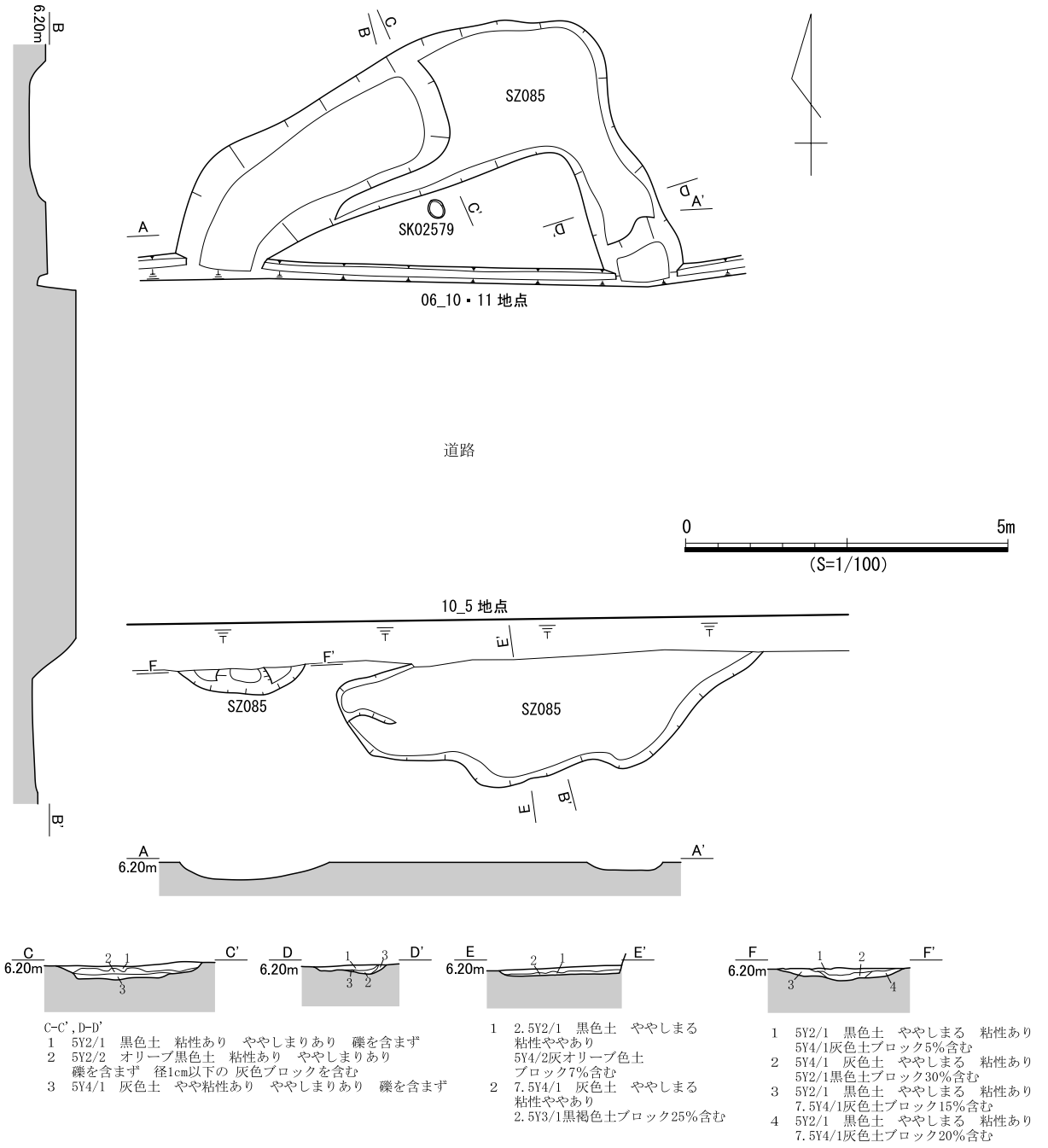


図 1564　SZ085 遺構図

平面形は明瞭であった。

方台部　北辺が直線的にのび、北東隅がほぼ直角に屈曲することから、方形もしくは台形状を呈すると考えられる。南北長約6.7ｍであり、南西隅部は周溝が途切れ陸橋部を有する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　南溝、西溝ともに幅は不明である。深さは約0.1ｍ～0.2ｍであり、南溝は底面が平坦であるが、西溝は底面中央が緩やかに窪んでいる。なお、壁面の傾斜はいずれも緩やかである。埋土は南溝で２層、西溝で４層に分層した。いずれもブロック土の混入が顕著である。

遺物出土状況　南溝から土器13点が出土し、西溝の南端から遺物が出土しなかった。南溝出土土器はⅤ期～Ⅶ期に属するが、いずれも細片であり図示していない。

時期　今回の報告箇所からは言及できないが、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』で検討したように北溝の出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ172（遺構：図1565、遺物：図1566）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。南溝と西溝を検出し、北溝と東溝は調査区域外に位置する。西溝はSZ170を切り、南西隅でSZ173に接する。南溝、西溝ともに他遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。特に西溝はSZ170との切り合い関係の把握が困難であった。

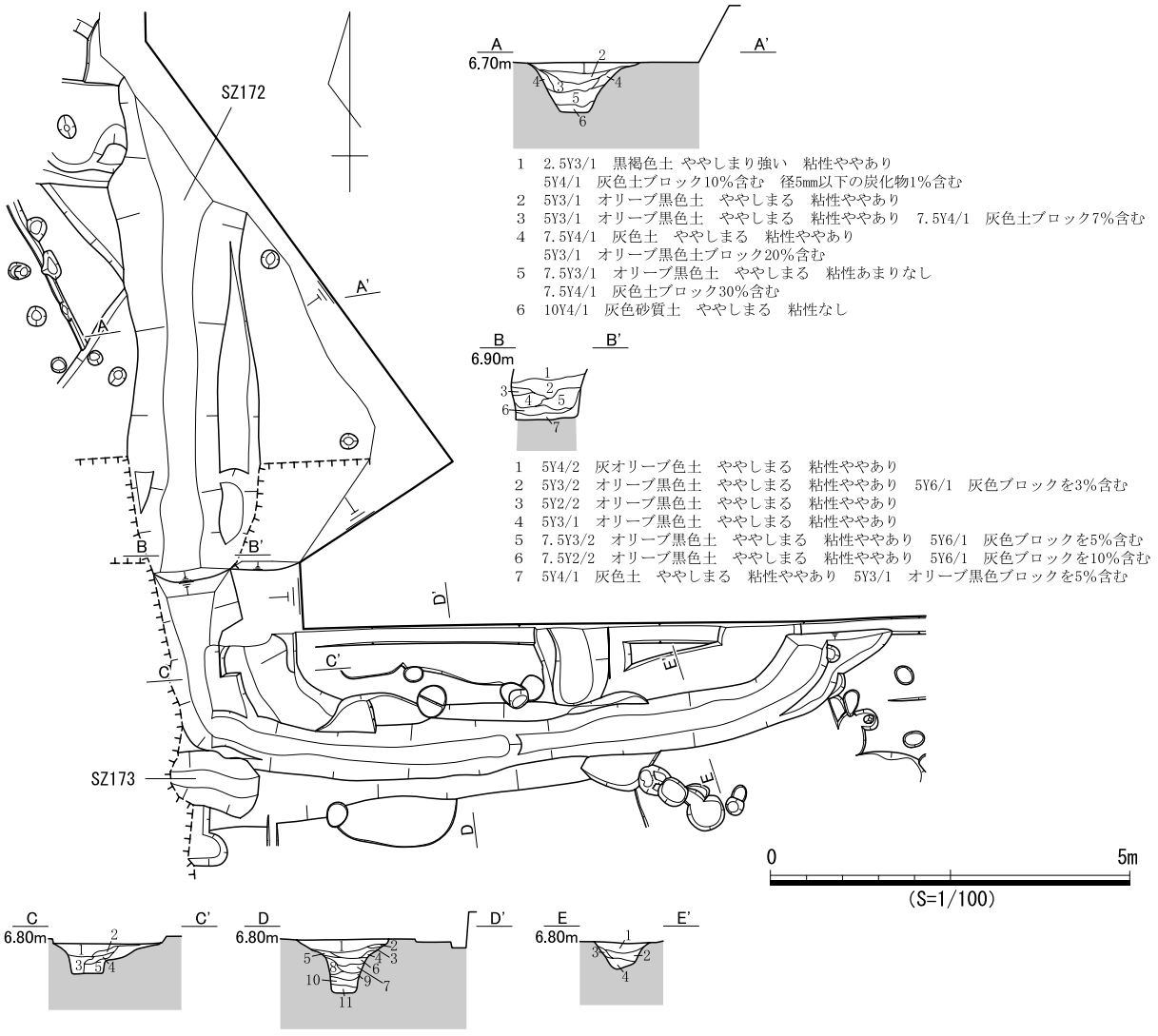
方台部　南辺はおよそ直線的で、西辺は中央付近がわずかに東側に内湾している。隅部は丸みを帯びており、規模は不明である。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.7ｍ～1.8ｍ、深さ約0.3ｍ～0.8ｍで、検出した範囲は全周している。西溝は直線的にのびており、その北側の断面形は逆台形を呈するが、南側は下方が垂直気味に掘り込まれ、上方は外側に大きく開く。一方、南溝の平面形は緩やかに膨らみ、底面は中央西寄りがやや深く、その部分は壁面が垂直気味に掘り込まれている。なお、南西隅部の底面は他の周溝底面よりも約10㎝～15㎝高い。埋土は４層～11層に分層した。主に埋土下層に壁面崩落土と考えられるブロック土を含む堆積層が確認でき、南溝は炭の混入が認められる。

遺物出土状況　南溝から土器227点、西溝から土器221点が、それぞれ散在して出土した。土器片はＩ期とⅤ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期のものがわずかに出土した。本遺構はＩ期のSZ170の上から構築されていることから、Ｉ期の遺物は混入である可能性が高い。また、Ⅴ期～Ⅶ期のものは上層からの出土であり、本遺構の最終埋没時期を示すと考えられる。なお、供献土器の出土は確認できなかった。

出土遺物　5562～5564はＩ期遠賀川系土器の壺。5562は肩部が強く張り出し、頸部と胴部の境には顕著な削り出し段が認められる。5563は口縁部で弱く外反し、平坦な端部には沈線状の凹みが認められる。5564は胴部で、無軸木葉文が認められる。5565はＩ期条痕文系甕。口縁部が外反し、端部に水平な平坦面が形成され、内外面に条痕が認められる。5566は縄文時代晩期後半の深鉢。頸部と胴部の境に口縁端部からやや離れて突帯を貼り付け、突帯上にユビによる押圧が認められる。5567はⅣ期甕A2類。口縁部が強く外反し、端部は平坦面をもつ。端部下端には強いキザミが認められ、粘土が下方に押し出される。

時期　供献土器は未確認だが、Ｉ期のSZ170を切ることと出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。



1　2.5Y3/1　黒褐色土 ややしまり強い　粘性ややあり
　5Y4/1　灰色土ブロック10%含む　径5mm以下の炭化物1%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック7%含む
4　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック20%含む
5　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あまりなし
　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
6　10Y4/1　灰色砂質土　ややしまる　粘性なし

1　5Y4/2　灰オリーブ色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
3　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
6　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
7　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを5%含む

C-C',D-D',E-E'
1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　径5cmの円礫を含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
3　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
4　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　Ｖ層（10Ｙ5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
5　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　やや青色　ややしまりあり　礫を含まず
6　5Y2/1　黒色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず　Ｖ層（10Ｙ5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
8　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず　灰色細砂ブロックを含む
9　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや茶色　やや粘性あり　ややしまる　礫を含まず　灰色細砂ブロックを少し含む
10　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　やや暗色　やや粘性あり　ややしまる　礫を含まず
11　10Y4/1　灰色微砂　やや粘性あり　ややしまる　灰色細砂ブロックを含む

図 1565　SZ172 遺構図

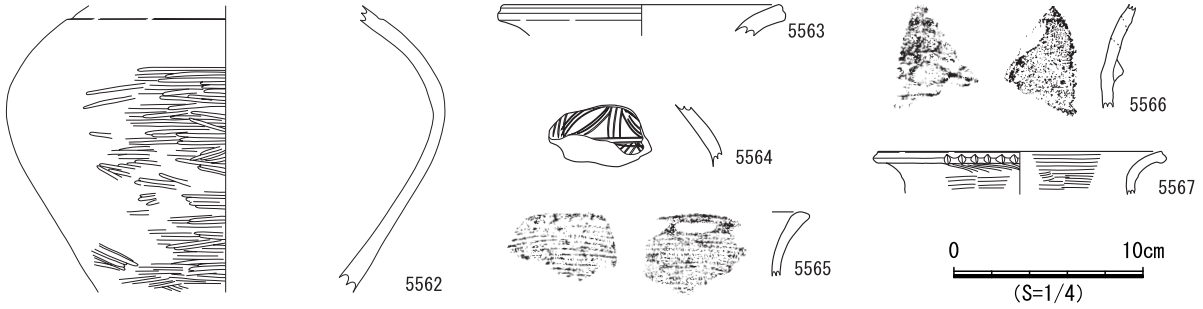


図 1566　SZ172 遺物実測図

SZ173（遺構：図 1567、遺物：図 1568）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側でSZ171・SZ172にそれぞれ接し、東側でSZ174とSZ175を切る。西溝はSB475の掘形底面で検出し、平面形は比較的明瞭であったが、南北方向にのびる撹乱底面で検出した平面形は不明瞭であった。また、東溝はSK05732の底面で検出し、平面形は不明瞭であった。

方台部　北辺はやや緩やかに膨らみを帯びており、他の辺はやや蛇行している。その規模は南北長約5.0ｍ、北側の東西長約4.7ｍ、南側の東西長約5.3ｍであり、北辺がやや短い台形状を呈する小型の方形周溝墓である。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.5ｍ～1.3ｍ、深さ約0.2ｍ～0.4ｍで、検出面では北東隅が途切れている。その底面は東・北溝はやや丸みを帯び、南・西溝は平坦で、壁面は直線的に開く。東溝の底面は北側より南側が深く、南東隅部が最も深くなる。しかし、南西隅部は浅く、北西隅部は北・西溝の底面標高と大きな差がない。周溝の埋土は３～６層に分層した。全体的にブロック土の混入が目立ち、層界の凹凸が目立つことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　東溝から土器89点、南・西・北溝から土器164点が、散在した状態で出土した。遺物

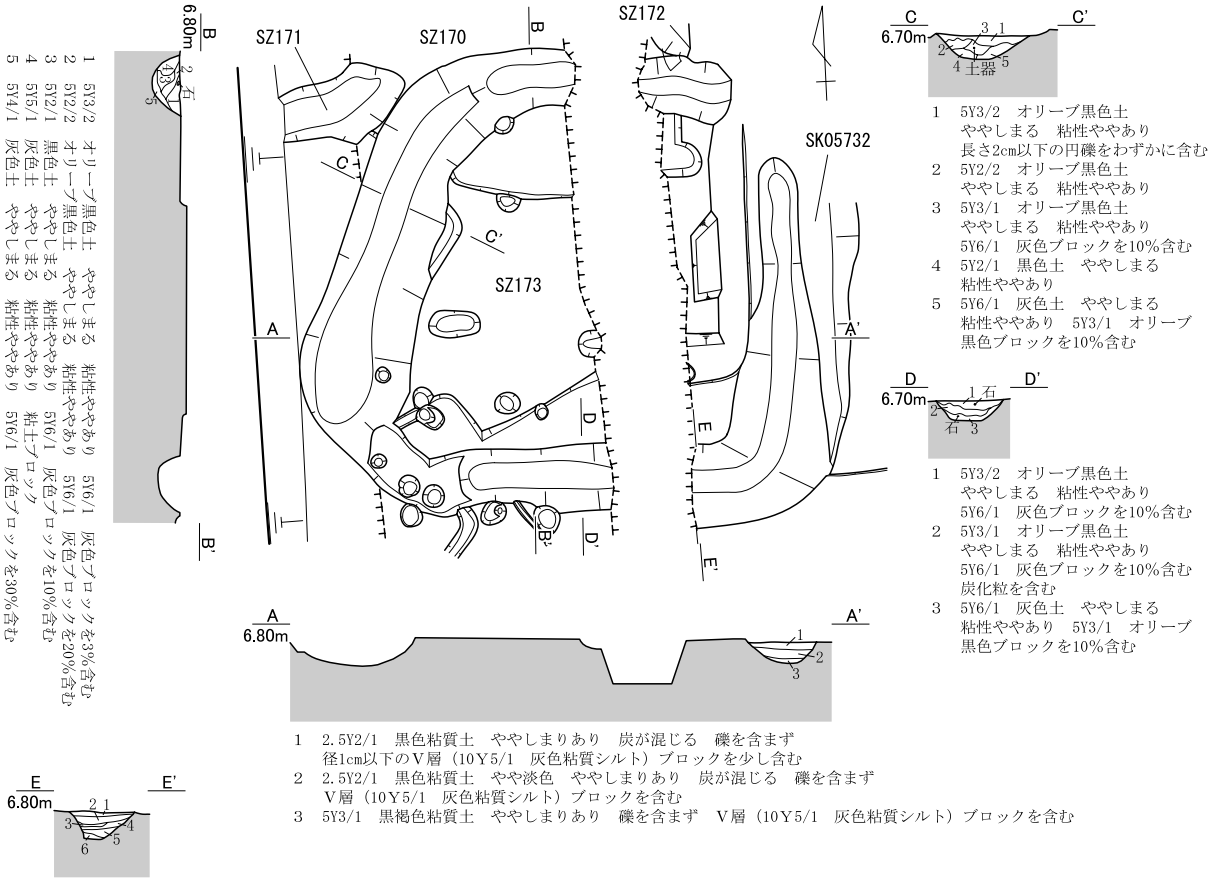


図 1567　SZ173 遺構図

の出土数は少ないものの、Ⅳ期の土器片の出土が目立つ。また、周辺の方形周溝墓と同様にⅠ期の土器片も出土し、上層ではⅤ期～Ⅶ期の土器片も出土している。なお、供献土器の出土は確認できなかった。

出土遺物　5568はⅣ期壺底部。外面には縦方向の細かいハケ目が残り、内面にはユビナデの痕跡が残る。5569はⅦ期高坏C4d類。口縁部内面に多条沈線が認められる。沈線間には山形文２帯、対向山形文を１帯施文する。5570はⅤ期～Ⅵ期甕A2a類。頸部は直立気味で、口縁部が強いヨコナデによって短く強く屈曲する。端部もナデによって平坦面を形成し、粘土が外方にはみ出す。口縁部外面には細かな刺突が認められる。5571は縄文時代晩期後半の深鉢。端部が短く外反し、肥厚する。端部直下からやや離れて突帯を貼り付け、突帯上には貝による押し引きを加える。

時期　Ⅳ期に再掘削されたSZ175を切るが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

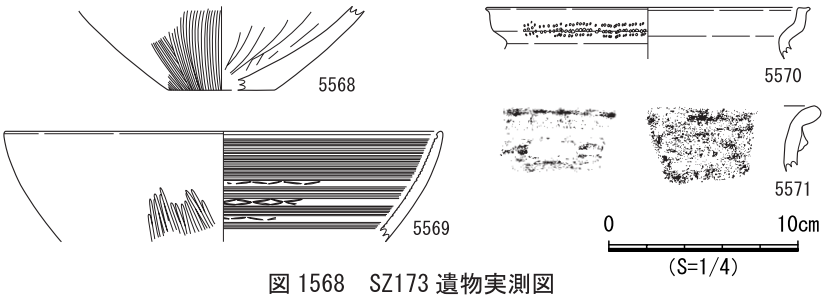


図 1568　SZ173 遺物実測図

SZ175（遺構：図 1569～1571、遺物：図 1572）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。南西隅は調査区域外にあり、北西隅でSZ173に切られ、SZ174を切る。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。また、周溝南西隅は遺構埋土が異なっていたために、周溝の再掘削を想定した。

方台部　南辺はおよそ直線的であるが、他は若干の凹凸がある。また、隅部の形状は遺構の重複もあり明瞭ではないが、北東隅はわずかに外側に張り出している。方台部の規模は南北長約10.0～10.5ｍ、東西長約9.7ｍで、わずかに南北が長い長方形、あるいは平行四辺形状を呈する。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～4.0ｍ、深さ約0.2ｍ～0.8ｍであり、検出した範囲内では全周しているが、北西隅はSZ173に切られるため定かではない。その断面形はおよそ逆台形を呈し、南溝のみ底面が丸みを帯びている。また南溝は他の溝よりも幅が広く、深いという特徴があるものの、西端南側は基盤層（Ⅴ層）が高い位置で表出した。なお、南西隅部は検出埋土の違いから部分的に周溝を再掘削していると判断した（図1570）。隅部は北東隅が溝底面より約0.3ｍ浅く、幅も狭くなっている。埋土は３層～13層に分層した。壁面沿いに崩落土が認められ、中央が凹む堆積である。南北溝にブロック土の混入は目立たないが、東西溝には多く確認できた。

遺物出土状況　南溝から土器1,365点、石器類１点、西溝から土器214点、北溝から土器281点が出土した。北溝中央の方台部側で壺２個体（5574、5575）が横位で出土し、一つは口縁部を南東に、一つは口縁部を北西に向けていた。いずれも完形に近い状態の土器であり、供献土器と考えられる。また、南西隅部の再掘削前の埋土からⅢ期細頸壺（5573）が出土した。その他、埋土上層を中心にⅠ期やⅤ期～Ⅶ期の小片が出土した。

出土遺物　5572はⅠ期遠賀川系土器の壺。頸部と胴部の境に削り出し突帯を形成する。5573はⅢ期

壺Ａ類。胴部の破片のみであるが、器壁が薄く、黒色で堅緻に焼成された良好な資料である。胴部上半には直線文帯と無文帯を交互に配し、直線文中に３条１組の弧線文が加えられる。直線文帯の両側には沈線が付加される。胎土、器形から在地のものとは考えにくく、尾張地方からの搬入品と考えられる。5574はⅣ期壺Ｃ類。大型の壺で、口縁部が大きく開く。端部下端を拡張し、その上からユビ

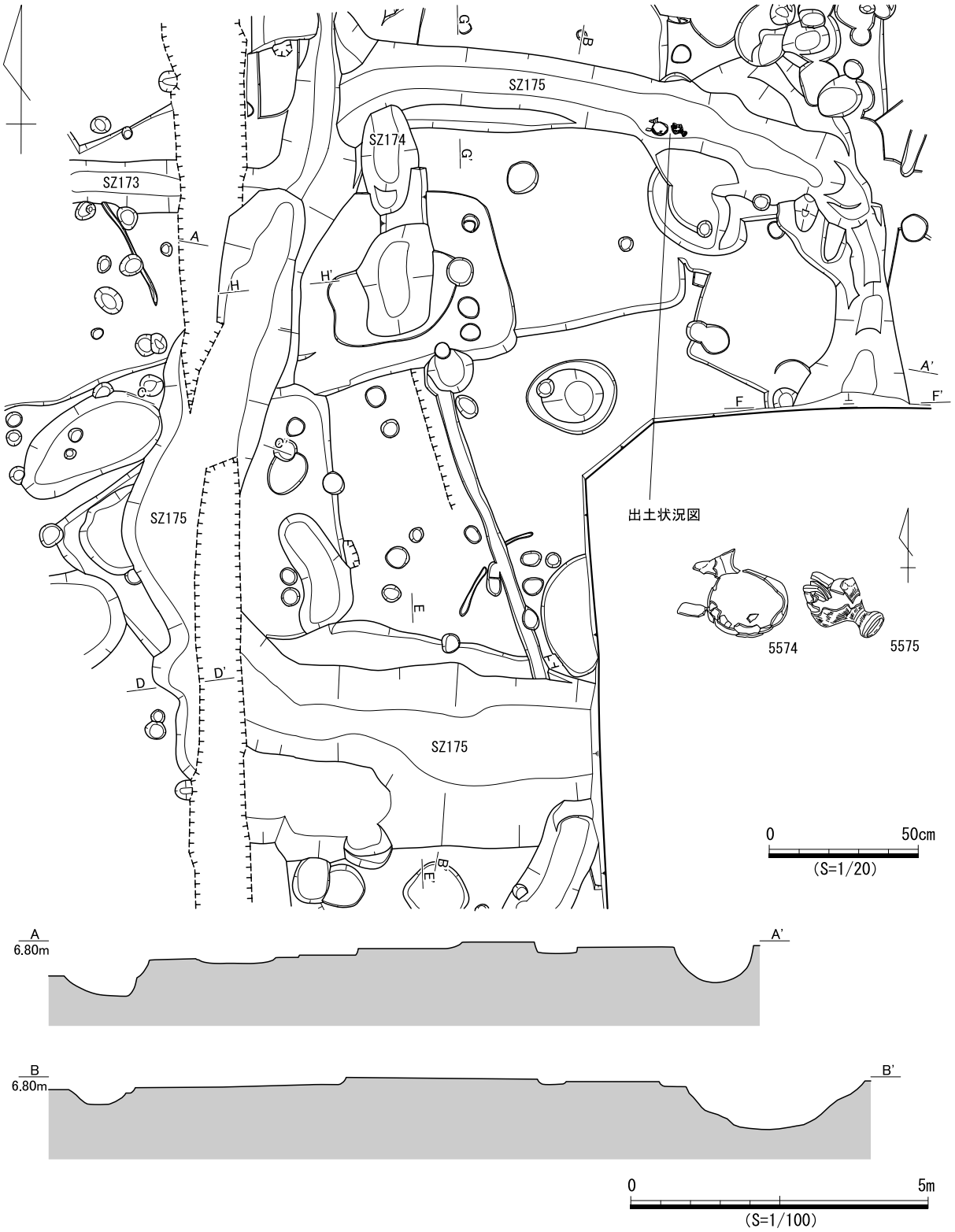
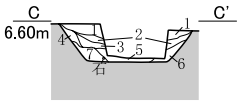
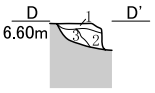


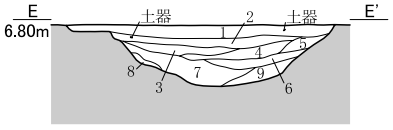
図 1569　SZ175 遺構図（１）



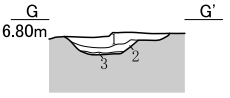
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
3　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
5　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
6　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを3%含む
7　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを20%含む



1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを20%含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
3　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　径10cm以下の円礫を少し含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
6　7.5Y2/1　黒色粘質土　やや青い色　しまり弱い　礫を含まず
7　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　径10cm以下の円礫を少し含む
8　7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　しまり弱い　砂が混じる　礫を含まず
9　7.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　しまり弱い　礫を含まず



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり
炭が混じる　砂が少し混じる　礫を含まず
2　5Y4/1　灰色砂質土　やや暗色　やや粘性あり
ややしまりあり　礫を含まず
3　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　やや暗色
ややしまりあり　礫を含まず

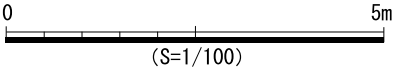
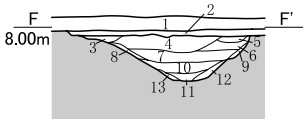


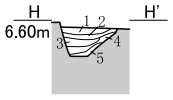
図 1570　SZ175 遺構図（２）

による押圧を等間隔に加え、襞状の形状を整える。頸部は細くなり、３～４条の凹線が認められる。胴部形状はＡ、Ｂ類と共通し、算盤玉状で最大径が胴部中央付近となる。胴部下半に穿孔が１箇所認められる。器面には文様は確認できず、ハケによる調整後のミガキが認められる。5575はⅣ期壺Ａ1類。口縁部が内湾気味に短く屈曲し、端部外面には凹線２条を施文する。頸部にも凹線３条が認められる。加飾は認められず、全面にハケ目が残る。5576はⅣ期壺Ａ類胴部。器面全体にハケ目が残る。5577はⅣ期壺。胴部上半の破片資料で、ハケ調整の後に直線文、波状文を施文する。5578はⅣ期壺Ｈ類。黒色を呈する器面にハケ目を残す。斜格子文、波状文が認められる。5579はⅣ期壺Ｆ類。口縁部が短く外反し、頸部直下には穿孔が認められる。端部を肥厚気味に形成し、平坦面をもつ。端部下端には刺突が認められる。5580はⅤ期壺Ａ類。台付き壺の脚台部で、円錐状に大きく開く。現状では、脚裾部直上に透孔が２孔認められるが、全体の数、方向は不明である。脚裾部は強く外反し、端部には顕著な平坦面が認められる。5581はⅠ期遠賀川系土器の甕。口径約30㎝となる大型品である。口縁部が短く外反し、端部はやや平坦な面をもつ。口縁部直下に削り出し段を形成し、それより下位には沈線等の施文は認められない。5582はⅣ期鉢Ａ類。口縁部が大きく内湾し、端部には顕著な平坦面をもつ。端部平坦面は内傾し、外面には数条の凹線が認められる。5583はⅠ期遠賀川系土器の甕。口縁部が外反し、肥厚気味の端部下端にキザミを施す。頸部に削り出し段を形成する可能性がある。5584はⅣ期甕A1類。口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面が認められる。胴部にはタタキの後、ハケ調整が認められる。5585はⅤ期甕A2a類。頸部に直立する部位があり、端部が大きく外方に引き出される。屈曲する端部内面には、強いヨコナデによる顕著な凹面が認められ、端部にも平坦面を形成する。端部外面には刺突を加える。5586はⅦ期高坏G3c類。口縁部が内湾し、端部付近の外面に多条沈線が認められる。尖り気味の端部直下には細かな刺突文を、多条沈線間には二重山形文を施文する。

時期　Ⅳ期のSZ173に切られⅠ期のSZ174を切ることと出土遺物の時期から、Ⅲ期に構築され、Ⅳ期に再掘削されたと考えられる。



1　Ⅰ層
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや砂質　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや淡色　やや砂質　ややしまる　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを含む
4　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを多く含む
7　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
8　2.5Y4/1　灰色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを含む
9　2.5Y4/1　灰色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを含む
10　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
11　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　砂が混じる　礫を含まず
12　7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを含む
13　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質土シルト）ブロックを含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
2　2.5Y3/1　黒色粘質土　やや暗色　しまり弱い　炭が混じる　礫を含まず
3　5Y2/1　黒色粘質土　しまり弱い　炭が混じる　礫を含まず
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　しまり弱い　炭が混じる　礫を含まず　砂質土ブロックを含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　しまり弱い　炭が混じる　礫を含まず　砂質土ブロックを含む

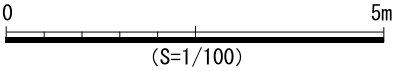


図 1571　SZ175 遺構図（３）

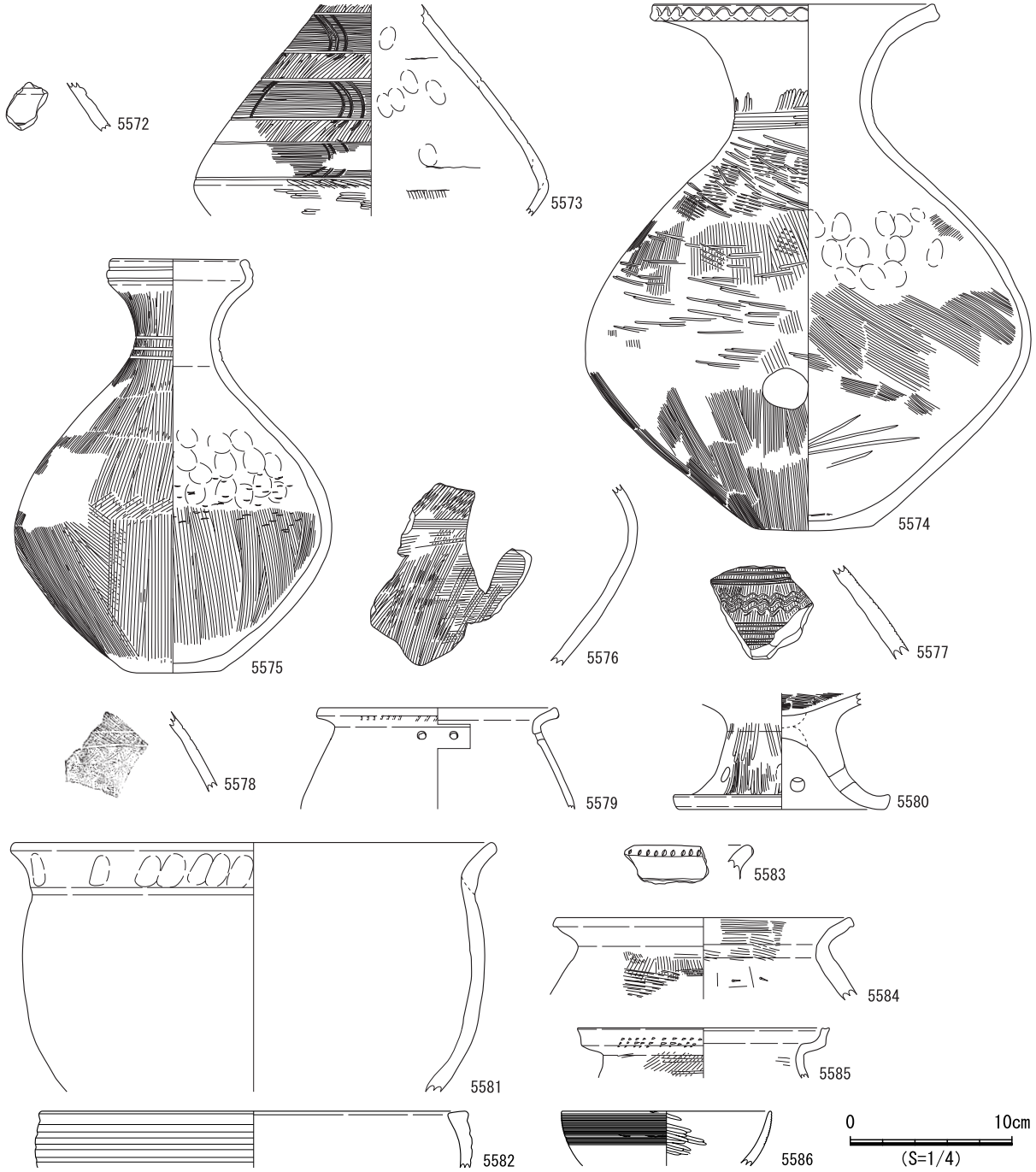


図 1572　SZ175 遺物実測図

SZ176（遺構：図 1574、遺物：図 1573）

検出状況　東部西側中央で検出し、遺構の大半は調査区域外にのびる。平面形は明瞭であったが、北端はSK05487底面で痕跡的に確認できたのみであった。周溝１条のみの検出であるが、検出した埋土が他の弥生中期頃の方形周溝墓と類似しているため、方形周溝墓の周溝と判断した。

方台部　規模は不明で、方台部の東辺は中央部分がわずかに東側に膨らむ。中央付近には周溝と類似する埋土を有するSK05498が位置する。SK05498は長さ1.6ｍ以上、幅約0.8ｍで隅丸長方形を呈し、深さ約0.3ｍで、底面が平坦である。出土遺物が少なく、その時期や性格は不明であるが、遺構埋土

が弥生時代後期以降のものとは明らかに異なることから、主体部の可能性もある。なお、墳丘盛土は確認できなかった。

周溝　幅約0.9ｍ～1.3ｍ、深さ約0.5ｍである。東溝の北端は西に屈折して2.0ｍ程で収束するが、屈折部より西側はSK05487底面における検出であり、別遺構の可能性もある。一方、南端は屈折することなく収束している。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、東溝の北端と南側がわずかに深く掘り込まれている。埋土は９層に分層でき、ブロック土が部分的に混入する。

遺物出土状況　埋土中から土器164点が出土した。土器の出土量は少ないもののⅣ期の土器片が目立ち、縄文時代晩期やⅠ期、Ⅴ期～Ⅸ期の土器片もわずかに混入している。なお、供献土器と考えられる土器は出土していない。

出土遺物　5587はⅠ期遠賀川系土器の壺。胴部と頸部の間に削り出し段を形成し、その両側に幅広の沈線を２条施文することで突帯状の形状を作り出す。太い沈線間には細い沈線が１条認められる。5588はⅣ期壺。波状文、直線文が認められる。5589はⅨ期甕。口縁部が強く外方に屈曲する。端部が肥厚し、平坦面を形成する。5590は縄文晩期後半前葉の深鉢。口縁部がわずかに外傾し、端部を丸くおさめる。端部には沈線状の凹みが認められる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

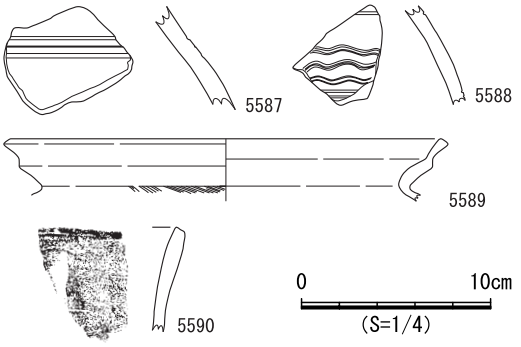


図 1573　SZ176 遺物実測図

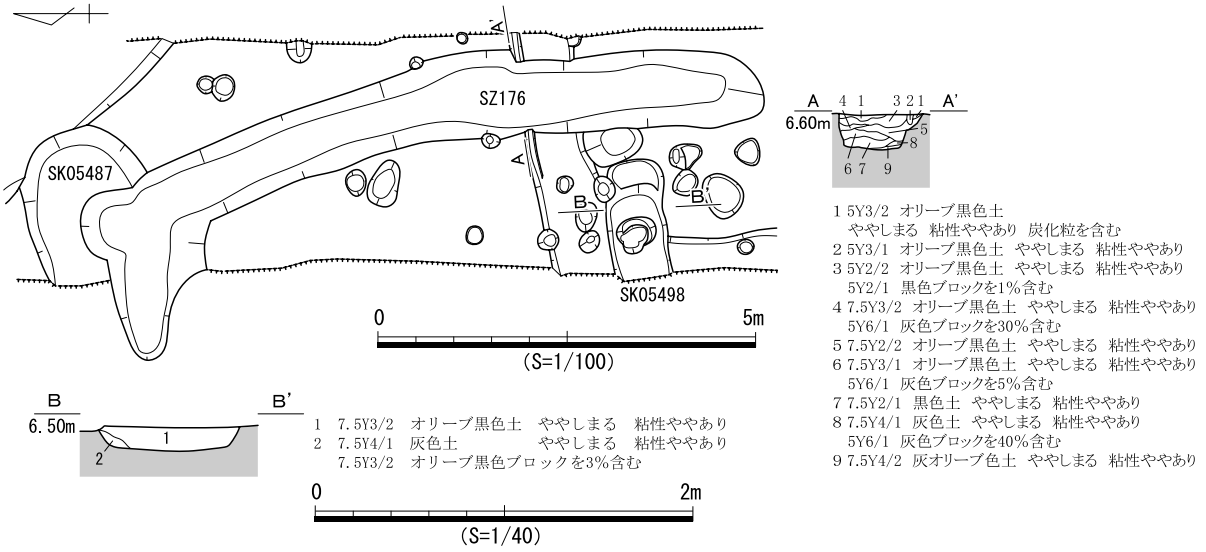


図 1574　SZ176 遺構図

SZ178（遺構：図 1575、遺物：図 1576）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、東側の半分以上が調査区域外にある。北溝と西溝の北半分のみを確認でき、平面形が方形を呈することから方形周溝墓と判断した。検出面はⅤ層上面だが、他遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。なお、西溝はSK05803に切られており、SK05824は南溝の西端の可能性もあるが、平面形が円形を呈するため土坑として報告する。

方台部　西辺は緩やかに湾曲しており、隅部は丸みを帯びている。その規模は不明であり、墳丘盛土

や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.9ｍ～1.6ｍ、深さ約0.3ｍであり、西溝よりも北溝の幅が広い。その断面形は逆台形を呈し、北溝は南壁面にやや幅広の平坦面を有する。底面はほぼ平坦であり、隅部は他の周溝底面とほぼ同じ高さである。埋土は６層に分層した。南壁面沿いには壁面崩落土と考えられるブロック土を含む土が堆積しており、その他はほぼ水平堆積である。

遺物出土状況　埋土中から土器120点が散在した状態で出土した。出土遺物はⅣ期とⅥ期～Ⅶ期のものであり、Ⅵ期～Ⅶ期のものは混入と考えられる。なお、供献土器と判断できる土器は出土していない。

出土遺物　5591はⅣ期壺Ｈ類。古井式の壺胴部片で、器面に丁寧な加飾を加える。半截竹管による区画線を境に、上下に斜格子文を施文する。小片のため全容は不明だが、ハケ状工具とクシ状工具によって施文していると思われる。在地のものとは明らかに異なる黒褐色の胎土が特徴的で、搬入品と考えられる。

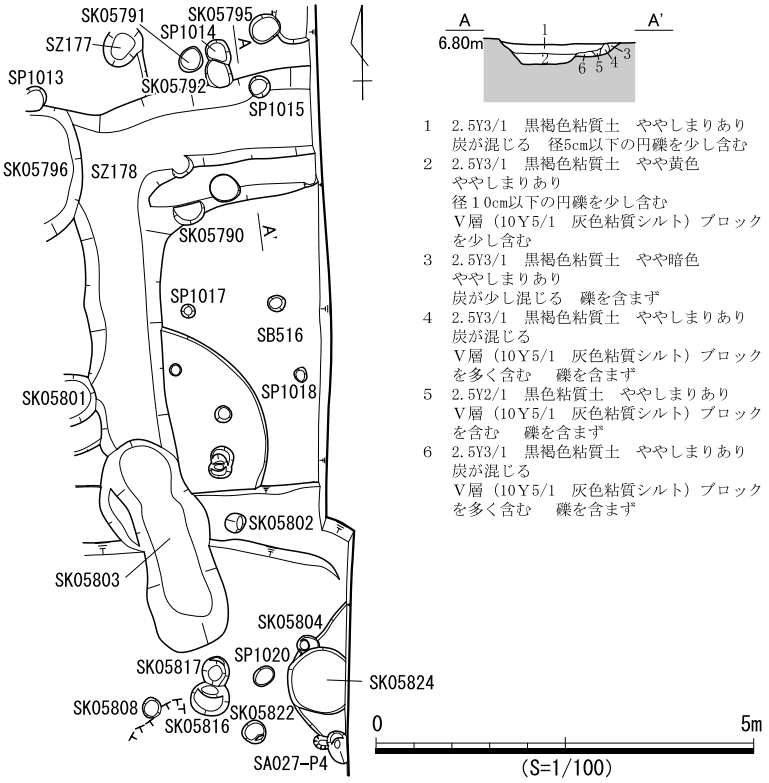


図 1575　SZ178 遺構図

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

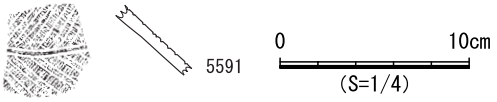
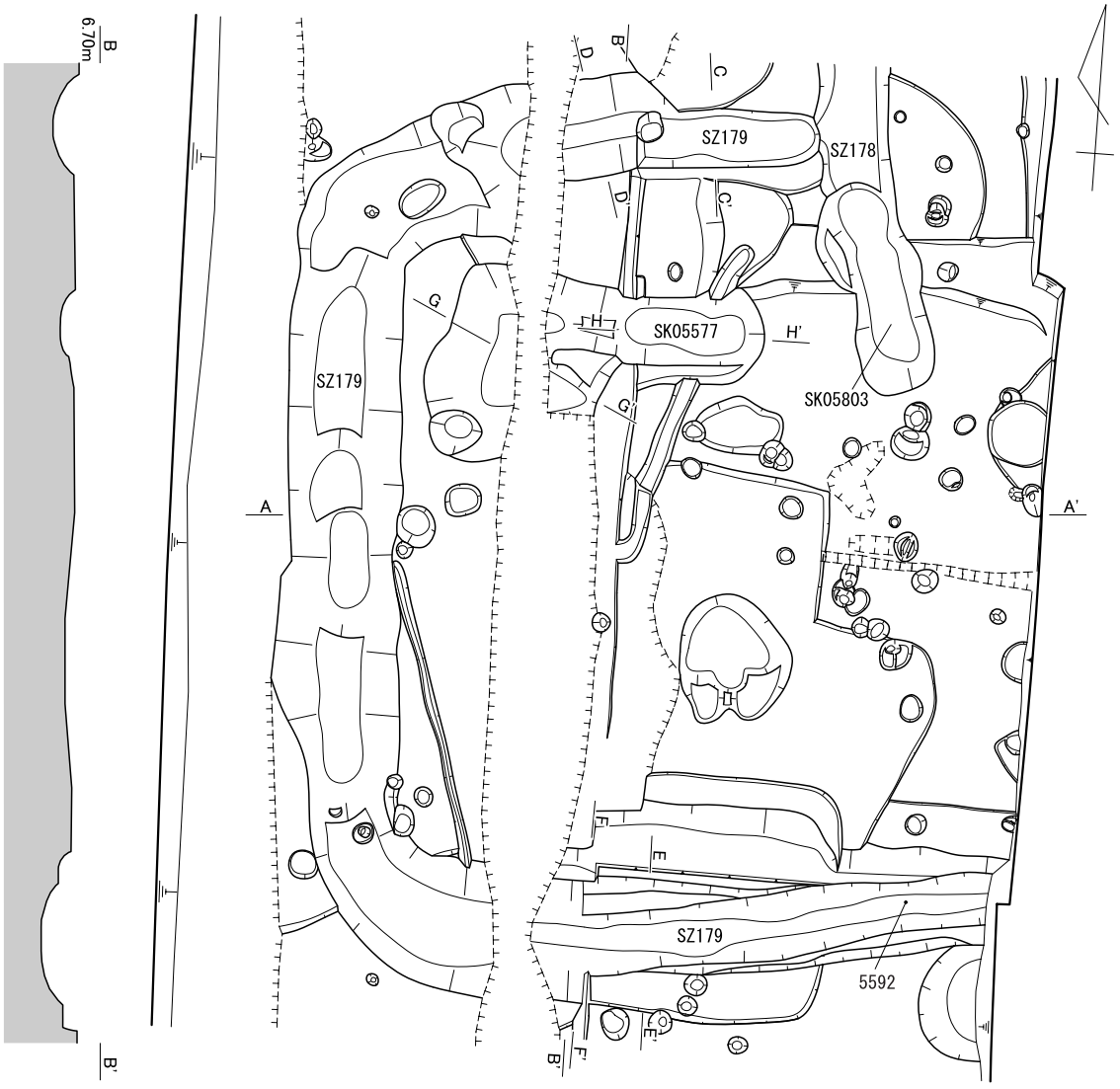


図 1576　SZ178 遺物実測図

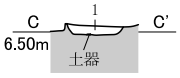
SZ179（遺構：図 1577・1578、遺物：図 1579）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。東側は調査区域外にのび、主に竪穴住居跡や土坑の底面で検出した。平面形は、途中で切れる北溝部分はやや不明瞭だったが、全体的に明瞭であった。なお、北溝はSZ178西溝に切られている。

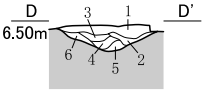
方台部　南北長約10.0ｍの方形を呈すると考えられる。南辺と西辺は直線的で、北辺はやや外側に膨らむ。方台部の北側では２基の土坑を検出した（SK05577、SK05803）。SK05577は長軸長約4.6ｍの不整形を呈する土坑であり、検出時の埋土が方形周溝墓の周溝埋土と類似していた。しかし、東側は平成20年度、西側は平成23年度に調査したこともあり、平面形は不明瞭で、底面中央部分がやや高いことから２基の土坑が存在していた可能性がある。出土遺物は29点のみで、いずれも細片であるため時期は不明であり、本遺構との関連性は不明である。また、SK05803は本遺構を切るSZ178西溝より後出するため、本遺構との関連性は低いと考えられる。よって、主体部については不明であり、墳丘盛土も確認できなかった。



1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
3　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
4　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
6　7.5Y2/2　オリーブ黒色度　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
7　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y2/2　オリーブ黒色ブロックを20%含む
8　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y2/2　オリーブ黒色ブロックを10%含む



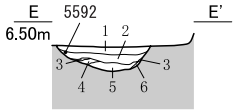
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土
ややしまりあり　炭が混じる
径10cm以下の亜円礫を含む



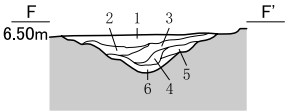
1　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む　炭化粒をわずかに含む
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
6　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む

0　5m
(S=1/100)

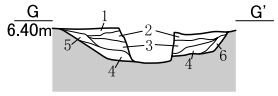
図 1577　SZ179 遺構図（１）



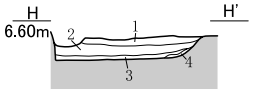
1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　土器片わずかに含む
　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土（やや暗い）　しまる　粘性あり（強い）
　炭化物わずかに含む　鉄分沈着あり
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性ややあり
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり
6　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性なし



1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物をわずか含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
5　5Y6/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/2　オリーブ黒色ブロックを30%含む
6　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/2　オリーブ黒色ブロックを40%含む



1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
2　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/1　黒色ブロックを1%含む
3　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
4　7.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
6　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む



1. 2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
2. 5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを少し含む
3. 5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり
　砂が混じる
4. 7.5Y4/1　灰色細砂　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む　下層

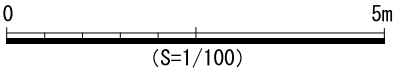


図 1578　SZ179 遺構図（２）

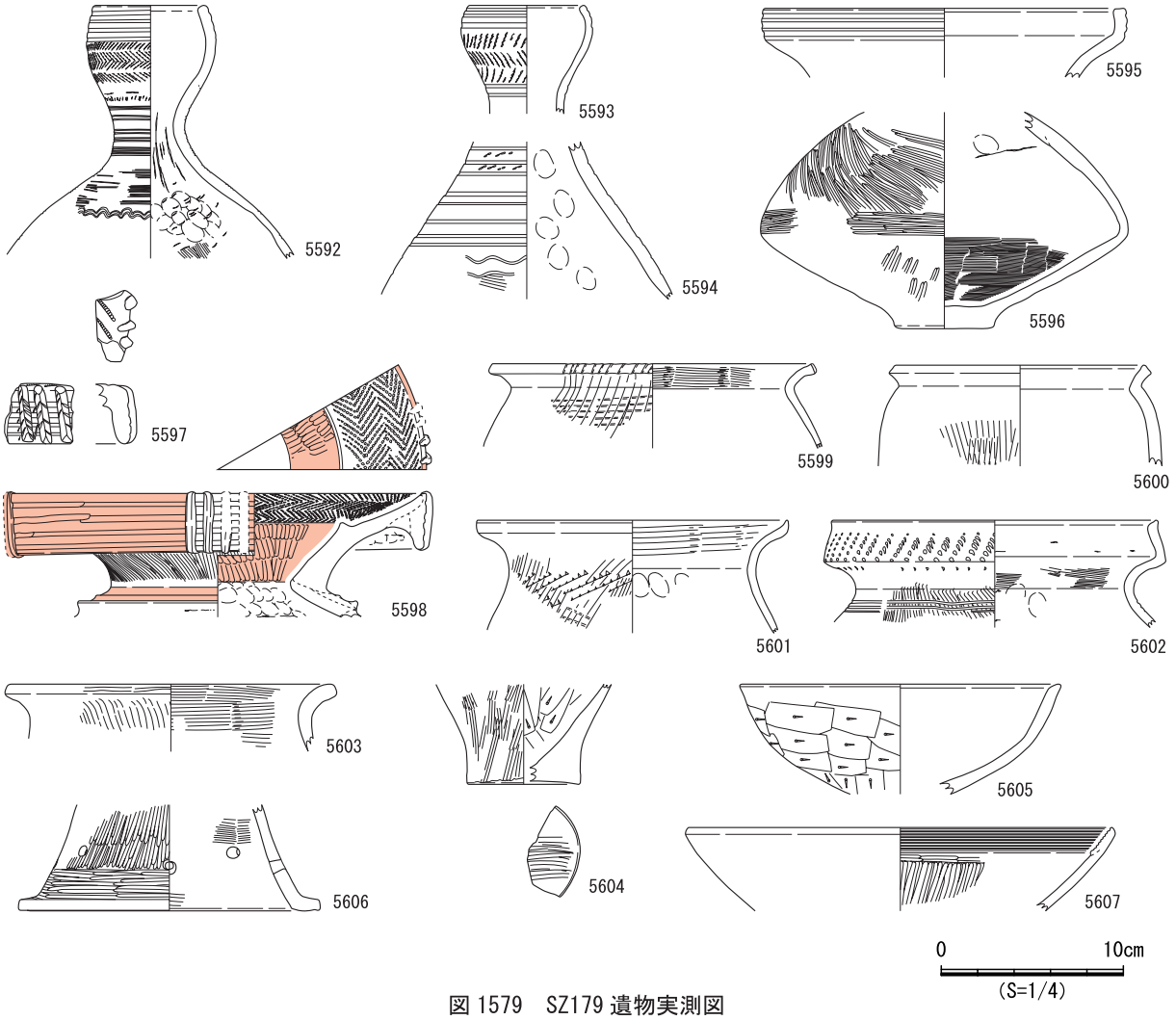


図 1579　SZ179 遺物実測図

周溝　幅約0.5ｍ～1.5ｍ、深さ約0.2ｍ～0.6ｍで、北西隅部と南西隅部はやや浅い。西溝は最も幅広で深く、底面中央部分が楕円形状に窪んでいる。一方、南溝と北溝はやや浅い。溝の断面形は、底面幅がやや狭い逆三角形状であり、南溝は方台部側の壁面傾斜が緩やかなのに対して、反対側は急傾斜である。埋土は、浅い北溝を除いて６層～８層に分層した。下層は壁面崩落土と考えられるブロック土が混入する土が堆積しているが、上層にもブロック土が混入しているため、人為堆積の可能性もある。

遺物出土状況　埋土中から土器1,169点、石器類３点が出土した。土器は溝全体から散在して出土しており、Ⅳ期の土器が多いものの供献土器と判断できるものはない。また、縄文時代晩期、Ⅰ期、Ⅴ期～Ⅶ期の土器もわずかに出土したが、混入と考えられる。

出土遺物　5592～5594はⅣ期壺A2類。5592は口縁部がほぼ完存し、袋状となる。端部直下には４条の明瞭な凹線が認められる。その下方に、クシ状工具による刺突文を羽状に４帯施文する。頸部にはハケ調整を施した上からナデ調整を加え、その下方から胴部上半にかけて直線文帯が認められる。5593は口縁部が袋状となり、頸部及び口縁端部にそれぞれ数条の凹線を施文する。凹線帯の間には、クシ状工具による刺突文を羽状に３帯施文する。5594は胴部上半に直線文及び波状文が認められる。5595はⅣ期壺B2類。口縁部が大きく外反し、端部は直立する。端部には平坦面を形成し、外面には３条の凹線を施文する。5596はⅥ～Ⅶ期壺Ａ類。底部はやや突出し、厚手である。胴部は最大径部での屈曲が著しく、下半は直線的にのびている。5597はⅤ期壺A4類。口縁部が外反し、端部が垂下する。外面には擬凹線が３条確認でき、その上から棒状浮文を貼付する。浮文には刺突を加え、現状では３条１組と考えられる。5598はⅥ～Ⅶ期壺A3類。口縁部が外反し、内面には粘土を貼付して明瞭な凸部を作り出し、段を形成する。段より下方には赤彩を施し、内面にはクシによるやや大振りの羽状文を２帯施文する。端部は大きく下方に拡張し、擬凹線及び赤彩を施す。４箇所に棒状浮文帯を配し、１箇所につき４条の棒状浮文を貼り付ける。5599、5600はⅣ期甕A2類。ともに口縁部が外反する。5599は胴部にタタキ調整を施した後に粗いハケによる調整を施す。口縁部のキザミはタタキによる。5600は摩耗が著しいため、器面調整は確認できない。5601はⅣ期甕A3類。頸部が緩やかに屈曲し、口縁部が外反する。端部がわずかに直立する。5602はⅣ期甕B2類。口縁部が強く屈曲し、内面には顕著な凹部を形成する。端部が内傾して立ち上がり、平坦面をもつ。端部外面に刺突を加え、煤が付着する。5603はⅡ期～Ⅲ期甕。頸部の屈曲が弱く、口縁部が短く外反する。口縁部全体が肥厚気味で、内面にはヨコ方向のハケ目が強く残り、外面には端部と胴部にハケ目が認められる。5604はⅣ期甕Ａ類底部。5605はⅣ期高坏。坏部は椀状を呈し、口縁部が内湾して立ち上がる。端部にはわずかに平坦面を形成し、やや内傾する。ケズリの痕跡が著しく6090と同一個体の可能性がある。5606はⅣ期高坏。脚部が直線的に開き、接地面を形成するように裾部を逆Ｌ字状に屈曲させ、端部にほぼ垂直に面取りされる。現状では焼成前と考えられる穿孔が２箇所に残っている。また、5607はⅦ期高坏C3b類。口縁部が内湾し、端部を肥厚する。肥厚部分に多条沈線を施し、外面はミガキ調整を施す。

時期　Ⅳ期のSZ178に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

SZ180（遺構：図1580、遺物：図1581）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。東側は調査区域外にのび、西溝は半分以上が撹乱により失われている。南溝はSB517、SB518底面で検出し、北溝はSK06045に切られ、北東側でSK06080を、南西側でSZ182を切る。

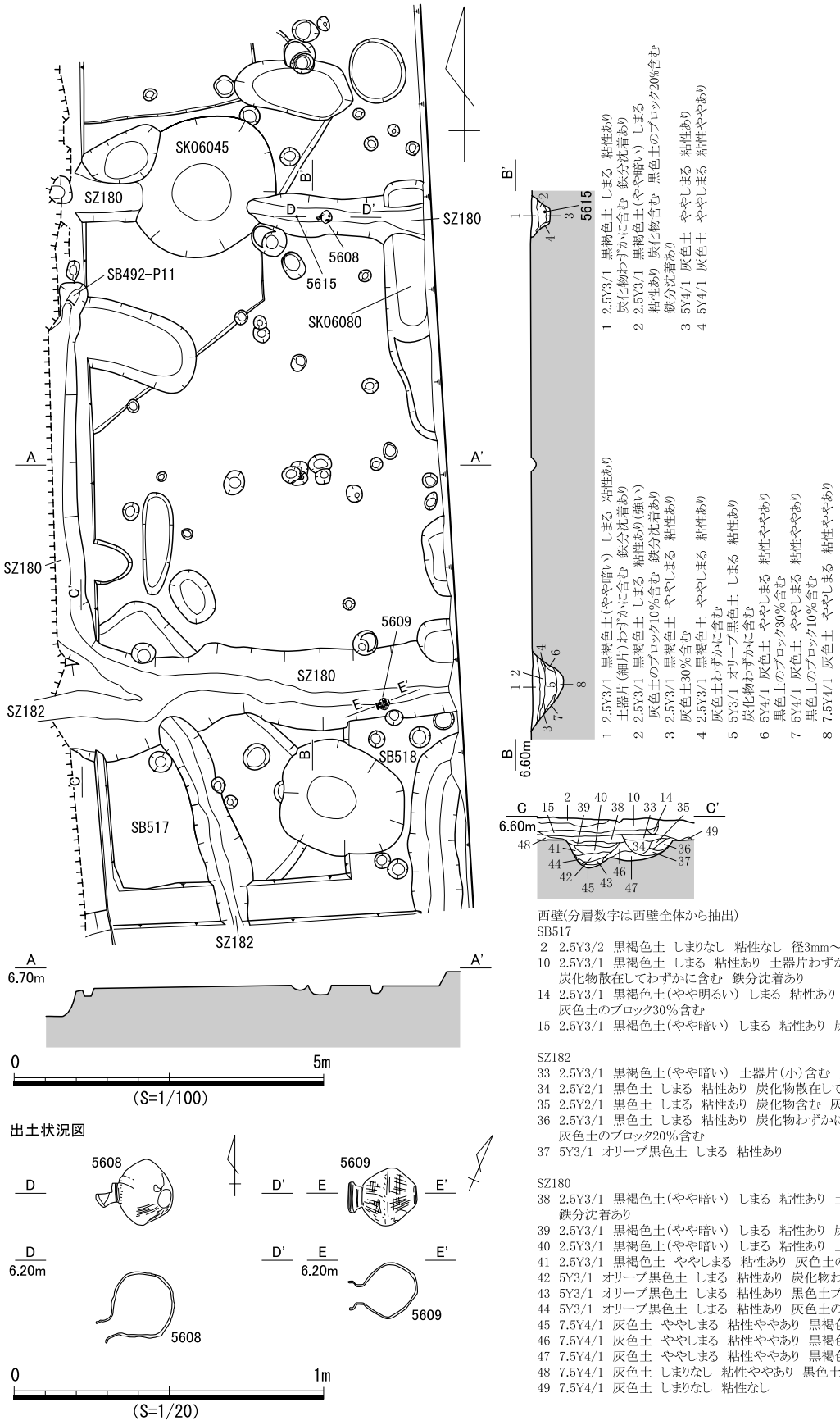
方台部　南北長約7.5ｍの方形を呈すると考えられる。各辺はほぼ直線的だが、北辺はやや凹凸がある。墳丘盛土及び主体部は確認できなかった。

周溝　幅は南溝が約1.2ｍ～1.5ｍ、北溝は約0.7ｍであり、南溝が広い。深さは南溝中央が約0.5ｍ、北溝は約0.3ｍであり、南溝が深い。北溝の断面形は逆台形状を呈するが、南溝は底面が丸みを帯びている。西溝の北端はSB492-P11に切られ、撹乱もあることから、陸橋部の有無は不明である。北溝の埋土は４層に、南溝は８層に分層した。いずれも下層から中層にかけてブロック土を含む壁面崩落土と考えられる堆積が見られるものの、上層はほぼ水平堆積である。

遺物出土状況　北溝からは土器173点、南溝からは土器162点、石器類６点が出土した。西溝からは遺物は出土しなかった。南北両溝から供献土器と考えられる土器が出土した。北溝で出土したⅣ期壺（5608）は、口縁部を一部欠損している以外はほぼ完形で、底部近くに穿孔が認められる。溝の最下層から、底部をやや上に向け、口縁部を東に向けた状態で出土した。南溝から出土したⅣ期壺（5609）は完形で、口縁部を東に向け横位で出土した。溝底よりやや上層で出土していることから、溝の埋没過程で転落した可能性がある。出土する土器片はⅣ期の破片が多く、縄文土器やⅠ期、Ⅵ～Ⅶ期の土器片がわずかに混入する。

出土遺物　5608、5609はともにⅣ期壺A1類。5609は完形品で、器面の数か所が剥落している。口縁端部が屈曲し、やや内傾して立ち上がる。胴部は算盤玉状の形状を呈し、胴部中央付近が最大径となる。口縁部外面には２条の凹線をもち、端部には平坦面を形成する。端部の平坦面上にも凹線を１条施文し、口縁部の一箇所に注口をもつ。頸部には凹線を２条施文し、胴部全面にハケによる調整痕が残る。胴部上半には、ハケ調整を施す前のタタキによる調整痕が認められるが、胴部下半には認められない。最大径部直下の一部には横方向のハケ調整痕が認められ、底部にもハケ目が残る。5608は、口縁部を一部欠損する以外は完存する資料である。口縁端部外面及び頸部には、凹線がそれぞれ２条ずつ認められる。また5609と比べて、やや頸部が長い。胴部上半はタタキの後にハケ調整を施し、下半はハケによる調整のみとなる。胴部下半には穿孔が１箇所認められ、穿孔周辺は内面側が剥落している。5610はⅣ期壺Ａ類。胴部には細かなハケ調整を施す。5611はⅣ期壺Ｂ類。頸部には粘土を貼り付け、クシによる刺突を加える。胴部には直線文が数帯認められる。5612、5613はⅣ期甕A2類。いずれも口縁部が短く屈折し、端部にはタタキを加える。5613は摩耗が著しい。5614はⅣ期甕A2類。口縁部が外反し、端部下端にタタキを加える。5615はⅣ期甕A3類。口縁部が短く屈曲し、端部が直立する。胴部最大径は、胴部中央やや上方にあり、底部は小さくなる。口縁端部には平坦面を形成し、端部下端にはタタキを加える。胴部はタタキによる調整の後にハケ調整を施す。頸部直下から最大径部にかけて、刺突文を３帯施文する。内面には底部から胴部中程までケズリが認められる。5616はⅣ期甕Ａ類。口縁部直下の胴部には、タタキ調整の後にハケによる調整と刺突文が認められる。

時期　Ⅳ期のSZ182を切るが、供献土器の時期からⅣ期と考えられる。



西壁(分層数字は西壁全体から抽出)

SB517

2 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径3mm～8mmの亜円礫含む lb層
10 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片わずかに含む
炭化物散在してわずかに含む 鉄分沈着あり
14 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む
灰色土のブロック30%含む
15 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む

SZ182

33 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) 土器片(小)含む 炭化物含む 鉄分沈着あり
34 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 炭化物散在して含む
35 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 炭化物含む 灰色土のブロック10%含む
36 2.5Y3/1 黒色土 しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む
灰色土のブロック20%含む
37 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり

SZ180

38 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 土器片(大)含む
鉄分沈着あり
39 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物含む 鉄分沈着あり
40 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 土器片含む 炭化物含む
41 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり 灰色土のブロック20%含む
42 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む
43 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 黒色土ブロック30%含む
44 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 灰色土のブロック20%含む
45 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 黒褐色土のブロック10%含む
46 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 黒褐色土のブロック20%含む
47 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 黒褐色土のブロックわずかに含む
48 7.5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり 黒色土のブロックわずかに含む
49 7.5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性なし

図 1580　SZ180 遺構図

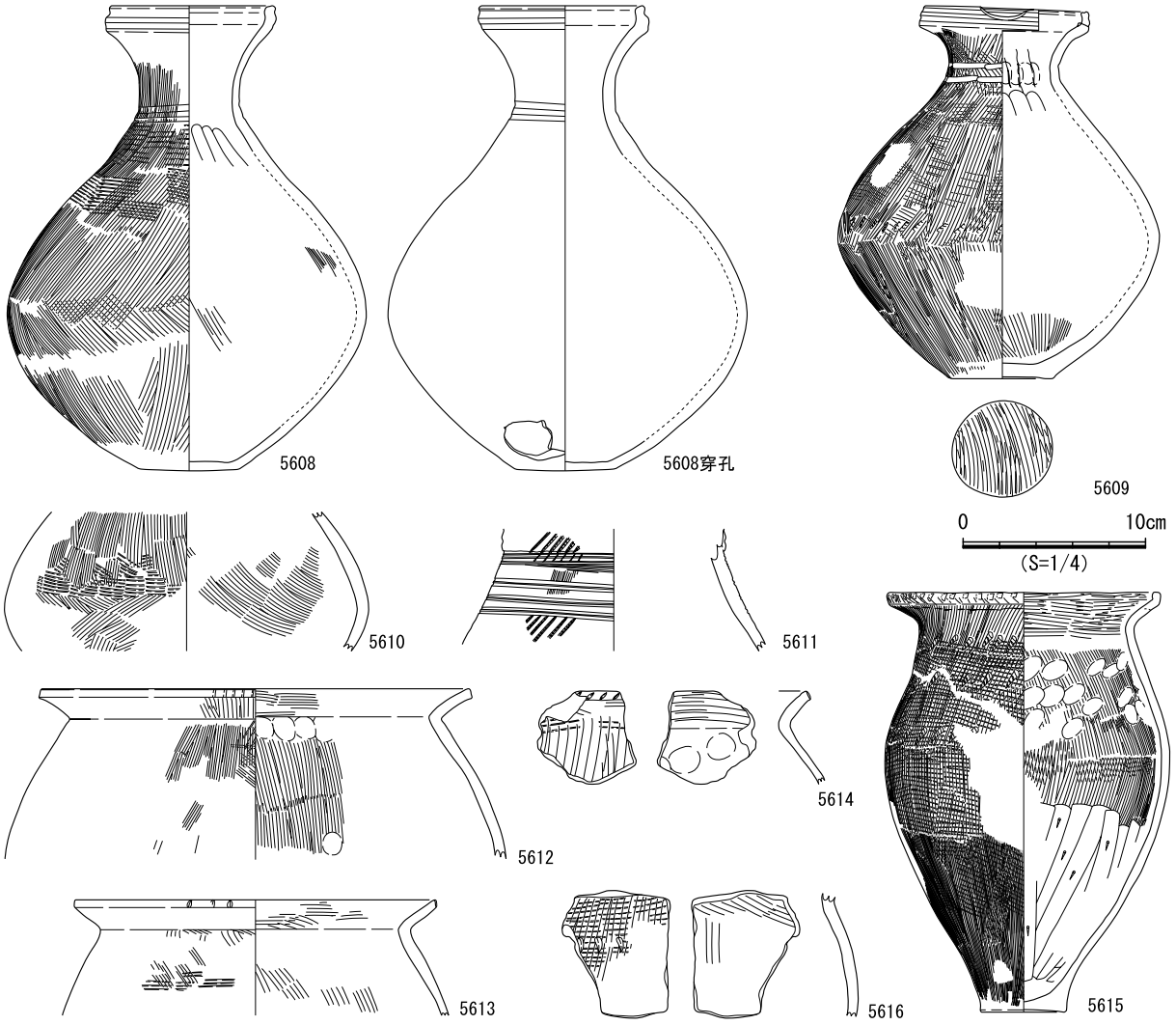


図 1581　SZ180 遺物実測図

SZ181（遺構：図 1583、遺物：図 1582）

検出状況　東部西側南寄りで検出し、半分以上が調査区域外に位置する。平面形は明瞭であり、北東隅でSZ182に切られ、東溝はSZ182の西溝と共有するか、切られていると考えられる。

方台部　方台部の北辺は直線的で、北東隅は丸みを帯びている。その規模は不明で、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅は不明であり、深さは約0.4ｍである。北溝の底面はほぼ平坦であり、南壁の傾斜は急である。埋土は６層に分層でき、上層に炭化物を含み、全体的にブロック土の混入が少ない。

遺物出土状況　埋土中から土器184点が出土した。出土土器はⅣ期のものが多く、中層から下層にかけてⅠ期遠賀川系土器、上層ではⅥ～Ⅶ期の土器片がわずかに混入する。なお、供献土器と判断できる土器は出土していない。

出土遺物　5617はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して直立し、端部はやや内傾する顕著な平坦面をもつ。口縁部外面には凹線のほかに縦方向の沈線が認められる。5618はⅣ期壺Ｆ類。口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面をもつ。端部直下には穿孔が２箇所施される。5619はⅣ期高坏Ｃ類。口縁部が内湾し、端部付近で内側に強く屈曲する。屈曲部直下には４条の凹線が認められ、穿孔の痕跡が残

る。5620、5621はⅦ期高坏G3c類。口縁部に多条沈線を施し、その間には貝による鋸歯文を加える。非常に細かく施文された精緻品である。

時期　供献土器は出土していないが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

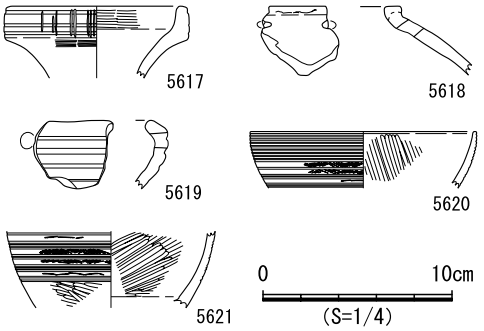


図 1582　SZ181 遺物実測図

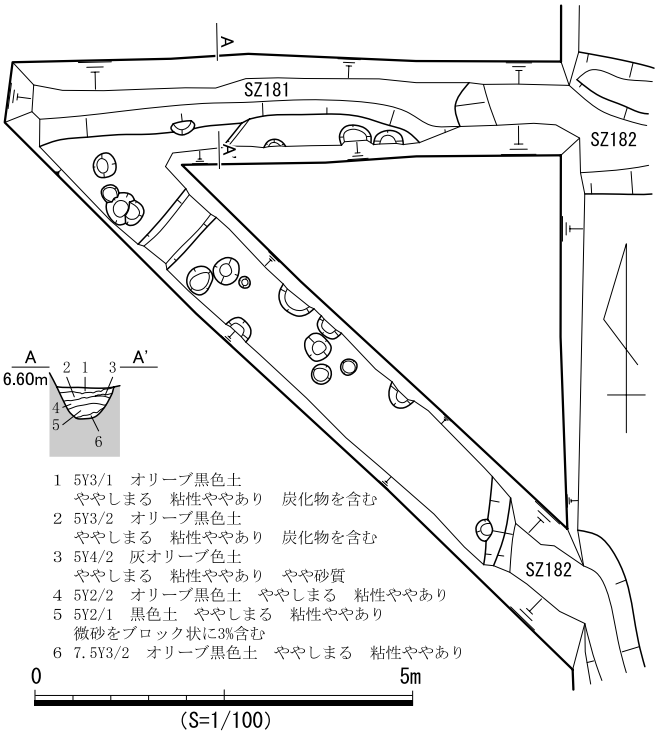


図 1583　SZ181 遺構図

SZ182（遺構：図 1584、遺物：図 1585）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。西溝の大半は調査区域外にあるが、SZ181東溝と共有している可能性があり、かつSZ184を切る。また、北東隅ではSZ180に切られる。周溝の大半はSB494、SB497、SB517、SB519などの他遺構の底面で検出しており、重複関係が著しく平面形は不明瞭であった。

方台部　南辺と北辺は直線的だが、東辺は中央部分がわずかに東側に膨らむ。東西長、南北長ともに約8.0ｍであり、ほぼ正方形を呈する。なお、方台部内にはSK05583やSD1096などの遺構があるものの、いずれも時期的に本遺構には伴わないと考えられ、墳丘盛土と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.5ｍ～1.5ｍ、深さ約0.3ｍ～0.6ｍであり、東溝は幅が狭く、北溝と南溝は広い。溝の断面形は東溝と南溝が三角形状、北溝と西溝が逆台形状であり、いずれも底面幅が狭い。北東隅部と北西隅部の底面標高は周溝中央部とほぼ同じであるが、南東隅部は中央部より高い。埋土は３～10層に分層した。どの溝でもブロック土の混入が顕著であり、壁面崩落土の堆積とともに人為堆積もある可能性が高い。

遺物出土状況　溝全体から土器573点、石器類２点が出土した。出土土器はⅣ期のものが多く、Ⅰ期やⅥ期～Ⅶ期の土器もわずかに混入している。しかし、供献土器と考えられるものは出土していない。

出土遺物　5622、5623はⅣ期壺A2類。ともに口縁部が短く屈曲して直立し、凹線を数条施す。凹線を施した後さらに、クシによる縦位の沈線を加える。5624はⅣ期壺H類。胴部には、ヨコハケを施した上から右下がりの沈線を重ね、半截竹管による沈線によって文様帯を区画する。間隔をあけて上方にさらに半截竹管によって沈線を施す。その上方には同様に、クシと沈線による文様を施し、沈線間はミガキによる器面調整を施す。そこに半截竹管の端部を利用した刺突を加える。黒褐色の胎土が特

徴的で、搬入品である。5625～5627はⅣ期甕A2類。いずれも口縁部がくの字に屈曲し、端部にタタキを加える。5628はⅣ期甕A5類。脚部は失われているが、台付き甕の底部であり、6125に類似する。5629はⅣ期甕Ａ類底部。5630はⅥ期甕D1b類。端部外面に刺突が認められる。5631はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。口縁部が強いナデによって短く明瞭に屈曲し、端部を丸く収める。5632はⅣ期高坏Ａ類。口

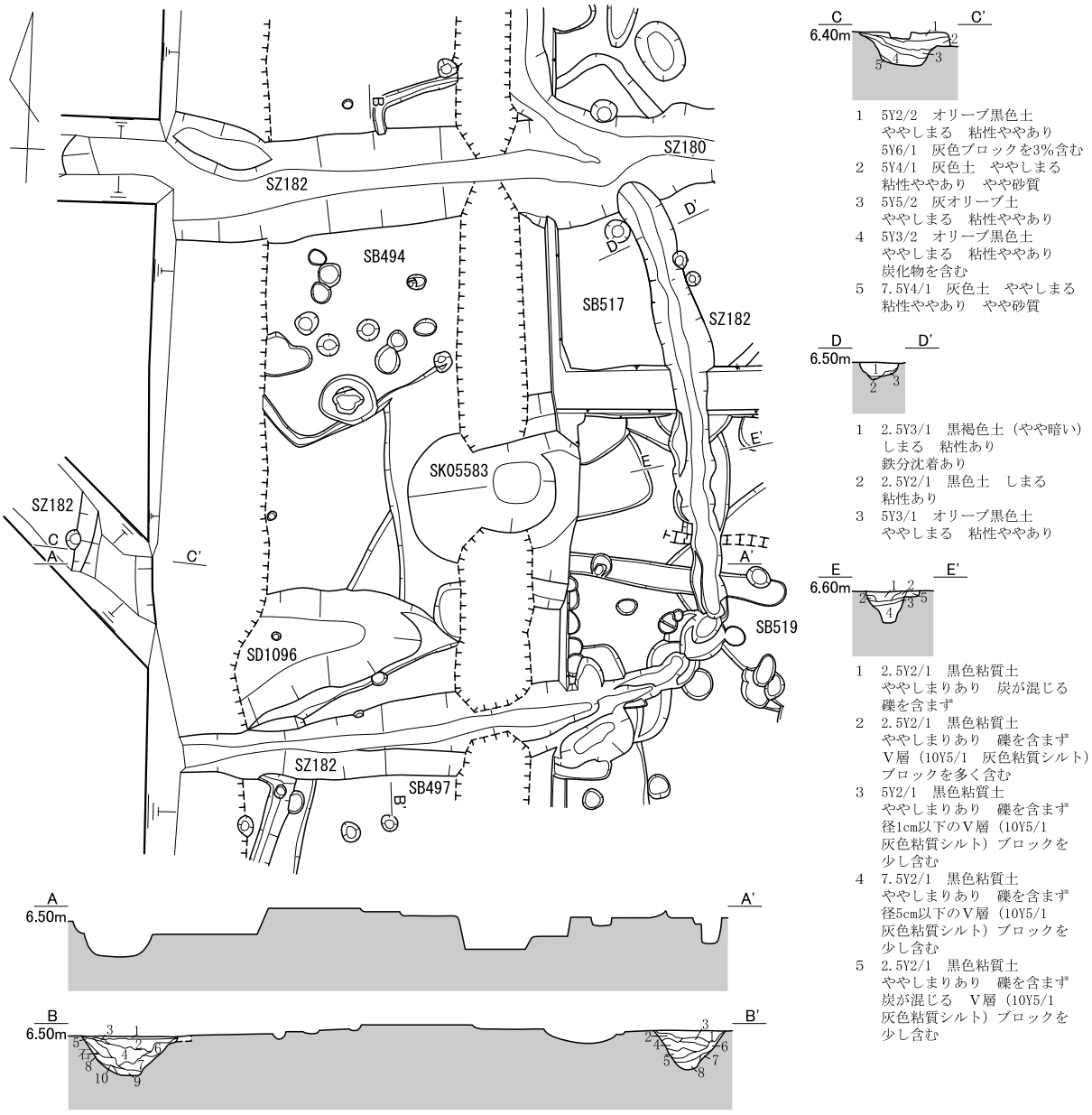


図 1584　SZ182 遺構図

縁部が袋状を呈し、端部にはわずかに肥厚して平坦面をもつ。端部直下には明瞭な凹線が３条認められる。5633はⅥ期～Ⅶ期高坏H1類。坏部が碗状を呈し、無文である。5634、5635はⅠ期遠賀川系土器の壺。5634は口縁部が大きく開き、大型品と考えられる。5635は底部が半分程度残存する。胴部には、ナデ及びハケによる調整痕が認められる。5636は高さ約12㎝弱のⅠ期小型壺で、全体形状はやや縦方向に細長くなる。口縁の一部を欠損する以外は完存する資料である。口縁部は短く外反し、端部を丸く収める。胴部最大径は中央やや下に寄り、上半には削り出し段を形成する。段の部分に沈線を加えることで、段差をより明瞭に表現する。

時期　供献土器は出土していないものの、Ⅳ期のSZ184を切り、Ⅳ期のSZ180に切られることと、出土遺物全体の様相から、Ⅳ期と考えられる。

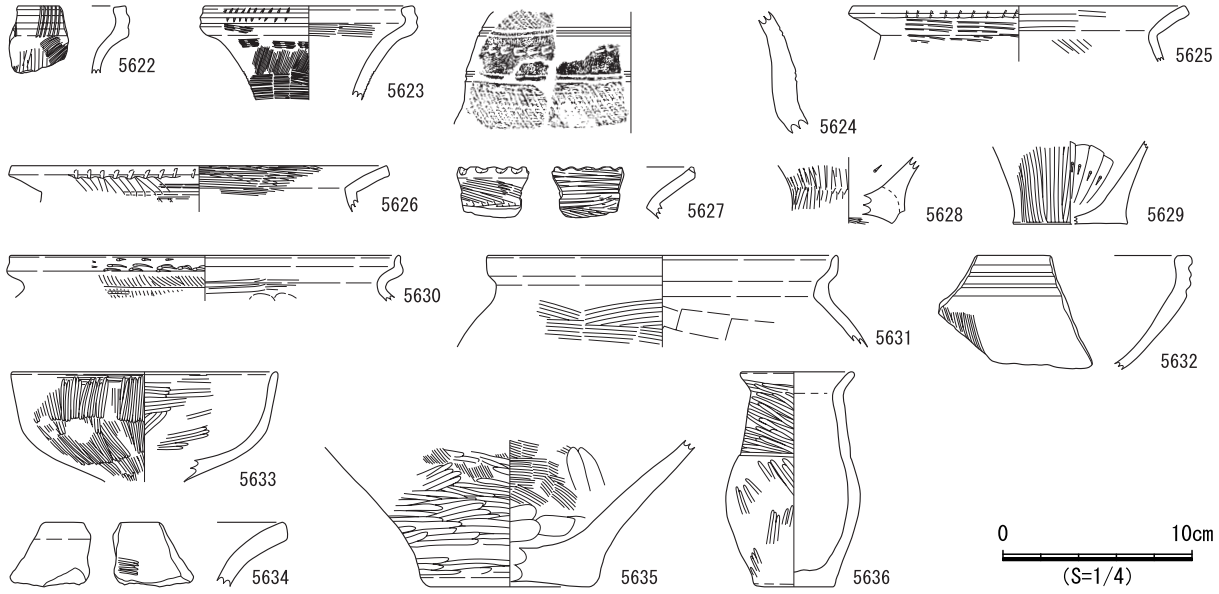


図 1585　SZ182 遺物実測図

SZ183（遺構：図 1586、遺物：図 1587）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。西溝のみの検出で、大半は調査区域外にある。北側はSB518底面で、南側はSB519底面でそれぞれ検出し、平面形は北側は明瞭であったが、南側はやや不明瞭であった。溝の北端部と南端部がともに東側に屈曲することから、方形周溝墓の溝の一部と判断した。なお、西側に並列するSZ182と主軸方位がそろう。

方台部　大半が調査区域外になるため、形状・規模ともに不明である。しかし、溝の両端部の屈曲から想定すると、方台部の南北長は４ｍ～５ｍほどの規模と考えられる。なお、墳丘盛土及び主体部は確認できなかった。

周溝　西溝のみの検出である。幅は北側が約0.8ｍと広く、南側は約0.5ｍと狭い。深さは約0.5ｍで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。埋土は５層～７層に分層し、全体に炭化物を含む。埋没当初は壁面崩落土と考えられる堆積が確認でき、その後はほぼ水平堆積であることから、自然に埋没した可能性が高い。

遺物出土状況　溝全体から土器500点、石器類が２点出土した。供献土器と判断できる土器は出土していない。出土土器はⅣ期のものが多く、上層にわずかにⅥ期～Ⅶ期の土器が出土した。

出土遺物　5637はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して直立し、端部には平坦面をもつ。外面には２条の顕著な凹線が認められる。5638はⅣ期壺A1類。頸部にわずかに凹線が認められるが、胴部上半はハケ調整が認められるのみで無文である。5639、5640はⅣ期壺A2類。ともに胴部の破片である。5639は２条１組×３帯の複合クシによる斜格子文と波状文を施文する。5640は胴の肩部上方に波状文が認められ、下半には文様は認められず、ハケ目が残る。5641はⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にはタタキを施す。5642はⅥ期甕。ハの字に開いた脚部の一部を打ち欠いている。5643はⅣ期高坏C類。口縁部が内湾し、端部直下に凹線が２条認められる。5644はⅠ期条痕文系土器の甕。口縁部が外反し、内外面ともに貝殻条痕が明瞭に認められる。端部は肥厚気味で、ナデによって顕著な平坦面を形成し、外側には二枚貝によるキザミが認められる。

時期　供献土器と判断できる土器は出土していないが、他の出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

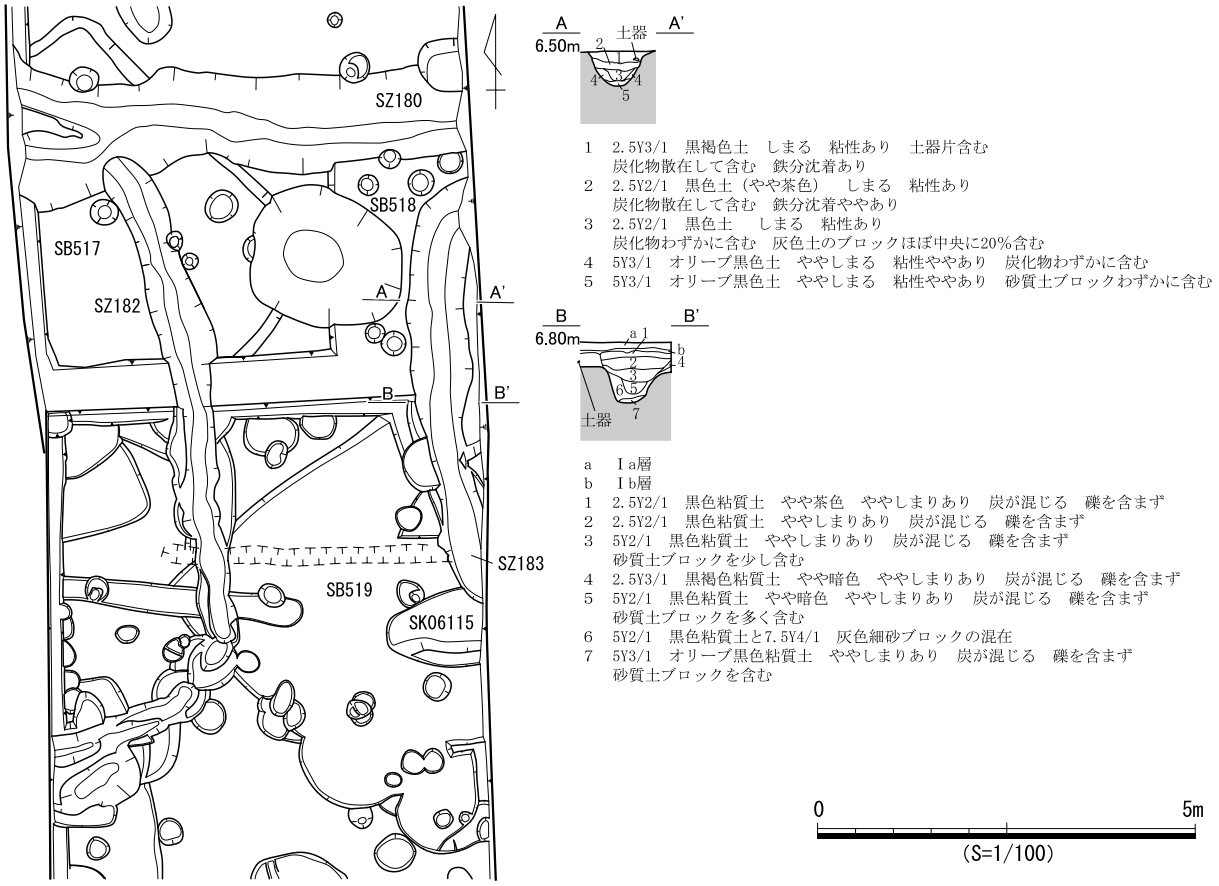


図 1586　SZ183 遺構図

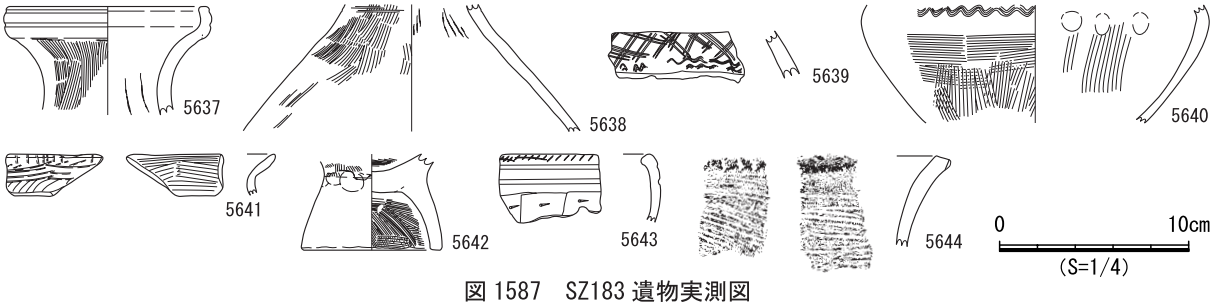


図 1587　SZ183 遺物実測図

SZ184（遺構：図1588、遺物：図1589）

検出状況　東部西側南寄りで検出し、大半は調査区域外に位置する。他の方形周溝墓との重複が著しく、北側でSZ182に切られ、南側でSZ186を切る。平面形は不明瞭であった。

方台部　方台部の東辺は直線的で、南東隅は丸みを帯びている。その規模は不明で、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.1ｍ、深さ約0.2ｍ～0.4ｍであり、検出できた範囲内において周溝は全周するが、南東隅のみやや幅が狭い。底面はほぼ平坦で、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は６層に分層でき、東溝は上層に炭化物が多く、東溝・南溝ともに下層に崩落土と考えられるブロック土を含む堆積を確認した。

遺物出土状況　埋土中から土器249点、石器類１点が出土した。出土土器はⅣ期のものが多く、壺や甕、高坏等が出土した。上層にⅥ期～Ⅶ期の土器片が

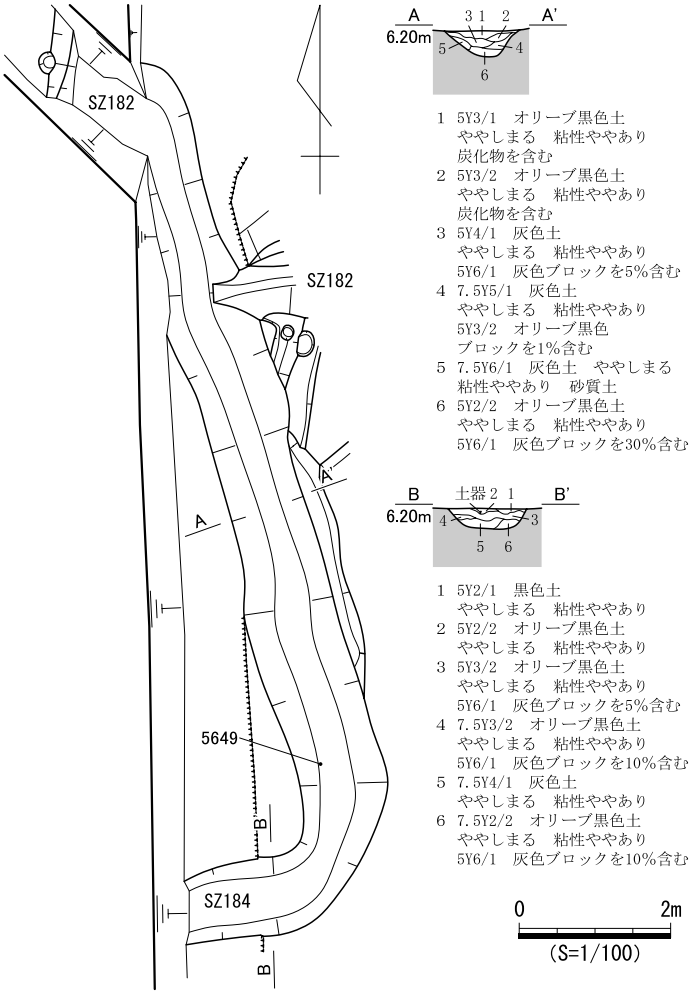


図1588　SZ184遺構図

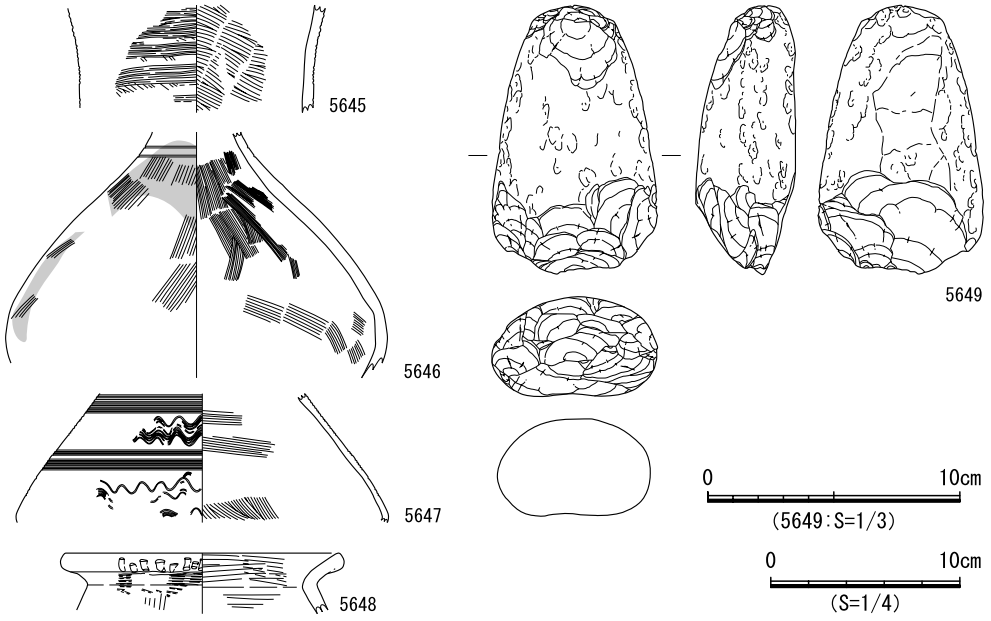


図1589　SZ184遺物実測図

わずかに混入しており、Ⅱ期の壺頸部も１点出土した。なお、供献土器と判断できるものはなかった。

出土遺物　5645はⅡ期壺A2類。頸部には二枚貝による直線文が等間隔に配置される。5646はⅣ期壺A1類。胴部に加飾は認められず、頸部には沈線が認められる。一部に煤が付着する。5647はⅣ期壺A2類。胴部上半に直線文及び波状文が交互に施文される。5648はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、端部下端にはタタキが残る。5649は磨製石斧。斧身は肉厚で断面楕円形を呈し、敲打痕がわずかに残る。

時期　供献土器は出土しておらず、Ⅳ期のSZ186を切るが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

SZ185（**遺構**：**図**1590・1591、**遺物**：**図**1592）

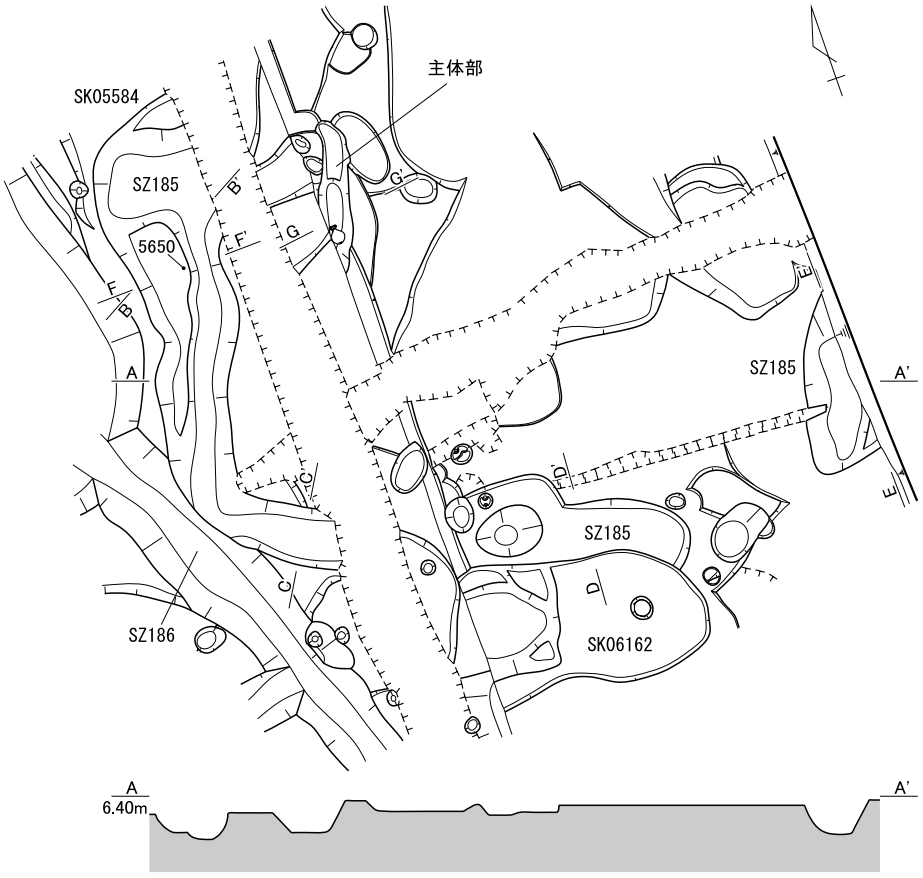
検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。南溝はSZ186とSK06162に、西溝はSK05584にそれぞれ切られ、東溝は調査区域外へのびている。南溝と東溝は途切れており、北溝は検出できなかった。東溝は上方に撹乱があり、南溝はSB520底面で検出した。また、西溝周辺は遺構の重複が著しく、いずれも平面形は不明瞭であった。

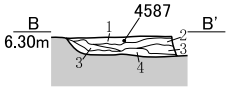
方台部　方台部の南辺と西辺は凹凸があるもののおよそ直線的であり、南西隅は撹乱のため形状が定かでない。規模は東西長約8.1ｍであり、墳丘は確認できなかった。方台部中央西寄りでは、西溝に平行する長さ約2.0ｍ、幅0.71ｍの主体部と考えられる土坑１基を検出した。その上部ではSK05585など５基の遺構が重複しており、それらの遺構の底面で平面形を確認した。南端は調査区境のため検出できなかった。底面は平坦で北側ほど浅くなり、壁面の傾斜は急で、東側上方には幅広い平坦面がある。埋土は５層に分層でき、ブロック土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

周溝　幅約0.7ｍ～1.2ｍ、深さ約0.1ｍ～0.3ｍであり、南東隅が途切れている。西溝は検出面では幅広の平面形であったが、西側壁面に平坦面を有し、底面は断面逆台形を呈する。その北端は東側に張り出すが、底面が長方形に膨らんでいることから別遺構の存在を誤認した可能性がある。南溝は浅く、中央を南北に貫く撹乱の東壁面では落ち込みを確認できなかった。東溝は底面が丸みを帯び、壁面は緩やかに傾斜している。埋土は１層～４層に分層でき、南溝は浅いため堆積状況は不明だが、他は下方にブロック土を含む崩落土が確認でき、上方は中央が凹む堆積である。

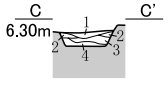
遺物出土状況　西溝と南溝から土器230点、石器・石製品１点、東溝から土器258点、SZ185主体部から土器96点が出土した。SZ185主体部の埋土中から土器片が散在して出土し、底面付近にて底部穿孔のある完形の壺（5651）が口縁部を北側に向けて横位で出土した。また、周溝内からも土器片が散在して出土し、西溝北側では底面より若干高い位置で約半分に割れた壺（5650）が口縁部を北側に向けて横位で出土した。いずれも供献土器と考えられる。

出土遺物　5650、5651はⅣ期壺A1類。5650は口縁部が屈曲して直立し、端部にはわずかに平坦面を形成する。端部外面には２条の凹線を施し、平坦面上には沈線状の窪みが認められる。頸部にはやや細い凹線が５条施文され、胴部最大径部直上には波状文が認められるが、それ以外の部位は基本的に無文である。胴部上半の器面にはハケ調整が認められるが、下半はケズリの後にハケ調整を施す。底部には穿孔が認められる。胴部中央付近に位置する最大径部が顕著に張り出し、胴部は算盤玉状を呈する。5651の口縁部形状は5650と類似するが、端部の平坦面が明瞭に形成される点において異なる。頸部には複数の直線文が認められるが、やや乱雑な施文となる。胴部は無文で、ハケによる器面調整が施されるのみである。胴部形状は算盤玉状となるが、最大径部の張り出しはやや弱くなる。底部に

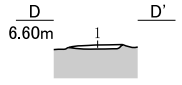




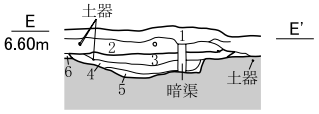
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化粒をわずかに含む
2　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを10％含む
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを3％含む



1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを30％含む
3　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3％含む
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/2　オリーブ　黒色ブロックを10％含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　砂が混じる　炭が混じる　礫を含まず



1　Ⅰa・Ⅰb層
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
　炭が混じる　5cm以下の円礫を少し含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
4　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　砂が混じる　炭が混じる
5　5Y2/1　黒色砂質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　黒色粘質土ブロックを含む
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　砂が混じる
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックに対応

周溝遺物(5650)出土状況

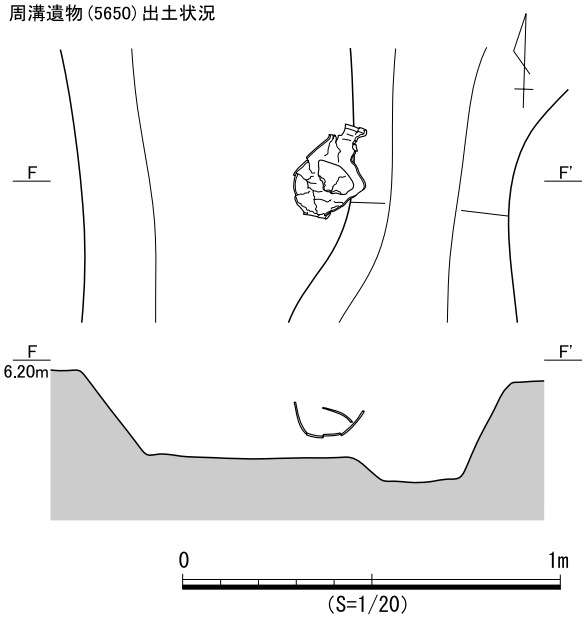


図 1590　SZ185 遺構図（１）

は穿孔が認められる。5652はⅣ期甕B2類。口縁部が屈曲して受口状となり、端部には内傾する平坦面をもつ。頸部には直線文、胴部には刺突文が認められる。5653はⅣ期高坏Ｃ類。口縁部が内湾し、端部には平坦面を形成する。その直下に３条の凹線が認められる。

時期　供献土器の時期から、Ⅳ期と考えられる。

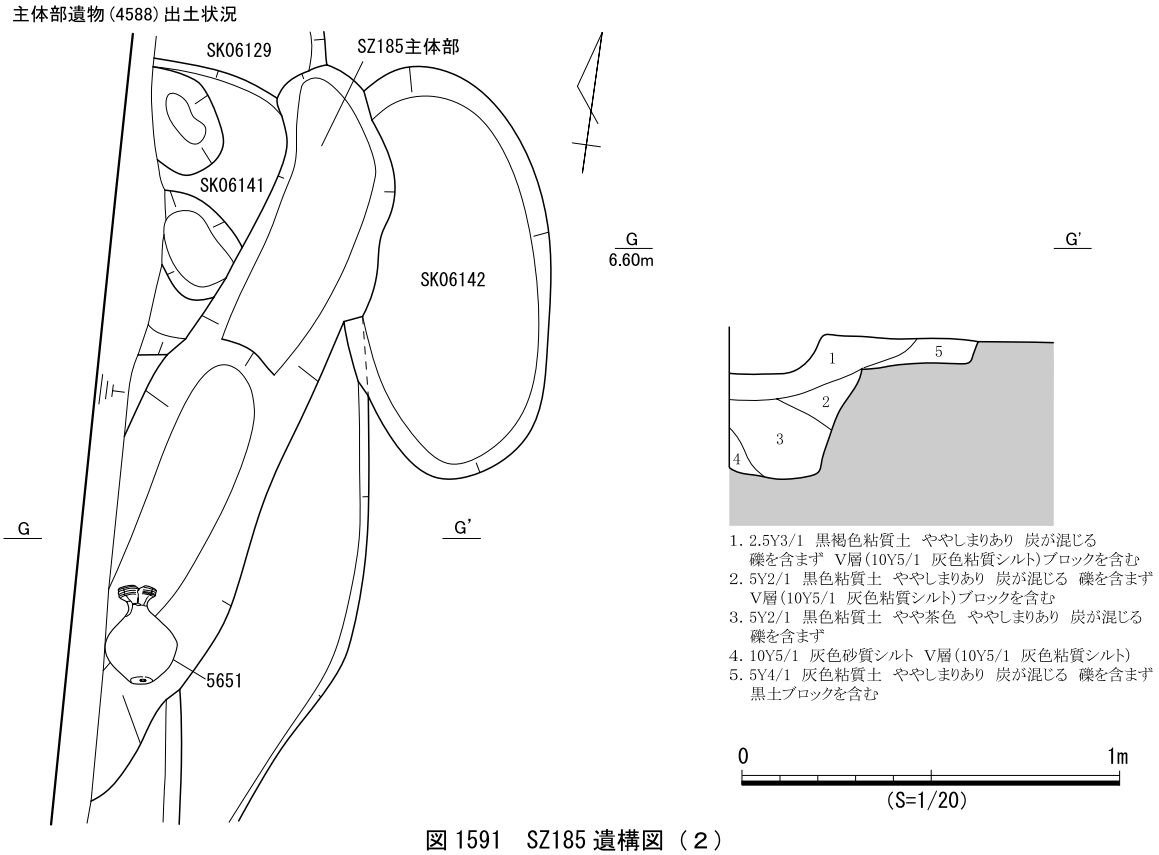


図 1591　SZ185 遺構図（２）

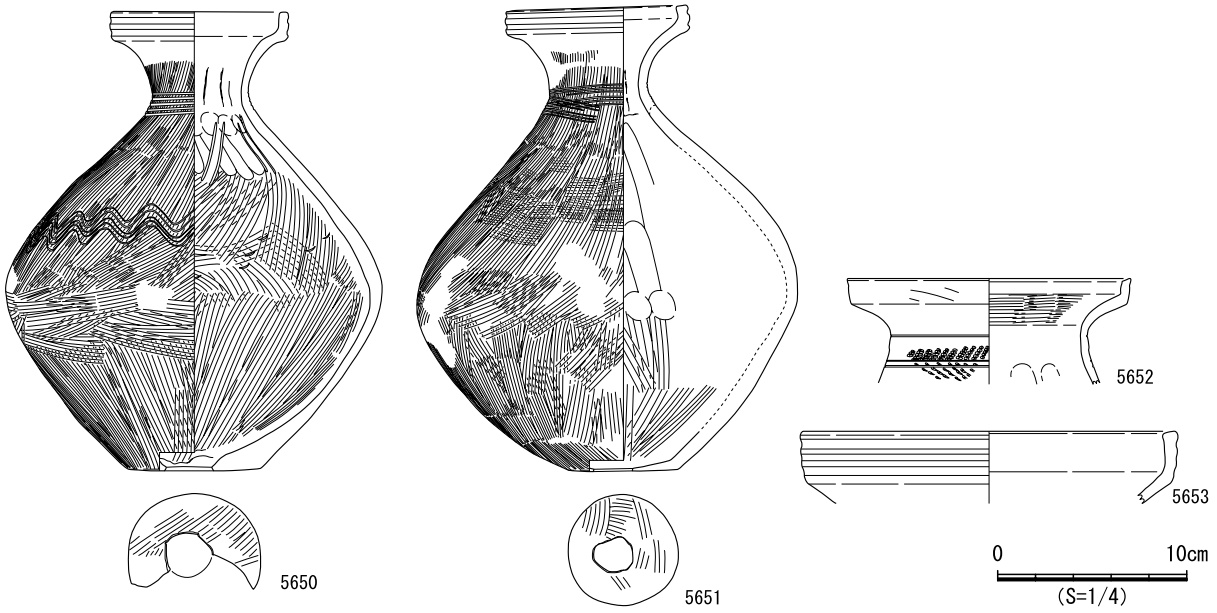


図 1592　SZ185 遺物実測図

SZ186（遺構：図1593、遺物：図1594）

検出状況　東部西側南寄りに位置する。遺構の大半は調査区域外にのび、東溝北側はSZ184に切られる。本遺構の上面には複数の竪穴住居跡があり、SZ185やSZ187にも隣接するため、平面形は不明瞭であった。

方台部　方台部の東辺は中央部分が東側にやや膨らみ、隅部は丸みを帯びている。その規模は南北長約11.4ｍで、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.1ｍ、深さ約0.4ｍ～0.5ｍであり、検出できた範囲内において周溝は全周する。しかし、北東隅は最も深くなっており、SZ186に先行する遺構を誤認して掘削した可能性がある。底面はほぼ平坦で、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は４～５層に分層でき、中央付近の上層を除いてブロック土の混入はほとんど確認できなかったことから、自然堆積の可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から土器126点、石器類１点が出土した。土器の出土量は少なく、供献土器と考えられる土器も確認できなかった。土器はⅣ期のものが多く、わずかにⅠ期とⅥ期～Ⅶ期の破片が混入している。

出土遺物　5654はⅣ期甕A3類。口縁部が屈曲して直立し、受口状となる。5655はⅣ期甕Ａ類底部。5656

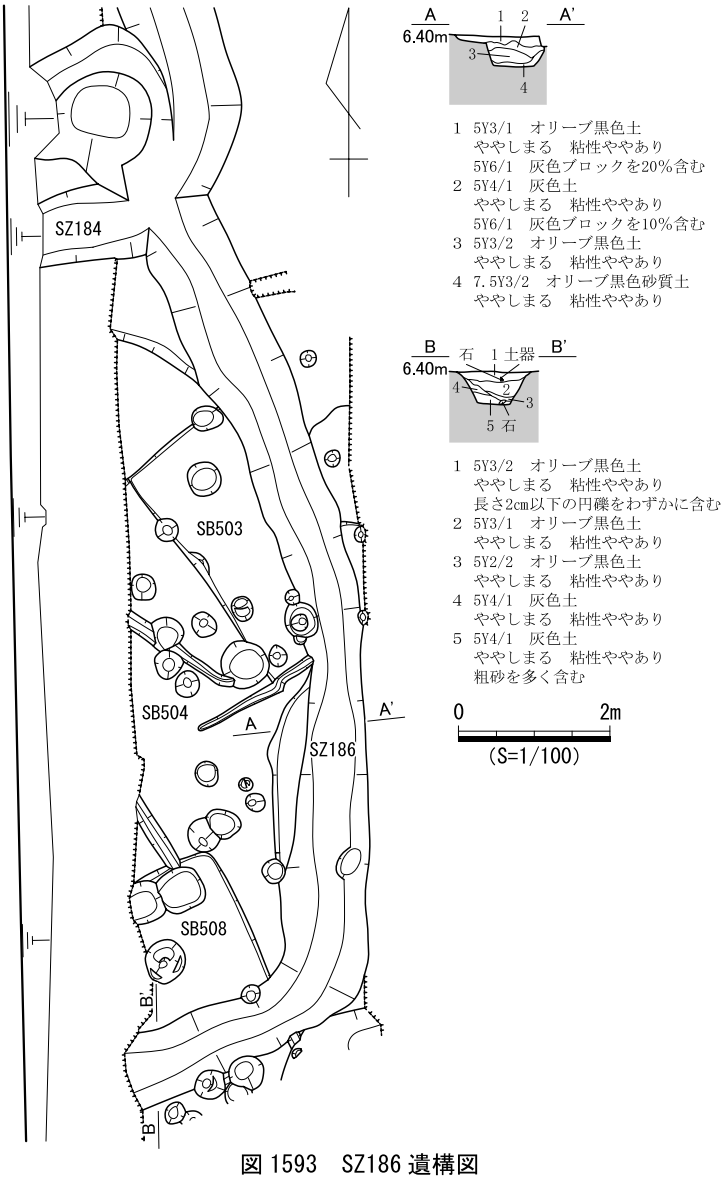


図1593　SZ186遺構図

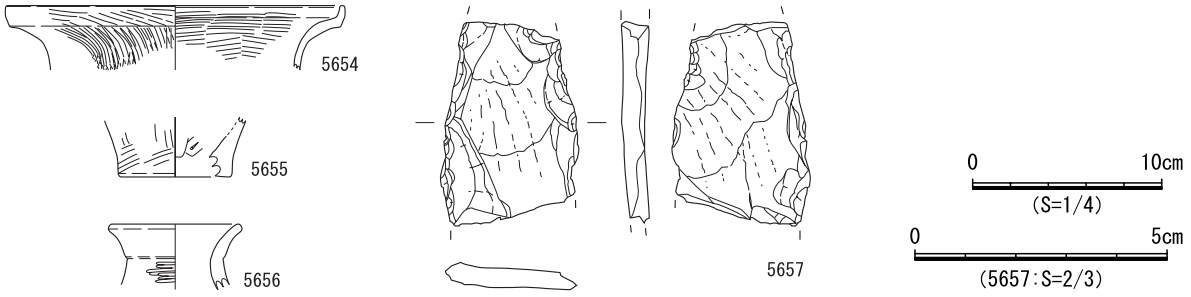


図1594　SZ186遺物実測図

はⅠ期遠賀川系土器の壺。小型壺の破片で、頸部に削り出し段をもつ。5657はRF。素材となる縦長剥片の両側縁に細かい剥離が認められる。

時期　供献土器は出土しておらず、Ⅳ期のSZ184に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

SZ187（遺構：図1595）

検出状況　東部西側南寄りで検出した。南辺、西辺、北辺ともに遺構の重複が著しく、基盤層と周溝埋土が類似していたため、平面形は不明瞭であった。発掘調査時は南側でSZ189を切ると判断したが、出土遺物を検討した結果、検出時の重複関係は誤認であると判断した。

方台部　南北長約8.2ｍであるが、平面形は不明である。方台部の西辺は直線的で、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～1.3ｍ、深さ約0.1ｍ～0.4ｍであり、確認した範囲内では全周している。南北溝に比べて西溝の幅が狭く、断面形は概ね逆台形状を呈するが、北溝のみ南側に平坦面を有する。底面はほぼ平坦であるが、西溝は南側ほど深く、南溝は南端が最も深い。また、周溝北西隅はとても浅く、陸橋部を形成している。埋土は１～４層に分層でき、どの層位でもわずかにブロック土の混入が認められた。

遺物出土状況　埋土中から土器78点が出土した。また、南溝にて平面形が方形を呈する厚さ約１㎝の粘土塊がほぼ水平に出土した。出土土器はⅣ期のものが多く、わずかにⅥ～Ⅶ期の土器片が混入し

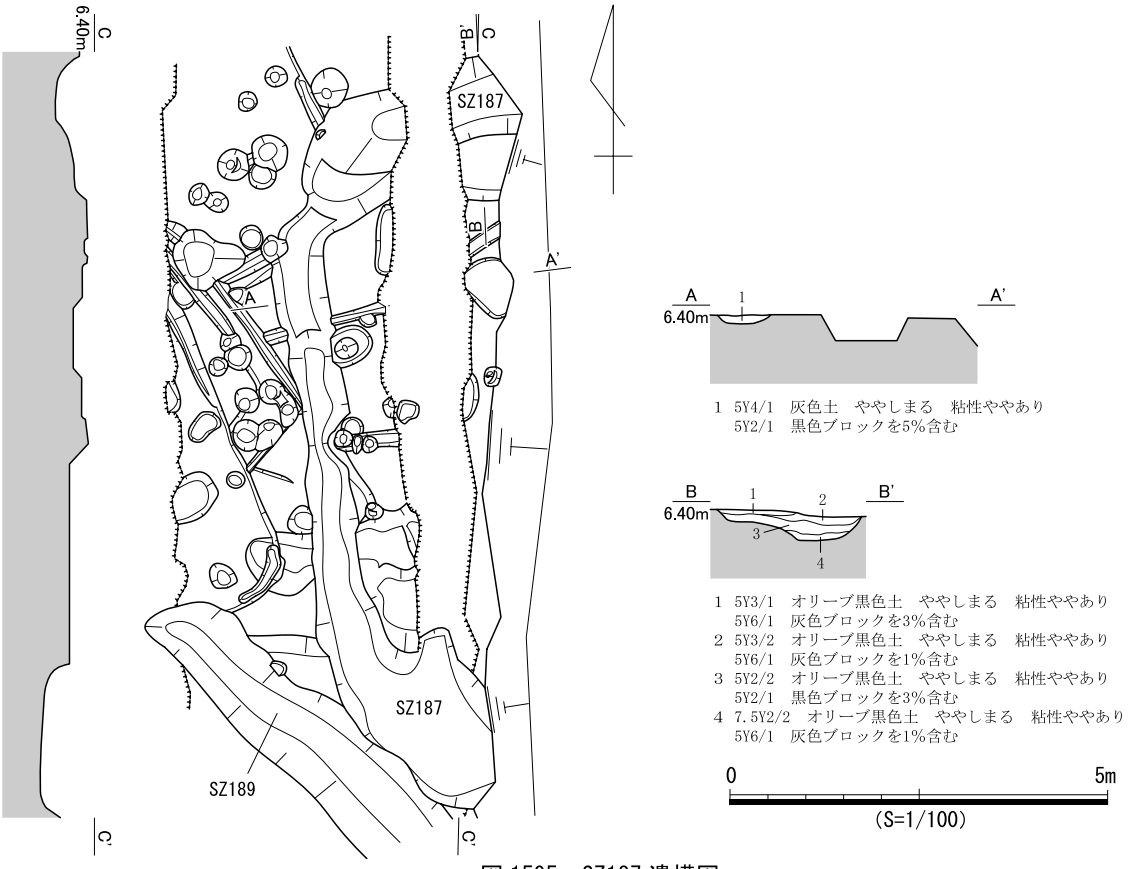


図1595　SZ187遺構図

ている。供献土器と考えられる土器は確認できず、出土土器はいずれも細片であり図示していない。

時期　供献土器は出土していないが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

SZ188（遺構：図 1596、遺物：図 1597）

検出状況　東部西側南寄りに位置し、北端を除いてSD1103底面で検出した。周溝の南側はⅤ層（砂質シルト）上で灰色シルト層が帯状に検出できたが、北側はSZ189と重複し、平面形は不明瞭であった。発掘調査時は本遺構がSZ189を切ると判断したが、出土遺物を検討した結果、検出時の重複関係は誤認であると判断した。

方台部　方台部の各辺は直線的で、南辺は南西側に開いている。その規模は南北長約9.6ｍであり、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。なお、SD1103掘削時に弥生時代中期の土器が出土しており、SD1103の中端ラインがSZ188南溝にほぼ直交していることから、本来は方台部が一回り小さかったか、先行する方形周溝墓を改変した可能性がある。

周溝　幅約0.7ｍ～1.5ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍであり、検出した部分は全周している。南溝と東溝に比べて北溝の幅が広く、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北溝より南溝の方が約0.1ｍ低い。埋土は５～９層に分層でき、東溝は西からの壁面崩落土が認められ、埋土中程にて炭化物を多く確認できた。

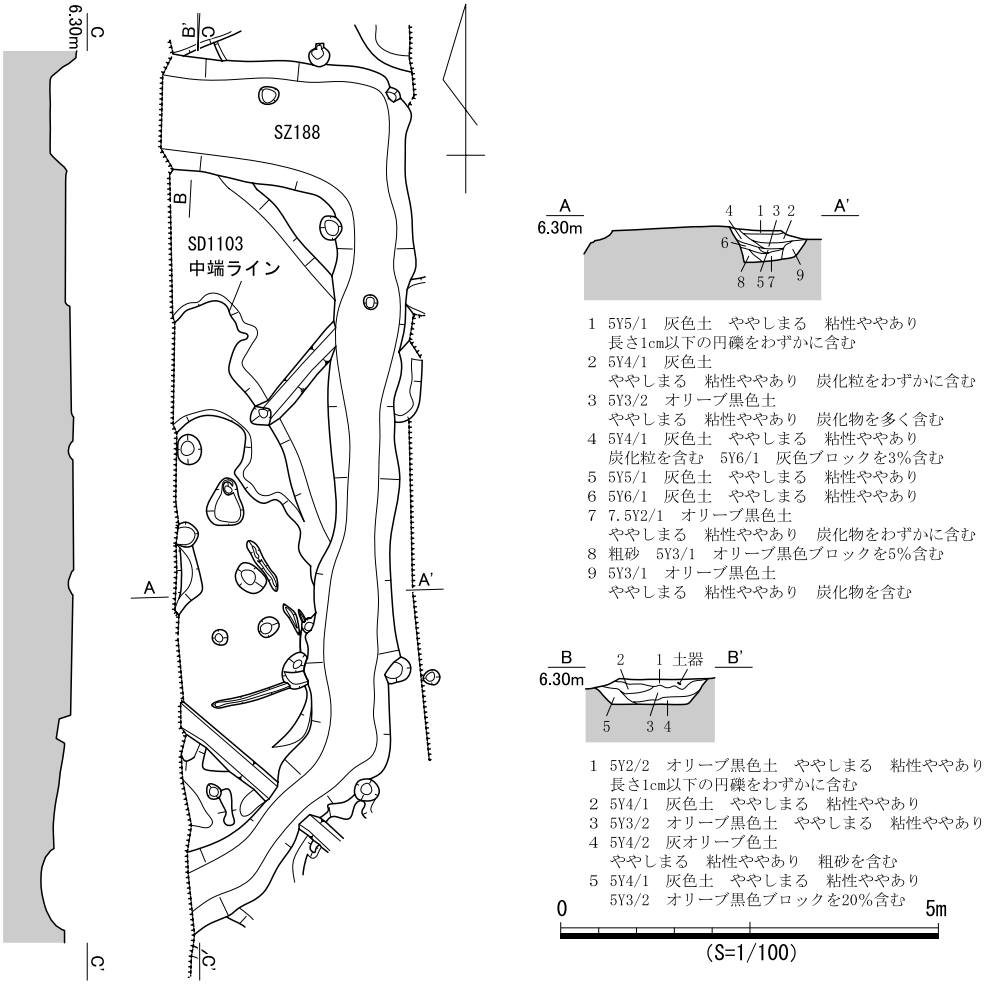


図 1596　SZ188 遺構図

遺物出土状況　埋土中から土器563点が出土した。出土土器はⅣ期のものが多く、Ⅰ期やⅥ期～Ⅶ期の土器がわずかに出土した。なお、供献土器と考えられる土器は出土していない。

出土遺物　5658はⅣ期壺B2類。口縁部が大きく外反し、端部が屈曲して直立する。口縁部にはやや内傾する平坦面を形成し、直下には顕著な凹線を２条施す。頸部やや下には斜位の刺突文、直線文が認められる。5659はⅣ期壺A2類。頸部に斜位の刺突文、以下に櫛描直線文と波状文を交互に施文する。5660はⅣ期甕Ｂ類。外面の剥離が著しい。5661～5663はいずれもⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、端部には顕著な平坦面をもつ。端部下端にはタタキが認められ、胴部にはタタキの後にハケによる調整を施す。5662は口縁端部が短く肥厚気味で、大型である。5664はⅣ期甕Ｅ類。Ａ類を模した小型品で、内面にはハケ調整が施され、口縁端部にキザミを加える。5665はⅣ期甕。胴部にはタタキの後にハケ調整を施し、若干方向は異なるもののどちらも縦方向の器面調整である。底部にもハケ調整を施す。5666はⅣ期甕Ａ類底部。5667はⅣ期鉢Ａ類。口縁部が内湾するが、端部を欠損する。狭小な底部から胴部が外反して立ち上がり、最大径は胴部中央寄り上方に位置する。底部には穿孔が認められる。5668はⅣ期壺Ｂ類。頸部以下には直線文帯を複数配置し、その間に振り幅の小さい波状文、刺突文を加える。5669はⅠ期遠賀川系土器の甕底部。

時期　供献土器は出土していないが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

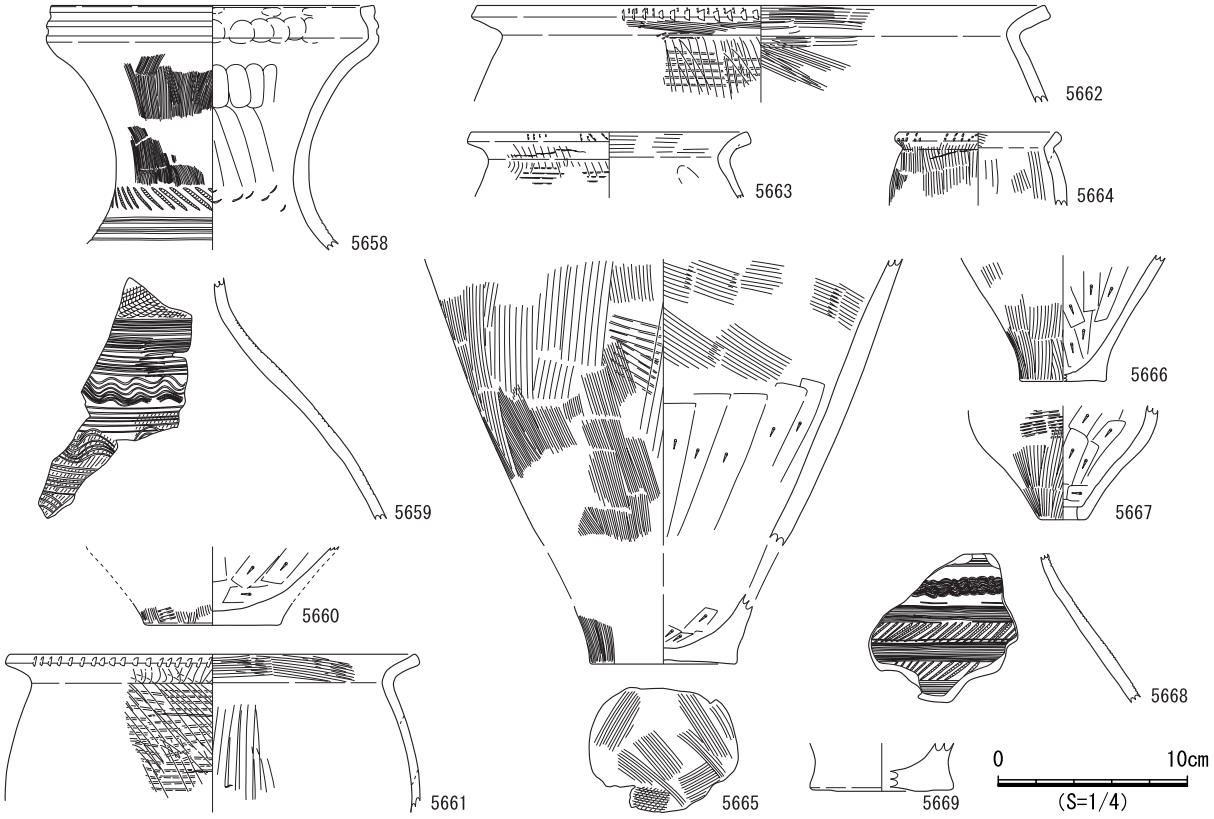
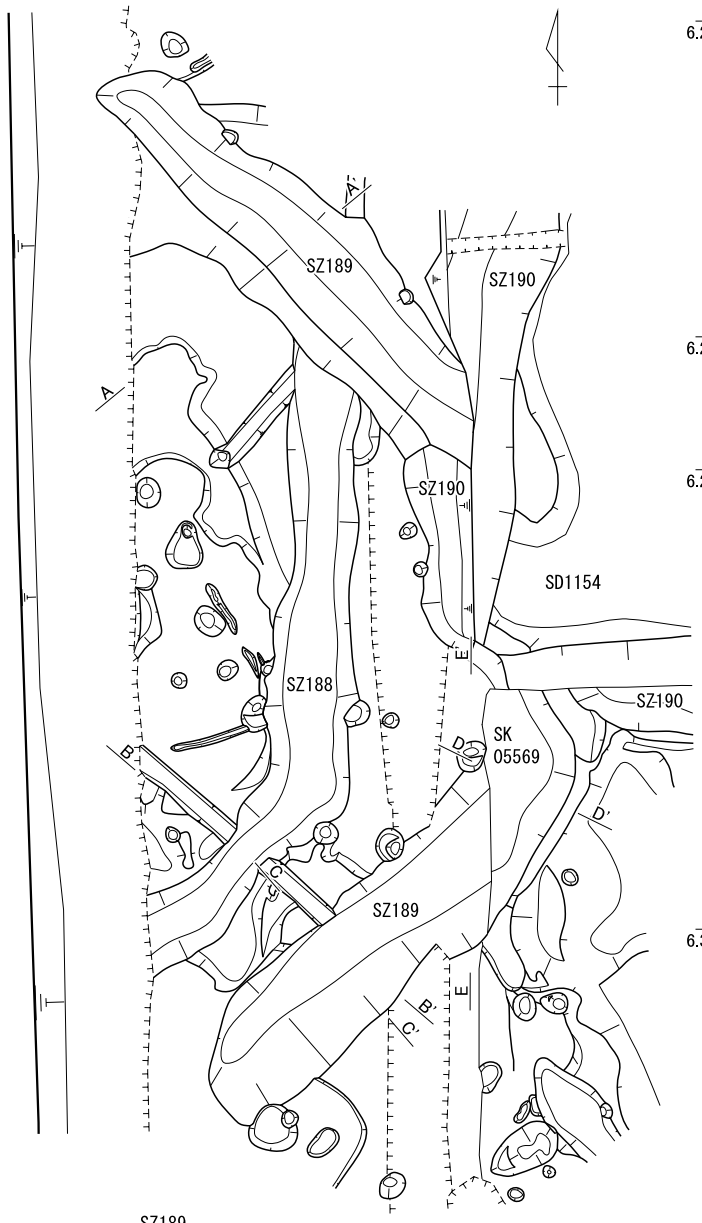


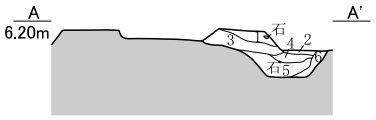
図 1597　SZ188 遺物実測図

SZ189（遺構：図 1598、遺物：図 1599）

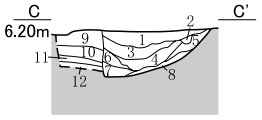
検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。主軸方位は北東であり、西側約半分は調査区域外にある。検出時の埋土は茶褐色を呈し、基盤層との層界が漸移的であったため、平面形は不明瞭であった。特に東隅部はSZ190やSD1154と重複しており、検出は困難であった。なお、SZ188を切り、

SZ190とSD1154に切られると判断したが、後述するようにSZ188との重複関係は誤認した可能性が高い。周溝は北東溝と南東溝の西端は調査区域内で収束し、南東溝の東端も収束している可能性が高

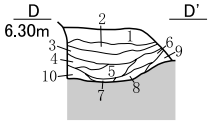




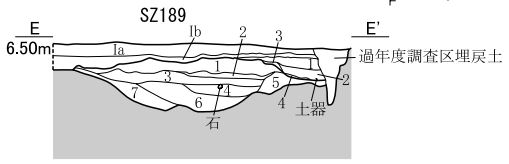
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ4cm以下の円礫をわずかに含む
2　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
3　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/1　黒色ブロックを3%含む
4　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ10cm以下の5Y6/1　灰色粘土ブロックを含む
6　7.5Y4/1　灰色砂質土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ1cm以下の円礫をわずかに含む



1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　粗砂をブロック状に含む
3　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
4　5Y2/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　7.5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
6　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
7　7.5Y3/2　オリーブ黒色砂質シルト　ややしまる
　粘性ややあり　長さ1cm以下の円礫をわずかに含む
8　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを5%含む
9　7.5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ3cm以下の円礫を含む
10　7.5Y6/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
11　粗砂
12　砂礫　粗砂と長さ1cm以下の円礫から成る



1　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり
　径5mm以下の炭化物3%含む　鉄分沈着あり
　1辺3cmの土器片1点あり　径2cm以下の亜円礫・亜角礫2%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまり強い　粘性ややあり
　鉄分沈着あり　2.5Y2/1黒色土ブロック5%含む
　径2cm以下の亜円礫1%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり
　鉄分沈着少しあり　2.5Y2/1黒色土ブロック3%含む
　径2cm以下の亜円礫1%含む
4　10Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性やや強い
　7.5Y4/1灰色土ブロック3%含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　2.5Y2/1黒色土ブロック3%含む
6　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
7　10Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
　10Y4/1灰色砂質土ブロック30%含む
8　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック15%含む
9　7.5Y4/1　灰色砂質土　しまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む
10　7.5Y4/1　灰色砂質土　しまる　粘性ややあり



1　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　1辺3cmの土器片1点あり　径3cm以下の亜円礫・亜角礫2%含む
　径5mm以下の炭化物3%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまり強い　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　2.5Y2/1黒色土ブロック5%含む　径2cm以下の亜円礫1%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　2.5Y2/1黒色土ブロック3%含む　径4cm以下の亜円礫1%含む
4　10Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性やや強い
　7.5Y4/1灰色土ブロック3%含む　1辺10cmの亜角礫1点あり
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり　鉄分沈着あり
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性やや強い
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり

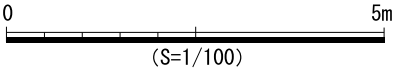


図 1598　SZ189 遺構図

いため、四隅切れの方形周溝墓と考えられる。なお、北東側は平成20年度、南東側は平成22年度、西側は平成23年度に調査を行ったため、平面図に齟齬が生じている。

方台部　西側部分が調査区域外となるため、全形は明らかでない。方台部の規模は不明であるが、北東辺と南東辺は直線的にのびている。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.0ｍ～1.6ｍ、深さ約0.6ｍ～1.0ｍである。北東溝は底面が平坦で、壁面との境界が明瞭であり、壁面は直線的に開く。南東溝は底面が丸みを帯び、北側壁面の傾斜はほぼ垂直であるが、南側壁面の傾斜は緩やかである。埋土は６層～10層に分層した。埋土下層には壁面崩落土と考えられるブロック土が堆積し、埋土上層は中央が窪む堆積である。

遺物出土状況　溝全体から土器416点が出土した。特に南東溝で多く出土しているが、供献土器と判断できる土器は出土しなかった。出土土器はⅠ期～Ⅶ期までの遺物がみられるが、特にⅠ期の遺物が多く、他の時期は少ない。また、大きな土器片としてはⅡ期の壺胴部片（5673）がある。

出土遺物　5670、5671はともにⅠ期遠賀川系土器の壺。5670は頸部に削り出し突帯を形成し、突帯上に沈線を１条加える。5671は削り出し段を形成し、段下方には数条の沈線が認められる。5672はⅠ期遠賀川系土器の壺底部。5673はⅡ期壺A2類。底部から胴部が大きく開いて立ち上がり、最大径のやや下に貝による直線文が数帯認められる。5674はⅢ期壺Ａ類。表面の黒褐色の色調が特徴的で、付加沈線と断続的な直線文が認められる。5675はⅤ期～Ⅵ期壺Ａ類。頸部には強いナデによって突帯状の凸部を作り出し、胴部には粗雑な直線文が認められる。5676はⅥ期～Ⅶ期壺Ｈ類。胴部がやや偏平で、底部は中心部に凹みが認められる。5677はⅣ期甕A4類。口縁部が屈曲するが、端部形状は不明である。胴部にはハケ調整が施されるが、タタキの痕跡は認められない。5678はⅦ期高坏G3c類。扁平に開く脚裾部に、多条沈線と貝による刺突文を交互に配置して加飾する。5679はⅥ期～Ⅶ期の土製品で合子形と考えられる。口縁部が強く内湾し、端部を丸く収める。胴部下半にはハケ調整を施す。

時期　供献土器は出土していないが、四隅切れの方形周溝墓であることとⅠ期の土器が多くⅡ期の大きな土器片が出土していることなどから、Ⅰ期～Ⅱ期と考えられる。なお、検出時にⅣ期のSZ188を切ると判断したが、平面形の重複関係を誤認した可能性が高い。

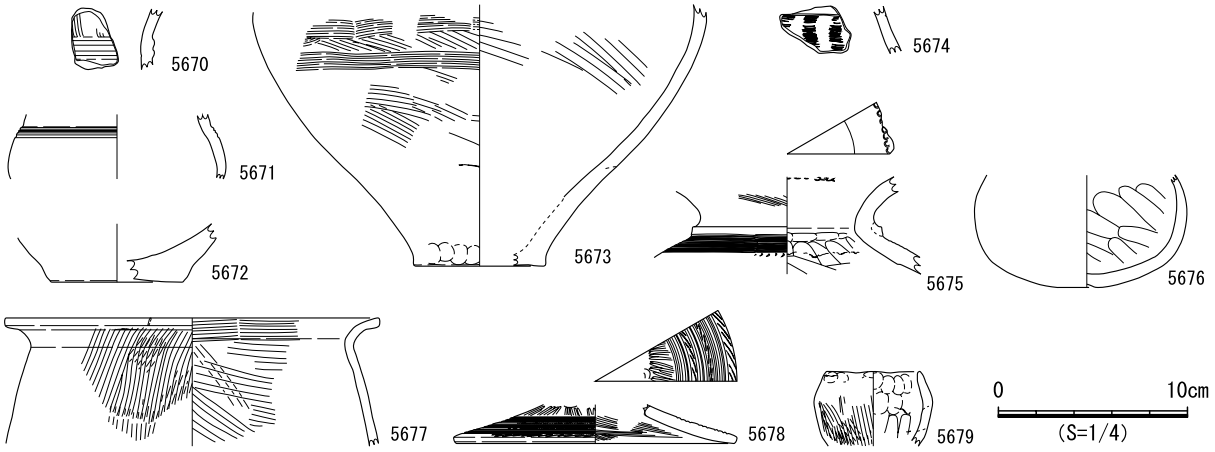


図 1599　SZ189 遺物実測図

SZ190（遺構：図 1600・1601、遺物：図 1602～1604）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。方台部の大半はSD1154に削平されており、その底面で周溝を検出した。西溝と南溝は遺構の重複や撹乱のため平面形はやや不明瞭であったが、他の平面形は明瞭であった。主軸方位は北北東であり、北東隅部が調査区域以外にある。なお、遺構の大半は平成20年度に調査を実施したが、南側は平成22年度、西側は平成23年度に調査を行ったため、平面図に若干の齟齬が生じている。

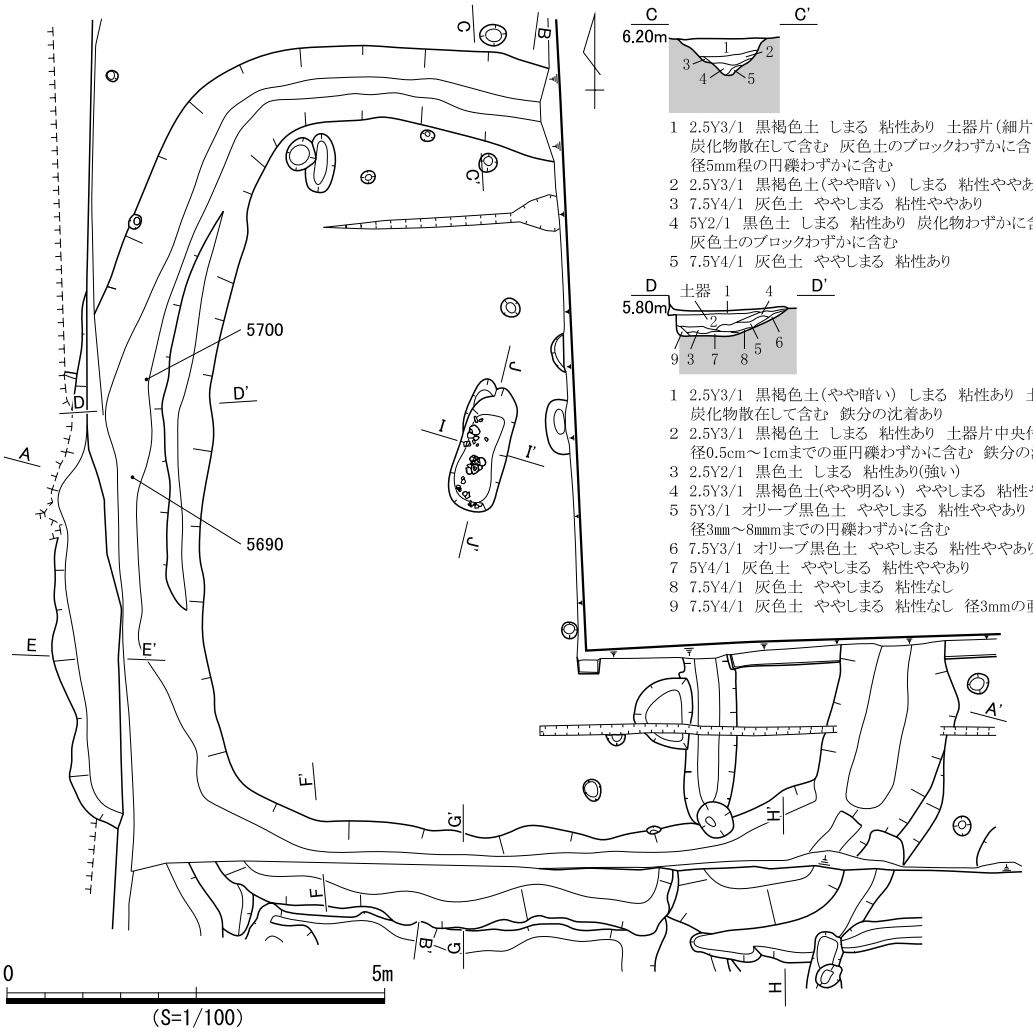
方台部　平面形は東西長、南北長ともに約10.0ｍで、方形を呈する。いずれの辺も直線的であるが、西辺は中央部がやや外側に張り出す。全体の約４分の３を検出したが、墳丘盛土は確認できなかった。方台部中央部に長さ1.95ｍ、幅0.72ｍの不整楕円形を呈する土坑を検出した。主軸方位は北北東で、東西周溝とほぼ平行する。壁面の傾斜は、長辺側はほぼ垂直で、短辺側はやや緩やかであり、特に北壁面の傾斜が緩やかである。深さは0.48ｍで、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面と底面との境界は明瞭である。埋土は８層に分層した。１～３層に炭化物の混入が著しく、特に２層では塊状となって出土した。６層には炭化物が約５㎜幅で帯状に入り、その上下から土器がまとまって出土した。帯状の炭化物は木棺痕跡の可能性があることや、出土遺物が周溝と同様にすべてⅣ期であることなどから、この土坑を主体部と考えた。

周溝　北東隅部の状況が不明であるが、確認できた溝はすべて連結し、南東隅部がやや浅い。各溝幅はそれぞれ約1.2ｍ～1.7ｍ、深さはそれぞれ約0.4ｍ～0.7ｍであった。埋土は残りの良いA-A’ラインで８～11層に分層した。底面から壁面にかけて壁面崩落土の堆積が認められるが、全体的に中央部が窪む堆積状況であることから、自然堆積の可能性がある。

遺物出土状況　溝全体から土器3,180点、石器類８点、木器・木製品２点出土した。溝全体にわたって上層から土器の小片が多く出土し、特に西溝と南溝各中央部での出土が顕著であった。また、主体部から土器444点、石器類が２点出土した。土器はⅣ期のものが多く、壺や高坏は少なく、甕が多い。

出土遺物　主体部出土遺物として９点を図示した（5680～5688）。主体部からは以下の土器の出土を確認した。5680はⅣ期壺Ａ類。算盤玉状の胴部形状となるが、最大径部の張り出しは弱い。器面は磨滅が著しく、文様、器面調整痕を判断することはできない。5681はⅣ期壺A1類。口縁部が開き、端部付近で屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面をもち、直下には凹線を２条施文する。5682、5683はⅣ期壺A2類。5682は頸部に５条の直線文を施文する。5683は壺A2類は小型品。胴部上半に直線文、振り幅の小さい波状文を直線文の上下に施文する。5684、5685はⅣ期甕A2類。5684は口縁部が外反し、端部に顕著な平坦面を形成する。下端にはタタキの一部が残り、頸部以下にはハケによる調整痕が残る。5685は口縁部が短く屈曲し、平坦な端部にはタタキを加える。胴部にはタタキの後にハケ調整を施し、一部に煤が付着する。5686、5687はⅣ期甕Ａ類底部。5688はⅣ期甕Ａ類胴部。胴部上半にはハケ調整前のタタキ痕が認められるが、下半に認められない。最大径は胴部中央寄りやや上方に位置し、下半部に煤が付着する。

一方、周溝出土遺物として39点を図示した（5689～5727）。5689、5690はともにⅣ期壺Ａ類底部。胴部にはハケ目が残る。5691～5694はいずれもⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して直立し、端部にはやや内傾する平坦面をもつ。外面には２条の凹線を施文する。5691は口縁部の屈曲が強く、端部付近は内傾する。5694は屈曲する端部下端に刺突を加える。5695はⅣ期壺A1類。口縁部が開き、端部付近

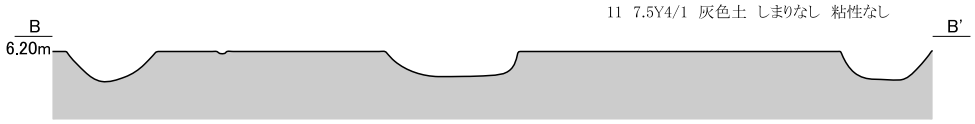


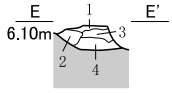
1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片(細片)散在して含む
炭化物散在して含む 灰色土のブロックわずかに含む
径5mm程の円礫わずかに含む
2 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性ややあり 炭化物散在して含む
3 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
4 5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む
灰色土のブロックわずかに含む
5 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性あり

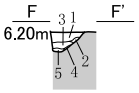
1 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 土器片(細片)含む
炭化物散在して含む 鉄分の沈着あり
2 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片中央付近にまとまって混入
径0.5cm～1cmまでの亜円礫わずかに含む 鉄分の沈着わずかにあり
3 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり(強い)
4 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) ややしまる 粘性ややあり
5 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径3mm～8mmまでの円礫わずかに含む
6 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
7 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
8 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性なし
9 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性なし 径3mmの亜円礫わずかに含む

1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり
土器片(細片)散在して含む
炭化物わずかに含む 径5mm～10mmまでの亜円礫わずかに含む
2 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり(強い)
3 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) ややしまる 粘性ややあり
4 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径3mm～8mmまでの円礫わずかに含む
6 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
7 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性なし
8 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性なし
径3mmの亜円礫わずかに含む

1 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり 鉄分沈着あり 亜円礫わずかに含む
2 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 土器片わずかに含む
炭化物わずかに含む
3 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
径5mm～10mmの亜円礫わずかに含む
4 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片わずかに含む
5 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり 灰色土のブロック10%含む
6 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり 灰色土のブロック20%含む
7 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり
8 7.5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性なし 黒色土のブロック10%含む
9 7.5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性なし 黒色土のブロック20%含む
10 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 11のブロックわずかに含む
11 7.5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性なし







1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む
2 粗砂 5Y3/2 オリーブ黒色ブロックを10%含む(墳丘崩落土か)
3 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
4 5Y2/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを5%含む

1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 土器片(細片)散在して含む
炭化物散在して含む 径0.5cm～1cmまでの円礫含む 鉄分沈着ややあり
2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5mm程の円礫わずかに含む
3 2.5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む 径2mm～5mmまでの円礫わずかに含む
4 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5 5Y4/1 灰色土 ややしまる やや粘性あり

図 1600　SZ190 遺構図（１）

で屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面をもち、直下には凹線を２条施文する。5696～5700はいずれもⅣ期壺A2類。5696は口縁部が袋状を呈し、端部を丸く収める。口縁部外面には多様な文様が認められる。端部直下から５条の凹線を施文し、最上段の凹線に重ねるように円形刺突文を配置する。最下段の凹線文直下に円形刺突文を施文し、その下方には羽状文が認められる。5697は口縁部に３条の凹線を施文し、複合クシによる縦位の直線文が認められる。頸部には複数の直線文帯が認められる。5698は頸部に突帯を貼付し、その上方に円形刺突文を施文する。突帯下部はハケ調整の後に直線文が認められる。5699はハケ調整の後に直線文を施文する。２条１組の複合クシを用い、ほぼ等間隔に複数回施文される。5700は胴部に振り幅の大きい波状文が認められる。5701、5702はともにⅣ期壺B2類。5701は、屈曲する口縁部外面に凹線が２条認められ、端部には顕著な平坦面をもつ。頸部に、焼成前に設けられた穿孔が２孔認められる。5702は頸部から口縁部が大きく外反して端部付近が屈曲し、外面には複数の凹線が認められる。5703はⅣ期壺Ｂ類。胎土及び器面は黒褐色で、複数の直線文が認められる。5704はⅣ期壺B2類。頸部下から胴部上半に直線文と波状文を交互に施文する。現状では直線文帯が５条、その間に波状文が４帯認められる。5705はⅣ期壺Ｈ類。頸部には斜位のハケ目が残り、その下方に直線文が認められる。5706、5707はともにⅣ期壺Ｈ類。5706は斜格子文が認められるが、間に形成される無文帯をはさんで、線描の方向を変えている。5707には、波状文らしき文様が認められる。5708はⅣ期甕Ａ類。胴部にはハケ目が残り、煤が付着する。5709は

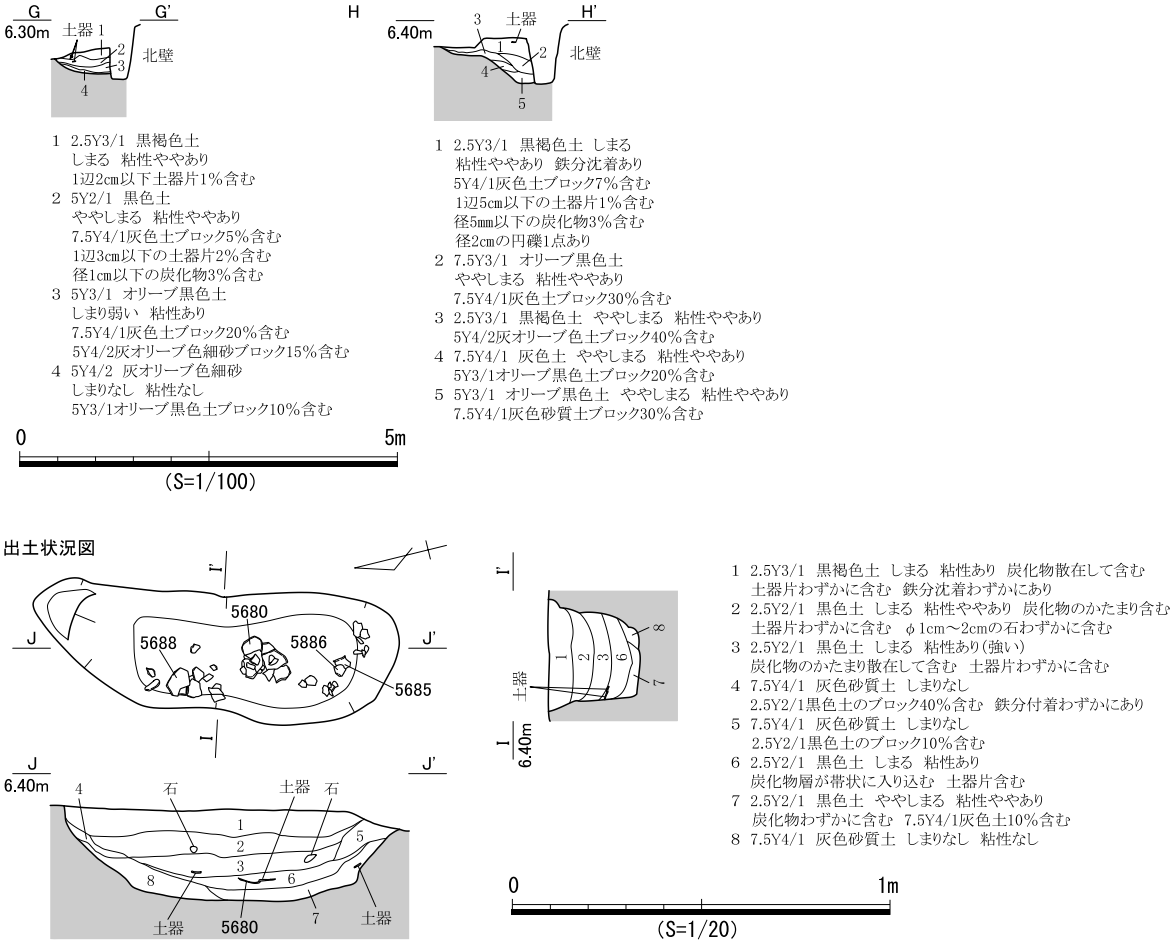
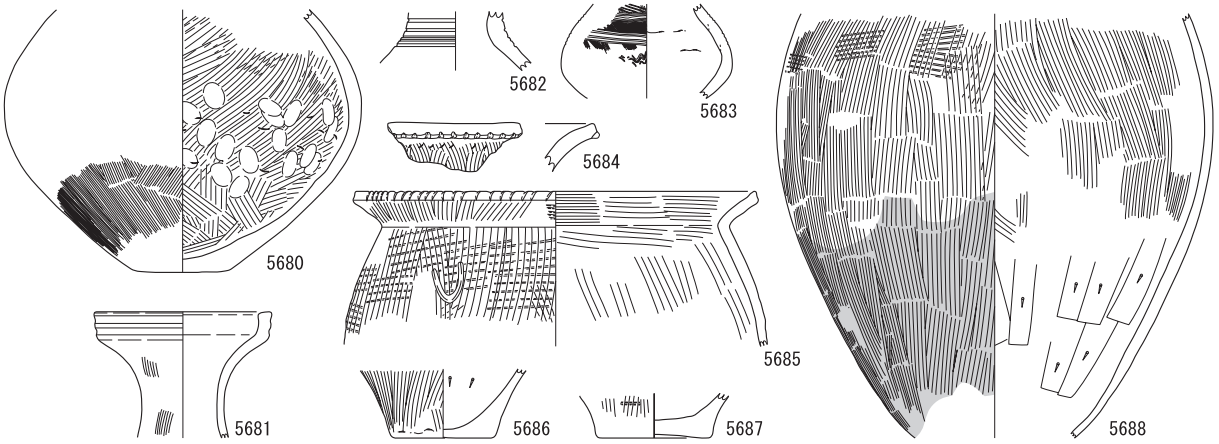


図 1601　SZ190 遺構図（２）

Ⅳ期甕A1類。口縁部が外反し、端部には顕著な平坦面が認められ、凹線が１条認められる。頸部には粘土を貼付した上から刺突を加える。5710はⅣ期甕A2類。口縁部が強く屈曲し、端部を肥厚気味にして顕著な平坦面を形成する。平坦面には２条の凹線を施文し、下端にはキザミを加える。頸部には粘土を貼付して幅広の突帯部を形成し、突帯上には刺突を加える。胴部にはタタキの後にハケによる調整を施し、その上からさらに波状文を３帯施文する。5711～5715はいずれもⅣ期甕A2類。

SZ190 主体部（5680～5688）



SZ190（5689～5709）

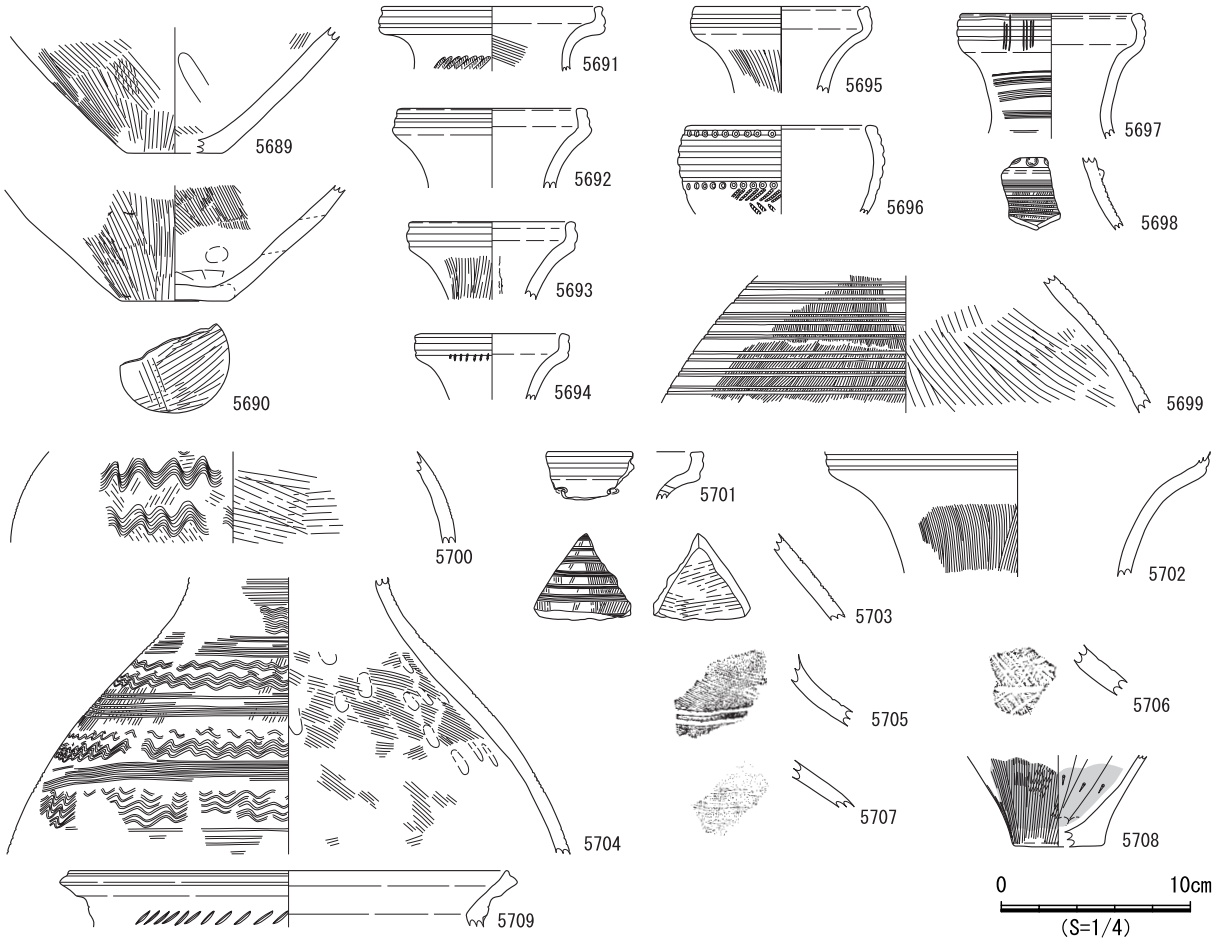


図 1602　SZ190 遺物実測図（１）

口縁部が屈曲して端部に平坦面を形成し、端部下端にタタキが認められる。5711は、口縁部内面の端部直下に凹面が認められる。5712は端部がやや丸くなり、胴部にはタタキの後にハケ調整を施す。5713～5715は端部平坦面に２条の凹線が認められ、屈曲部外面に刺突を加える。5713は屈曲部外面に粘土を充填し、その上から刺突を加える。5714は胴部にタタキの後にハケ調整を加える。5716はⅣ期甕B2類。外反する口縁部が強く屈曲して直立し、端部にはわずかに平坦面を形成する。平坦面上には沈線状の凹みが確認できる。端部直下はヨコナデ、その下方に刺突文を施文する。頸部は無文となるが、やや下がった位置から刺突文、波状文を施文する。5717はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部がナデとともに屈曲して直立する。端部には内傾する平坦面をもち、外面には刺突を加える。5718はⅣ期鉢Ａ類。大型品である。口縁部がほぼ直立し、肥厚する端部に平坦面を形成する。端部直下の外面には２条の凹線を施文する。5719はⅣ期高坏Ａ類。口縁部が袋状を呈し、端部が肥厚して顕著な平坦面を形成する。外面端部直下には凹線が認められる。5720はⅣ期高坏Ｃ類。口縁部が内湾し、肥厚気味の端部には顕著な平坦面をもつ。端部及び端部直下の外面には凹線が認められる。

SZ190（5710～5723）

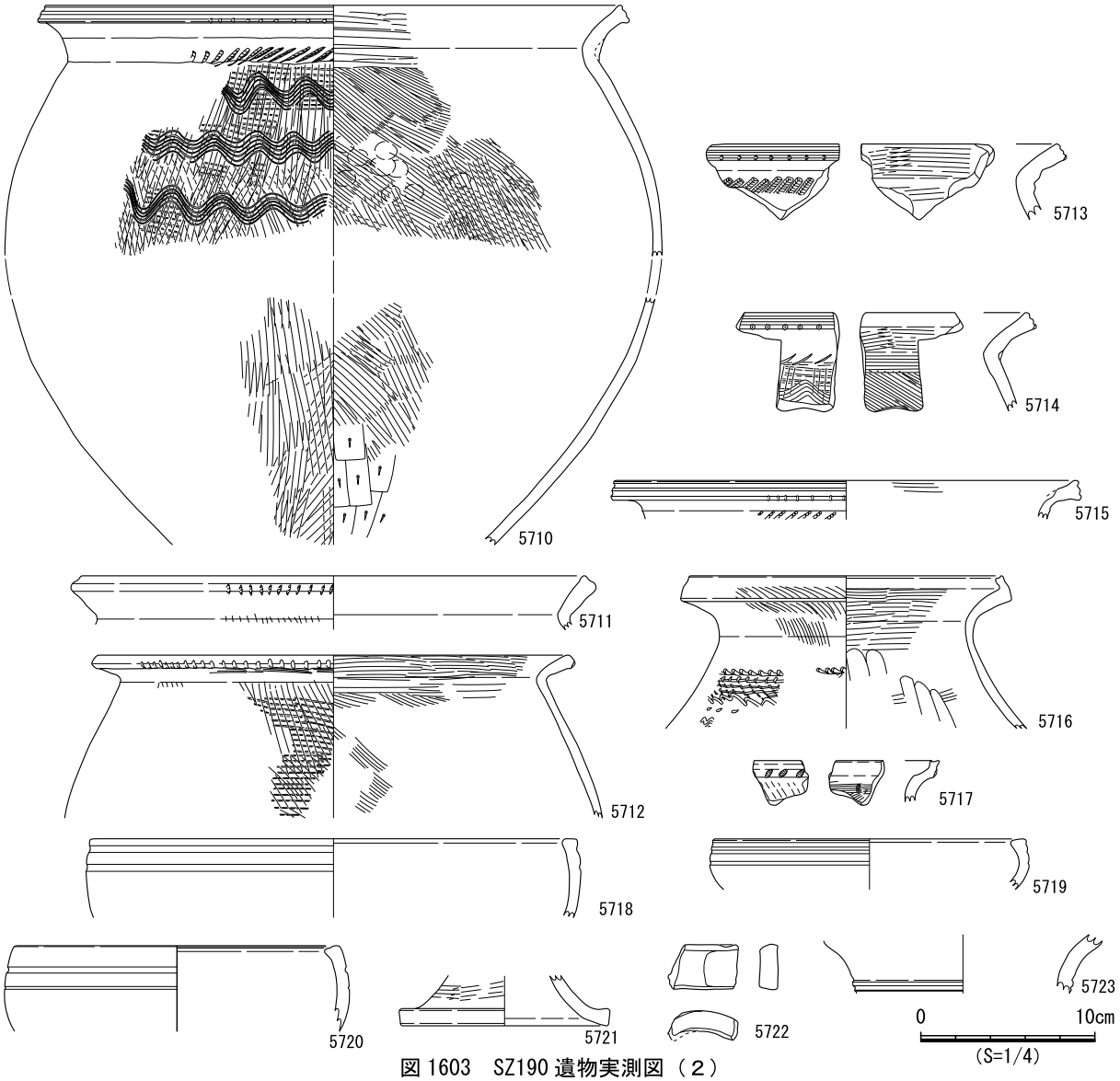


図 1603　SZ190 遺物実測図（２）

5721はⅣ期高坏。脚部にはタタキ痕が明瞭に残り、裾部は強く外反する。端部を肥厚して直立した平坦面を形成する。5722はⅣ期水差形の細頸壺の把手。5723はⅠ期遠賀川系土器の壺。頸部には削り出し突帯を形成し、その上に沈線が認められる。5724は刃器。素材となる横長剥片の縁辺に連続する剥離を施す。5725は磨製石斧。細長い形状で側縁は平行し、全面に剥離痕が残る。5726、5727は叩石。いずれも長楕円礫を素材とし、5726は全面に敲打痕が残り、横方向の線状痕も認められる。また、5727は側面から下面にかけて敲打痕が残る。

時期　主体部と周溝出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ190（5724～5727）

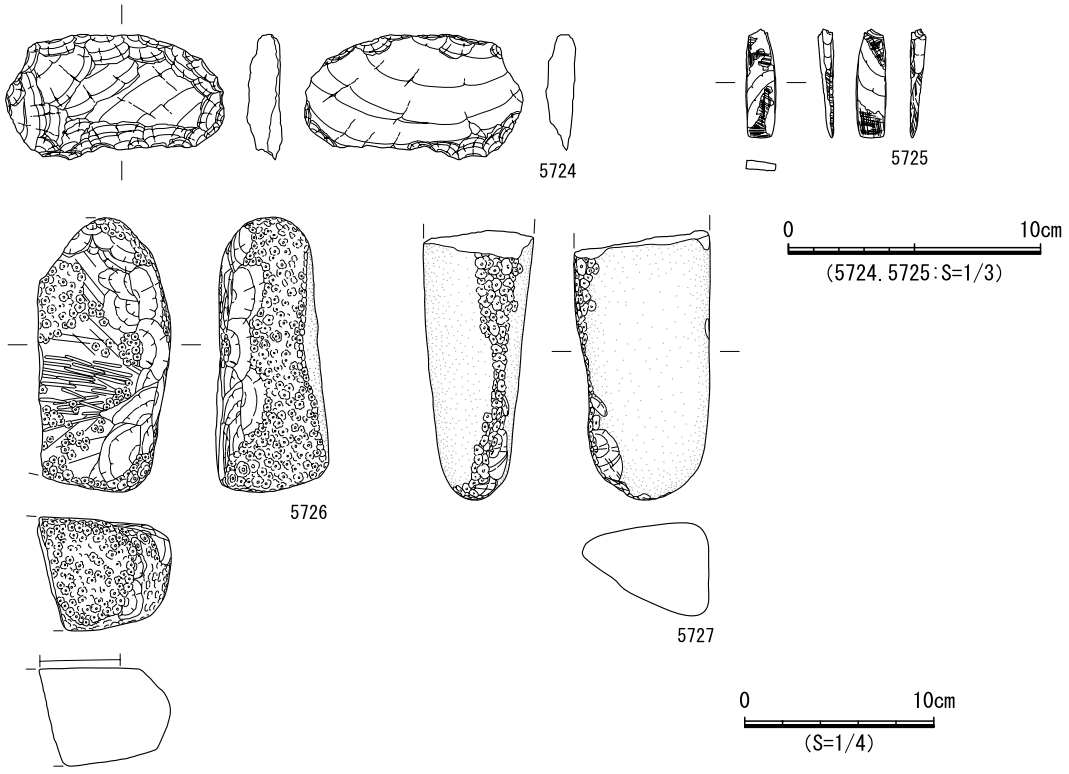


図 1604　SZ190 遺物実測図（３）

SZ191（遺構：図 1605、遺物：図 1606）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北東隅は調査区域外にのび、南東側でSZ192を切る。SB531～SB534等の複数の遺構底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。

方台部　各辺ともに直線的に延び、隅部はわずかに丸みを帯びる。その規模は東西長約8.7ｍ、南北長約7.0ｍであり、平面形は東西に長い隅丸方形状を呈する。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.6ｍ、深さ約0.4ｍ～0.6ｍであり、検出した範囲内では全周している。隅部は内側が比較的直角に近い形状で屈曲しているのに対し、外側は緩やかな弧を描いており、東・南溝の幅はほぼ均一であるのに対し、西溝は中央部分の幅が最も広くなる。また、南・東溝よりも北・西溝の幅が広い。その断面形はおよそ逆台形を呈し、周溝南西側は溝下方の壁面が急傾斜となる。また、隅部の底面は３箇所とも周溝底面よりわずかに高い。埋土は４～８層に分層し、いずれの土層でもブロック土の混入が多く認められる。壁面沿いには崩落土と考えられる土が堆積し、上方の埋土は中央が窪む堆積である。

遺物出土状況　南溝と東溝から土器233点、北溝と西溝から土器370点が出土した。南溝の中央付近において、底面直上で胴部穿孔のある壺が口縁部を東に向けて出土した。本遺構の供献土器と考えられる。出土土器はⅠ期とⅣ期で占められ、Ⅰ期の土器片の出土量が多い。

出土遺物　5728はⅣ期壺A2類。口縁部が袋状になり、端部を丸く収める。口縁部には凹線３条、斜位の刺突文を施文し、頸部から胴部上半にかけては幅広く直線文が認められる。さらに下方には波状文、直線文、波状文の順に施文され、最下段の波状文帯が胴部最大径の位置にあたる。胴部下半は縦方向のハケ調整を基本とするが、最大径部直下には一部にヨコハケが認められ、穿孔が１孔認められる。底部は平底で、ハケ目が残る。胴部は肩部が強く張り、算盤玉状を呈する。5729はⅣ期壺H類。

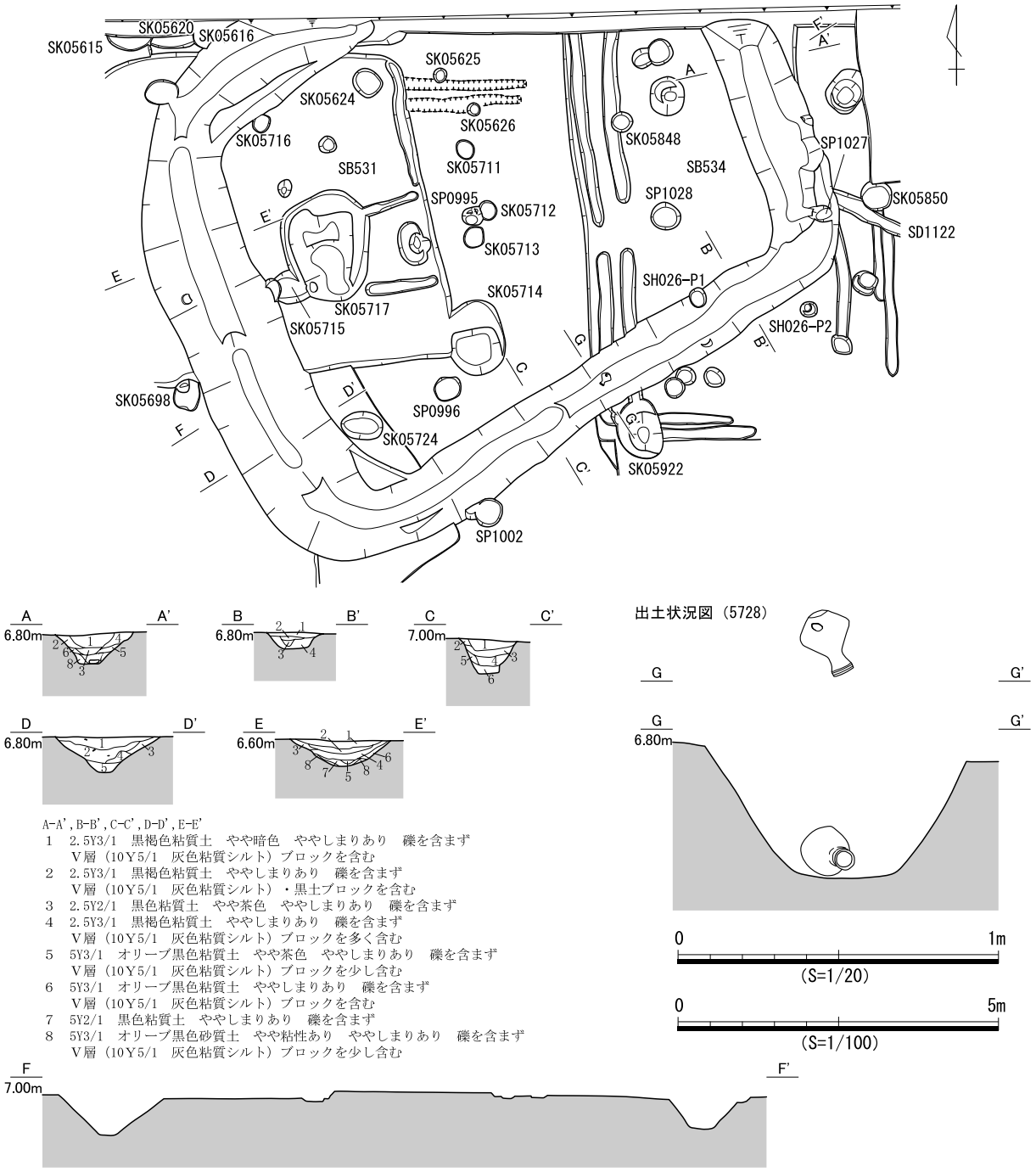


図 1605　SZ191 遺構図

黒褐色の胎土が特徴的で、器面には直線文が認められる。5730はⅠ期遠賀川系土器の壺。口縁部が大きく外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。5731はⅠ期遠賀川系土器の鉢。口縁部が短く外反し、端部をやや下方に拡張する。

時期　供献土器の時期から、Ⅳ期と考えられる。

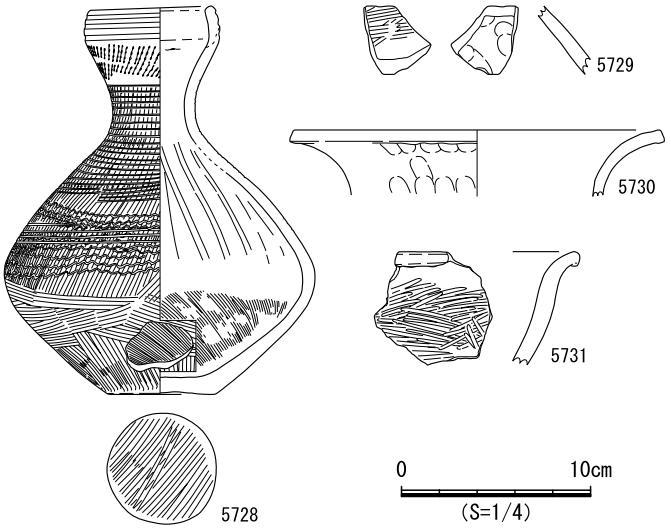


図 1606　SZ191 遺物実測図

SZ194（遺構：図 1607、遺物：図 1608）

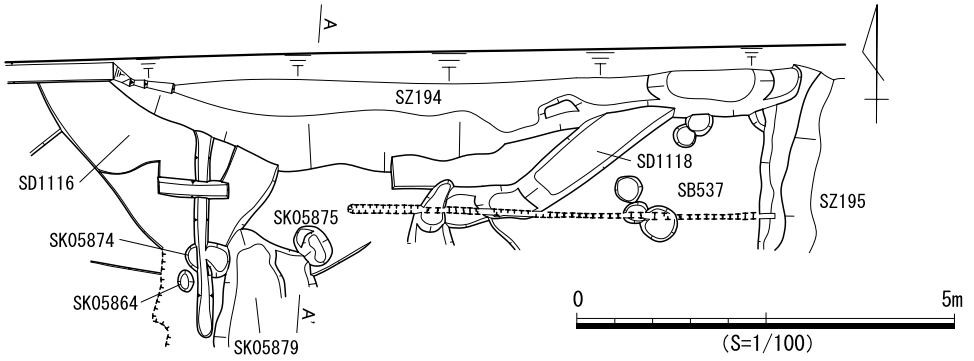
検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。大半は調査区域外に位置し、南溝のみ検出した。なお、他遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

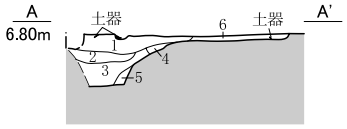
方台部　方台部の範囲はすべて調査区域外にあたるため、詳細は不明である。

周溝　深さ約0.7ｍであり、隅部は未確認である。その断面形は逆台形を呈し、底面ではⅥ層が表出した。埋土は６層に分層し、すべての層にブロック土が見られないことと、炭が混入することが特徴的である。溝の平面形や断面形などから、方形周溝墓の周溝と判断した。

遺物出土状況　埋土中から土器1,244点、石器類１点、木製品１点が出土した。溝底面ではⅣ期の壺（5732）が潰れたような状態で出土し、供献土器と考えた。また、埋土上層（１層）からⅥ期～Ⅶ期の土器片がまとまって数箇所で出土し、周溝の窪地を廃棄場所として利用していたと考えられる。

出土遺物　5732はⅣ期壺Ｃ類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張する。端部を下方に拡張して顕著な平坦面を形成し、刺突を加える。頸部には直線文及び刺突文を施文し、それ以下の胴部上半には直線文が数帯認められる。胴部最大径の位置には刺突文を施文し、その上方には２条×２の複合クシによる波状文が認められる胴部下半には縦位のハケ目が残り、平底の底部にも一部ハケ目が認められる。胴部形状は算盤玉状を呈し、肩部が強く張る。5733はⅤ期甕A2a類。口縁部が短く外反





1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　土器が多い　径5cm以下の円礫を少し含む
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　しまり弱い　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
3　5Y2/1　黒色粘質土　しまり弱い　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　径1cm以下の円礫を含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　しまり弱い　炭が混じる　径5cm以下の円礫を含む
6　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　炭が混じる　径5cm以下の円礫を含む

図 1607　SZ194 遺構図

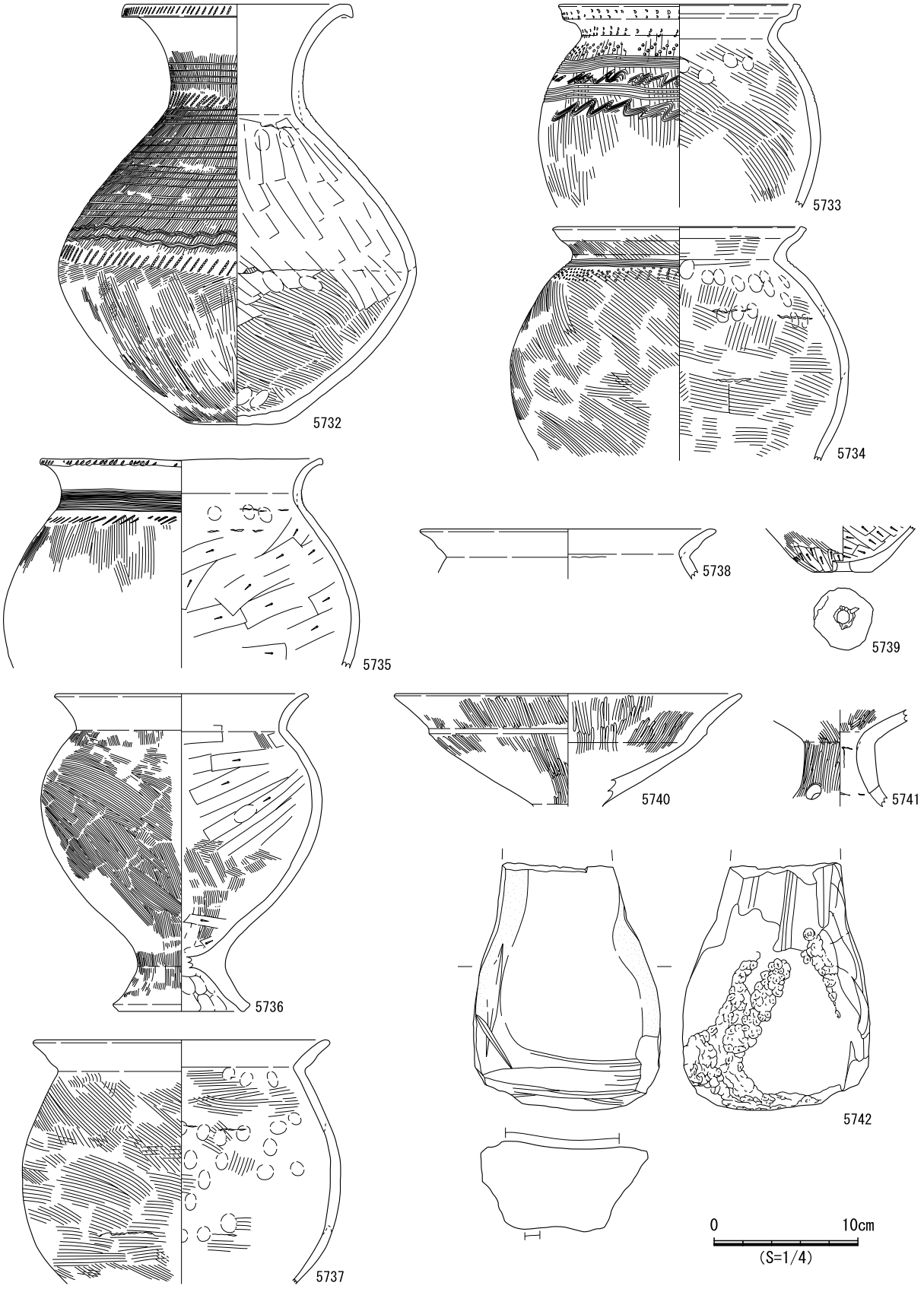


図 1608　SZ194 遺物実測図

し、端部ナデとともに強く屈曲してほぼ直立する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には刺突を加える。頸部には刺突文を２帯施文し、その下方には直線文と波状文を交互に２回ずつ認められる。内外面ともにハケ調整を施す。5734、5735はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。5734は口縁部が外反し、端部付近がわずかに内湾して平坦面を形成する。頸部直下には直線文を施文し、その下方に刺突文が認められる。器面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。5735は口縁部が強く外反し、端部には刺突を加える。頸部には直線文を施文し、その下方に刺突文を加える。器面には煤が付着し、内面にはケズリが認められる。5736～5738はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。いずれも口縁部が外反し、端部を丸くおさめ、外面に煤が付着する。5736は胴部最大径が上から３分の１ほどに位置し、肩部が張る。外面には細かいハケ目が残り、内面にはナデ及び板ナデが認められる。脚部は低く、ハの字状に開く。5737は外面に粗いハケ目が残る。5739はⅤ期～Ⅵ期鉢Ｂ類。平底の底部に穿孔を施し、内外面ともにケズリが認められる。5740はⅤ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が大きく外反し、屈曲部の外面には明瞭な段を形成する。端部を丸くおさめ、内外面ともにミガキを施す。5741はⅤ期器台Ａ類。脚部が柱状に短く直立し、透孔を３方向に配置する。5742は砥石。砥面が大きく窪み、その周縁に溝状の窪みが認められ、裏面には敲打痕が残る。

時期　供献土器と考えられる遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ195（遺構：図1609・1610、遺物：図1611）

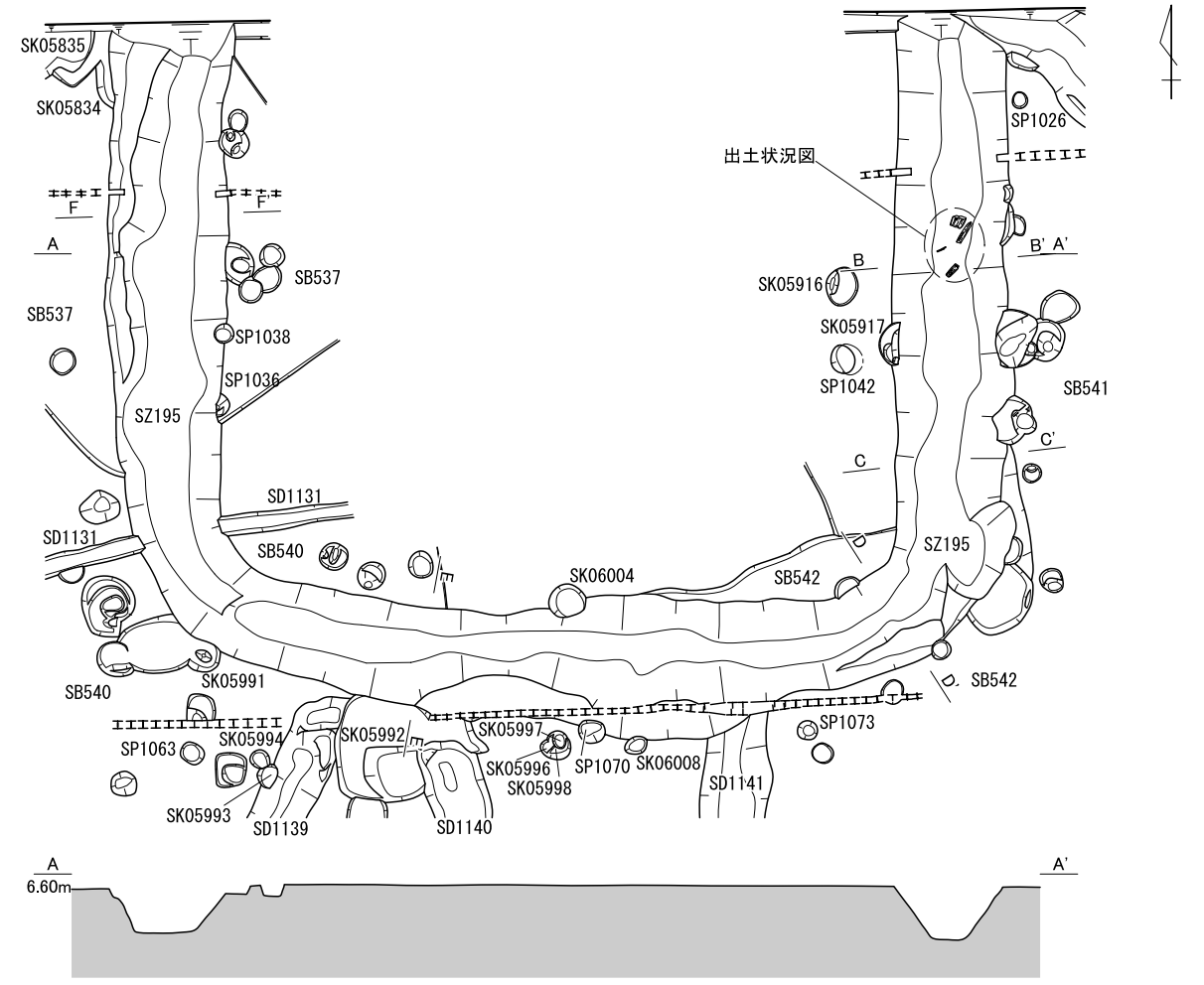
検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にあり、SZ196とSZ197を切り、SZ194とは近接するが重複していない。なお、他遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

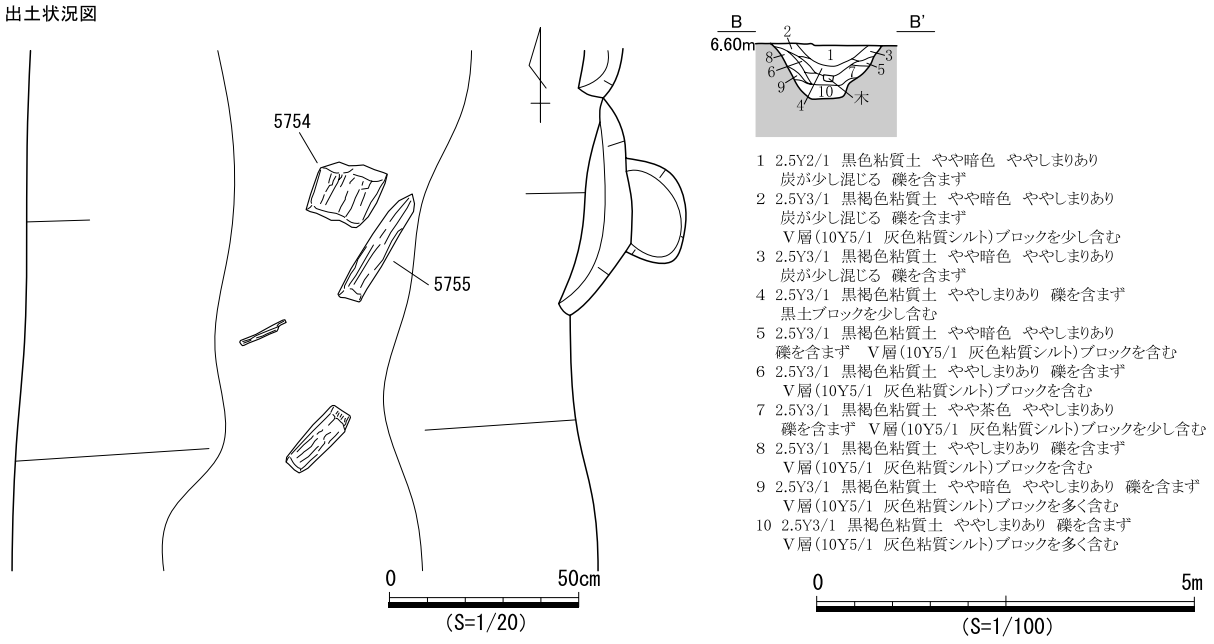
方台部　各辺ともに直線的に延び、隅部は丸みを帯びている。その規模は東西長約9.6～9.8ｍで方形を呈し、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.6m～1.8m、深さ約0.6～0.7mであり、検出した範囲内では全周している。西・東溝の幅はほぼ一定であるのに対し、南溝は中央付近の幅が広い。その断面形はおよそ逆台形状を呈し、西溝の北側のように底面が丸みを帯びる箇所もある。また、部分的に壁面に幅狭の平坦面を有する。周溝の底面は概ね平坦だが、隅部は２箇所とも底面よりやや高くなっている。埋土は５層～10層に分層した。全体的にブロック土の混入が多く、東溝では墳丘側の壁面崩落土の堆積が顕著である。また、上層に炭が目立つ。

遺物出土状況　東溝から土器395点、石器類１点、木製品６点、南・西溝から土器968点、木製品２点が出土した。東溝では、底面から約20㎝上位で木製品が横位でまとまって出土した。また、西溝では検出面から約10㎝下でⅣ期の台付鉢の台部片（5752）が出土し、供献土器と判断した。なお、埋土上層ではⅤ期～Ⅶ期の小片が出土した。

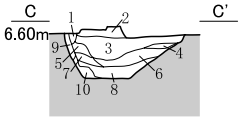
出土遺物　5743はⅤ期壺Ａ類。胴部上半に３帯の直線文帯が認められる。その間に、波状文風の文様を縦位に施文し、また扇形文も認められる。5744はⅤ期～Ⅵ期壺A1b類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張して平坦面を形成する。口縁部内面には、端部際に刺突文を施文し、その内側に円形刺突文を配する。端部平坦面にはクシによる刺突文を施文し、３本１組の棒状浮文を貼付する。5745はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈折する。5746はⅣ期甕Ｄ類。口縁部が短く外反し、端部を上下に拡張して顕著な平坦面を形成する。端部には凹線を施文し、頸部直下の胴部には刺突文が認められ



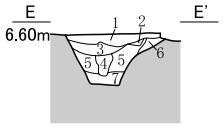


1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
4 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを少し含む
5 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
7 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや茶色 ややしまりあり
礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
8 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
10 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

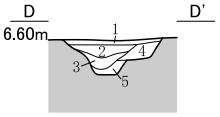
図 1609　SZ195 遺構図（１）



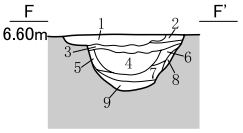
1　2.5Y3/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
4　2.5Y3/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
5　2.5Y3/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
6　5Y2/1　黒褐色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
7　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
8　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
9　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
10　10Y4/1　灰色砂質シルト　Ⅴ層



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　径2cm以下のⅤ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
3　2.5Y2/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
5　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
7　5Y4/1　灰色砂質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　黒土ブロックを含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
　炭が混じる　礫を含まず
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロック・黒土ブロックを含む
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロック・黒土ブロックを含む
5　7.5Y4/1　灰色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず
　黒土ブロックを少し含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
3　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　細かいⅤ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる
　礫を含まず　細かいⅤ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
5　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
6　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
7　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
8　10Y4/1　灰色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず　黒土ブロックを少し含む
9　10Y4/1　灰色微砂　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　黒土ブロックを含む

0　5m
(S=1/100)

図 1610　SZ195 遺構図（２）

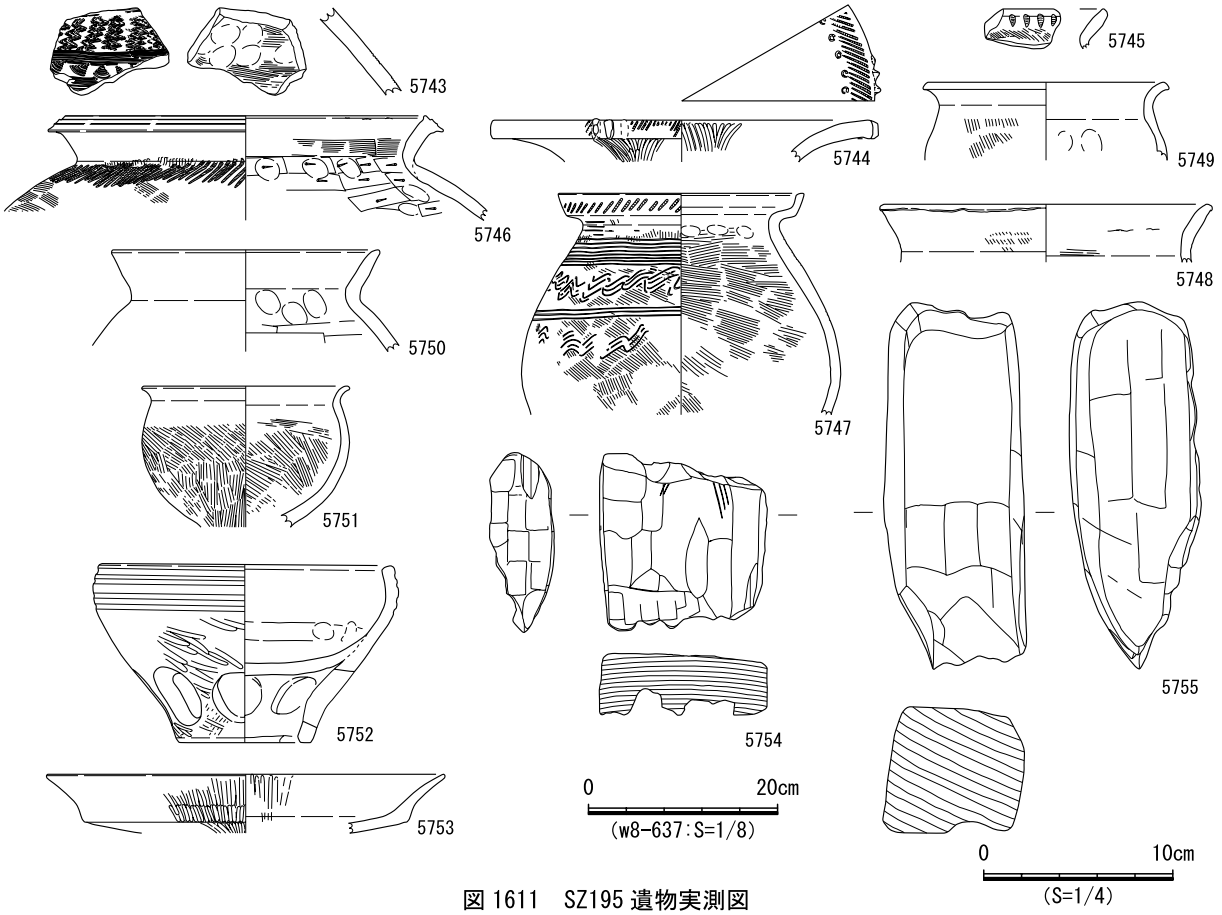


図 1611　SZ195 遺物実測図

る。胴部内面にはケズリが認められる。5747はⅤ期甕A2a類。口縁部が外反し、端部が強く屈曲して直立する。端部に内傾面を形成し、端部外面には刺突を加える。胴部外面には全面にハケ調整を施し、その上から胴部上半には直線文と波状文を交互に２回ずつ施文する。5748はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が外反し、端部を丸く収める。5749はⅥ期～Ⅶ期甕E2類。口縁部が外反し、外面に煤が付着する。5750はⅥ期～Ⅶ期甕E4類。口縁部が屈折し、直線的に外傾する。5751はⅥ期～Ⅶ期甕E6類。口縁部が短く外反し、胴部は丸く球形を呈する。内外面ともに煤が付着する。5752はⅣ期台付鉢。口縁部形状は鉢Ａ類や高坏Ａ類に類似する。口縁部が内傾して端部を肥厚し、端部には平坦面を形成する。口縁部外面には顕著な凹線を４条施文する。脚部には縦長楕円形の大きな透孔があり、全体では８孔穿たれていると考えられる。脚部は直立気味となり、接地面を平坦に仕上げる。5753はⅤ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が強く屈曲して外反する。外面の稜は明瞭である。5754は残材。厚みのある板材で、上端を斜めに削り落としている。表面には粗い加工痕が残り、裏面は腐食のため凹凸が著しい。5755は残材とした。しかし、断面方形を呈し、左側面下方が湾曲していることから、器具の二次加工品の可能性もある。

時期　供献土器と考えられる遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ196（遺構：図1612、遺物：図1613）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。中央から南側は調査区域外にあり、SZ195に切られ、SZ197に近接する。なお、他遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

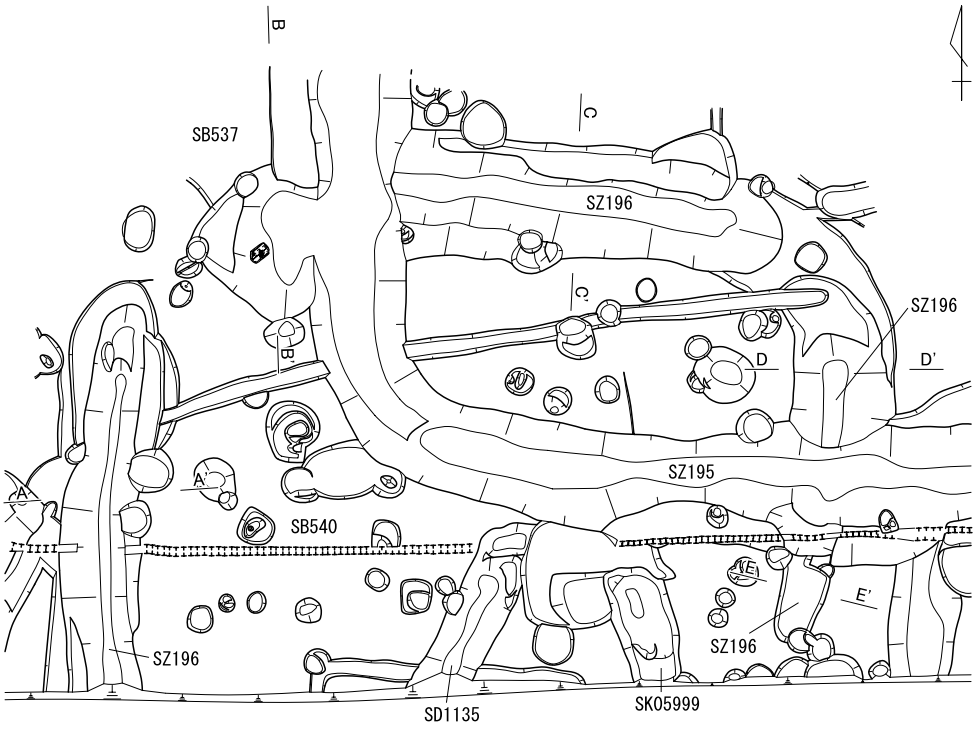
方台部　東辺は直線的であるが、北辺と西辺は緩やかに湾曲している。その規模は東西長約9.3ｍで方形を呈し、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

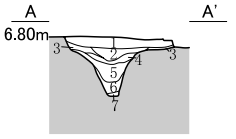
周溝　幅約1.2ｍ～1.6ｍ、深さ約0.5ｍ～0.8ｍであり、検出時に西溝と北溝は途切れ、東溝の南端は調査区域内で収束していた。西溝に対して北・東溝の幅が広く、その断面形は西溝がＶ字状で上方に幅狭の平坦面を有し、北・東溝は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北東隅部は極めて浅い。埋土は１層～12層に分層した。全体的にブロック土の混入が目立ち、北溝は壁面に沿う崩落土の堆積が顕著である。一方、西溝は中央が凹む堆積である。

遺物出土状況　西溝から土器718点、北溝から土器375点、石器類１点、木製品１点、東溝から土器79点が出土した。Ⅴ期～Ⅵ期の遺物が上層から多く出土し、縄文時代晩期とⅠ期の遺物もわずかに出土した。なお、Ⅳ期の土器片は認められず、供献土器と判断できるものも出土していない。

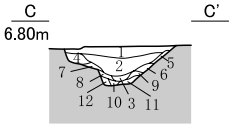
出土遺物　5756はⅤ期～Ⅵ期壺Ａ類。胴部上半に直線文を施文し、その下方にはクシによる刺突文が認められる。5757はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部がくの字に屈折し、端部には顕著な平坦面を形成して刺突を加える。5758は叩石。長楕円礫を素材とし、その側縁と下面に敲打痕が残る。5759は礎板か。上下端部は丸みを帯び、側面は直線的にのびる。表面中央部は不整形に窪み、二次加工の可能性がある。

時期　供献土器は出土していないため不明であるが、Ⅳ期のSZ195に切られることからⅣ期以前と考えられる。

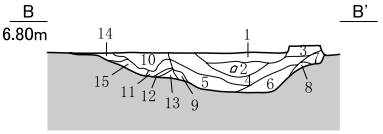




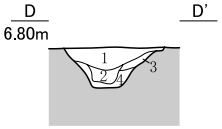
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　炭が混じる
　径3cm以下の円礫を少し含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　炭が混じる　礫を含まず
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロック多く含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　炭が少し混じる　礫を含まず
5　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロック少し含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　砂が混じる　礫を含まず
7　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや淡色
　砂が混じる　礫を含まず



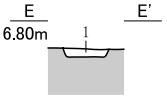
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
　礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
4　5Y4/1　灰色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　黒土ブロックを含む
5　7.5Y4/1　灰色砂質土　やや暗色　やや粘性あり
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
9　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや淡色
　ややしまりあり　礫を含まず
　黒土ブロックを少し含む
10　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
11　7.5Y4/1　灰色細砂　ややしまりあり　礫を含まず
12　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　1層よりやや淡色　ややしまりあり　径10cm以下の円礫を少し含む
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
5　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
7　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
9　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず　黒土ブロックを含む
10　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
11　5Y2/1　黒色砂質土　ややしまりあり　礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
12　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
13　5Y2/1　黒色砂質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
14　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
15　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色
　ややしまりあり　礫を含まず
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色
　ややしまりあり　礫を含まず
3　5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

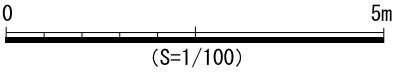


図 1612　SZ196 遺構図

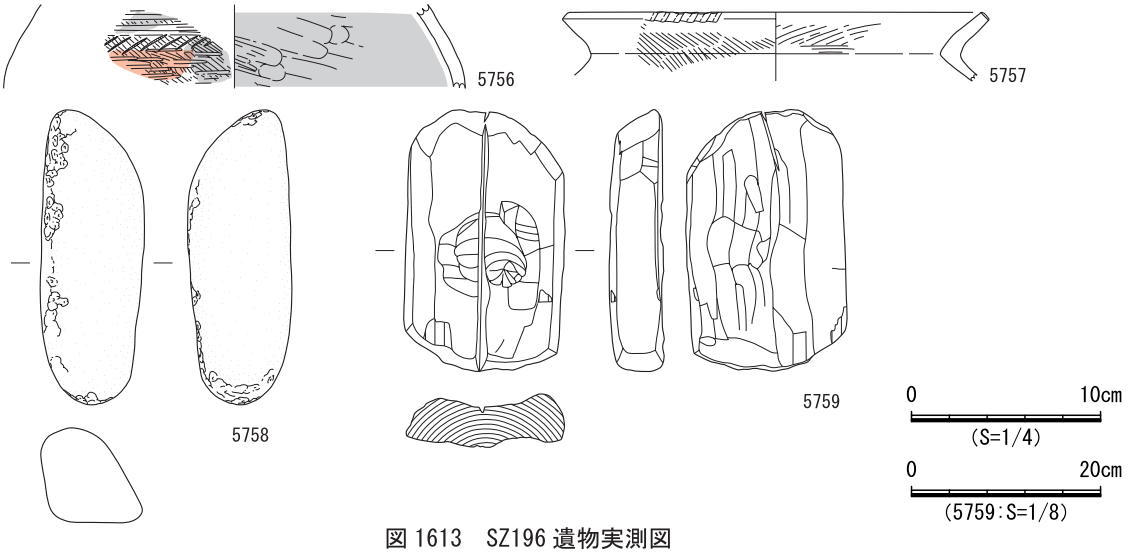


図 1613　SZ196 遺物実測図

SZ197（遺構：図 1614・1615、遺物：図 1616）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にあり、南東溝がSZ195に切られる。なお、他遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

方台部　各辺は直線的であり、隅部は丸みを帯びている。その規模は北西－南東約7.8ｍ、北東－南西約6.3ｍで、北西－南東方向に長い長方形を呈する。なお、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　約0.9ｍ～1.8ｍ、深さ約0.3ｍ～0.7ｍであり、検出時に北東溝と南東溝は途切れており、他の溝は連続していた。北東溝・南東溝に対して南西溝の幅が広く、その断面形はおよそ逆台形状を呈する。溝の底面は比較的平坦であるが、南隅と西隅は極めて浅く、四隅切れの方形周溝墓と様相が似ている。埋土は３～７層に分層し、全体的にブロック土の混入が目立ち、上方に炭が含まれている

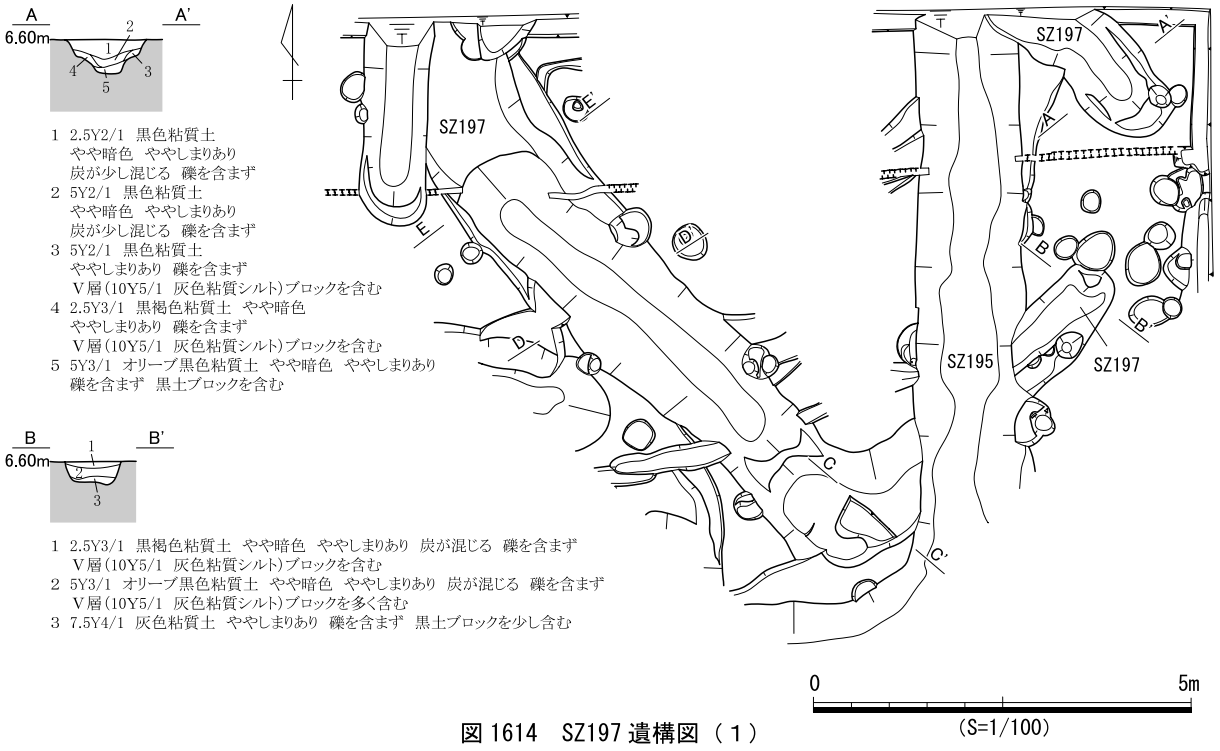


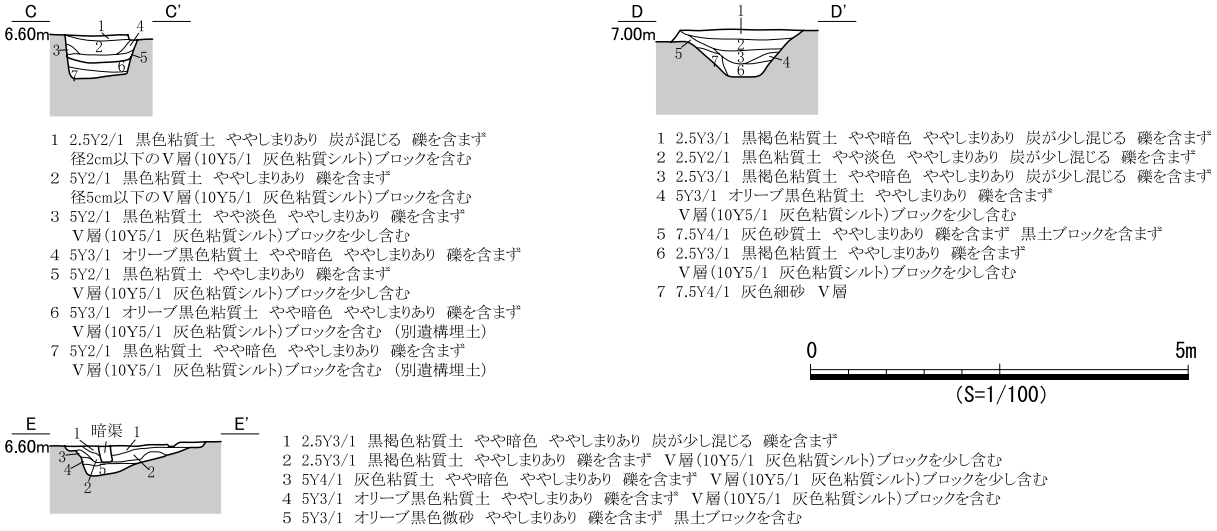
図 1614　SZ197 遺構図（１）

ことが多い。

遺物出土状況　北東溝から土器116点、南東溝から土器37点、南西溝から土器150点、北西溝から土器９点が出土した。北東溝では、底面からやや上位でⅡ期の壺が出土し、供献土器と考えられる。なお、Ⅰ期、Ⅳ期、Ⅵ期～Ⅶ期の土器片も出土したが、混入と考えられる。

出土遺物　5760～5762はⅣ期壺。5760は頸部に貼付される突帯。5761は器面にハケ調整を施し、やや太い線刻が認められる。5762は外面にハケ後ナデを施す。内面は剥離が著しい。5763はⅥ期～Ⅶ期壺蓋。天頂部を欠損する。天頂部から端部に向けて外反し、端部は下方に屈曲する。屈曲部付近には多条沈線を施文し、２孔１組の穿孔が認められる。5764はⅠ期壺。口縁部が外反し、頸部には削り出し段及び沈線１条が認められる。5765はⅡ期壺。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成する。頸部から胴部は最大径に向けてなだらかに広がり、胴部最大径は下方に位置して下膨れとなる。底部は平底である。胴部上半はハケの後にナデを施すが、底部付近の胴部下半にはハケ後ミガキが認められる。内面は剥離が目立つが、ナデまたはハケ調整が基本と考えられる。

時期　供献土器と考えられる遺物の時期から、Ⅱ期と考えられる。



C-C'
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
径2cm以下のⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
径5cm以下のⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
5 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む (別遺構埋土)
7 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む (別遺構埋土)

D-D'
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
3 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
4 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
5 7.5Y4/1 灰色砂質土 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含まず
6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
7 7.5Y4/1 灰色細砂 Ⅴ層

E-E'
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3 5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
5 5Y3/1 オリーブ黒色微砂 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む

図 1615　SZ197 遺構図（２）

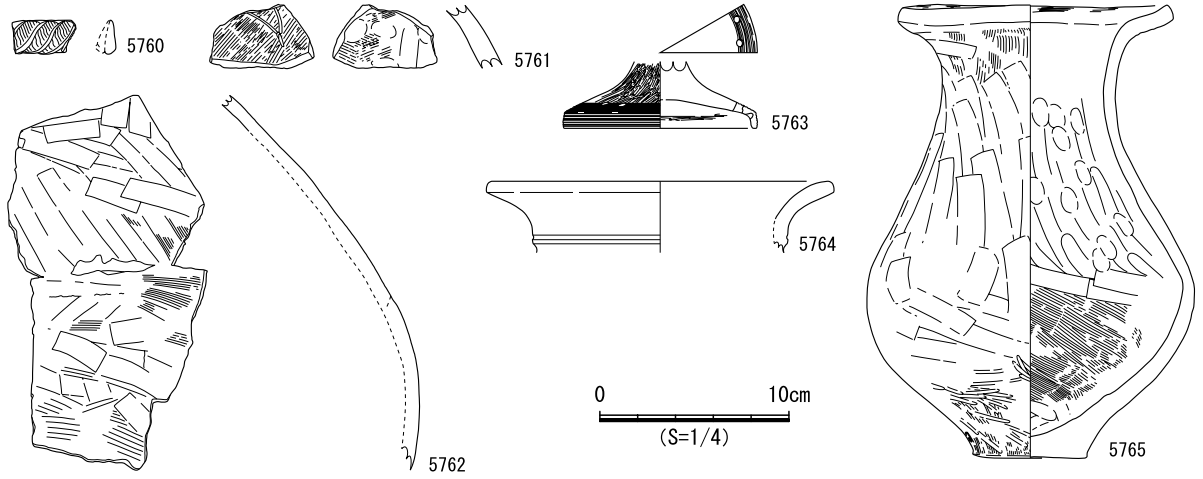


図 1616　SZ197 遺物実測図

SZ198（遺構：図1617）

検出状況　東部西側中央から東部中央にかけての遺構密集域に位置し、南溝はSZ199、SZ200を切る。西溝はSB541床面で検出し、平面形は比較的明瞭であった。一方、東溝と南溝は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。なお、周溝は全周している。

方台部　方台部の中央が調査区域外に位置するため全容は不明であるが、北辺と南辺は直線的で、東辺はやや蛇行するものの、およそ直線的であるといえる。その規模は南北長約5.4～5.7ｍであり、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.2ｍ、深さ約0.2ｍ～0.6ｍであり、全周する。溝の底面は東溝中央と南東隅が深く、北東隅と東溝中央南寄りは極めて浅い。溝の断面形は逆台形を呈し、北溝南側の壁面には狭い平坦面がある。埋土は３層～８層に分層でき、壁面から底面にかけて崩落土と考えられるブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況　西溝から土器42点、北・東・南溝から土器27点が出土した。西溝では散在して出土し、北・東・南溝では埋土上層を中心に出土し、底面付近ではほとんど出土しなかった。しかし、いずれも小片であり図示していない。

時期　出土遺物や遺構の重複関係から時期を言及できず、周辺の状況からⅡ期～Ⅳ期と考えられる。

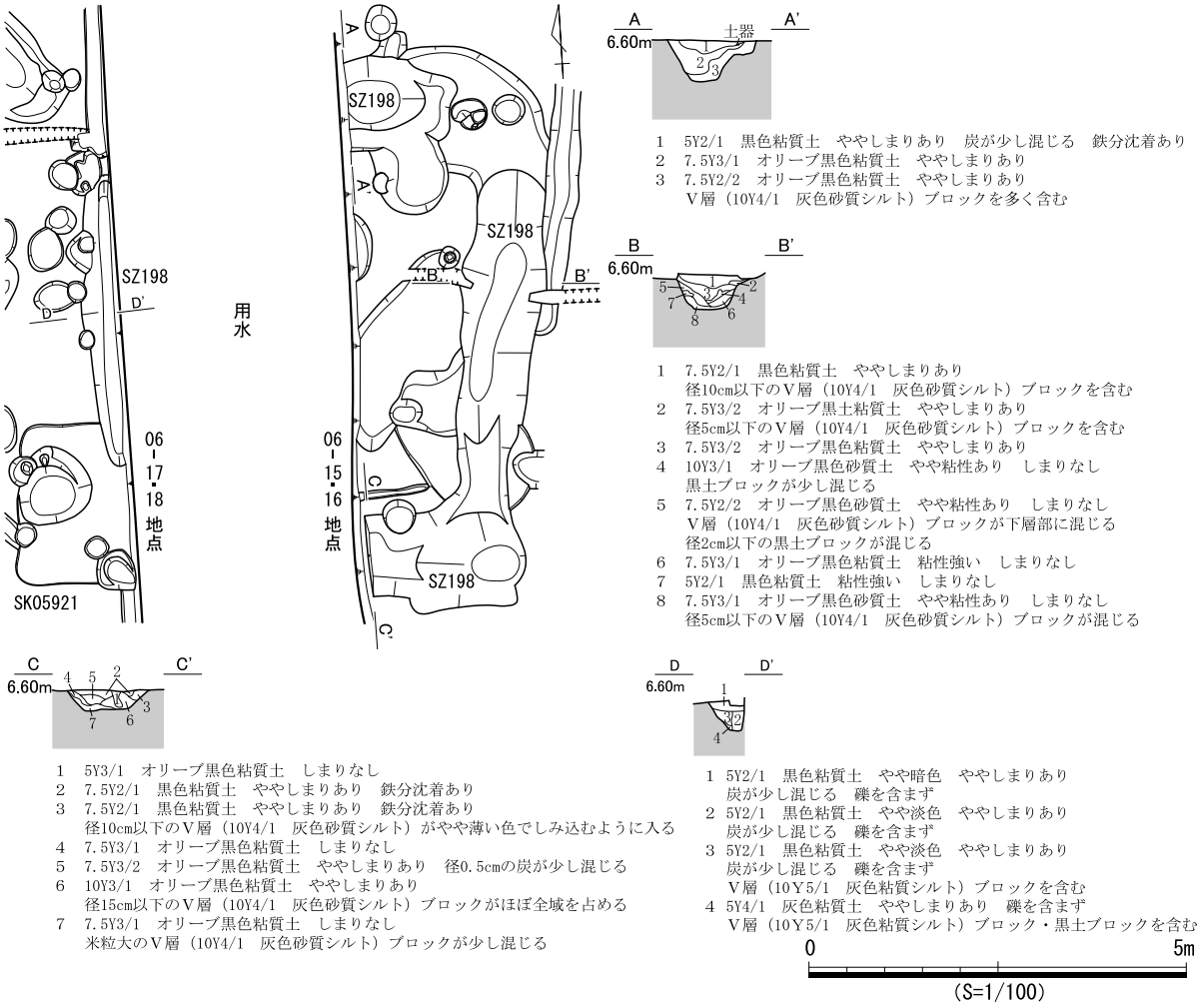


図1617　SZ198遺構図

SZ199（遺構：図 1618）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北溝をSZ198に切られSZ200と重複するが、SZ200との先後関係は不明瞭であった。南側と西側は調査区域外にのび、検出した範囲内では周溝は途切れていない。

方台部　大半が調査区域外にあるため、その規模や形状は不明であるが、北辺は直線的であり、北東隅は直角気味である。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　北溝は幅約1.6ｍ、深さ約0.6ｍであり、北東隅は極めて浅い。埋土は８層に分層でき、北・東溝ともにブロック土混じりの崩落土が堆積した後、水平に堆積している。溝の断面形は逆台形を呈し、方台部側の傾斜が急で、外側は緩やかに丸みを帯びている。

遺物出土状況　埋土から土器10点が出土したが、いずれも小片であり図示していない。

時期　出土遺物や遺構の重複関係から時期を言及できず、周辺の状況からⅡ期～Ⅳ期と考えられる。

SZ200（遺構：図 1618、遺物：図 1619）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北溝をSZ198に切られ、南溝はSZ199と重複するが、その先後関係は不明瞭であった。南側と西側は調査区域外にのび、検出した範囲内では周溝は途切れていない。

方台部　大半が調査区域外にあるため、その規模や形状は不明であるが、北東隅は丸みを帯びている。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　東溝は幅約1.1ｍ、深さ約0.5ｍであり、北東隅は極めて浅い。埋土は２～６層に分層でき、

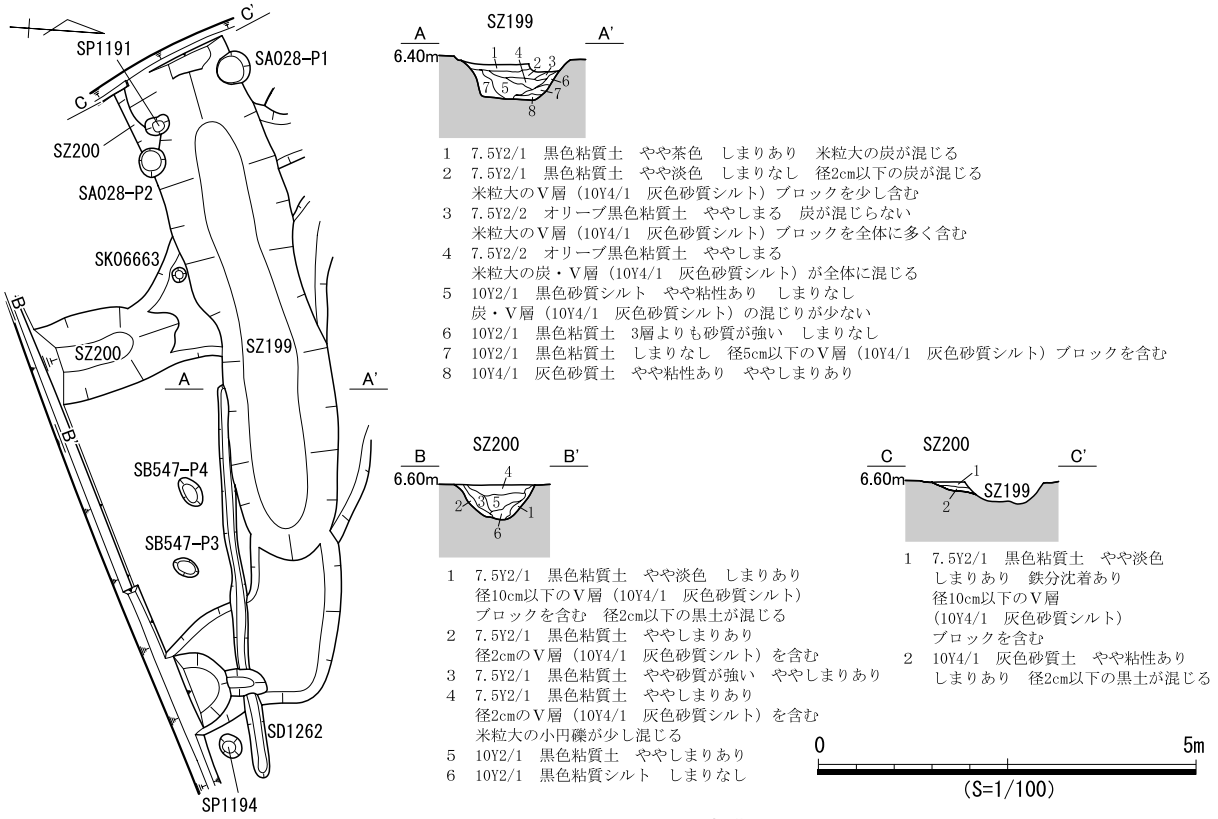


図 1618　SZ199・SZ200 遺構図

東溝はブロック土混じりの崩落土が堆積した後、水平に堆積している。なお、溝の断面形はおよそ逆台形を呈する。

遺物出土状況　埋土から土器16点、東溝の埋土上層にて石鏃１点が出土した。いずれも小片であり、供献土器は出土していない。

出土遺物　5766は打製石鏃である。鏃身は五角形を呈し、先端は折損している。基部には凹状のわずかな抉りが入る。

時期　出土遺物や遺構の重複関係から時期を言及できず、周辺の状況からⅡ期～Ⅳ期と考えられる。

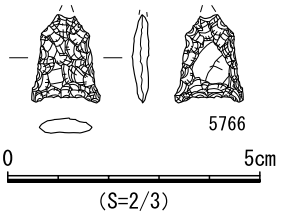


図 1619 SZ200 遺物実測図

SZ201（遺構：図 1620、遺物：図 1621）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置し、南西側でSZ202を切り、南側はSZ203との重複関係が不明瞭であった。また、北東部は竪穴住居跡や溝などの遺構と重複しており、平面形はやや不明瞭であった。なお、周溝は全周している。

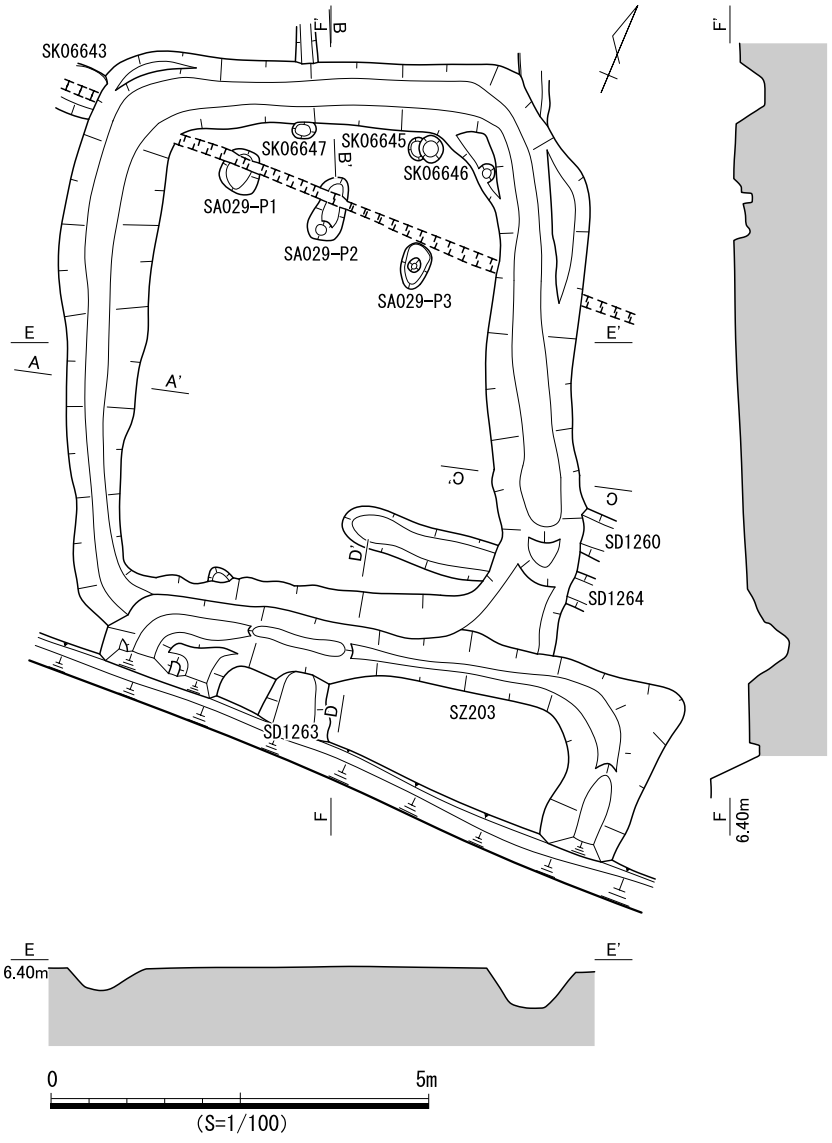
方台部　方台部の北辺と南辺は直線的で、西辺南側はわずかに西側に膨らみ、東辺はやや内反り気味である。隅部は南西隅が直角気味で、それ以外はやや丸みを帯びている。その規模は東西長約5.3ｍ～5.5ｍ、南北長約6.8ｍで、南北にやや長い長方形を呈する。墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～1.2ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍであり、全周する。北溝は幅がほぼ均一であるのに対し、西溝は北側が外側に膨らみ、東溝は北側と南側が外側に膨らむ。底面は北溝と西溝がほぼ平坦であり、東溝がやや深い。また、南東隅は溝底面より約0.2ｍ～0.3ｍ高い。溝の断面形は、西溝が底面から壁面にかけて丸みを帯びるのに対し、北溝や東溝は逆台形状を呈する。埋土は４～６層に分層でき、多くの溝で埋土上層に炭を確認した。また、西溝下層では植物遺体が含まれていた。これらのことから、周溝は自然堆積の可能性が高い。

遺物出土状況　埋土から土器332点、石器・石製品１点が出土した。上層から出土したⅤ期～Ⅶ期のものが多く、上層からⅣ期の破片もわずかに出土した。なお、供献土器と判断できるものは出土していない。

出土遺物　5767はⅣ期壺Ｄ類。端部には顕著な平坦面をもつ。器壁が厚く、大型品と思われる。5768、5769はⅣ期甕Ｄ類。口縁部が短く外反し、端部を上下に拡張する。端部には擬凹線が認められる。5770はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から柱状に直立し、裾部が開く。透孔は３方向に認められ、付根から透孔までに、３条からなる直線文を５帯施文する。5771はⅦ期高坏C4d類。口縁端部がわずかに内湾して内面に多条沈線を施文し、その間に山形文を加える。5772は高坏G3c類。平坦な坏底部から口縁部が内湾して立ち上がり、端部は内傾する。内面の段は不明瞭だが、外面の稜は明瞭に残る。口縁部外面には、中位より下がった位置まで細かい多条沈線を施文し、その間に連弧文、刺突文、山形文を加える。無文帯には丁寧なミガキを施し、精緻なつくりの資料である。5773はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器。平底で、口縁部が外傾して立ち上がる。5774は打製石鏃。鏃身は三角形を呈し、基部は「く」の字状の浅い抉りが入る。

時期　出土遺物からの言及は困難である。Ⅱ期のSZ203に切られるか同時存在であることから、Ⅱ期以前と考えられる。



A　A'

1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　径1cm以下の炭が混じる
2　10Y2/1　黒色粘質土　しまりなし
3　7.5Y2/1　黒色砂質土　やや淡色
　やや粘性あり　ややしまりあり
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
　やや粘性あり　ややしまりあり
　木片が混じる　植物遺体も混じる
5　7.5Y2/1　黒色砂質土
　やや粘性あり　しまりあり
　径2cm以下のＶ層
　(10Y4/1　灰色砂質シルト)を含む

B　B'

1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　径1cm以下の炭が混じる
2　7.5Y2/1　黒色砂質土　やや淡色
　やや粘性あり　ややしまりあり
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり
　径2cm以下のＶ層
　(10Y4/1　灰色砂質シルト)を含む
4　7.5Y2/1　黒色粘質土
　やや砂質が強い　ややしまりあり

C　C'

1　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　径3cm以下の円礫を1点含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　径2cm以下のＶ層
　(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色
　ややしまりあり　米粒大の炭が混じる
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
　ややしまりあり　径5cm以下のＶ層
　(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
5　10Y2/1　黒色粘質土　しまりなし
6　10Y4/1　灰色砂質土
　やや粘性あり　しまりあり
　径2cm以下の黒土が混じる

D　D'

1　10Y4/1　灰色砂質土　ややしまりあり
　10Y2/1　黒色土ブロックを含む
2　10Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　鉄分沈着あり　植物遺体が混じる
3　10Y4/1　灰色砂質シルト　やや粘性あり
　10Y2/1　黒色土ブロックを含む

図 1620　SZ201 遺構図

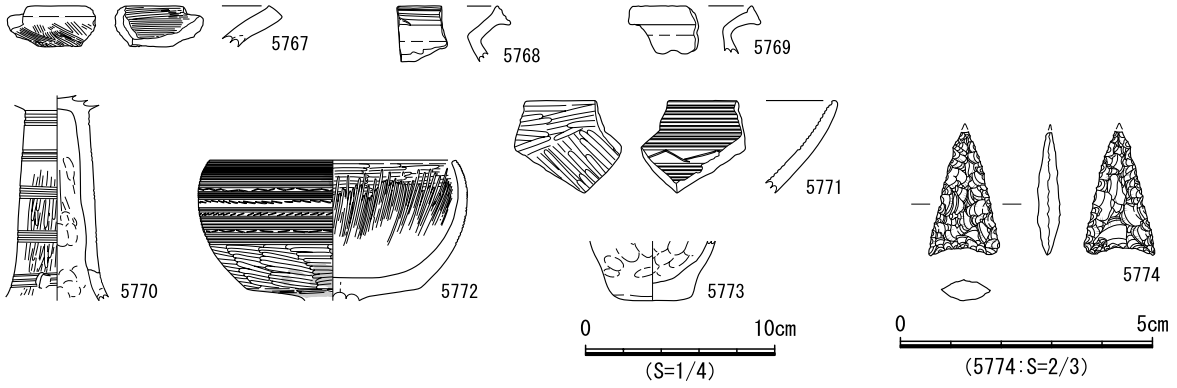


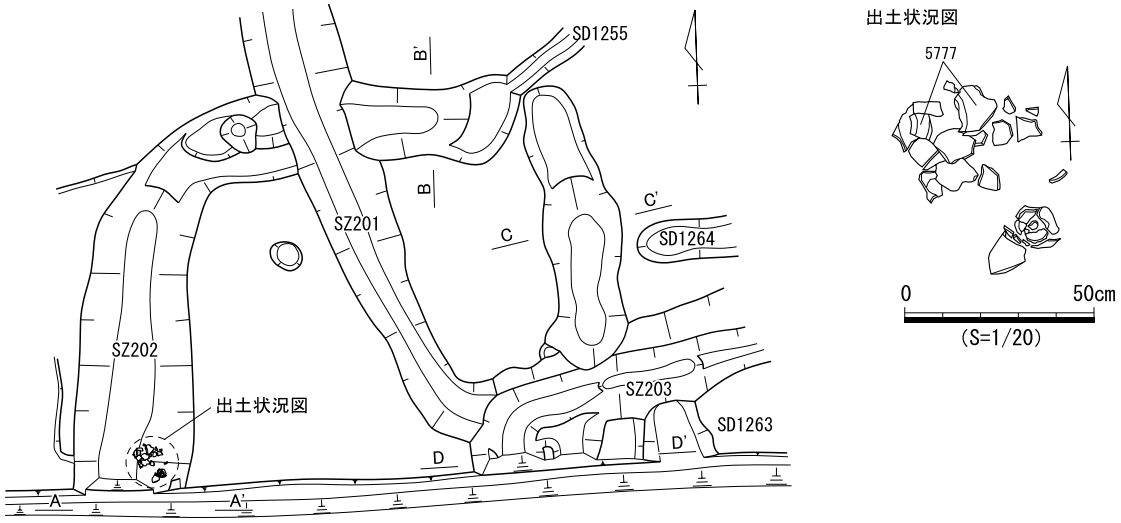
図 1621　SZ201 遺物実測図

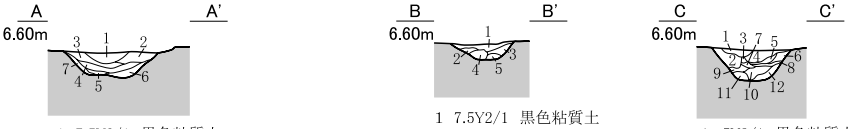
SZ202（遺構：図 1622、遺物：図 1623）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北溝と東溝をSZ201とSZ203に切られ、南側は調査区域外にのびている。周溝は北東隅で切れている。

方台部　方台部の北辺と西辺はおよそ直線的で、東辺はやや凹凸がある。その規模は東西長約5.4ｍ～5.9ｍで、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.8ｍ～1.6ｍ、深さ約0.2ｍ～0.4ｍであり、北東隅が途切れる。平面形は各辺ともに中央外側が緩やかに膨らんでおり、北・東溝に比べて西溝が広い。また、西・東溝よりも北溝がやや浅く、北西隅はさらに浅い。溝の断面形はおよそ逆台形を呈し、底面は北溝中央付近がやや深く凹んでいる。埋土は４～12層に分層でき、ほとんどの溝で埋土下層に崩落土と考えられるブロック土が堆積し、上層には植物遺体や炭が確認できることから、自然堆積の可能性が高い。なお、A-A′の２層において土

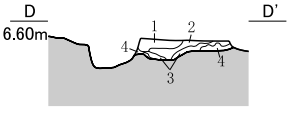




1 7.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 土器片が混じる
径1cm以下の炭を少し含む
2 7.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 植物遺体が少し混じる
径5cm以下のＶ層
(10Y4/1 灰色砂質シルト)が混じらず
3 7.5Y2/1 黒色砂質土
やや暗色 ややしまりあり
4 10Y2/1 黒色粘質土 しまりなし やや砂質
5 10Y2/1 黒色粘質シルト 粘性あり しまりなし
6 10Y4/1 灰色砂質土
やや粘性あり しまりあり 黒土が少し混じる
7 7.5Y2/1 黒色粘質土
やや淡色 ややしまりあり
径2cm以下のＶ層
(10Y4/1 灰色砂質シルト)を含む

1 7.5Y2/1 黒色粘質土
やや茶色 ややしまりあり
鉄分沈着あり
径2cm以下のＶ層
(10Y4/1 灰色砂質シルト)
ブロックを少し含む
2 7.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり
Ｖ層(10Y4/1 灰色砂質
シルト)が混じらず
3 7.5Y2/1 黒色砂質土
やや粘性あり しまりあり
米粒大の墨・黒土ブロックが
少し混じる
4 10Y2/1 黒色粘質土
やや淡色 しまりなし
5 10Y4/1 灰色砂質土
やや粘性あり
径2cm以下の4層が混じる

1 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 鉄分沈着あり
径2cm以下の炭が混じる
2 10Y2/1 黒色砂質土 ややしまりあり 径2cm以下の炭が混じる
Ｖ層(10Y4/1 灰色砂質シルト)ブロックを含む
3 7.5Y2/2 オリーブ黒色砂質土 やや粘性あり ややしまりあり
4 7.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
5 7.5Y2/1 黒色粘質土 やや砂質 植物遺体が混じる
6 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 ややしまりあり
Ｖ層(10Y4/1 灰色砂質シルト やや暗色)ブロックが上層に多く混じる
径5cm以下の11層(10Y2/1 黒色粘質土)ブロックを含む
7 7.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまる 植物遺体が混じる
8 10Y4/1 灰色砂質シルト やや粘性あり しまりあり やや明色
9 10Y4/1 灰色砂質シルト やや粘性あり しまりあり やや暗色
10 7.5Y2/1 黒色粘質土 しまりなし
11 10Y2/1 黒色粘質土 しまりなし
径5cm以下のＶ層(10Y4/1 灰色砂質シルト)ブロックを含む
12 10Y2/1 黒色砂質土 やや粘性あり ややしまりあり
径5cm以下の11層(10Y2/1 黒色粘質土)ブロックを含む



1 7.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまる 米粒大の炭が少し混じる 植物遺体が混じる
2 7.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 しまりなし
3 7.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 しまりなし
径5cm以下のＶ層(10Y4/1 灰色砂質シルト)のブロックが混じる
4 10Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 しまりなし
径3cm以下のＶ層(10Y4/1 灰色砂質シルト)のブロックが混じる
径2cm以下の黒土が混じる

0　5m
(S=1/100)

図 1622　SZ202 遺構図

器片がまとまって横位で出土した（5777等）。周溝の最終埋没時期を示すと考えられる。

遺物出土状況　埋土から土器353点が出土した。Ⅴ期～Ⅶ期の土器が多く、Ⅳ期の土器片はなく、Ⅱ期の壺胴部片がわずかに出土している。埋土上層において、Ⅴ期～Ⅵ期の壺Ｂ類（5777）がまとまって出土した。

出土遺物　5775はⅡ期壺。胴部に貝による直線文が認められ大型品と考えられる。5776はⅤ期～Ⅵ期壺A1a類。口縁端部を大きく下方に拡張する。端部には顕著な平坦面を形成し、擬凹線を施す。5777はⅤ期～Ⅵ期甕Ｂ類。頸部がやや直立気味で、胴部には粗いハケ調整を施す。内面はハケの後にナデを施す。5778はⅥ期～Ⅶ期甕Ｂ類。胴部内外面ともに粗いハケ目が残る。5779はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が屈折し、端部付近で強く屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面を形成する。5780はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が短く屈折して端部に平坦面を形成し、端部には刺突を加える。頸部直下には直線文が認められる。5781はⅤ期器台A1a類。口縁部がなだらかに外反し、端部を肥厚して平坦面を形成する。口縁内面端部際には、刺突文帯、円形刺突文が認められる。端部平坦面の下端に刺突を加え、３本１組の棒状浮文を貼付する。5782はⅥ期～Ⅶ期器台B1a類。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成する。

時期　出土遺物からの言及は困難であるが、Ⅱ期のSZ203に切られているため、構築時期はそれ以前と考えられる。また、最終的にはⅤ期～Ⅶ期にかけて埋没したと考えられる。

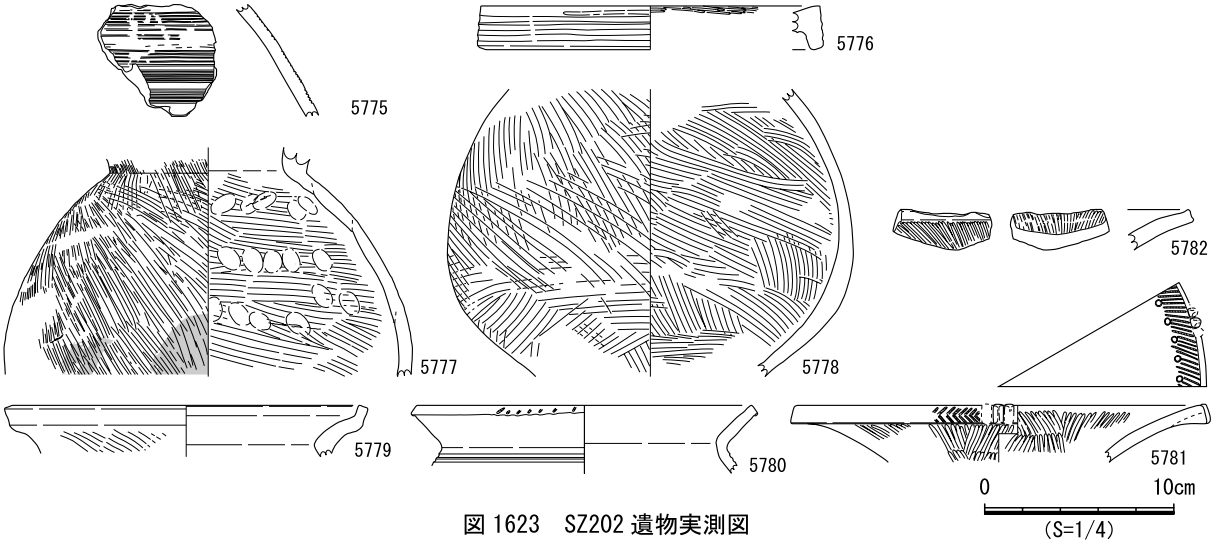


図 1623　SZ202 遺物実測図

SZ203（遺構：図 1624、遺物：図 1625）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北側でSZ202を切るが、SZ201との重複関係は不明瞭であった。中央から南側は調査区域外へのび、検出した範囲内では周溝は途切れていない。

方台部　大半が調査区域外にあるため、その規模や形状は不明であるが、隅部は丸みを帯びており、北辺東側は外側にやや張り出す。

周溝　幅約0.5ｍ～1.2ｍ、深さ約0.4ｍ～0.5ｍであり、全周する。北溝は中央から西側にかけて外側に大きく膨らんでおり、北西隅は丸みを帯びているが、北東隅は外側に突出し、肩部に平坦面を有する。底面は隅部も含めてほぼ同じ高さであり、北溝中央西寄りと東溝がわずかに深くなる程度である。溝の断面形はおよそ逆台形を呈し、上方が大きく開き、下方の壁面傾斜は急である。埋土は５～７層

に分層でき、崩落土と考えられるブロック土を含む土の堆積が顕著である。

遺物出土状況　埋土から土器71点、石器・石製品１点が出土した。遺物は周溝上層での出土が多く、下層は少ない。しかし、東溝の調査区壁面沿い付近にて、Ⅱ期甕（5783）の口縁部破片が底面よりやや上位で口縁部を上にして出土した。

出土遺物　5783はⅡ期甕。口縁部が肥厚して短く外反し、端部には平坦面を形成する。端部にはキザミを加え、ハケ工具の押圧が２箇所に認められる。外面にはハケ調整を施し、内面はハケ後ナデを施す。

時期　底面よりやや上位で出土した遺物の時期から、Ⅱ期と考えられる。

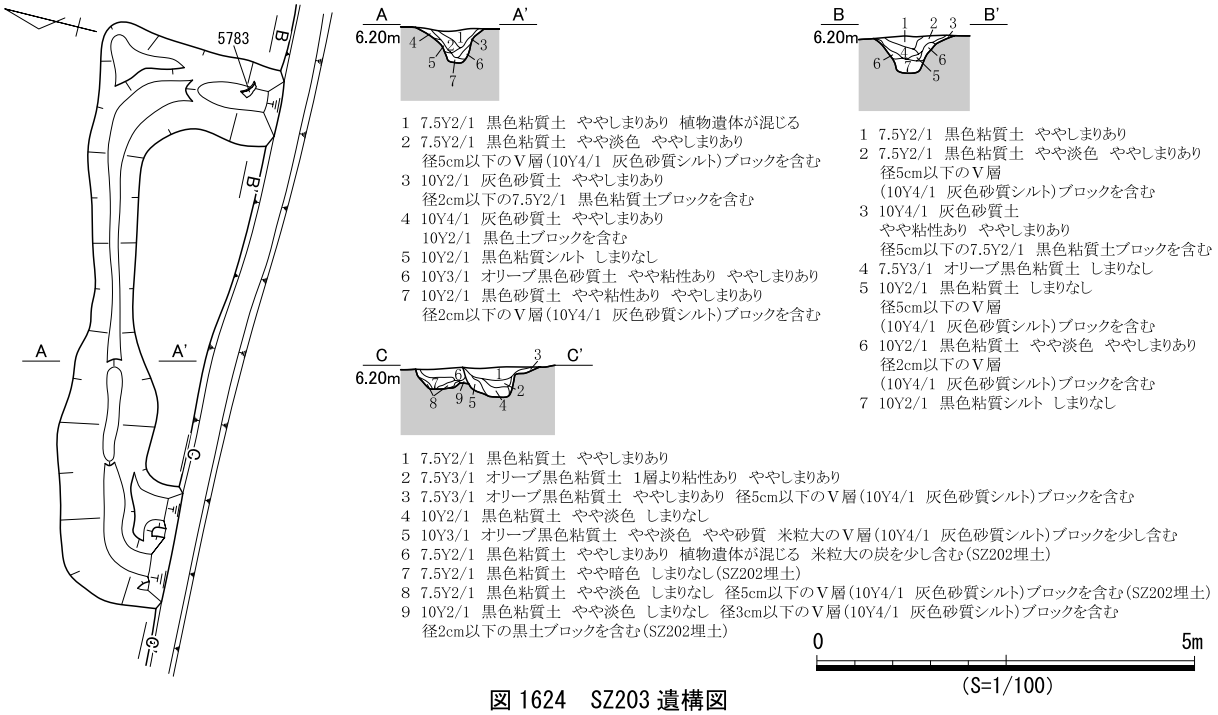


図 1624　SZ203 遺構図

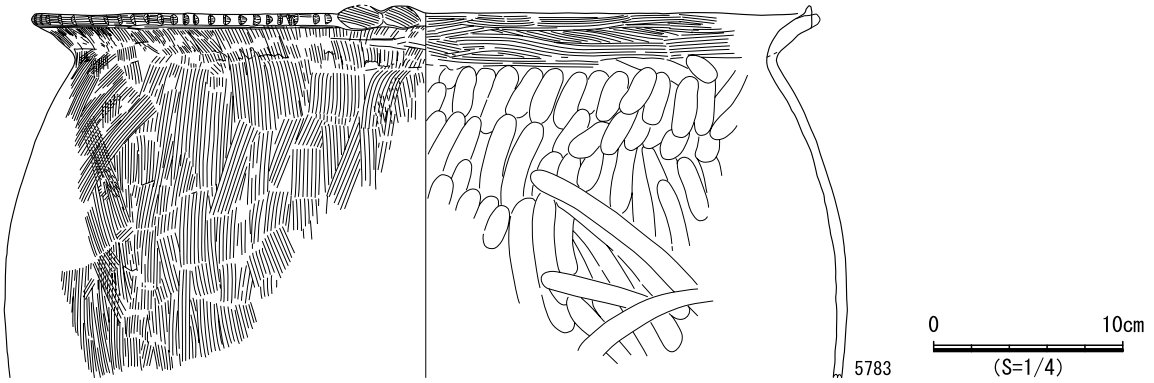


図 1625　SZ203 遺物実測図

SZ204（遺構：図 1626、遺物：図 1627）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置し、北溝はSB552とSD1252に切られる。平面形は比較的明瞭であったが、北溝付近は遺構の重複があり、やや不明瞭であった。周溝は南西隅で途切れている。

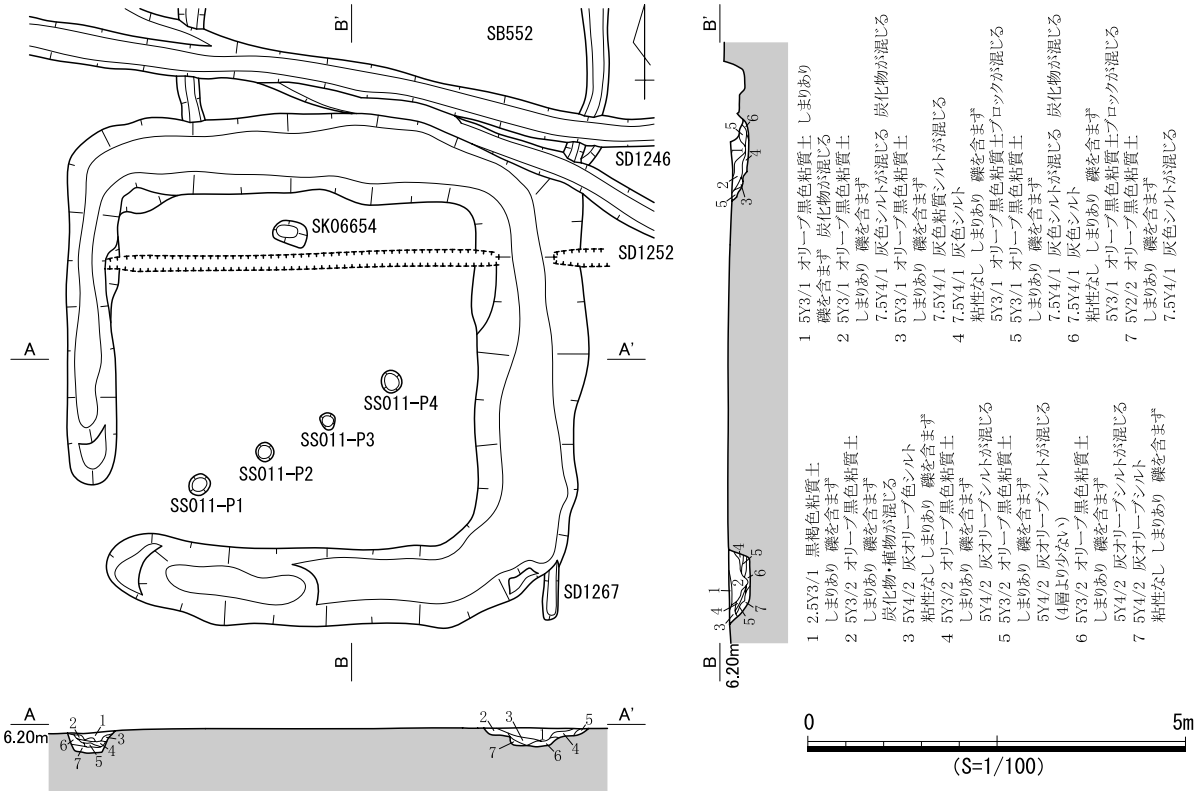
方台部　方台部の各辺はおよそ直線的で、その規模は東西長約5.3ｍ～5.5ｍ、南北長約5.0ｍ～5.2ｍ

で、東西にやや長いものの、ほぼ正方形を呈する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～1.5ｍ、深さ約0.1ｍ～0.3ｍであり、南西隅が途切れる。各辺の溝は直線的にのびており、西溝が最も狭く、東溝が最も広い。また、深さは南溝西寄りが最も深く、北東隅と南東隅は辺部の周溝よりも浅い。溝の断面形は、北溝と東溝が底面から壁面にかけて丸みを帯びるのに対し、西溝と南溝は逆台形状を呈する。埋土は７層に分層した。いずれの溝も下層は細かく分層ができ、壁面等の崩落が頻繁に繰り返されたと考える。また、上層は炭化物や植物が含まれることから、本遺構の周溝は自然堆積の可能性が高い。なお、北溝上層では検出面から10㎝程掘削してから土器が出土したが、SB552に伴う遺物である可能性が高い。

遺物出土状況　埋土から土器175点が出土した。土器の多くは上層から出土したⅤ期～Ⅵ期のものであり、Ⅳ期の壺Ａ類（5784）も出土した。

出土遺物　5784はⅣ期壺Ａ類。口縁部が袋状に内湾し、端部外面には刺突文を施す。頸部付近には２条の凹線が認められる。5785はⅥ期～Ⅶ期鉢Ａ4b類。口縁部が短く外反して端部がわずかに内湾し、端部を丸くおさめる。最大径が胴部中央よりやや上方に位置し、肩部が強く張る。底部は矯小で、平底である。5786はⅤ期高坏Ｂ4類。坏底部から口縁部が大きく外反する。屈曲部外面の稜は認められ



1 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず 炭化物あり
Ⅴ層(10Y4/1 灰色砂質シルト)ブロックが混じる
5Y4/2 灰オリーブ色シルトブロックが混じる
2 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
5Y4/2 灰オリーブ色シルト 1層より多く混じる
3 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
5Y2/2 オリーブ黒色粘質土が混じる
4 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 しまりあり 礫を含まず
5Y4/2 灰オリーブ色シルトをわずかに含む
5 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
5Y4/2 灰オリーブ色シルトが混じる
6 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
7 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 粘性なし しまりあり 礫を含まず
5Y2/2 オリーブ黒色粘質土が混じる

1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
炭化物が混じる
2 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる
3 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる (2層より少ない)
4 7.5Y4/1 灰色シルト粘性なし しまりあり 礫を含まず
5Y2/2 オリーブ黒色粘質土が混じる
5 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトが混じる
6 5層と同じ
7 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 しまりあり 礫を含まず
7.5Y4/1 灰色シルトブロックが混じる

図 1626　SZ204 遺構図

るが、屈曲そのものは形骸化する。口縁部外面と屈曲部外面にヨコミガキが施される。5787はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根からわずかに円錐状に開き、裾部が強く外反する。透孔が３方向に配置され、脚部の下方に位置する。

時期　出土遺物の時期と遺構周辺の状況から、Ⅳ期と考えられる。

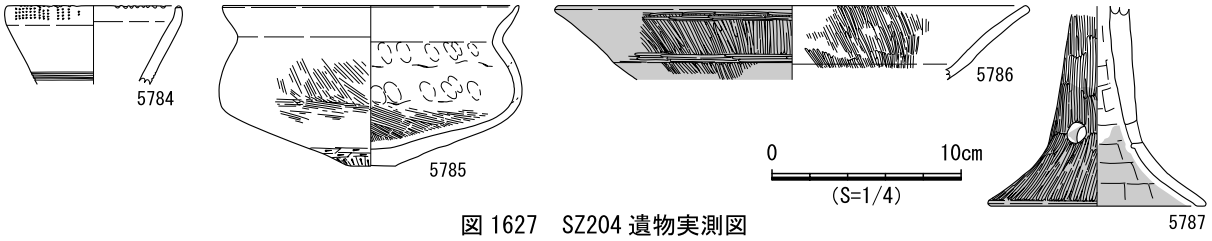


図 1627　SZ204 遺物実測図

SZ205（遺構：図 1628）

検出状況　東部中央南寄りに位置する。東側は調査区外にのび、北側でSD1194やSK06368に切られる。検出面はⅤ層上面であり、平面形は明瞭であった。

方台部　大半が調査区域外にあるため、規模や形状は不明である。西辺はやや蛇行しており、隅部は丸みを帯びている。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ、深さ約0.2ｍ～0.3ｍである。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は方台部側が急で、その反対側はやや緩やかである。周溝底面は隅部が他と比べてやや高い。埋土は５層～６層に分層した。壁面沿いにはブロック土を含む崩落土が堆積しているが、その上部にもブロック土の混入が認められる。

遺物出土状況　周溝から土器２点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物からは言及できないものの、周辺の方形周溝墓がⅢ期～Ⅳ期に属することから、本遺構もほぼ同時期と考えられる。

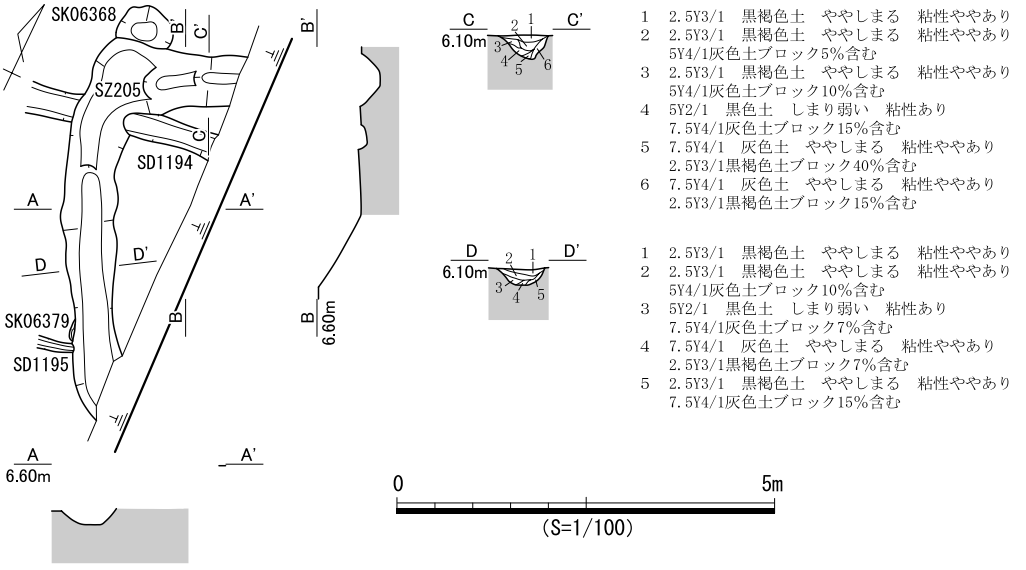


図 1628　SZ205 遺構図

SZ206（遺構：図 1629、遺物：図 1630）

検出状況　東部中央南寄りに位置する。北側に東西方向の溝、南側に逆Ｌ字状に屈曲する溝を検出し、その対応関係や埋土の状態から、北東隅部が途切れる方形周溝墓と判断した。大半は調査区域外にのび、南東隅部でSZ207に切られる。Ｖ層上面での検出であり、遺構埋土とＶ層との識別は容易であったが、遺構の輪郭は漸移的であった。

方台部　北辺と東辺が直線的にのび、隅部がほぼ直角に屈曲することから、全形は方形を呈すると考えられる。規模は不明であるが、南東隅部が調査区内で屈曲していることから、南北長約５ｍと考えられる。方台部の東寄りにて、東溝と平行する土坑を検出した。長さ3.66ｍ、幅1.00ｍであり、平面形は隅丸方形あるいは長楕円形を呈する。深さは0.28ｍであり、底面中央は舟底状に緩やかに窪み、南北両側に平坦面を有するが、東西壁面の傾斜はほぼ垂直である。埋土は６層に分層し、全体的にブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。供献土器は出土していないものの、平面形や断面形から主体部の可能性がある。なお、墳丘は確認できなかった。

周溝　北溝は幅約1.0ｍ、深さ約0.2ｍで、底面は西側が深い。東溝から南溝にかけては幅約1.0ｍ～1.5ｍと北溝より広いものの、深さは約0.2ｍと浅く、壁面の傾斜は緩やかである。埋土は２層～５層に分層し、いずれの溝もブロック土の混入が顕著である。南東隅部は周溝が途切れておらず、底面標高も隅部以外とほぼ同じである。

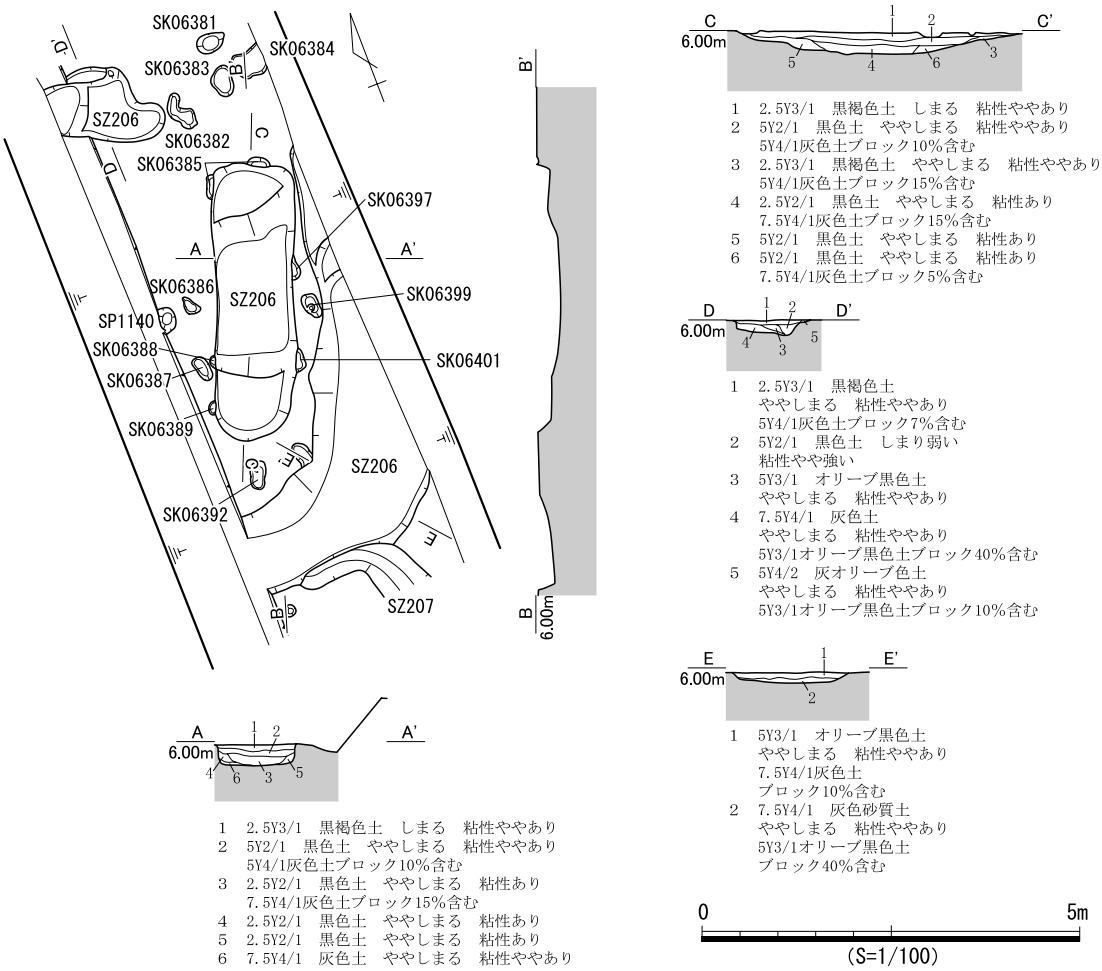


図 1629　SZ206 遺構図

遺物出土状況　北溝から土器28点、東溝・南溝から土器22点、主体部から土器10点が出土した。土器は細片が多いものの、北溝からⅢ－２期の壺Ａ類（5788）が出土しており、時期決定資料と判断した。なお、南溝からⅤ期の鉢（5789）が出土しており、埋没時期を示す可能性がある。

出土遺物　5788はⅢ－２期壺Ａ類。胴部上半に櫛描直線文が４帯認められ、その上下端には細い沈線が加えられる。直線文上には複合クシによると考えられる弧線文が６～８箇所に施文される。胴部下半は無文でハケ調整が施され、底部はやや突出する。文様の一部に乱れがあるものの、器壁も薄く黒色で堅緻に焼成された資料で、内面には部分的にはケズリが認められる。5789はⅤ期鉢。平底の底部から開いて立ち上がり、最大径部が強く張り出す。胴部上半は欠損するため、全形は不明である。

時期　Ⅲ－２期～Ⅳ期のSZ207に切られることと、北溝出土遺物の時期から、Ⅲ－２期と考えられる。

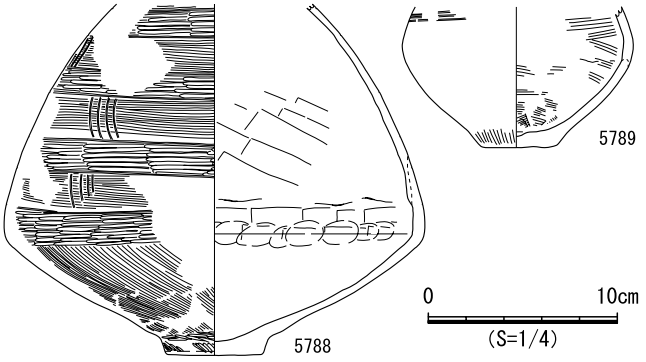


図 1630　SZ206 遺物実測図

SZ207（遺構：図 1631）

検出状況　東部中央南寄りに位置する。西側は調査区域外にのび、北側でSZ206を切り、東溝がSD1196とSZ208に切られる。平面形は明瞭であったが、遺構の重複関係はやや不明瞭であった。規模は小さいものの、溝が方形に巡り、SZ208に切られることから、小型の方形周溝墓と判断した。

方台部　西側は調査区域外にのびるものの、南北長約3.5ｍの方形を呈すると考えられる。各辺とも直線的にのび、北東隅部はほぼ直角に屈曲し、南東隅部はSZ208に切られて不明である。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　北溝は調査区域内で収束しており、南東隅部はSZ208に切られている。東溝は幅約0.8ｍ、南北溝は幅約0.5ｍ～0.6ｍであり、東溝がやや広い。深さは東溝と北溝が約0.2ｍで断面形がＶ字状を呈す

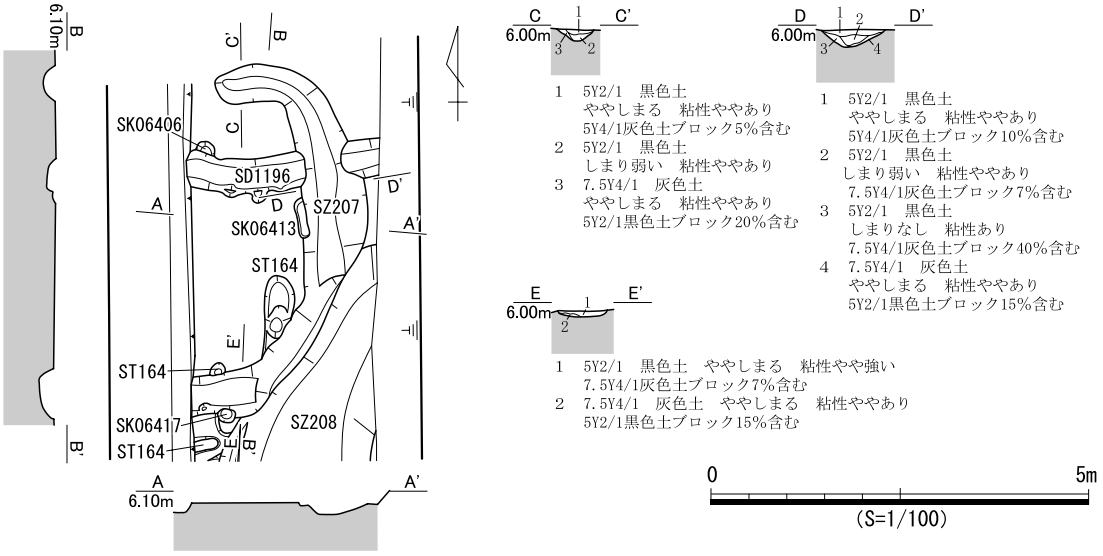


図 1631　SZ207 遺構図

るのに対し、南溝が0.1ｍ未満で底面は平坦である。埋土は２層～４層に分層した。いずれの土層でも、壁面から底面にかけてブロック土が混入する崩落土と考えられる土が堆積している。

遺物出土状況　周溝から土器11点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

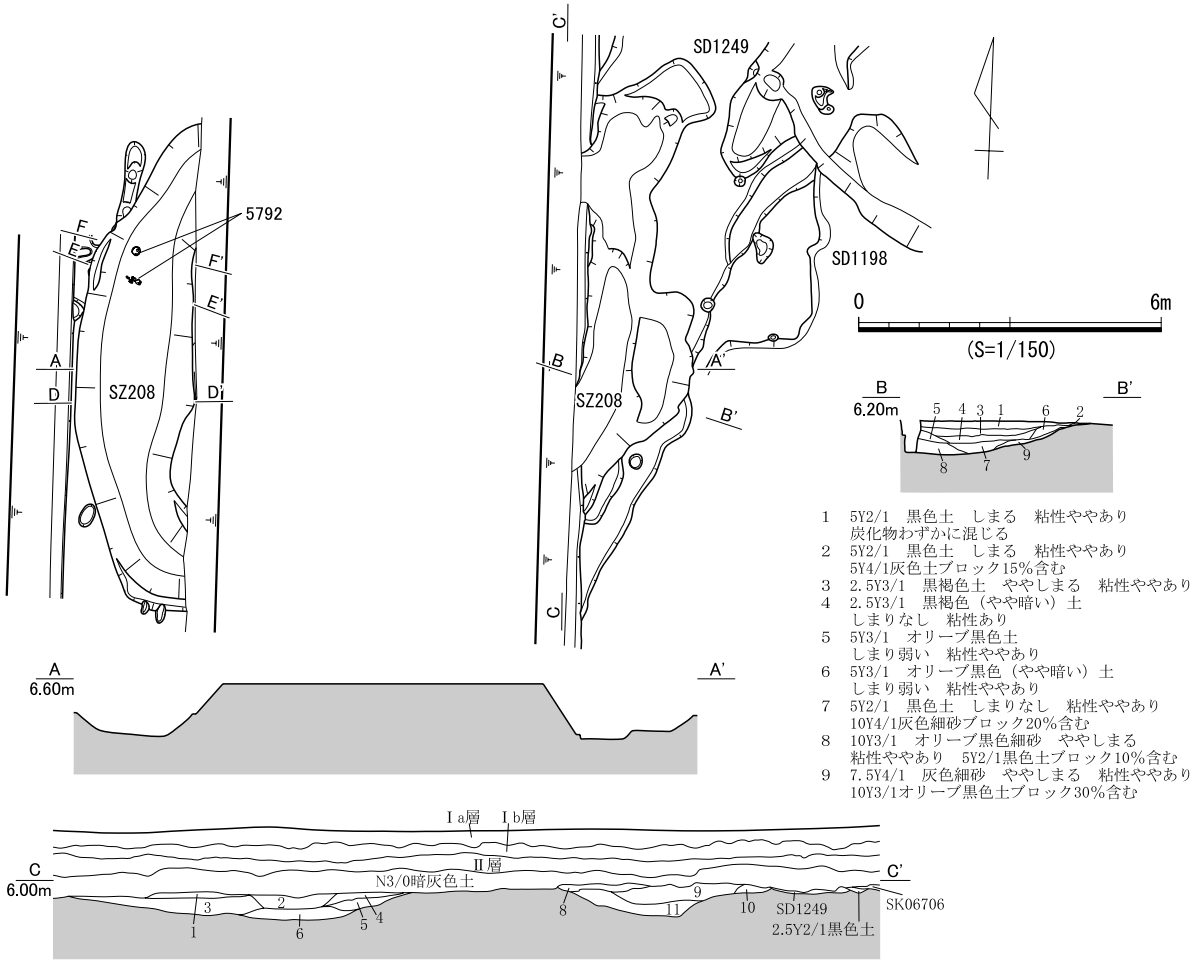
時期　出土遺物から時期を言及できないが、Ⅳ期のSZ208に切られ、Ⅲ－２期のSZ206を切ることから、Ⅲ－２期～Ⅳ期と考えられる。

SZ208（遺構：図1632・1633、遺物：図1634）

検出状況　東部中央から東側の南寄りに位置する。東溝はSD1249掘削後に検出し、西溝は東溝に比べて平面形が明瞭であった。中央部分は調査区域外となり全容は不明であるが、平面的な位置関係から同一の方形周溝墓の周溝と判断した。

方台部　大半が調査区域外となり、全容は不明である。

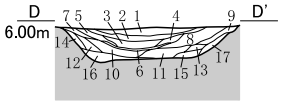
周溝　東溝は上部が削平されているが、残存幅は約2.2ｍ、深さは約0.4ｍあった。底面は丸みを帯び、



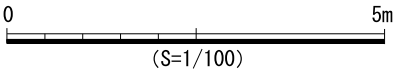
1　5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり
炭化物わずかに混じる
2　5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり
5Y4/1灰色土ブロック15%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
4　2.5Y3/1　黒褐色（やや暗い）土
しまりなし　粘性あり
5　5Y3/1　オリーブ黒色土
しまり弱い　粘性ややあり
6　5Y3/1　オリーブ黒色（やや暗い）土
しまり弱い　粘性ややあり
7　5Y2/1　黒色土　しまりなし　粘性ややあり
10Y4/1灰色細砂ブロック20%含む
8　10Y3/1　オリーブ黒色細砂　ややしまる
粘性ややあり　5Y2/1黒色土ブロック10%含む
9　7.5Y4/1　灰色細砂　ややしまる　粘性ややあり
10Y3/1オリーブ黒色土ブロック30%含む

1　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性あり
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック30%含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
8　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
9　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
10　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック25%含む
11　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性あり　7.5Y4/1灰色砂質土ブロック30%含む

図1632　SZ208遺構図（１）



1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　径5mm以下の炭化物1%含む
2　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　径3mm以下の炭化物1%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色（やや暗い）土　しまり弱い　粘性ややあり
　2.5Y2/1黒色土が帯状に15%混じる
4　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性あり　径1cm以下の炭化物1%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性ややあり　径1cm以下の炭化物2%含む
6　2.5Y2/1　黒色土　しまりなし　粘性あり　炭化物が層全体に帯状に混じる
7　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　炭化物わずかに混じる
9　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック40%含む
10　7.5Y2/1　黒色土　しまりなし　粘性あり
11　5Y3/1　オリーブ黒色（やや暗い）土　しまり弱い　粘性ややあり
　7.5Y3/1オリーブ黒色シルトブロック10%含む
12　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
13　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性ややあり
14　7.5Y4/1　灰色シルト　しまりなし　粘性なし
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック30%含む
15　7.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　7.5Y4/1灰色砂質土が縞状に20%混じる
16　10Y4/1　灰色細砂　ややしまる　粘性なし　5Y2/1黒色土ブロック25%含む
17　10Y4/1　灰色シルト　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック7%含む



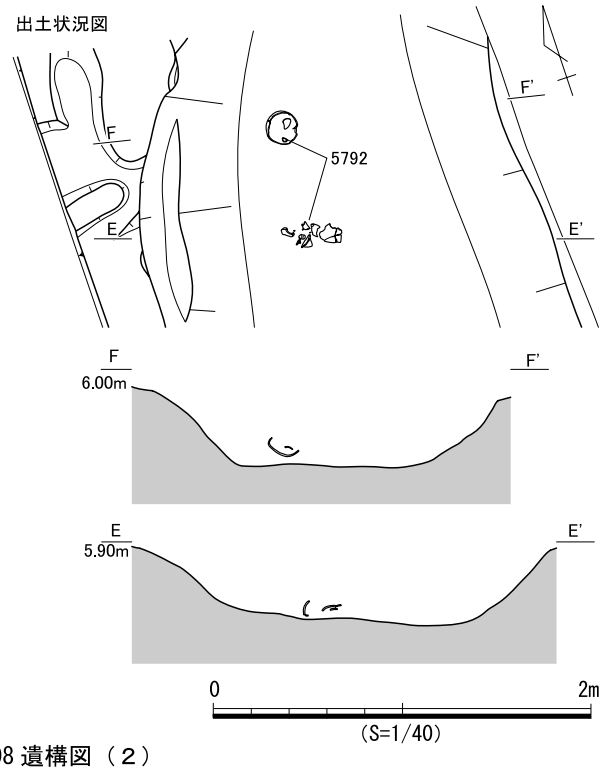


図 1633　SZ208 遺構図（２）

壁面の傾斜は緩やかである。西溝は幅約2.3ｍ、深さ約0.4ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は方台側が外側に比べて緩やかである。埋土はいずれも底面から壁面にかけてブロック土が混入する崩落土が堆積し、その上部には水平もしくは中央が窪む堆積が認められる。これらのことから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　西溝から土器236点、木製品１点、東溝から土器10点が出土した。出土土器はⅣ期に属するものが多く、東溝では底面付近で底部から胴部まで残存しているⅣ期壺（5792）が斜位で出土した。

出土遺物　5790はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して直立して端部に平坦面をもち、外面には凹線が認められる。5791、5792はⅣ期壺A2類。5791は口径が大きく、口縁部が袋状を呈する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には凹線６条が認められ、その直下に刺突文帯を加える。5792は小型品で、頸部以上を欠損する。頸部文様は器面の摩耗によって不明瞭となるが、頸部下方から胴部にかけては直線文が施文される。その下方に振り幅の小さい波状文帯を加え、さらに直線文帯を施文して肩部にいたる。文様は３条１組×３帯の複合クシによると考えられる。最大径は胴部中央肩部に位置して強く張り、典型的な算盤玉状を呈する。

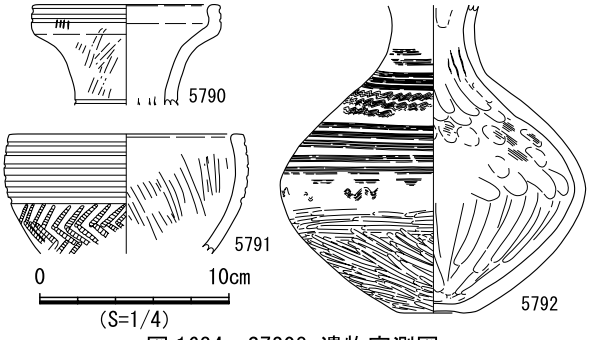


図 1634　SZ208 遺物実測図

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ209（遺構：図 1635）

検出状況　東部中央南寄りに位置する。北溝はSZ208に切られ平面形は不明瞭であったが、南溝は比較的明瞭であった。南溝がＬ字状に屈曲し、北溝とあわせて一つの方形周溝墓と判断した。

方台部　東側は調査区域外にあるが、ほぼ南北方向に主軸をもつ方形周溝墓である。その規模は方台部の西端で南北約4.5ｍ、調査区東端で南北約5.8ｍであり、方台部中央付近の幅が広い。南辺は直線的にのびているが、西辺はやや蛇行しており、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　北溝中央がSZ208に切られているものの、調査区内で途切れている箇所はない。北溝は幅約0.6ｍ、南溝は幅約1.0ｍであり、南溝がやや広い。深さは0.1ｍ～0.2ｍであるが、北溝は底面が平坦で壁面の傾斜が急であるのに対し、南溝は底面が丸みを帯び壁面の傾斜が緩やかである。また、南溝の底面標高は東側が西側よりもわずかに深い。埋土は３層～４層に分層した。いずれの土層でも、壁面から底面にかけてブロック土が混入する崩落土と考えられる土が堆積しているが、最上層ではブロック土の混入が認められないことから、自然堆積の可能性がある。

遺物出土状況　北溝から土器が９点出土したものの、南溝からは出土しなかった。土器はいずれも細片であり、図示していない。

時期　出土遺物から時期を言及できないが、Ⅳ期のSZ208に切られることから、それ以前と考えられる。

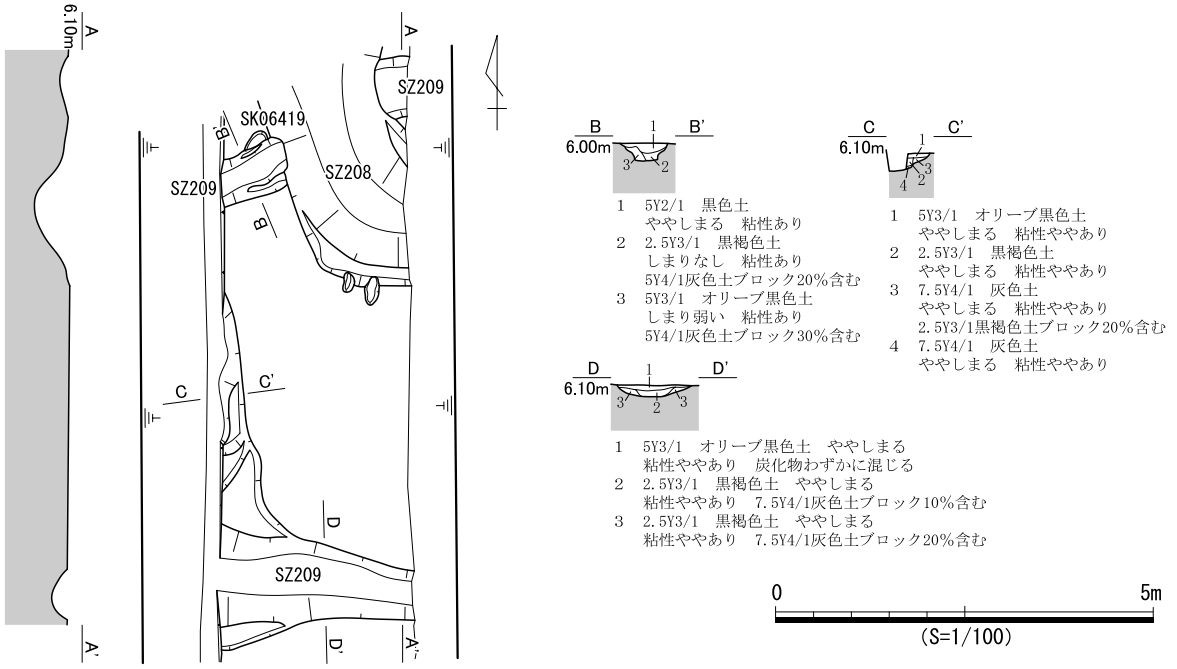


図 1635　SZ209 遺構図

SZ210（遺構：図 1636）

検出状況　東部中央南寄りに位置する。遺構の大半は調査区域外にあり、東溝のわずかな範囲を検出した。平面形は明瞭であり、遺構の平・断面形状から方形周溝墓と判断した。

方台部　方台部は調査区域外にあり、規模や形状等は不明である。

周溝　東溝の東半分のみの検出であり、断面形から調査区壁面付近が最深部と考えられる。深さは約0.4ｍであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的緩やかである。埋土は６層に分層した。壁面

から底面にかけてブロック土が混入する崩落土と考えられる土が堆積しており、上層（１・２層）はブロック土の混入が認められず、中央が緩やかに窪む堆積であることから、自然堆積の可能性がある。

遺物出土状況　周溝から土器４点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物から時期を言及できないが、本遺構付近にはⅢ期～Ⅳ期の方形周溝墓が分布していることから、本遺構もⅢ期～Ⅳ期頃と考える。

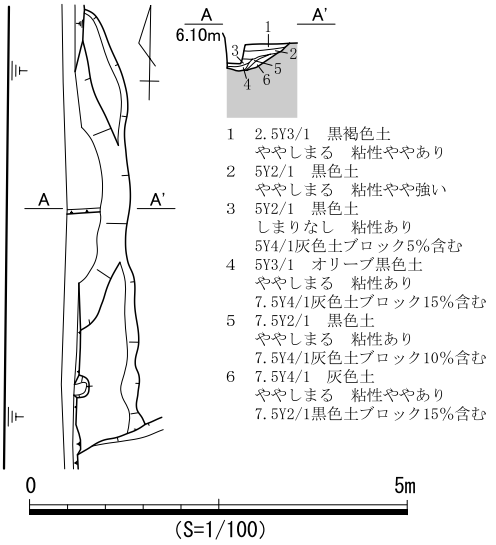


図 1636　SZ210 遺構図

SZ211（遺構：図 1637、遺物：図 1638）

検出状況　東部東側南寄りに位置する。SD1252 と SK06803 に切られるが、平面形は明瞭であった。検出当初は竪穴住居跡の可能性も想定していたが、溝の平断面の形状や出土遺物から方形周溝墓と判断した。

方台部　長軸長、短軸長ともに約 3.5 ｍの不整方形を呈する。北西辺と南東辺はほぼ直線的であるが、北東辺はやや蛇行している。また、東隅部は角を有するが北隅部と西隅部は丸みを帯びており、南隅部は周溝が途切れている。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　南隅部は幅約 1.5 ｍの陸橋部となり、北隅部は溝幅が約 0.25 ｍと極端に狭く、浅い。隅部以外の幅は約 0.6 ｍ～ 1.1 ｍであり、全体的にはＬ字形の溝が対に配置されたような状況である。深さ

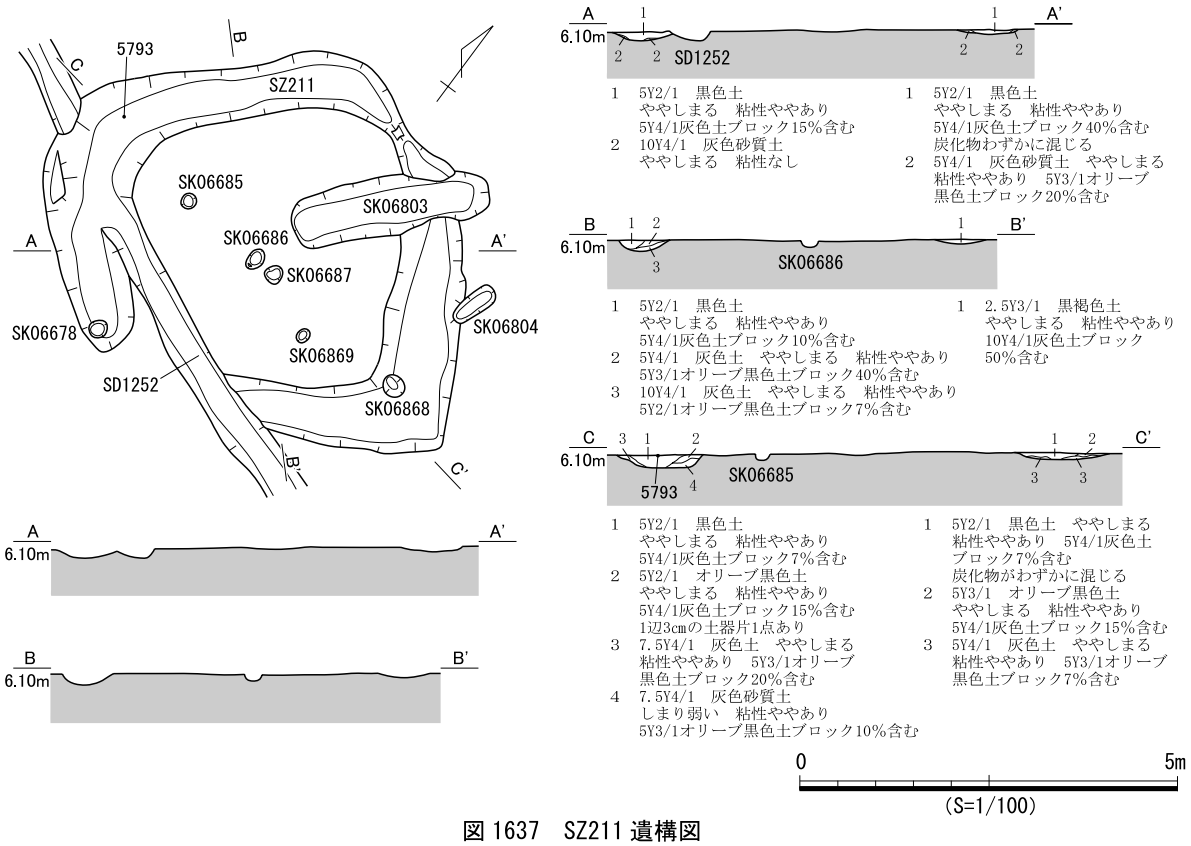


図 1637　SZ211 遺構図

は0.1ｍ～0.2ｍであり、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜も緩やかである。埋土は単層から４層に分層し、いずれの箇所でもブロック土が混入している。

遺物出土状況　埋土中から土器124点、木製品１点が出土した。出土土器の多くはⅣ期～Ⅶ期に属し、周溝西隅周辺から多く出土した。

出土遺物　5793はⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部がわずかに内湾して平坦面を形成する。

時期　供献土器が出土していないため不明であるが、Ⅵ期～Ⅶ期に属するSD1252に切られることと、周辺の方形周溝墓がⅣ期に属し、本遺構からもⅣ期の土器片が出土していることから、Ⅳ期と考えられる。

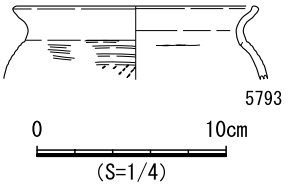


図 1638　SZ211 遺物実測図

SZ212（遺構：図 1639～1641、遺物：図 1642）

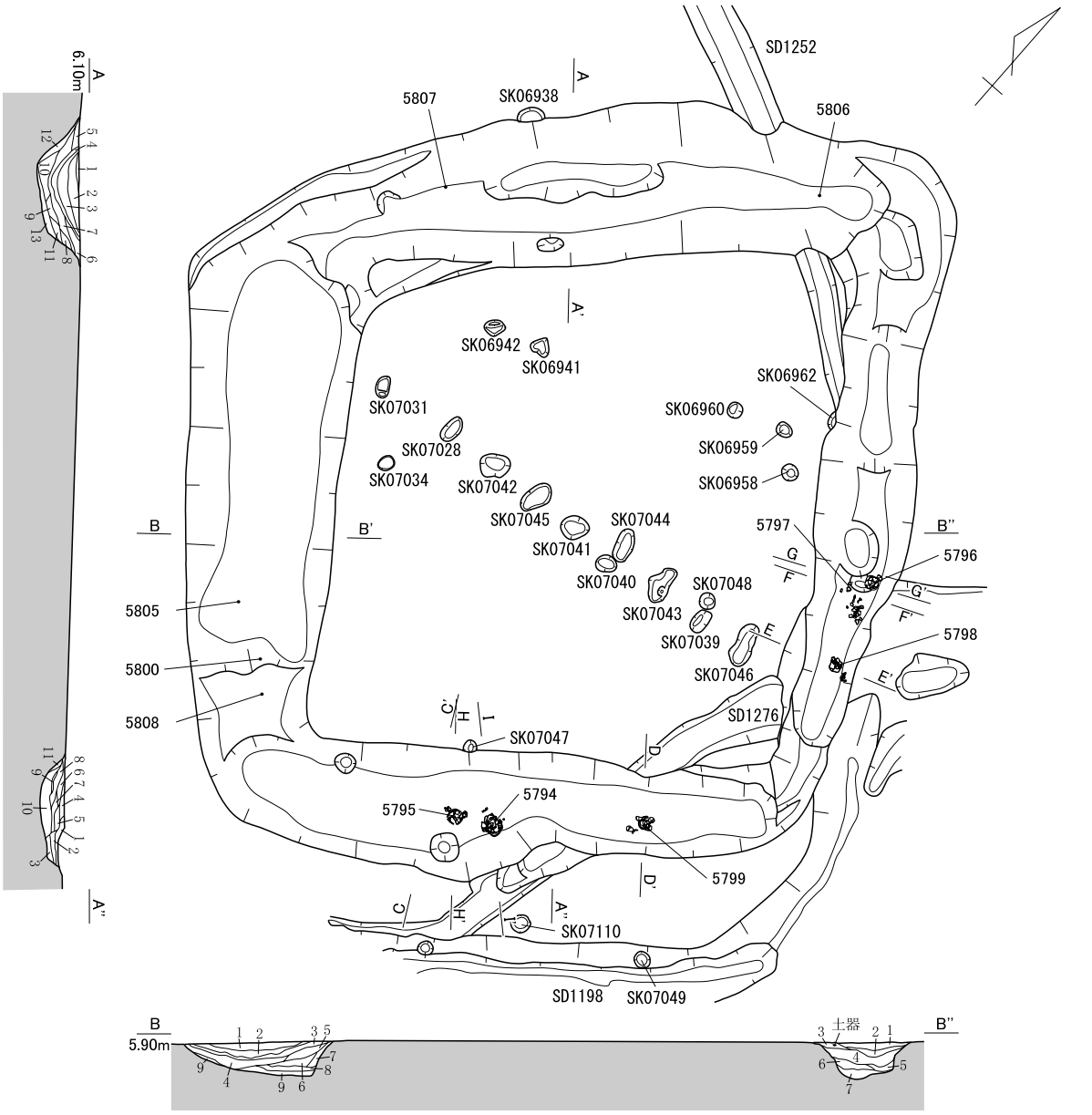
検出状況　東部東側南寄りに位置する。Ｖ層表出面で検出し、SD1252やSD1276に切られる。周溝は全周しており、その平面形は明瞭であった。

方台部　規模は北西－南東長約7.1ｍ、北東－南西長約6.8ｍであり、全体としては不整方形を呈する。北東辺はやや蛇行しているが他は直線的であり、隅部は丸みを帯びている。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.5ｍ～2.2ｍで、北西溝、南西溝が北東溝、南東溝よりも広い。深さは約0.3ｍ～0.6ｍで、南東溝が他より約0.15ｍ浅い。底面は北、東、南隅部が浅く、検出面から約0.25ｍ掘削するとＶ層が表出した。底面は緩やかに丸みを帯びているが、東溝はやや凹凸がある。壁面の傾斜は北西溝と南西溝は方台部側が急であり、その反対側はやや緩やかである。また、北東溝は崩落によるためか、壁面の上方が外側に開いている。埋土は最大13層に分層した。どの周溝でも下層には壁面崩落土と考えられるブロック土が混入する土が堆積しており、北西溝や南西溝では再掘削の可能性が考えられる堆積が認められた。

遺物出土状況　埋土中から土器1,043点、石器類７点、木製品26点が出土した。各辺の溝埋土から土器が出土しており、その多くはⅣ期に属する。特に北東溝と南東溝で遺存状況のよい土器が出土し、供献土器と考えられる。南東溝の中央東側ではⅣ期の壺Ａ類（5799）が埋土上層にて口縁部を北にむけて横位で出土した。また中央西側では同じくⅣ期の壺Ａ類（5794、5795）が溝の底面付近にて横位で出土し、5795は口縁部を北にむけて出土した。北東溝の南側では、同じくⅣ期の壺Ａ類（5796～5798）が埋土上層から出土した。このうち、5796はほぼ完形の状態で出土し、口縁部を北にむけて横位で出土した。なお、南西溝では検出面から約0.5ｍ下で磨製石斧（5805）が出土した。

出土遺物　5794～5798はⅣ期壺A1類。口縁部が短く直立して、２条の凹線が認められる。5794は5795、5796と比べて頸部が細身でやや長い。胴部はなかだらかに膨らむ。5795は胴部全面に細かなハケが残るが、ハケ以前のタタキも認められる。5796の胴部は算盤玉状で、頸胴部境に沈線が４条認められる。胴部上半はハケが密に残り、わずかにハケ以前の右下がりのタタキが認められる。5798の胴部上半は磨耗が著しく調整などの観察はできなかった。形状は5796と酷似する。5799はⅣ期壺A2類。口縁部が袋状口縁を呈し、凹線が５条認められる。頸部が細身で胴部は算盤玉状であるが、5796と比べると底部が大きい。頸部以下に直線文と波状文を交互に施文する。5800はⅣ期壺の胴部。大型



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
粘性ややあり　径2mm以下の炭化物1%含む
2　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
径5mm以下の炭化物1%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる
粘性ややあり　径3mm以下の炭化物1%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性あり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
5Y4/1灰色土ブロック7%含む
6　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性あり
7.5Y4/1灰色砂質土ブロック25%含む
7　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性あり
7.5Y4/1灰色砂質土ブロック30%含む
8　10Y4/1　灰色砂質土　ややしまる　粘性ややあり
5Y3/1オリーブ黒色土ブロック40%含む
9　10Y4/1　灰色砂質土　ややしまる　粘性あり
5Y3/1オリーブ黒色土ブロック20%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
鉄分沈着多い　炭化物わずかに混じる
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
5Y3/1オリーブ黒色土ブロック20%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い
粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
5　10Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性あり
10Y4/1灰色土ブロックが大きく30%混じる
6　10Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い
粘性あり　10Y4/1灰色土ブロック20%含む
7　10Y3/1　オリーブ黒色砂質土　しまり弱い　粘性ややあり
10Y4/1灰色土ブロックと5Y3/1オリーブ黒色土ブロックが
マーブル状に30%混じる

遺物ドット図

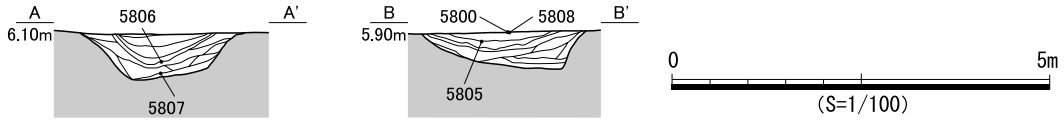
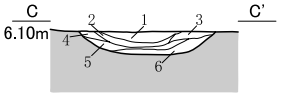


図 1639　SZ212 遺構図（１）

A-A” 北西溝
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あまりなし　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径8mm以下の炭化物1%含む
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　7.5Y灰色土ブロック5%含む　径5mm以下の炭化物2%含む
4　2.5Y3/1　黒色（さらに黒い）土　しまりなし　粘性あり　径5mm以下の炭化物2%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径5mm以下の炭化物1%含む
6　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径5mm以下の炭化物2%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
8　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
9　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む
10　5Y2/1　黒色土　しまりなし　粘性あり
11　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
12　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック40%含む
13　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　5Y4/1灰色土がマーブル状に30%混じる

A-A” 南東溝
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　1よりしまる　粘性ややあり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径5mm以下の炭化物2%含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5Y4/1灰色土ブロック10%含む
8　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5Y4/2灰オリーブ色土ブロック15%含む
9　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
10　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色粘質土ブロック40%含む
11　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック10%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物わずかに混じる
2　2.5Y2/1　黒色（さらに暗い）土　ややしまる　粘性あり　炭化物わずかに混じる
3　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　径3mm以下の炭化物2%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　径3mm以下の炭化物1%含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性あり
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1灰色砂質土ブロック20%含む

0　5m
(S=1/100)

出土状況図

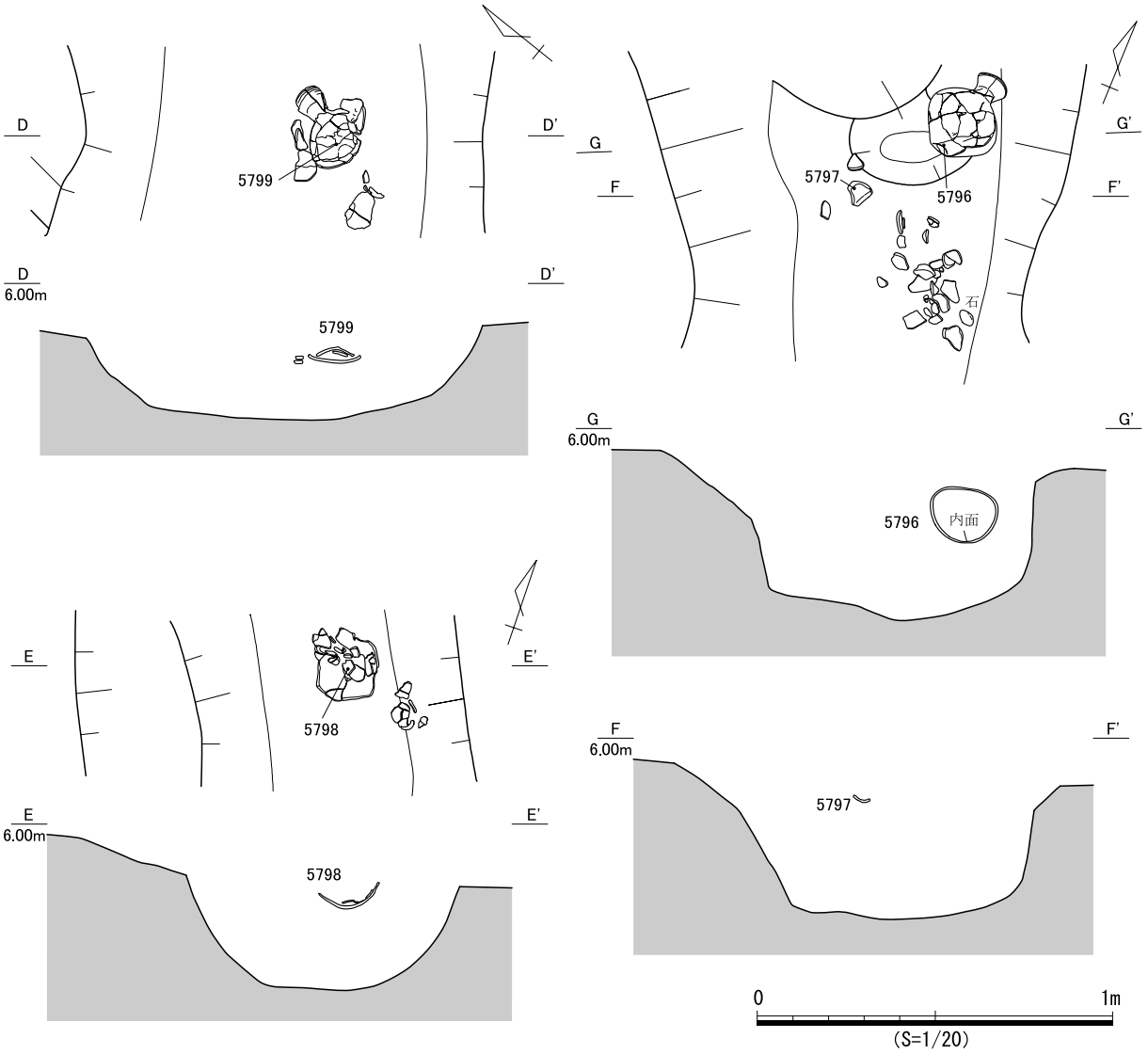


図 1640　SZ212 遺構図（２）

品で直線文と波状文が認められる。5801はⅣ期甕A2類。口縁部が短くくの字に屈折し、端部は平坦である。端部にタタキが認められる。胴部の膨らみは強く、刺突文が認められる。5802はⅥ期高坏F類。口縁部が外反する。5803はⅧ期高坏。口縁部が坏底部から弱く屈折して立ち上がり、付根が細い。5804はⅨ期高坏。口縁部が坏底部から直線的に外傾する。5805はハイアロクラスタイト製の磨製石斧。両側縁がほぼ平行し、上方は丸みを帯びている、刃部は直線的で、一方向から斜めに作出されている。5806は叩石。扁平な亜円礫の頂点や側面を使用して敲打している。5807は砥石。表面や側面は節理に沿って平坦に割れており、その面を砥面として利用している。5808は柱材。芯去材で、上下端部は欠損している。

時期　供献土器の時期から、Ⅳ期と考えられる。

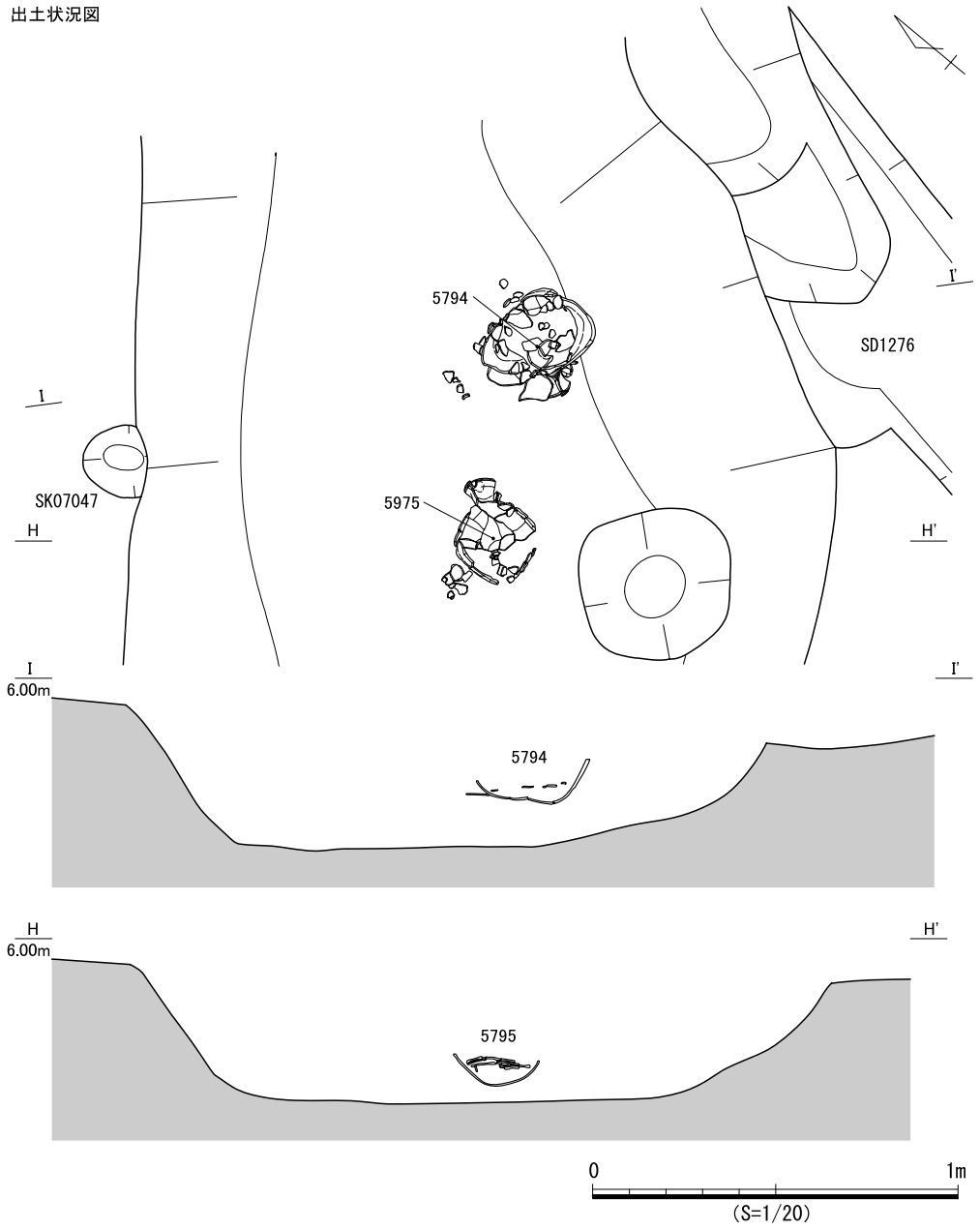


図 1641　SZ212 遺構図（３）

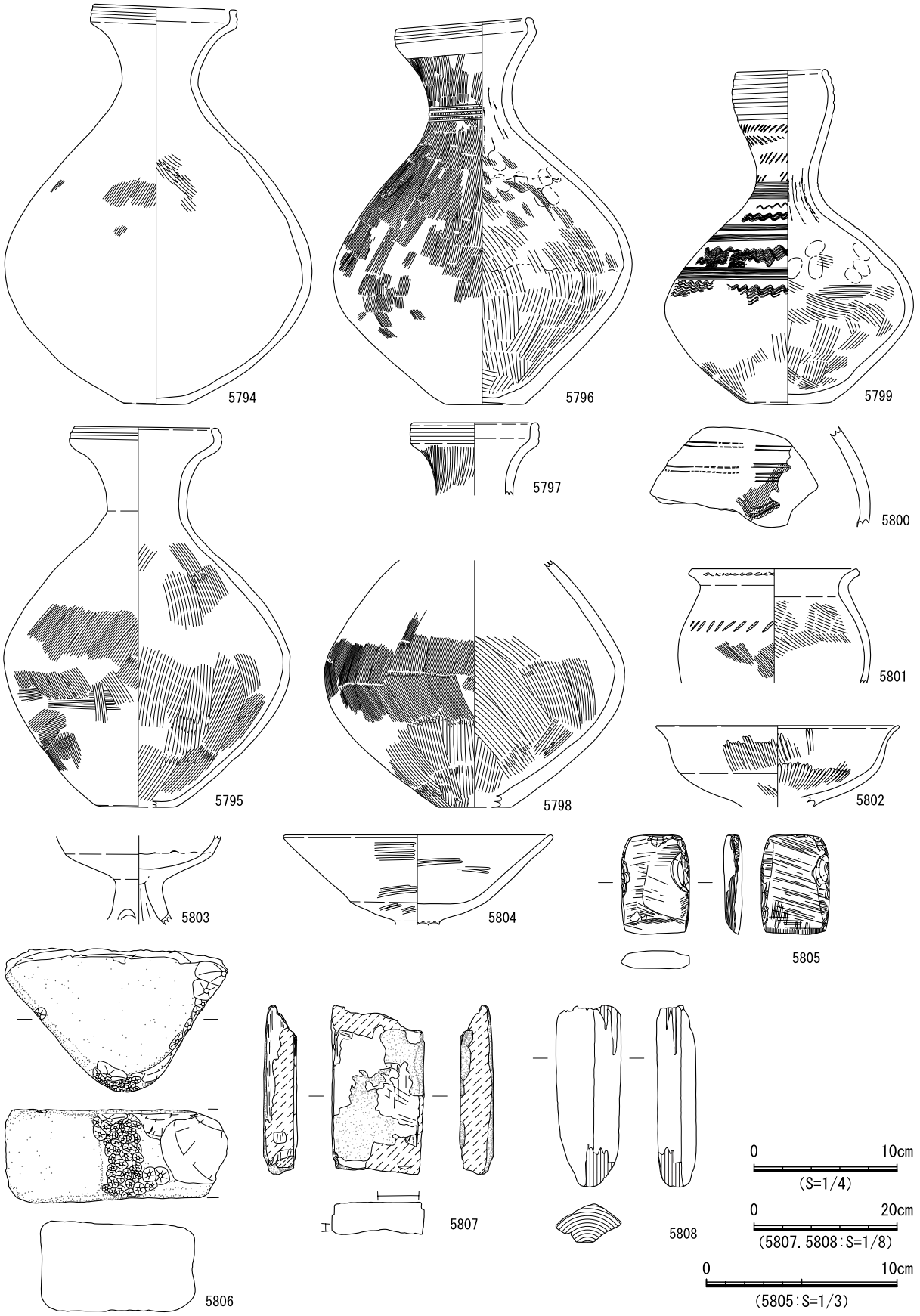


図 1642　SZ212 遺物実測図

SZ213（遺構：図1643、遺物：図1644）

検出状況　東部東側南寄りに位置し、北西溝はSD1284に切られる。本遺構周辺は湧水が著しく、平面形は不明瞭であった。

方台部　南西辺はやや蛇行するが、北東辺は直線的にのびており、北隅部がほぼ直角に屈曲することから、全体としては方形を呈すると考えられる。東西長は約7.5ｍである。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

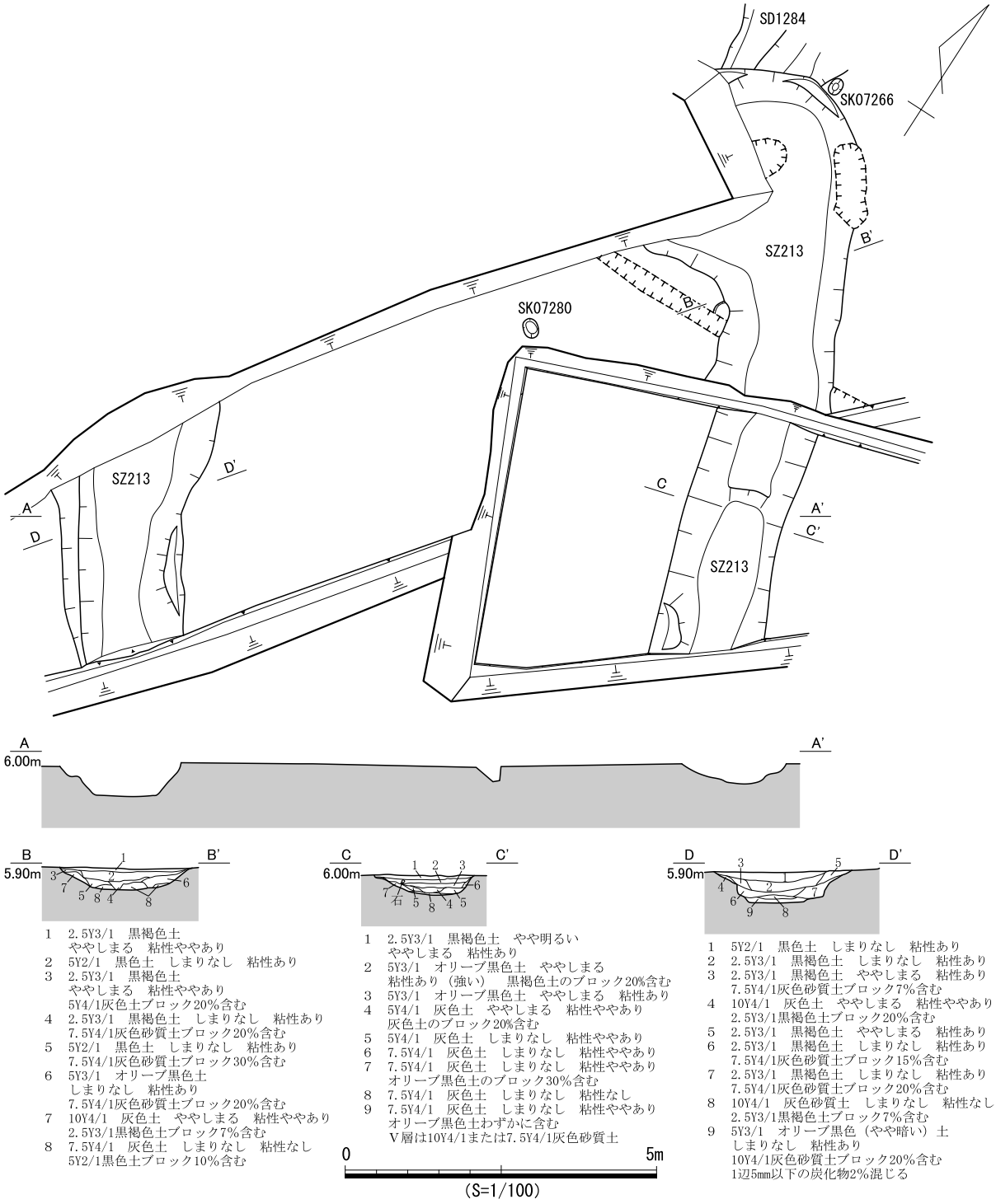


図1643　SZ213遺構図

周溝　南西溝の幅は南端で約1.7ｍ、北端で約2.5ｍであり、北側がやや広がっている。深さは約0.5ｍで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は急で、上方が外側に大きく開く。北東溝の幅は約1.8ｍであり、北隅部はやや幅が広い。深さは約0.3ｍであり、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜は墳丘側がやや緩く、その反対側が急である。埋土は８層～９層に分層した。壁面及び埋土中程から底面にかけて、壁面崩落土と考えられるブロック土を含む土が堆積している。また、その上部には水平もしくは中央が窪む堆積が認められることから、自然堆積と考えられる。なお、底面は東溝の南側が深く、北東隅部は辺部とほぼ同じ高さである。

遺物出土状況　西溝から土器２点、東溝から土器177点、石器類１点、木製品２点が出土した。出土土器はⅣ期とⅥ期～Ⅶ期に属し、東溝からの出土が多い。

出土遺物　5809はⅣ期甕A3類。口縁部が強く外反し、端部が屈曲してほぼ直立する。端部外面には凹線が２条認められる。頸部直下から胴部にかけて、刺突文が３帯認められる。5810はⅣ期甕A1類。口縁部が外反し、端部に面を有する。5811は砥石。亜円礫の自然面を砥面として利用し、側面に敲打痕が残る。

時期　供献土器が出土していないため不明であるが、周辺の方形周溝墓がⅣ期に属し、本遺構からもⅣ期の土器片が出土していることから、Ⅳ期と考えられる。

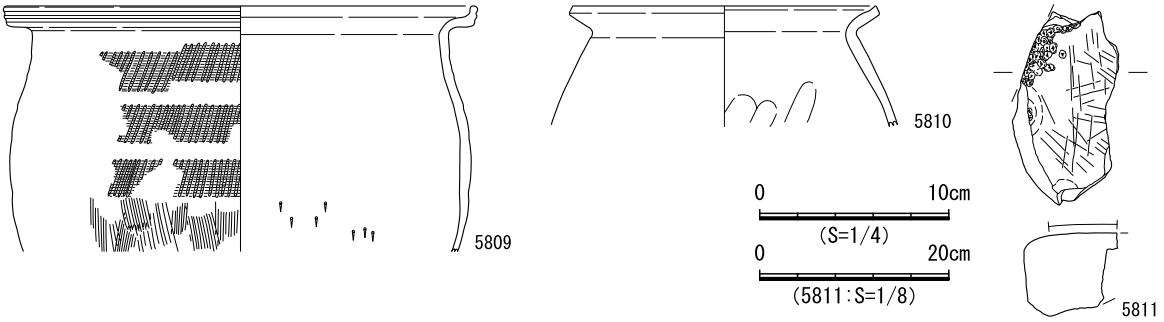


図 1644　SZ213 遺物実測図

SZ214（**遺構：図 1645、遺物：図 1646**）

検出状況　東部中央南寄りに位置し、SD0381の西側にある。Ｖ層上面で検出したが、東溝の平面形は不明瞭で、調査区北壁の土層を根拠に精査し検出した。西溝はSB555やSB556、SD1215などの底面で検出し、平面形は比較的明瞭であった。南北方向は調査区域外にあり全形は不明であるが、位置関係や埋土の共通性から同一の方形周溝墓の周溝と判断した。

方台部　西辺、東辺ともに直線的にのび、ほぼ平行することから、全形は方形を呈する可能性が高い。東西長は約5.8ｍであり、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝　東溝は幅約0.8ｍ～1.3ｍ、西溝は幅約1.2ｍ～1.5ｍであり、西溝がやや広い。深さはいずれも約0.5ｍである。東溝は断面Ｖ字状を呈し、壁面が直線的で東肩部に平坦面がある。一方、西溝は底面が平坦で、壁面の傾斜は墳丘側が緩やかで、その反対側が急となる。埋土は８層～11層に分層した。いずれも下層にはブロック土が混入する崩落土と考えられる土が堆積しているものの、最下層には細砂もしくは砂質土が堆積している。

遺物出土状況　東溝から土器153点、西溝から土器９点が出土した。出土土器はⅣ期～Ⅷ期のものが多いが、本遺構はＶ期のSB556に切られているため、Ｖ期以降の遺物は混入と考えられる。なお、供

献土器と考えられるものは確認できなかった。

出土遺物　5812はⅣ期壺A2類。胴部上半に直線文、波状文が認められる。小型品であるが、肩部の張りは強い。5813はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部が屈折し、端部にはナデによって平坦面を形成する。頸部にはわずかに直立する部位が認められる。5814はⅤ期高坏B1類。坏底部から口縁部が直立気味に立ち上がり、外反する。端部には顕著な平坦面を形成する。5815はⅦ期土製品。算盤玉状を呈し、中央に孔があく。

時期　混入遺物以外ではⅣ期の壺Ａ類があり、西側に位置するSZ215やSZ217もⅣ期であることから、Ⅳ期と考える。

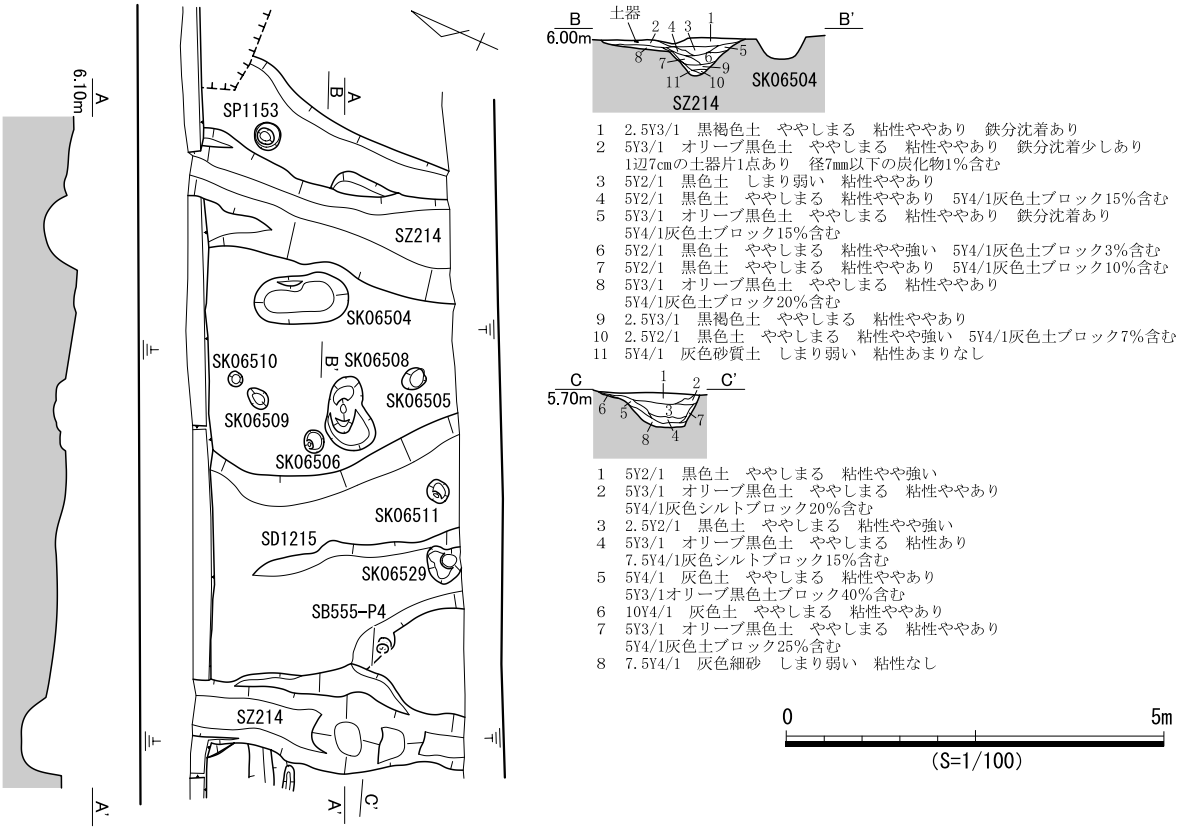


図 1645　SZ214 遺構図

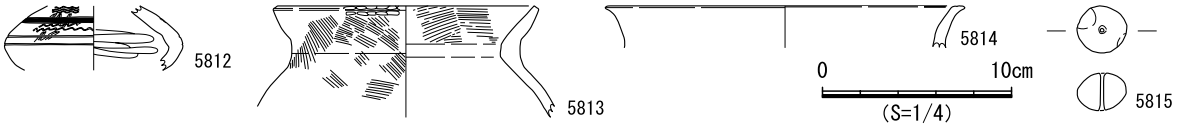
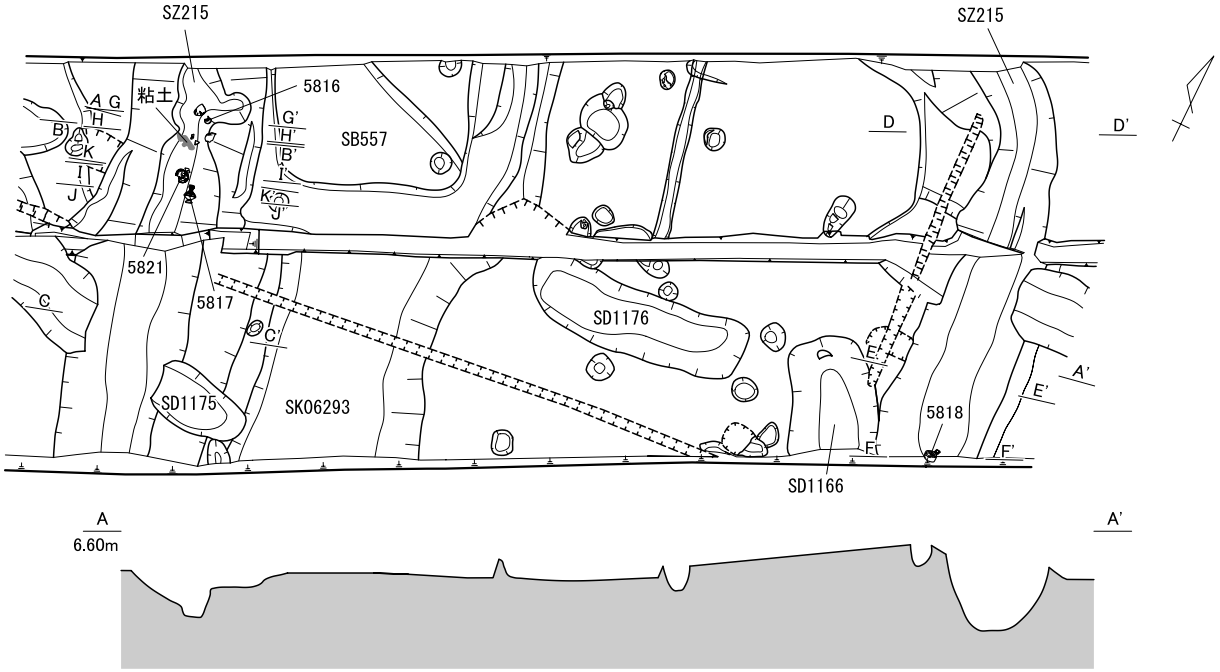


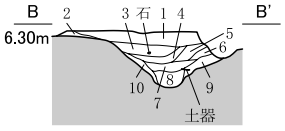
図 1646　SZ214 遺物実測図

SZ215（**遺構：図 1647 ～ 1649、遺物：図 1650**）

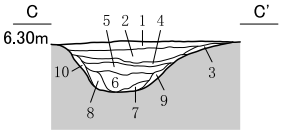
検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。周辺はⅣ層がほとんど遺存せず、Ib層除去後にⅤ層表出面で検出した。北側と南側は調査区域外にのび、西溝はSB557に切られ、SD1175を切る。平面形は不明瞭であり、調査区壁面の土層を根拠として平面形を確定した。なお、SD1166とSD1176はⅡ期の遺構であり、本遺構の時期と異なる。

方台部　全形は不明であるが、北東隅部がほぼ直角に屈曲することから平面形はほぼ方形であると考えられる。その規模は東西長約10.0ｍである。なお、主体部と墳丘盛土は確認できなかった。

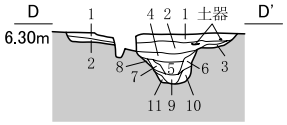




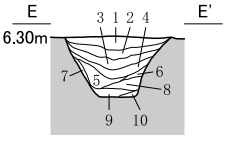
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径5mm以下の炭化物2%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　1辺3cmの土器片1点あり　径4cmの亜円礫1点あり
4　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
5　5Y3/1　オリーブ黒色(やや暗い)土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y4/1灰色土ブロック10%含む
7　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色シルトブロック5%含む
8　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性やや強い　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色シルトブロック層の下方に混じる
9　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり　5Y4/1灰色土ブロック10%含む
10　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1灰色土ブロック7%含む



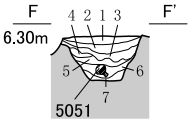
1　2.5Y3/2　黒褐色土　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
3　2.5Y3/1　黒褐色土(やや明るい)　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
4　2.5Y3/2　黒褐色土(やや明るい)　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
5　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり　鉄分沈着わずかにあり
6　5Y2/2　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり
7　5Y2/2　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり　灰色土のブロック10%含む
8　5Y2/2　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり　灰色土のブロック20%含む
9　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　灰色土20%含む
10　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　灰色土30%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　径5mm以下の炭化物2%含む　1辺3cmの土器片1点あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y4/1灰色土ブロック10%含む　径5mm以下の炭化物1%含む
　1辺12cm以下の土器片1点あり
3　2.5Y3/1　黒褐色(やや暗い)土
　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック30%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y2/1黒色土ブロック5%含む
5　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性やや強い　鉄分沈着少しあり
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　5Y4/1灰色土ブロック10%含む
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む
8　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
9　7.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性ややあり
10　7.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
11　7.5Y4/1　灰色砂質土　しまり弱い　粘性あまりなし　7.5Y2/1黒色土ブロック20%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土(やや暗い)
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
2　2.5Y2/1　黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり
5　5Y2/1　黒色土　しまる　粘性あり(強い)
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり
　灰色土のブロック20%含む
7　7.5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
8　7.5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり　黒色土20%含む
9　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
10　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性なし



1　2.5Y3/1　黒褐色土(やや暗い)
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
　φ0.5～2cmの亜円礫わずかに含む
2　2.5Y2/1　黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり
4　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　黒褐色土20%含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり
6　5Y2/1　黒色土　しまる　粘性あり(強い)
7　7.5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり

0　5m
(S=1/100)

図 1647　SZ215 遺構図（１）

周溝　幅は約1.4ｍ～1.5ｍ、深さ約0.7ｍ～0.8ｍである。東西溝ともにほぼ直線的にのび、北東隅部の底面は、他の周溝底面の標高とほぼ同じ高さである。東溝の壁面傾斜はやや急であるが、西溝の壁面傾斜は東溝に比べてやや緩やかであり、上方が大きく開いている。埋土は７層～11層に分層した。壁面沿いには壁面崩落土と考えられる堆積土があり、それより上位では、ほぼ水平あるいは中央が窪む堆積であり、自然に埋没した可能性がある。

遺物出土状況　土器が東溝から639点、西溝から769点出土した。また、石器類が東溝及び西溝からそれぞれ１点ずつ出土している。周溝からは、供献土器と考えられる土器が複数個体出土した。そのうち、東溝南端部では口縁部を一部欠損しているものの、ほぼ完形のⅣ期壺(5818)が口縁部を東に向け、逆位で出土した。また、西溝北側では完形の土器Ⅳ期壺(5817)が溝と平行の横位の状態で出土し、さらに下層から別の壺(5821)が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期の破片も上層から多く出土したが、最終埋没の時期を示すと考えられる。

出土遺物　5816はⅣ期壺Ａ1類。口縁部が明瞭に屈曲して内傾し、端部を丸くおさめる。端部には１箇所、打ち欠きが認められる。外面には凹線が２条認められ、頸部にも２条の凹線が認められる。胴部最大径は中央付近に位置し、胴部形状はやや丸みを帯びた算盤玉状を呈する。胴部下半及び底面には粗くて深いハケ目が残る。胴部上半には縦位のハケ、横位のタタキの調整痕が認められ、下半は摩

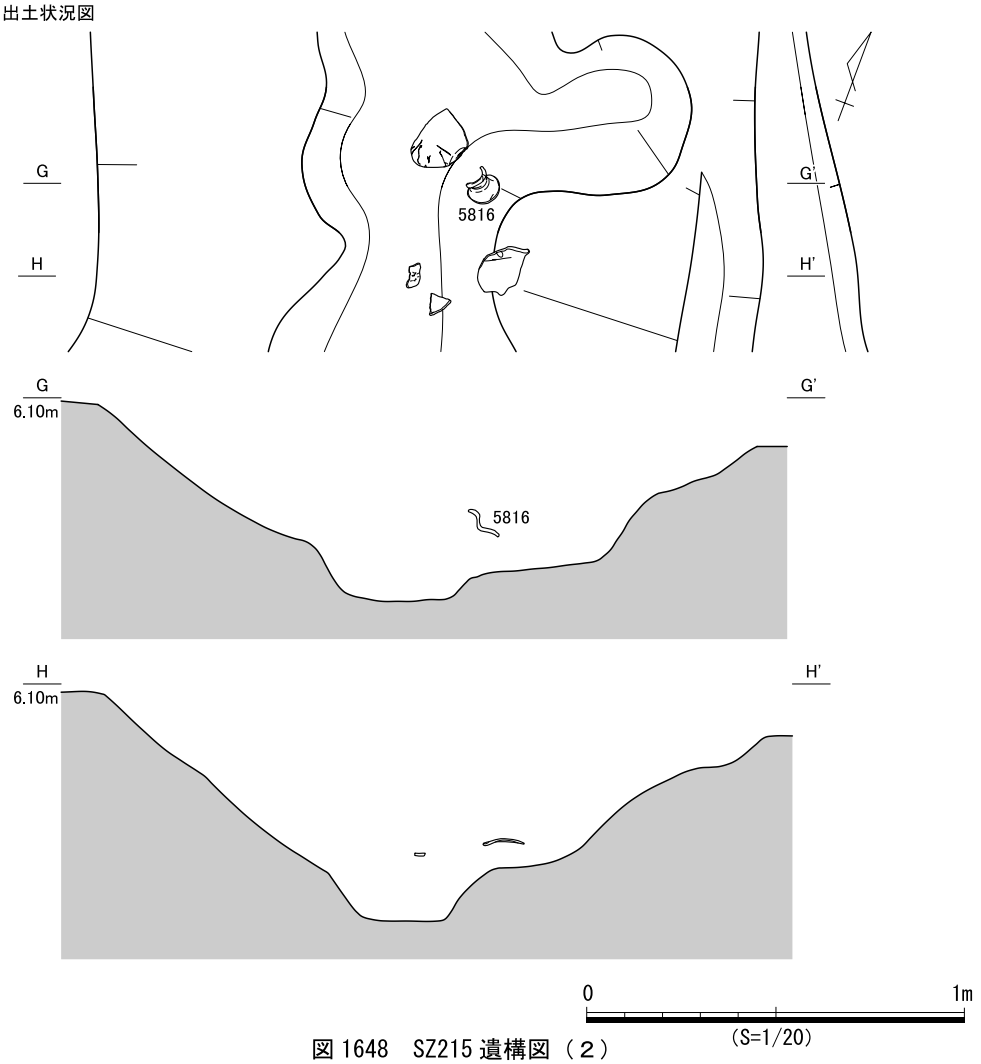


図 1648　SZ215 遺構図（２）

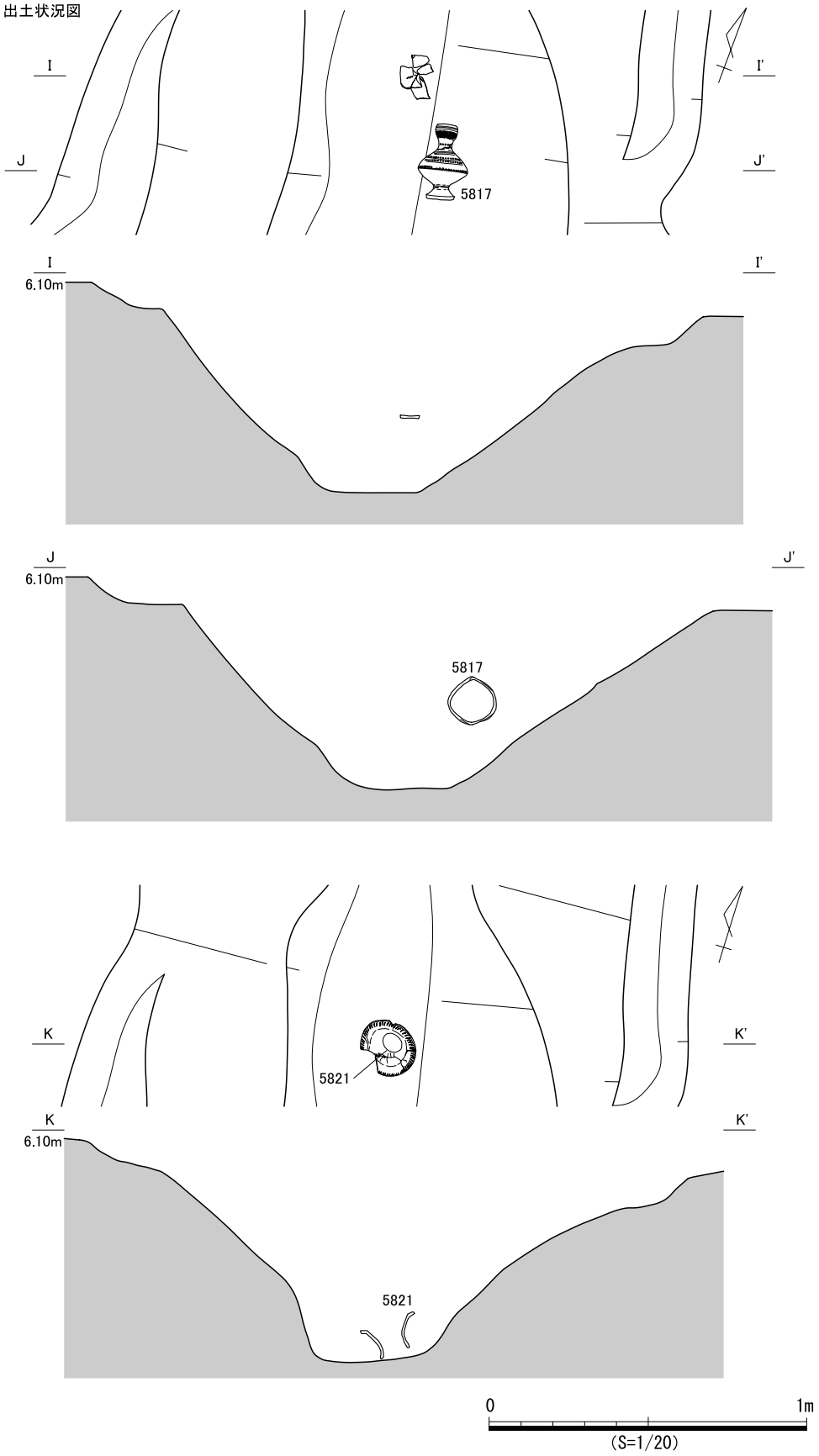


図 1649　SZ215 遺構図（３）

耗が進んでいる。ハケの後にタタキを施したと考えられる。5817、5818はともにⅣ期壺A2類。5817は台付壺の完形品。口縁部は袋状となり、端部を丸く収める。端部直下から胴部上半まで様々な文様が施文され、加飾が著しい。口縁部には端部直下から凹線４条、羽状文が認められ、続いて頸部には２条１組×３帯の複合クシによる直線文、円形刺突文、刺突文を施文する。胴部上半には、頸部と同じ工具による直線文が２帯認められ、その上から縦位の直線文を４方向に配置する。その下方に振り幅の小さい波状文を施文するが、直線文と同じ工具による施文と考えられる。直線文と波状文の境界部には円形刺突文を加える。波状文下にも直線文１帯を配するが、その境界にも円形刺突文を加える。その直線文以下には、振り幅の小さい波状文、円形刺突文列を加えて胴部最大径の肩部に至る。胴部下

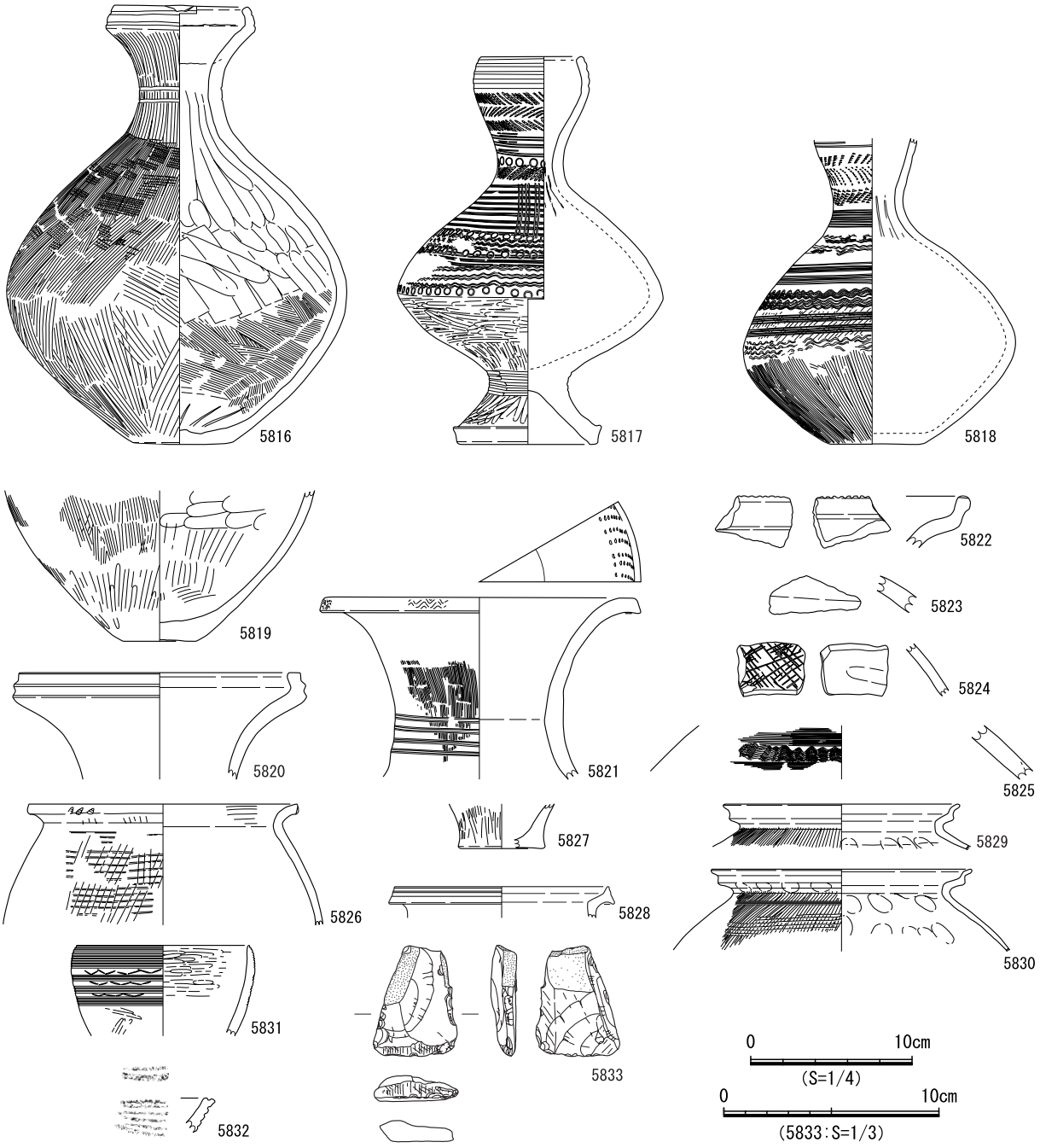


図 1650　SZ215 遺物実測図

半に文様は認められず、脚部付根付近の細くなる部分には５条の直線文が認められる。脚部は外反して開き、端部には内傾する平坦面を形成する。端部は上方に拡張し、胴部形状は最大径部が強く張り出し、算盤玉状となる。5818は口縁部を欠損するが、頸部以下は完存する。口縁部の凹線が数条認められ、頸部にかけては羽状文が認められる。頸部から胴部上半にかけては、４条１組×２帯の複合クシによる振り幅の小さい波状文と直線文が交互に３回ずつ施文され、最下段の波状文が胴部最大径の位置にあたる。胴部下半には、底部から放射状にハケ調整が施される。胴部の全体形状は、やや丸みを帯びた算盤玉状となる。5819はⅣ期壺Ａ類。胴部には底部から放射状にハケ調整が施される。5820はⅣ期壺B2類。口縁部が外反し、強く屈曲して端部付近は内傾する。端部には顕著な平坦面をもち、外面には凹線を２条施文する。5821はⅣ期壺Ｃ類。長く立ち上がる頸部から口縁部が大きく外反し、端部付近では内面がほぼ水平になる。内面には刺突文を施文し、端部には外傾する平坦面をもつ。端部には打ち欠きが１箇所認められる。頸部には複数の直線文が認められ、２条１組のものが多い。5822、5823はともにⅣ期壺Ｈ類。5822は外反する口縁部が屈曲して外反する。端部を肥厚して丸くおさめ、キザミを加える。器壁が厚く、大型品と考えられる。5823は黒褐色の胎土が特徴的である。5824はⅣ期壺Ｈ類。胴部には、不明瞭ながら斜格子文が認められる。5825はⅣ期壺Ａ類。胴部の直線文帯の間に波状文が認められる。5826はⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反して端部には平坦面をもち、下端には刺突を加える。胴部にはタタキ後ハケの調整痕が認められ、一部に煤が付着する。5827はⅣ期甕Ａ類。胴部にはハケによる調整痕が残る。5828はⅣ期甕Ｄ類。口縁部が短く外反して端部を上下に拡張し、端部平坦面には凹線が認められる。5829、5830はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲するものの、外方に大きく開く。5829の端部は肥厚気味となるが、5830は端部が薄くつくられている。5831はⅦ期高坏G3c類。外傾する口縁部が端部付近で内湾し、端部を尖り気味に収める。端部直下から外面には多条沈線が認められ、その間にヘラによる山形文を３帯加える。5832はⅠ期沈線文系の壺。口縁部が外傾し、端部には沈線が１条認められる。外面には工字文風の鍵の手状の文様が認められるが、小片のため全容は不明である。5833は磨製石斧とした。表面には部分的に自然面が残り、刃部に縦方向の線状痕が残る。

時期　供献土器の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ216（**遺構：図** 1651）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。周辺はⅣ層がほとんど遺存せず、Ib層除去後のⅤ層表出面で検出した。周辺に複数の方形周溝墓が存在するが、重複することなく、単独で存在する。東西南北すべての周溝が途切れて連続しないことから、四隅切れの方形周溝墓と判断した。なお、南溝の東端部がわずかに調査区域外にある。SZ217の方台部内に位置し、SZ217より先行すると考えられる。

方台部　方台部各辺は直線的である。規模は南北長約3.7ｍ、東西長約4.7ｍで、東西にやや長い長方形を呈する。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　周溝は４辺が独立し、四隅に陸橋部をもつ。各溝の間隔は約0.6ｍ～1.7ｍであり、北溝と東溝間が最も狭く、北溝と西溝間が最も広い。各周溝幅はそれぞれ中央付近で約0.6ｍ～1.0ｍであり、南溝の幅が最も広い。断面形は逆台形、もしくは底面が丸みを帯びて壁面傾斜が急な形状である。い

ずれの溝も深さ約0.5ｍで、底面幅は狭く比較的平坦である。しかし、西溝だけは深さ約0.3ｍと浅く、溝底は丸みを帯びて壁面傾斜は緩やかである。埋土は５層～８層に分層でき、埋没当初における壁面崩落土による堆積が確認できる。それより上位はほぼ水平堆積であることから、自然に埋没した可能性がある。

遺物出土状況　土器片が北溝から３点、東溝から６点、南溝から２点、西溝から６点出土した。また石器類が西溝及び南溝から、それぞれ１点ずつ出土した。供献土器と判断できる土器は出土していない。出土土器はⅥ期～Ⅶ期の細片のみであり、図示していない。

時期　Ⅳ期のSZ217より先行し、四隅切れの形状からⅡ期以前の可能性がある。

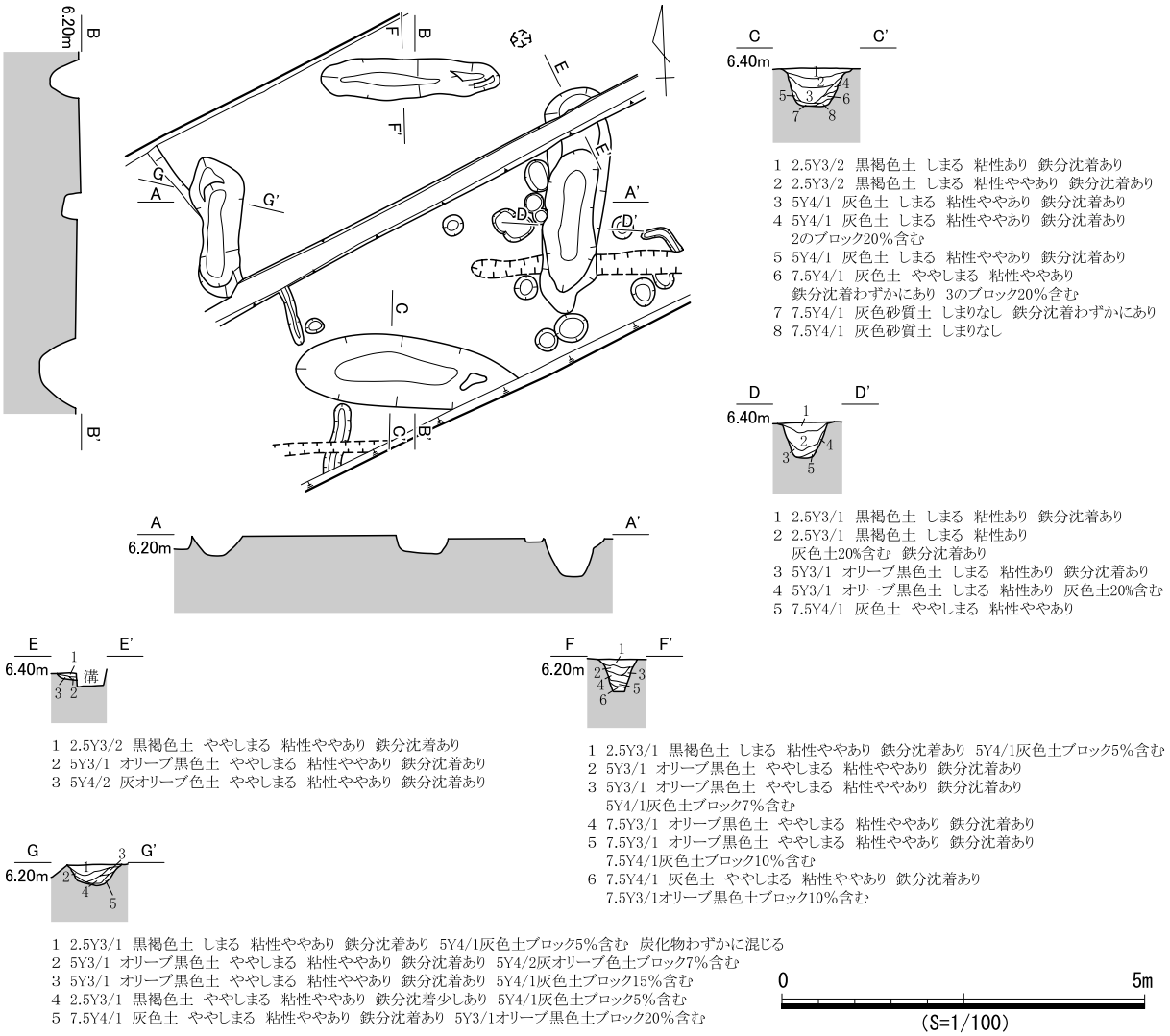
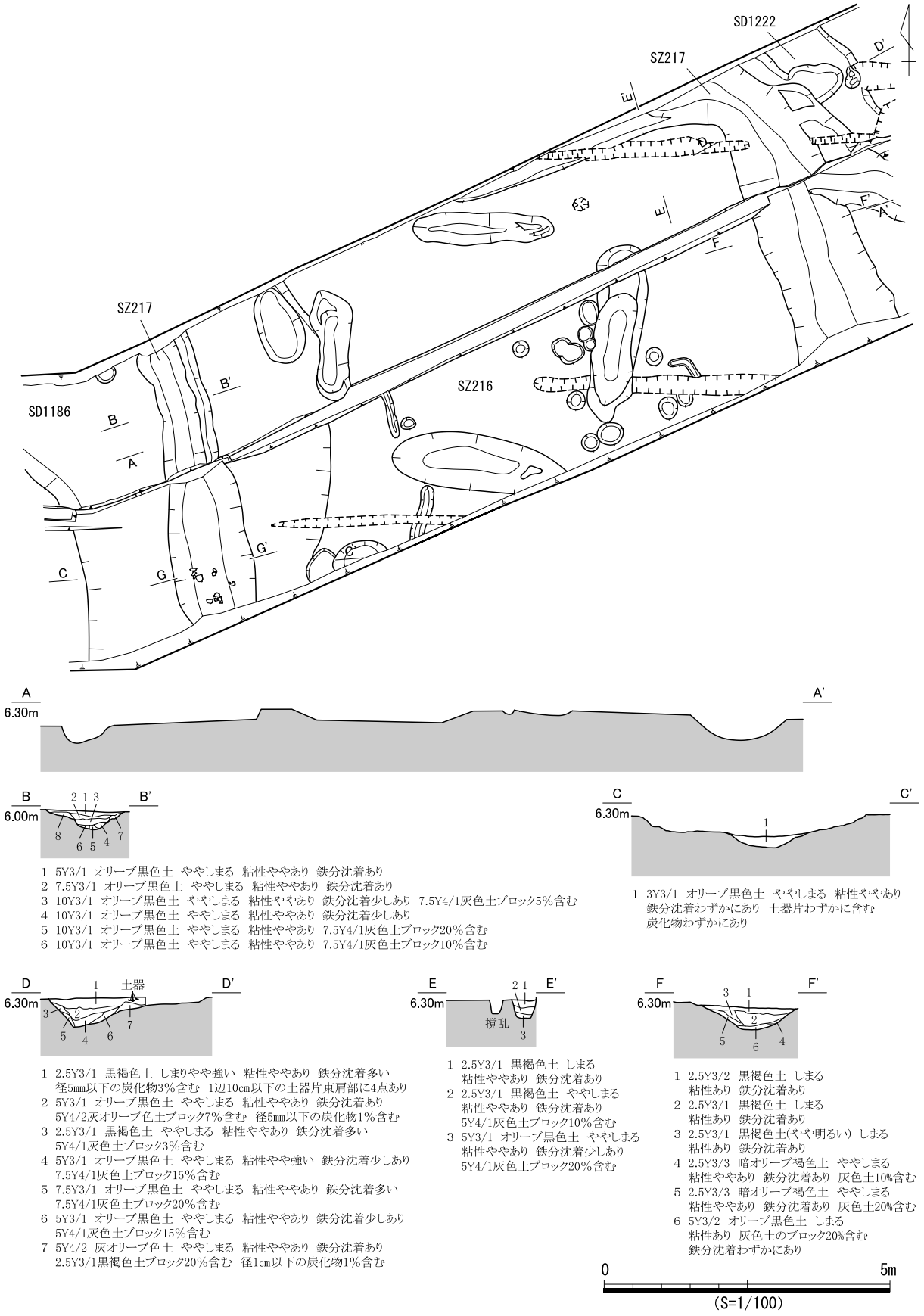


図 1651　SZ216 遺構図

SZ217（遺構：図 1652・1653、遺物：図 1654）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。周辺はⅣ層がほとんど遺存せず、Ib層除去後にⅤ層表出面で検出した。西溝はSD1186底面で、東溝はSD1222底面での検出であり、平面形は不明瞭であった。なお、本遺構の方台部に当たる位置には四隅切れの方形周溝墓であるSZ216があり、その墳丘を再利用して本遺構が構築された可能性がある。



1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
2 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
3 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着少しあり 7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む
4 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着少しあり
5 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
6 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む

1 3Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
鉄分沈着わずかにあり 土器片わずかに含む
炭化物わずかにあり

1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりやや強い 粘性ややあり 鉄分沈着多い
径5mm以下の炭化物3%含む 1辺10cm以下の土器片東肩部に4点あり
2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
5Y4/2灰オリーブ色土ブロック7%含む 径5mm以下の炭化物1%含む
3 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着多い
5Y4/1灰色土ブロック3%含む
4 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性やや強い 鉄分沈着少しあり
7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む
5 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着多い
7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
6 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着少しあり
5Y4/1灰色土ブロック15%含む
7 5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック20%含む 径1cm以下の炭化物1%含む

1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる
粘性ややあり 鉄分沈着あり
2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる
粘性ややあり 鉄分沈着あり
5Y4/1灰色土ブロック10%含む
3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる
粘性ややあり 鉄分沈着少しあり
5Y4/1灰色土ブロック20%含む

1 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる
粘性あり 鉄分沈着あり
2 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる
粘性あり 鉄分沈着あり
3 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) しまる
粘性あり 鉄分沈着あり
4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 ややしまる
粘性ややあり 鉄分沈着あり 灰色土10%含む
5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 ややしまる
粘性ややあり 鉄分沈着あり 灰色土20%含む
6 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる
粘性あり 灰色土のブロック20%含む
鉄分沈着わずかにあり

図 1652　SZ217 遺構図（１）

方台部　全形は不明であるが、北東隅部がほぼ直角に屈曲することから平面形はほぼ方形であると考えられる。その規模は東西長約11.0ｍであり、周辺の方形周溝墓の中では規模が大きい。なお、主体部と墳丘盛土は確認できなかった。

周溝　幅約1.2ｍ～1.8ｍ、深さ約0.3ｍ～0.5ｍである。東西溝ともに直線的にのび、北東隅部の底面は、他の周溝底面の標高とほぼ同じ高さである。壁面の傾斜は緩やかで、底面幅は狭く、丸みを帯びる。埋土は１層～８層に分層した。いずれの周溝も底面から壁面にかけて壁面崩落土と考えられる堆積が確認でき、それより上位ではほぼ水平、あるいは中央が窪む堆積であり、自然に埋没したと考えられる。

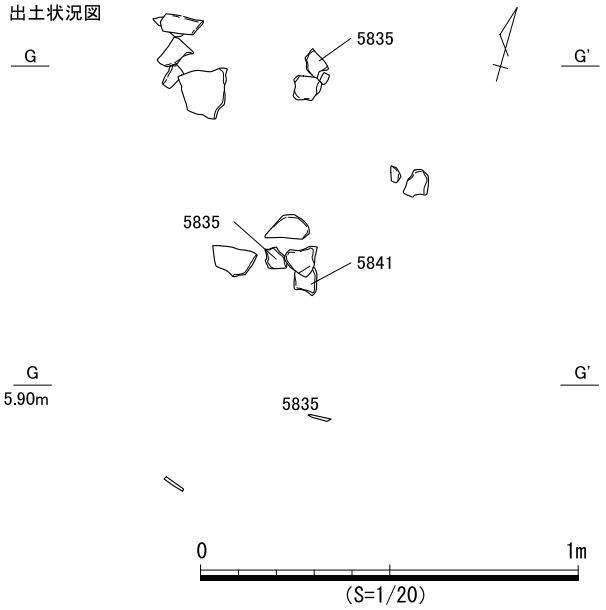


図 1653　SZ217 遺構図（２）

遺物出土状況　土器が東溝及び北溝の一部から436点、西溝から173点出土しており、石器類が東溝及び北溝の一部から１点、西溝から９点出土している。出土遺物は小片が多いものの、西溝南側の下層でⅣ期甕や壺の破片が横位でまとまって出土した。このうち壺（5835）は供献土器の可能性がある。その他にⅠ期やⅥ期～Ⅶ期の土器片が混入して出土した。

出土遺物　5834はⅣ期壺A2類。口縁部から頸部にかけて直線文、廉状文、刺突文が施文される。5835はⅣ期壺Ｃ類。頸部が直立気味に長く立ち上がり、口縁部が短く外反する。端部を肥厚して平坦面を幅広く形成し、上端は刺突文を施文した後にナデを施し、下端にはキザミを加える。頸部には刺突文が認められる。最大径を胴部中央やや下に有し、胴部下半にはハケ目が残る。上半には複数の波状文が認められる。5836はⅣ期壺Ｈ類。器壁の厚い口縁部が大きく外反し、端部付近で強く屈曲して直立する。端部には平坦面を形成し、クシによるキザミを加える。5837はⅦ期壺。台付壺の脚部で、付根から円錐状に開き、端部を丸くおさめる。透孔を３方向に配し、端部直上には多条沈線を施文する。5838はⅣ期甕。胴部に粗いハケ目とタタキ痕が残る。5839はⅣ期高坏Ｃ類。口縁部が袋状に内湾し、端部には顕著な平坦面を形成する。端部直下の外面には３条の凹線が認められる。5840はⅠ期壺。条痕文系の大型の壺で、頸部が比較的長く立ち上がる。口縁部付近の貼付け突帯上に、指頭圧痕による押圧が認められる。肩部はなで肩で、胴部は緩やかに開く。5841、5842はⅠ期甕。5841は遠賀川系土器の甕で、口縁部が短く外反し、頸部に沈線を１条施文する。胴部は緩やかに膨らみ、中程やや上位に２条の沈線を施文し、その間に３条１組の山形文が認められる。5842は条痕文系土器の甕で、口縁部がゆるやかに外反する。端部を外方に拡張し、端部の平坦面には条痕が２条認められ、端部には押圧が認められる。5843は叩石。砥面から側面にかけて敲打痕が残り、砥面には線状痕が確認できる。

時期　供献土器の可能性がある遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

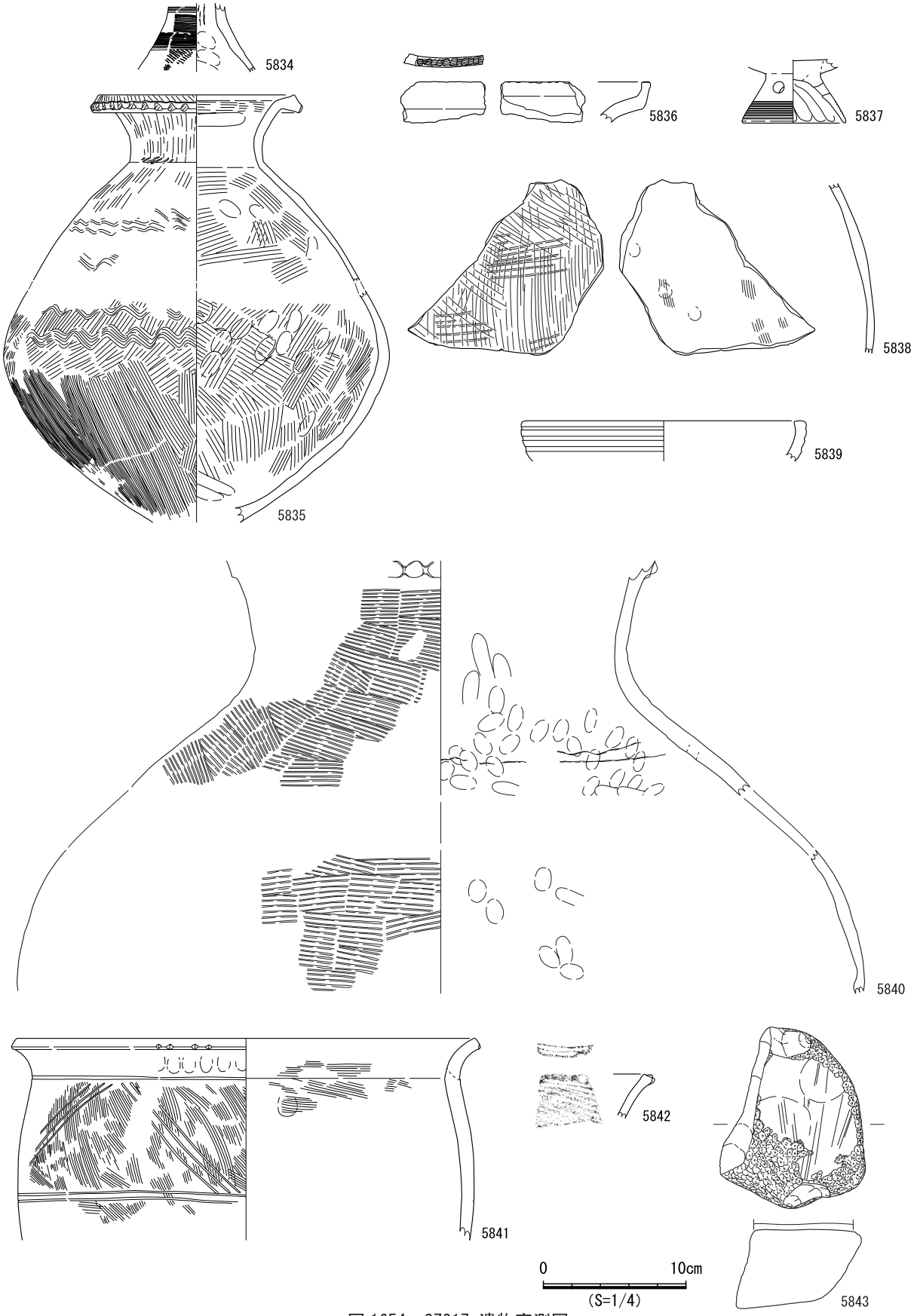


図 1654　SZ217 遺物実測図

SZ218（遺構：図1656、遺物：図1655）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、西側から南側にかけてSZ219を切る。調査区壁面にて遺構埋土は明瞭に確認できたものの、平面形は不明瞭であった。Ｌ字状に屈曲することと、Ⅳ期の遺物を含むことから、方形周溝墓と判断した。

方台部　北側と東側の大半が調査区域外にのびるため形状や規模は不明であるが、隅部は鈍角気味に屈曲している。なお、主体部と墳丘盛土は確認できなかった。

周溝　幅約0.7ｍ～1.4ｍ、深さ約0.2ｍであり、最深部は屈曲する外側に偏る。埋土は２層～３層に分層でき、方台部側からの崩落と考えられる堆積が認められる。溝底面は丸みを帯び、屈曲する外側の壁面傾斜は急であるが、内側は比較的緩やかな傾斜となる。

遺物出土状況　溝全体から土器439点が出土した。Ⅳ期とⅥ期～Ⅶ期の土器が出土しており、供献土器と判断できる土器は出土しなかった。

出土遺物　5844はⅣ期甕A3類。口縁部が屈曲して直立し、端部を平坦に仕上げる。端部にはタタキが認められ、外面には波状文を施文する。5845はⅦ期甕D2a類。口縁部が屈曲して開き、上段は垂直気味に立ち上がる。5846はⅦ期高坏Ｃ類。脚部がわずかに内湾し、端部には平坦面をもつ。

時期　Ⅳ期のSZ219を切るが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

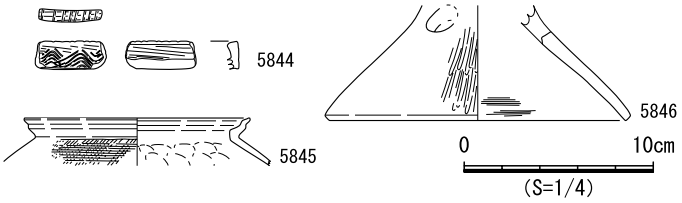


図1655　SZ218 遺物実測図

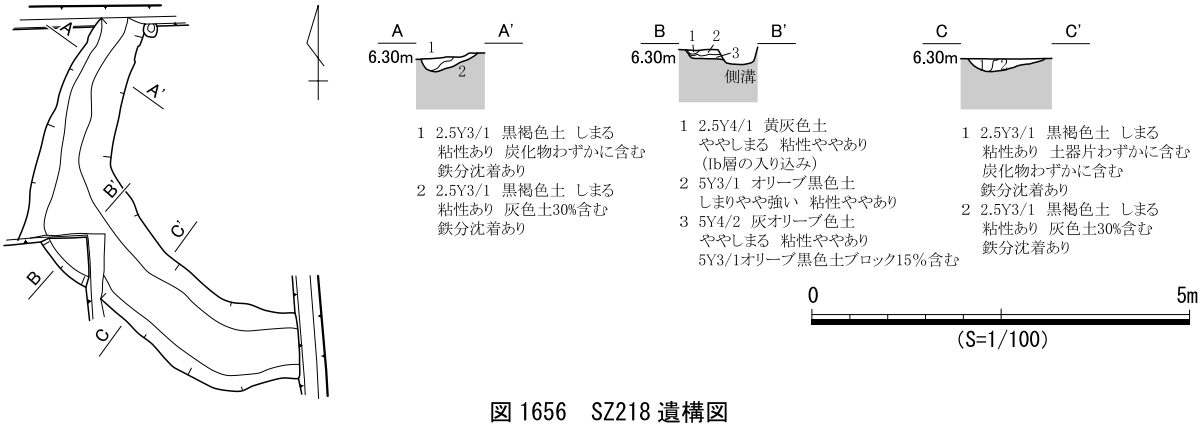


図1656　SZ218遺構図

SZ219（遺構：図1657、遺物：図1658・1659）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。Ｌ字状に屈曲する溝で、埋土の堆積状況と出土遺物の様相から、方形周溝墓の一部と考えた。北側をSZ218に切られ、平面形は不明瞭であった。なお、南端にあるSK06287は周溝底面で検出した土坑である。

方台部　本遺構は北側と東側の大半が調査区域外に位置するため、方台部全体の規模及び形状は不明である。検出範囲は方台部の南西部にあたり、隅部はやや鈍角気味に開く。なお、墳丘盛土と主体部は確認できなかった。

周溝　幅約1.6ｍ～2.7ｍ、深さ約0.2ｍ～0.3ｍである。溝底面の幅は広く、断面形は平坦もしくは緩やかに丸みを帯びる。壁面の傾斜は比較的急であるが、屈曲部の西壁面のみ緩やかである。埋土は２

層～５層に分層でき、ブロック土の混入が目立つ。しかし、その成因は不明である。

遺物出土状況　溝全体から土器1,641点、石器類が16点出土している。出土遺物の大半はⅣ期の土器であり、他の時期の混入は少ない。5863や5864などの甕は残りが良く、供献土器の可能性もある。5863はSK06287出土土器と接合関係がある。

出土遺物　5847～5849はⅣ期壺A1類。5847は口縁部が外反し、端部が屈曲して内傾する。端部を丸くおさめて２条の凹線を施文し、一部を打ち欠く。頸部に斜位の短い刺突文を施文する以外は、文様は認められない。5848、5849は端部に内傾する平坦面を形成し、頸部は無文である。5850はⅣ期壺A2類。やや小型品であるが、胴部中央の肩部が強く張り出す。胴部の上半、下半ともそれぞれ直線的な形状で、典型的な算盤玉状を呈する。頸部直下から胴部上半に直線文帯と波状文帯をそれぞれ２帯ずつ施文する。5851～5854はⅣ期壺Ａ類。5851、5854は胴部の肩部の張り出しがやや弱いが、およそ算盤玉状を呈する。5853は胴部にも底部にも、明瞭にハケ目が残るが、5852の底部には認められない。5855、5856はⅣ期壺Ｂ類。5855は、直線文、波状文、直線文が施文される。5856は上げ底で、胴部は内反り気味に開く。5857～5859はⅣ期壺Ｃ類。頸部が緩やかに外反して長く立ち上がり、口縁部が強く外反する。端部を下方に拡張し、やや外傾する平坦面を明瞭に形成する。5857、5858は頸部が緩やかに外反して長く立ち上がり、口縁部が強く屈曲して開く。端部を下方に拡張し、外傾する平坦面上には凹線を２条施文する。ともに口縁部内面は無文だが、5858は頸部と胴部の境に斜位の刺突文を施文する。5859は口縁部内面には扇形文を全面に施文し、瘤状突起を２個１対で３箇所に貼付する。頸部と胴部の境には突帯を貼付し、ナデによって尖らせる。突帯直上にはやや雑ながら、振り幅の小さい波状文を施文し、突帯下方には直線文と波状文を交互に施文する。5860、5861はⅣ期壺Ｈ類。斜格子文状の文様が認められる。5862はⅣ期甕A1類。口縁部が外反し、端部に凹線状の浅い凹みを形成するが、端部下端のキザミは認められない。胴部には縦方向のタタキ痕が認められ、その後の縦位のハケ調整が認められる。内面にはケズリが認められる。5863～5869はⅣ期甕A2類。5863は大型品で、胴部にはタタキ、ハケの調整痕が認められる。5864は大型品で、端部平

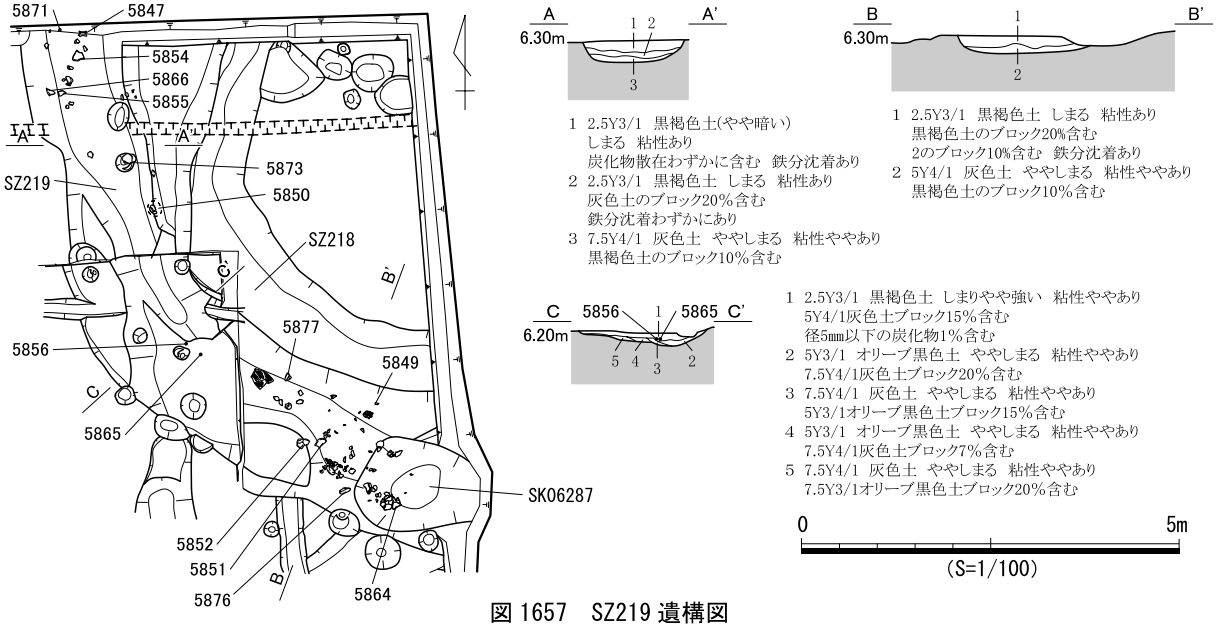


図1657　SZ219遺構図

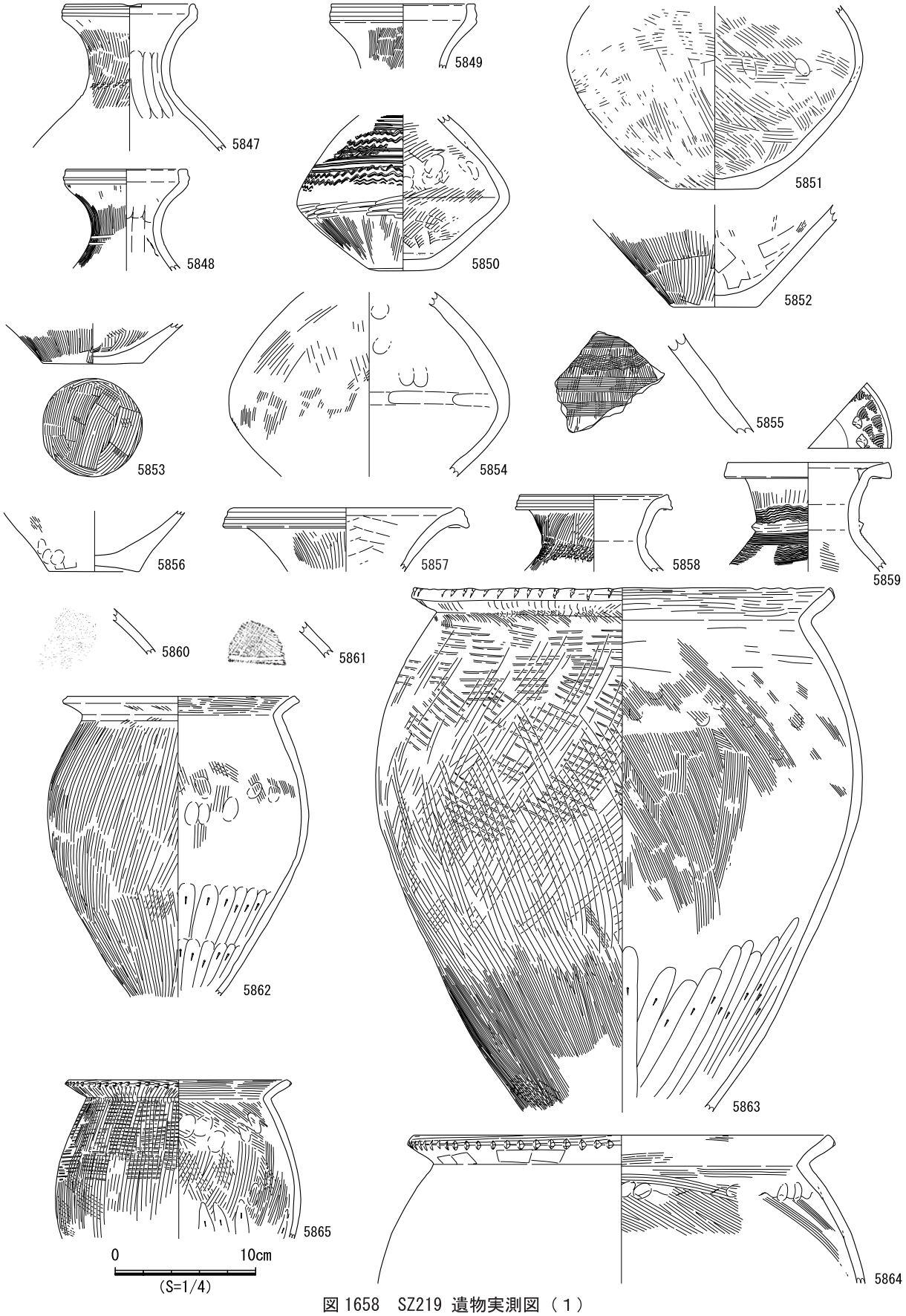


図 1658　SZ219 遺物実測図（１）

坦面にタタキ、ハケの調整痕が認められる。胴部は摩耗が著しく、文様や調整痕を確認することができない。5865は端部下端にキザミを加える。頸部直下にはヨコタタキ後にハケ調整を施し、最大径部以下には煤の付着が顕著である。5866は口縁端部の仕上げがやや雑で、煤の付着が顕著である。5867は口縁部が短く屈曲し、平坦な端部にはタタキが認められる。5869は器壁が厚く、大型品である。端部平坦面にハケ目が認められ、頸部外面には粘土を貼付し、その上から刺突を加える。5870、5871はⅣ期甕A3類。5870は口縁部が屈曲して端部にはわずかに平坦面を形成し、端部には羽状文に見えるハケもしくはタタキによる調整が認められる。5871は口縁部の屈曲が強く、端部には格子状のハケの痕跡がみられる。5872はⅣ期甕Ａ類。胴部及び底部にハケ調整を施し、底部中央に穿孔が認められる。5873はⅥ期～Ⅶ期甕。全面にハケ調整を施す。胴部最大径部がやや強く張り出し、その一帯に煤、炭化物の付着が集中する。5874はⅣ期鉢Ａ類。口縁部が袋状に内湾し、端部にはわずかに平坦面をもつ。外面には凹線を４条施文する。5875はⅣ期高坏。坏部は大きく開き、外面に稜は認められない。脚部は裾部に向かって緩やかに外反し、端部はやや肥厚し、直立気味の平坦面を形成する。5876、5877は叩石で、いずれも不整形の亜円礫を素材とする。5876は表面と下方に部分的に敲打痕が残る。5877は不定形を呈し、側面の湾曲部にわずかに敲打痕が認められ、赤色顔料が付着している。

時期　Ⅳ期のSZ218に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

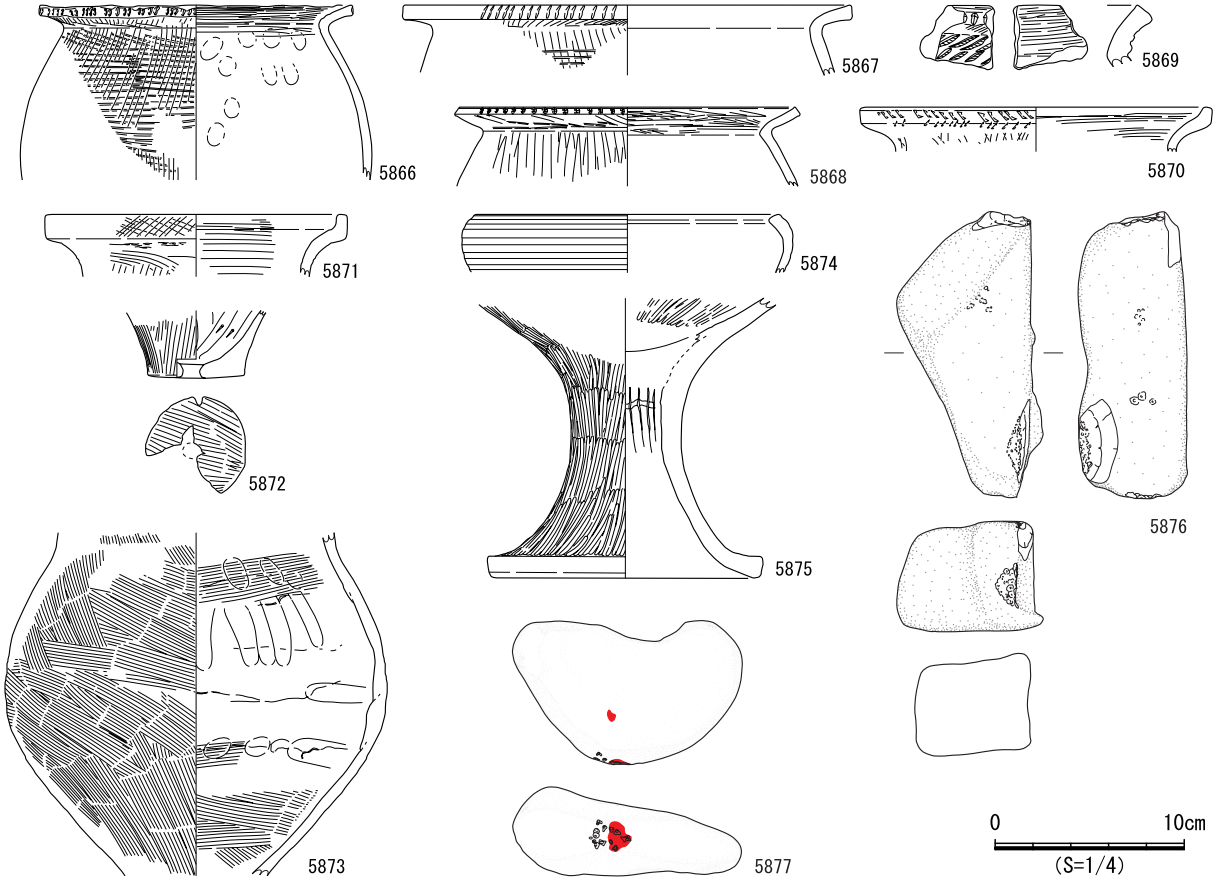


図 1659　SZ219 遺物実測図（２）

SZ220（遺構：図1660、遺物：図1661）

検出状況　東部西側中央に位置する。周溝は調査区域外へのびており、南北溝のみを検出した。なお、南北溝ともに竪穴住居跡下での検出であり、平面形は明瞭であった。

方台部　北辺と南辺はおよそ直線的であり、隅部は検出できていない。規模は南北長約6.8ｍ～7.2ｍであり、墳丘盛土は確認できなかった。なお、中央付近には南西から北東に主軸をもつSK05395がある。平面形は不整長楕円形を呈し、長軸長約2.8ｍである。埋土は２層に分層でき、層界の凹凸が顕著でブロック土の混入が認められることから、人為堆積と考えられる。出土遺物は細片のみであるため時期は不明であるが、主体部の可能性もある。

周溝　幅約1.6ｍ～2.5ｍ、深さ約0.5ｍ～0.7ｍであり、北溝よりも南溝の方が広い。断面形は、底面が丸みを帯び、壁面の傾斜は南溝が緩やかで、北溝は比較的急である。埋土は６～９層に分層でき、壁面沿いにブロック土が多く混入する壁面崩落土と考えられる土が堆積している。底面の高さは、北溝、南溝ともに中央付近が最も深くなっている。南溝では中央西寄りの底面直上で石灰岩が３個出土し、底面東側では小土坑２基を検出した。なお、北溝の西側は撹乱により失われているが、西端は若干北側へ湾曲している可能性があり、SZ120と周溝を共有している可能性もある。

遺物出土状況　北溝から土器155点、南溝から土器266点、石灰岩３点が出土した。埋土中からの出

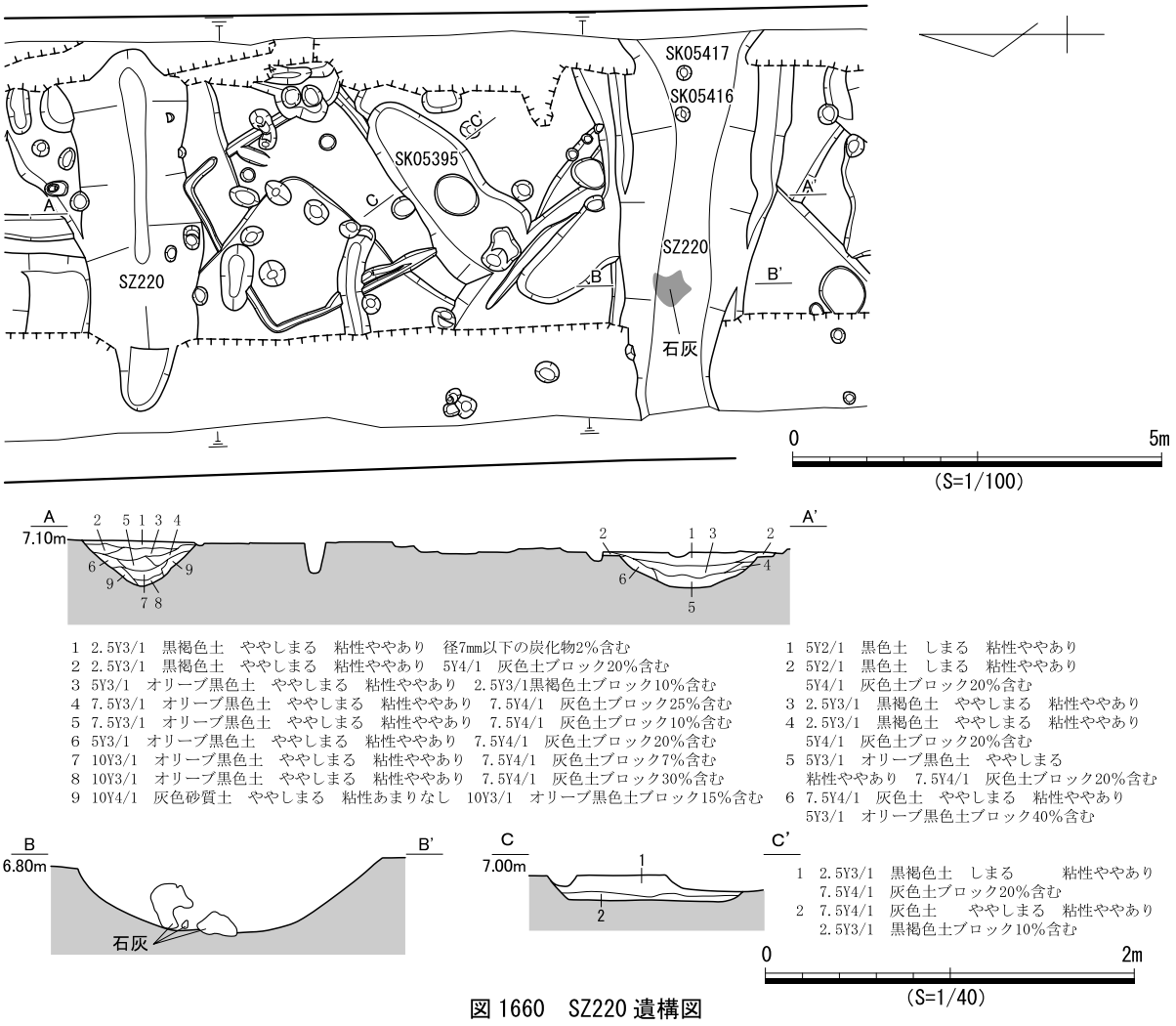


図1660　SZ220遺構図

土土器はⅣ期のものが多く、下層から縄文時代晩期の土器片が、上層からⅥ期～Ⅶ期の土器片がわずかに出土した。供献土器と判断できる土器は出土していない。

出土遺物　5878はⅣ期甕Ａ類。平底で、外面に細かなハケ目が残る。5879はⅦ期器台C3類。脚部は付根直下から円錐状に開き、裾部はやや内湾する。受部は浅い皿状に開き、端部を外方に拡張し、下がり気味となる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

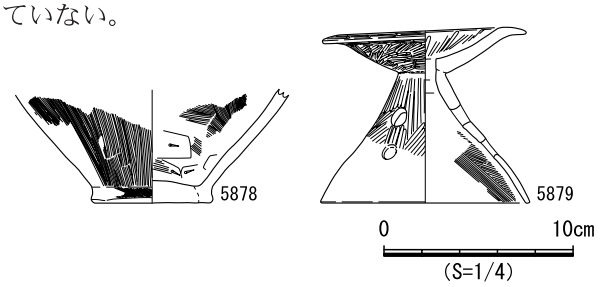


図 1661　SZ220 遺物実測図

SZ222（遺構：図 1662、遺物：図 1663）

検出状況　東部西側中央に位置する。遺構の大半は調査区域外へのび、北溝はSZ221を切る。また西側は南北方向の撹乱があり、周溝の約半分はその底面で検出した。

方台部　東辺と南辺は直線的で、隅部は鋭角気味に屈曲し、隅部は丸みを帯びている。規模は不明で、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝　幅約0.6ｍ～1.4ｍ、深さ約0.1ｍ～0.5ｍであり、検出した部分は全周している。東溝と南溝の幅はほぼ同じであり、隅部がわずかに狭くなる。断面形は東溝が底面から壁面にかけて丸みを帯びているのに対し、南溝は逆台形状を呈する。底面は南溝がほぼ水平で、東溝は中央付近が深くなっており、隅部は東・南溝よりも約0.3ｍ～0.5ｍ高く、陸橋部を形成している。埋土は２層～４層に分層でき、下層ほどブロック土の混入が多く、壁面崩落土が堆積していると考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器182点、石器類１点が出土した。東溝では１層と３層の層界付近から

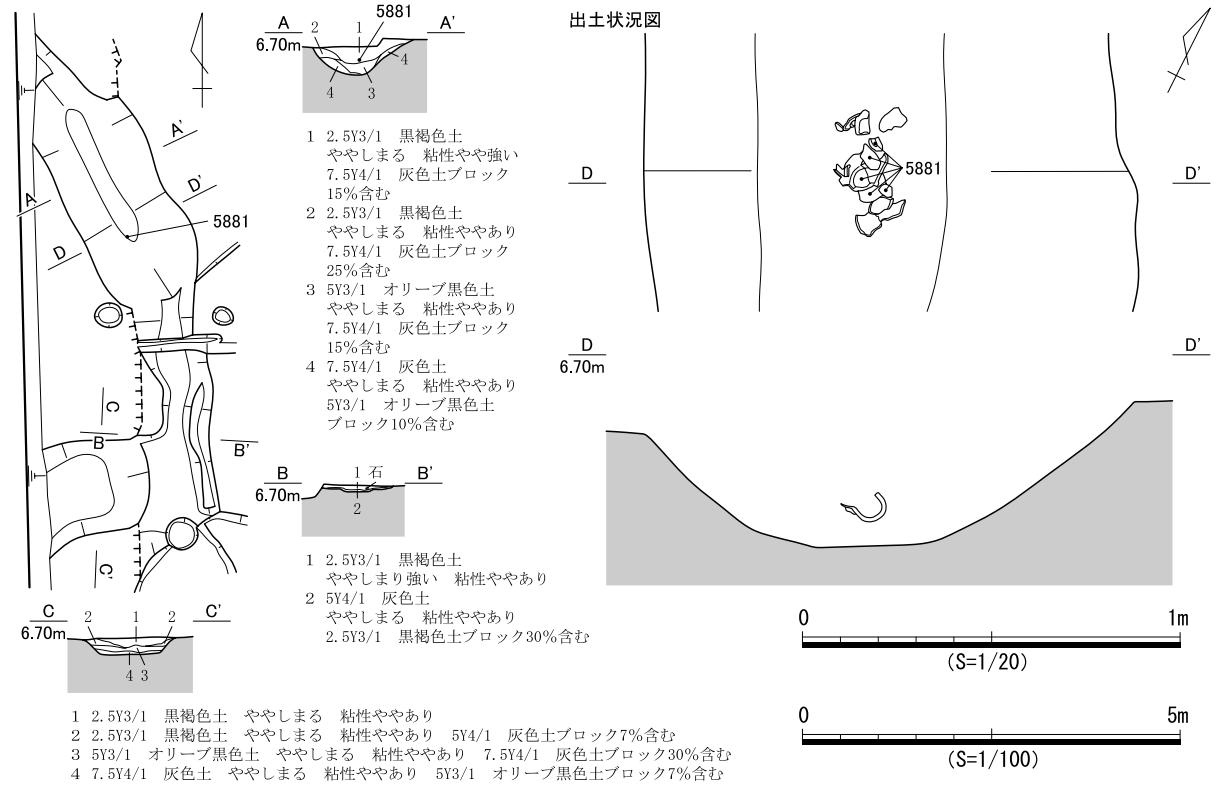


図 1662　SZ222 遺構図

Ｖ期壺Ｋ類（5881）が、３層からⅣ期甕Ｂ類（5880）が出土した。その他にⅣ期～Ⅶ期の土器片が出土したが細片が多い。なお、供献土器と判断できる遺物は出土しなかった。

出土遺物　5880はⅣ期甕B2類。屈曲部から端部下端が強く外方に引き出され、内面には明瞭な平坦面が形成される。口縁端部はわずかに内傾しながら立ち上がり、先端部にも内傾する平坦面が認められる。口縁端部外面には刺突文を施文する。5881はＶ期壺Ｋ類。口縁部は長く直立し、端部はわずかに外反する。端部にはナデによって顕著な平坦面が形成される。

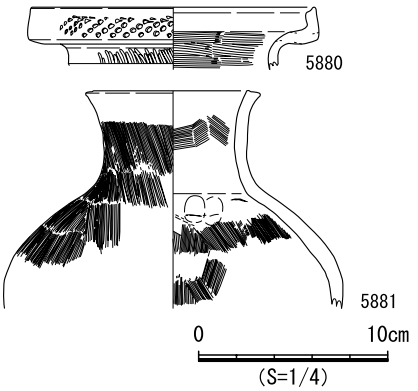


図 1663　SZ222 遺物実測図

時期　供献土器は出土していないが、３層出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

SZ223（遺構：図 1665、遺物：図 1664）

検出状況　東部中央南寄りに位置し、SD0381の埋土15層掘削後にＶ層上面で検出した。東側はSD0381に切られ、北西側は調査区域外へのびている。平面形は明瞭であり、検出時の埋土は茶褐色のような色調であった。南溝のみの検出であるが、溝の平面形、屈曲部の様相、出土遺物、検出時の埋土の色調などから、方形周溝墓と判断した。

方台部　南辺は直線的であるが、大半が調査区外にあるため規模や形状は不明である。なお、墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝　南溝は幅約1.0ｍ、深さ約0.5ｍであり、断面形はＶ字状である。底面幅は約0.1ｍ～0.3ｍと狭く、壁面の傾斜は急である。南西隅部はほぼ直角に屈曲しており、底面の標高が浅くなる。埋土は９層に分層した。壁面から底面にかけてブロック土を含む壁面崩落土が堆積し、それらと前後して中央にブロック土を含まない土が堆積している。これらのことから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器20点が出土した。埋土上層からⅥ期～Ⅶ期の小片が出土し、５層からⅡ期の壺Ａ類（5882）が出土した。

出土遺物　5882はⅡ期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張して広く平坦面を形成する。端部には貝による直線文を施文するが、下端にユビ押圧を加えることで文様がわずかに波状となる。

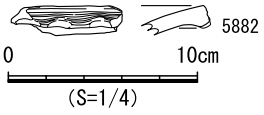


図 1664　SZ223 遺物実測図

時期　埋土下層の出土遺物の時期から、Ⅱ期と考えられる。

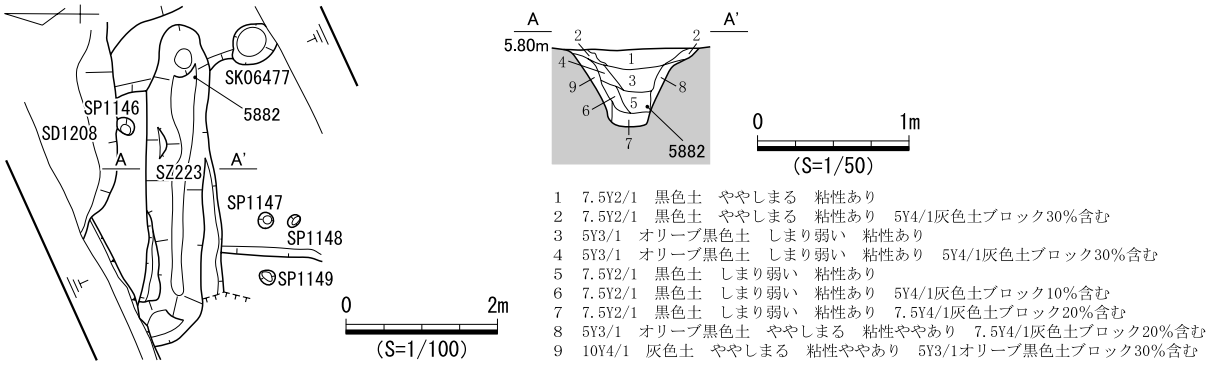


図 1665　SZ223 遺構図

２　溝状遺構

溝状遺構は、遺跡を南北に貫くSD0381（大溝）以外は検出長が短く、連続性も見出せない。これらの一部は、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝残欠の可能性もある。なお、SD0381は弥生時代中期に掘削された溝状遺構であるが、当該時期の出土遺物が少なく、大半は弥生時代後期から古墳時代前期の遺物であるため、その詳細は次節にて記載する。

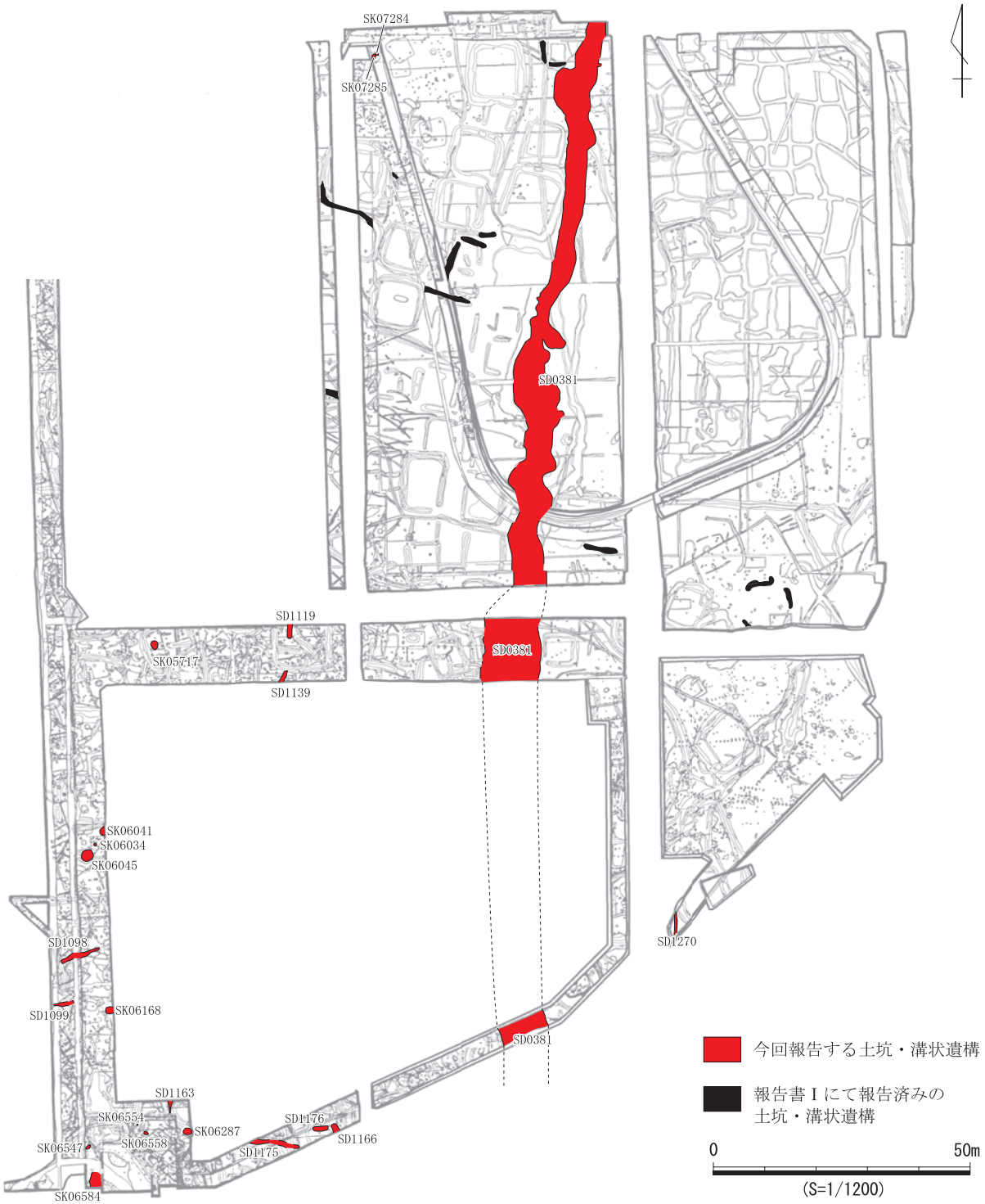


図 1666　東部域の弥生時代中期の土坑・溝状遺構分布図

SD1098（遺構：図1667、遺物：図1668）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SZ184とSK06122に切られ、東端は収束する。東側の平面形は明瞭であったが、西側は遺構の重複が著しく平面形は不明瞭であった。

形状　南南西から北北東にのびる溝である。幅約0.8ｍ、深さ約0.3ｍであり、溝の断面形はおよそ逆台形を呈し、底面は東側が浅く、西側に向かうにつれて次第に深くなる。

埋土　３～４層に分層した。溝の西側では南方向からの崩落土が観察でき、その後ブロック土を含む土が堆積していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器110点が、西側を中心に散在して出土した。

出土遺物　5883はⅡ期壺Ａ類。胴部には二枚貝による直線文が施される。直線文より上方は、ハケ調整の後に弱いナデ調整を施す。

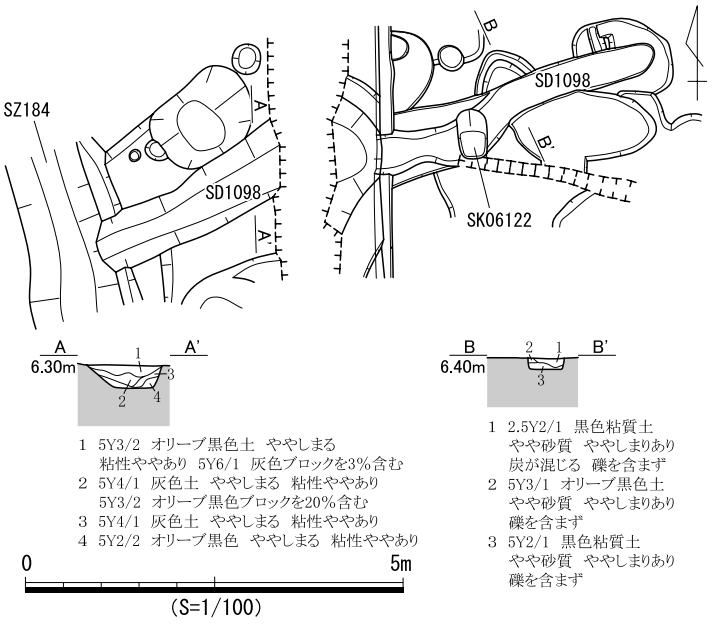


図1667　SD1098遺構図

図1668　SD1098遺物実測図

時期　Ⅳ期のSZ184に切られることと出土遺物の時期から、Ⅱ期と考えられる。

SD1099（遺構：図1669、遺物：図1670）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側は調査区域外へのびており、SZ186に切られる。検出時の埋土は弥生時代中期の方形周溝墓の周溝に類似していたが、対応する周溝が確認できなかったことから、溝状遺構と判断した。なお、平面形は比較的明瞭であったが、SZ186との新旧関係の識別は困難であった。

形状　東西にのびる溝であり、東端はやや膨らんで収束する。幅約0.7ｍ、深さ約0.4ｍである。壁面の傾斜は南壁が垂直気味、北壁がやや開き気味であり、底面はほぼ平坦であった。

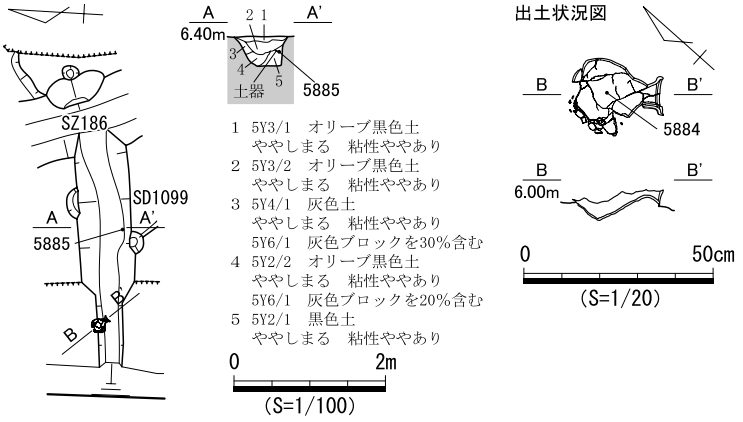


図1669　SD1099遺構図

埋土　５層に分層した。３、４層は北壁面から底面沿いに堆積し、ブロック土の混入が認められることから壁面崩落土と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器18点が出土した。出土遺物は少ないが、Ⅳ期壺Ａ類（5884）が口縁部を南東に向けて、胴部の約半分が欠落した状態で出土した。Ⅵ期鉢Ａ類（5885）は埋土上層からの出土で、混入と考えられる。

出土遺物　5884はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して直立し、端部にはわずかに平坦面を形成する。端部外面には２条の凹線を施し、頸部にも数条の凹線が認められる。胴部は無文で、ハケによる器面調整を施す。最大径部が胴部中央付近に位置して算盤玉状を呈するが、最大径部の張り出しはやや弱い。5885はⅥ期鉢Ａ類。頸部直下に直線文、その下方に刺突文を施すが、直線文帯の最下段は凹みが顕著である。器面全体に煤の付着が著しい。

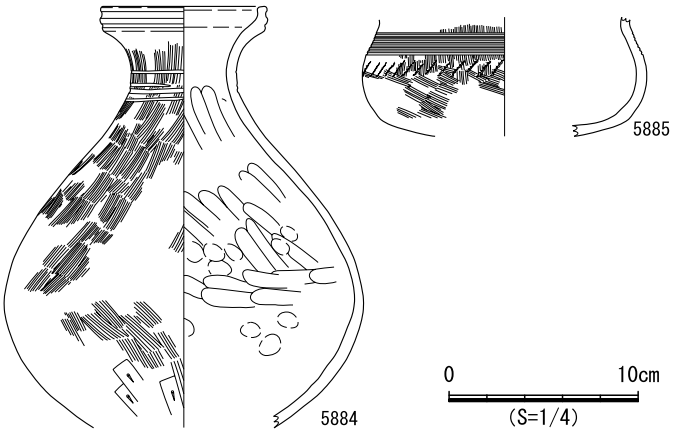


図 1670　SD1099 遺物実測図

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SD1119（遺構：図 1671）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。SB538の床面で検出し、平面形はやや不明瞭であった。溝の規模や形状、埋土の堆積状況は周辺の方形周溝墓と類似する。しかし、周辺には組み合う溝が確認できず、北側が調査区域外となるため、ここでは単独の溝として報告する。

形状　南北方向に主軸をもち、幅約0.9ｍである。南端は調査区域内で丸みを帯びて収束しているが、北側は調査区域外に及ぶ。深さは約0.4ｍで、断面形はＵ字状を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。４層は埋没当初に堆積したと考えられる崩落土であり、１～３層は中央が窪む自然堆積層と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器16点が散在して出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB538より先行することからそれ以前と考えられ、埋土が弥生時代中期の遺構に類似することから、Ⅱ期～Ⅳ期頃と考える。

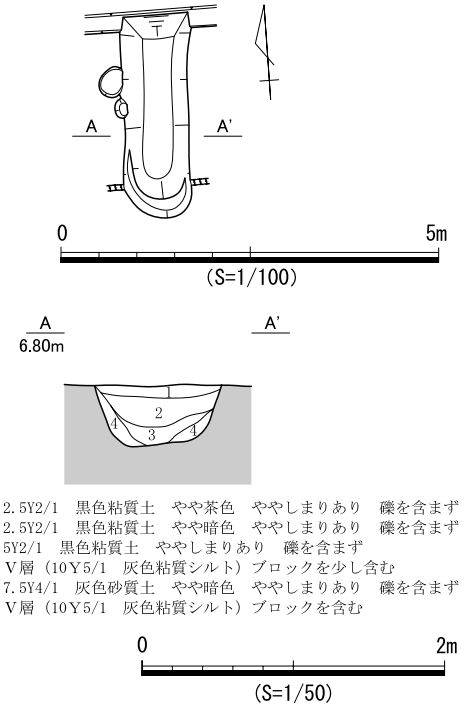


図 1671　SD1119 遺構図

SD1139（遺構：図1672）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域の、SZ196の方台部に位置する。SB540床面で検出し、平面形は比較的明瞭であった。溝の規模や形状、埋土の堆積状況は周辺の方形周溝墓と類似する。しかし、周辺には組み合う溝が確認できず、南側が調査区域外となるため、ここでは単独の溝として報告する。

形状　北東－南西方向に主軸をもち、幅約0.8ｍである。北端はわずかにSK05992に切られるものの、調査区域内で収束する。南側は調査区域外に及ぶため、全形は不明である。深さは約0.4ｍで、断面形はU字状を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。北端部では、壁面に平坦面が形成されている。

埋土　４層に分層した。４層は崩落土の可能性があるものの、埋土全体にブロック土の混入が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

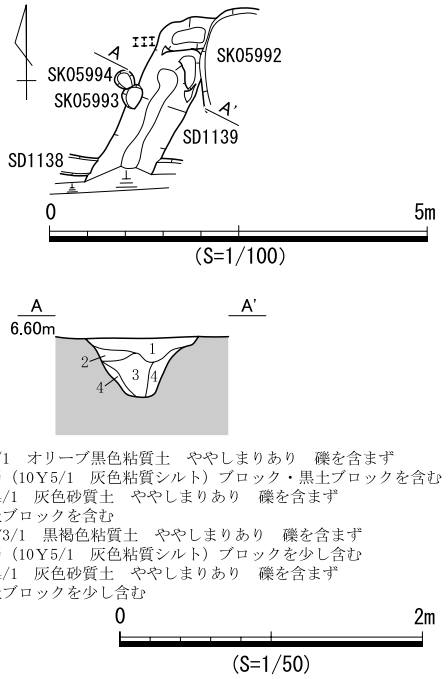


図1672　SD1139遺構図

遺物出土状況　埋土中から土器63点が散在して出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅸ期のSB540より先行することからそれ以前と考えられ、埋土が弥生時代中期の遺構に類似することから、Ⅱ期～Ⅳ期頃と考える。

SD1163（遺構：図1673、遺物：図1674）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SZ218とSZ219の掘削後に残った部分であり、細長い形状のため溝とした。なお、平面形は不明瞭であった。

形状　遺構の大半は別遺構に切られ、北側は調査区域外にのびるため、平面形は不明である。深さは約0.2ｍであり、底面はやや凹凸がある。

埋土　単層である。ブロック土の混入が認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器110点、石器類２点が出土した。

出土遺物　5886はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して内傾し、端部には顕著な平坦面を形成する。外面には３条の凹線が認められるが、それ以外は無文である。5887はⅣ期甕A2類。口縁部がくの字に強く屈曲し、端部はやや

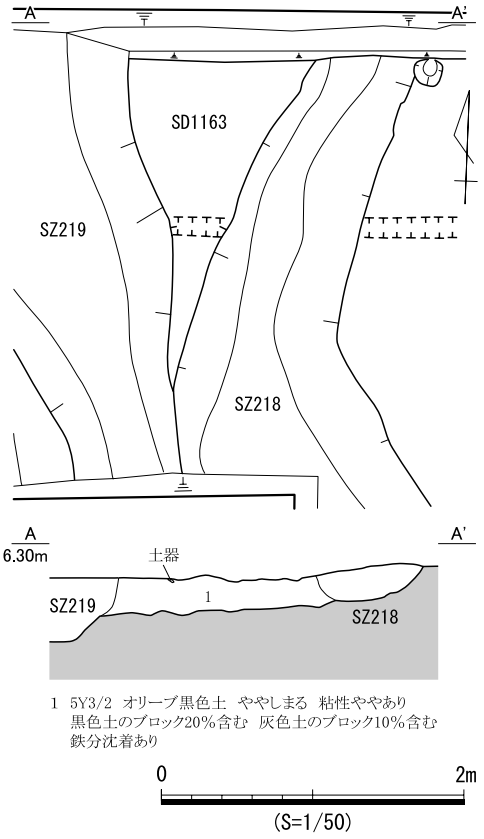


図1673　SD1163遺構図

肥厚気味である。端部には顕著な平坦面を形成する。平坦面上にはハケ調整を施した後に、刺突を加える。胴部にはタタキ後のハケ調整痕が認められる。器壁が厚く、大型品と考えられる。5888はⅣ期甕Ａ類底部。胴部にはハケ目が残る。

時期　Ⅳ期のSZ218、SZ219に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

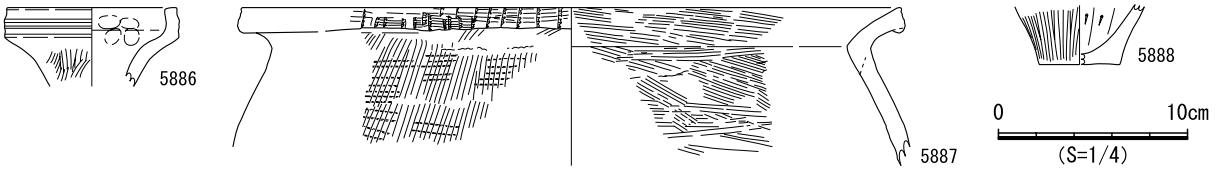


図 1674　SD1163 遺物実測図

SD1166（**遺構：図 1675**）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。Ｉｂ層下、Ｖ層上面での検出であったが、鉄分の沈着が著しく、それを除去した面で検出した。黒色土のまとまりを帯状に確認し、南部は調査区域外にのびる。

形状　平面形は長楕円形と考えられ、東西長幅約1.2ｍ、深さ約0.5ｍである。断面は逆台形状で底面は平坦であり、壁面の傾斜はやや急である。単独の溝あるいはSD1176と組み合う方形周溝墓の周溝の可能性がある。

埋土　６層に分層した。底面から壁面にかけてブロック状の堆積が認められるが、その成因は不明である。なお、上層は中央が窪む堆積である。

遺物出土状況　埋土中から土器６点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。出土土器はⅡ期、Ⅵ期～Ⅶ期のものが確認できる。

時期　不明である。しかし、SD1176との関連性を重視し、Ⅱ期の遺構として報告する。

SD1176（**遺構：図 1675、遺物：図 1676**）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集集域に位置する。Ｖ層上面での検出だが、鉄分沈着が著しく、平面形はやや不明瞭であった。

形状　平面形は不整長楕円形状を呈すると考えられるが、北端の一部が調査区域域外となるため、全形は不明である。検出した範囲では長さ約3.0ｍ、幅0.9ｍ、深さ約0.2ｍである。底面は丸みを帯

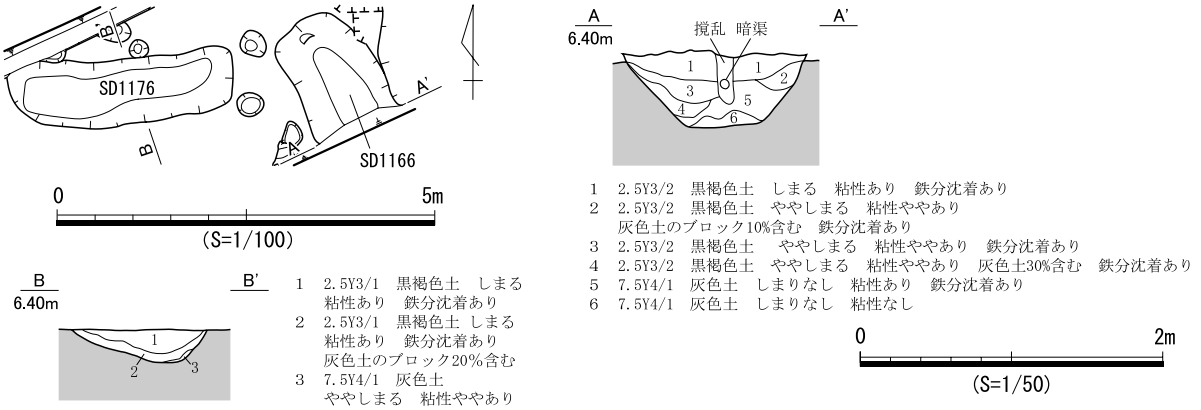


図 1675　SD1166・SD1176 遺構図

び、最深部が北側に偏り、壁面傾斜は北側が急となり、南側は緩やかである。

埋土　３層に分層した。中央が窪む堆積であり、下層にブロック土が混入する。

遺物出土状況　埋土中から土器16点が出土した。出土した土器はⅡ期とⅥ期～Ⅶ期のものであり、SD1166でもⅡ期の遺物が出土していることから、四隅切れの方形周溝墓の可能性もある。

出土遺物　5889はⅡ期壺。胴部には太くて明瞭な沈線が認められ、沈線によって区画された楕円形の内部に縄文が認められる。

時期　出土遺物の時期と、SD1166との関係から、Ⅱ期の遺構として報告する。

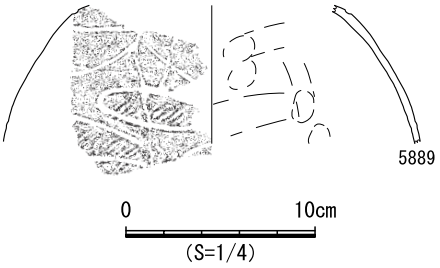


図 1676　SD1176 遺物実測図

SD1175（遺構：図 1677）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。平面形は不明瞭であり、SZ215の掘削後に、その西溝壁面に溝の掘形を確認し、平面精査を経て溝と判断した。なお、SZ215とSZ217に切られる。

形状　ほぼ東西方向に主軸を持ち、東側は調査区内で収束し、西側は調査区域外へとのびている。溝の形状が明確に確認できる東側では、幅約0.9ｍ、深さ約0.3ｍであり、底面は丸みを帯び、南側の壁面傾斜は急だが、北側は緩やかとなる。一方、西側の壁面傾斜は緩やかである。溝の規模や埋土の状況から方形周溝墓の可能性も考えられるが、周辺に組み合う溝は確認できなかった。

埋土　溝の東側では５層に分層した。南壁面沿いに崩落土と考えられる土層を確認でき、中央は水平堆積に近い。一方、西側ではブロック土の混入が顕著である。

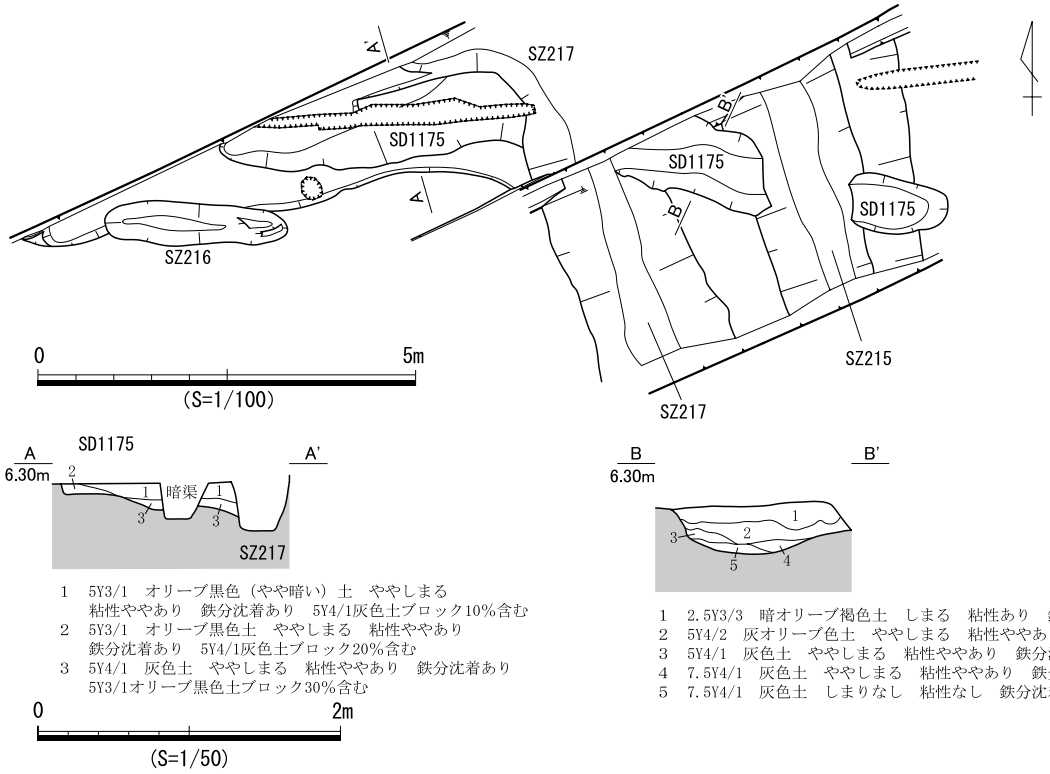


図 1677　SD1175 遺構図

遺物出土状況　埋土中から土器63点が散在して出土した。出土土器はⅥ～Ⅶ期のものが上層から出土しているものの、いずれも小片であり図示していない。

時期　時期不明であるが、Ⅳ期のSZ215、SZ217に切られるため、Ⅳ期以前と考えられる。

SD1270（遺構：図1679、遺物：図1678）

検出状況　東部東側南寄りに位置し、南北両端ともに調査区域外にのびている。平面形は不明瞭であったが、北端でSZ213に切られていると判断した。

形状　南北方向にのびる溝で、幅約0.4ｍ、深さ約0.4ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は中央付近が急であり、南端は東壁面が急、西壁面が比較的急である。なお、底面の標高は北側が高く、南側はやや低い。

埋土　４層に分層した。底面と壁面沿いにブロック土が混入する壁面崩落土が堆積し、その上部には黒色土がほぼ水平に堆積することから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器116点が出土した。溝の南端からⅣ期壺Ａ類の胴部片（5890）がやや斜めに傾いて出土した。

出土遺物　5890はⅣ期壺Ａ類。文様は認められず、肩部の張りはやや強い。

時期　Ⅳ期のSZ213に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

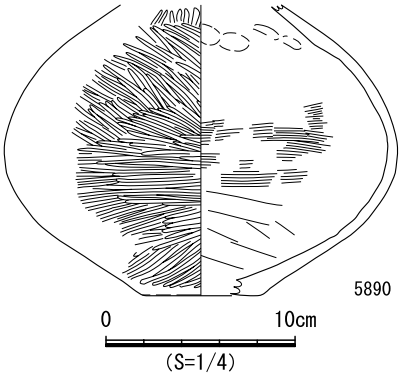


図1678　SD1270遺物実測図

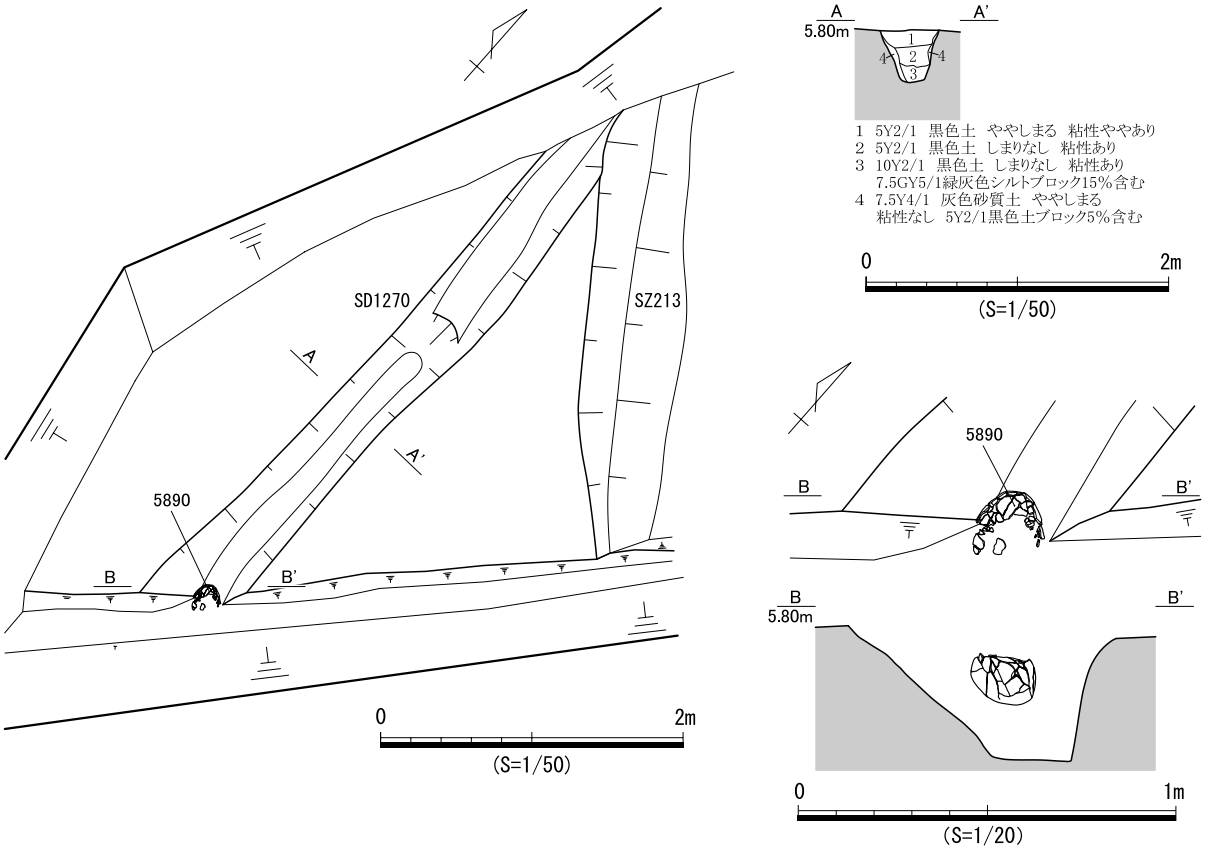


図1679　SD1270遺構図

３　土坑

当該期の土坑は、SD0381の西側のみに分布し、東側では未確認である。なお、土坑の位置は、図1666を参照されたい。以下、順に記載する。

SK05717（遺構：図1680、遺物：図1681）

検出状況　東部西側中央に位置する。SB531の床面で検出し、平面形は不明瞭であった。

形状　長軸長約1.7ｍ、短軸長約1.4ｍの、南北にやや長い不整楕円形を呈する。底面は丸みを帯び、最深部は深さ約0.4ｍで南側に偏る。壁面傾斜は全体的に緩やかであるが、南壁面を除いて複数の平坦面が認められる。

埋土　３層に分層した。３層中にやや大きな土器片を含み、１層にはブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器80点、石器類４点が出土した。埋土下層にて、やや大型のⅠ期遠賀川系土器の破片が出土した。全周する壺の口縁部や、甕の口縁部破片などが確認できる。

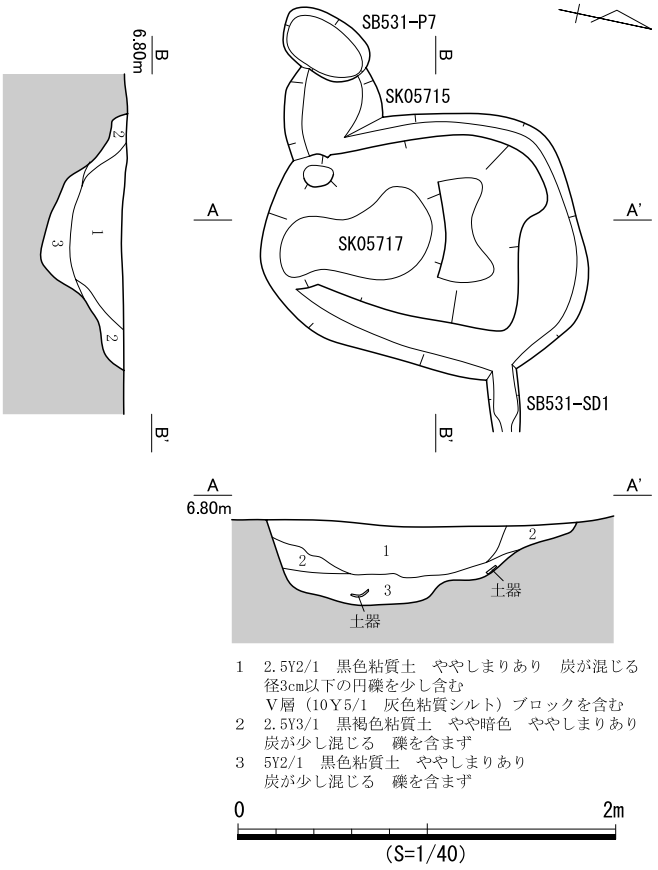


図1680　SK05717遺構図

出土遺物　5891～5894はⅠ期壺。5891は口縁部が外反し、端部に顕著な平坦面を形成する。端部直下には焼成前穿孔が２箇所、向かい合う位置に認められる。頸部には貼付突帯を形成する。5892は胴部片で、肩部が強く張る。5893は沈線２条が認められ、沈線の間には刺突文が認められる。5894は平底の底部である。5895はⅡ期条痕文系の甕。口縁部が短く外反し、内面には粗いハケ目、端部には貝殻による押圧が認められる。外面は頸部以下に貝による条痕が残り、全体に煤が付着する。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB531より先行することと出土遺物の時期から、Ⅰ期～Ⅱ期と考えられる。

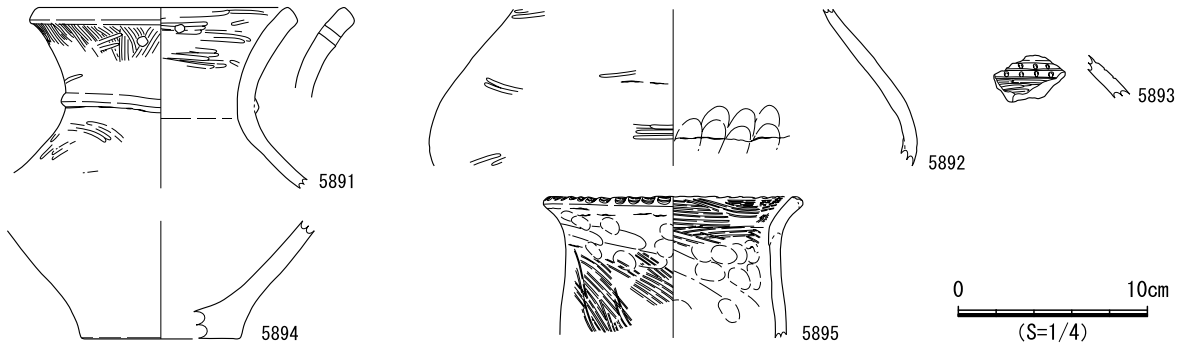


図1681　SK05717 遺物実測図

SK06034（遺構：図 1682、遺物：図 1683）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において、円形にまとまる黒褐色土を確認した。平面形の輪郭は漸移的で、やや不明瞭であった。

形状　長軸長約 0.4ｍの、東西にやや長い楕円形を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は垂直に近い。

埋土　２層に分層した。炭化物やブロック土の混入が認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中からⅣ期の壺Ａ類(5896)が出土した。口頸部から上が欠損しており、頸部を上にし、ほぼ正位で出土した。

出土遺物　5896 はⅣ期壺 A2 類。胴部は算盤玉状を呈し、最大径は胴部中央付近となる。胴部上半には直線文と波状文が交互に施文され、下半は無文でハケによる調整痕が認められる。底部は平底となる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

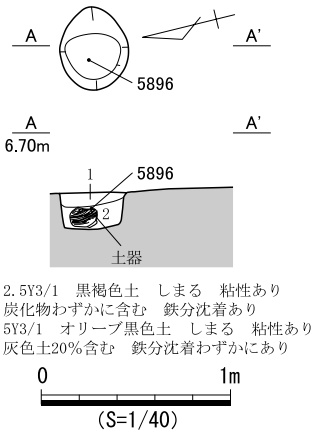


図 1682　SK06034 遺構図

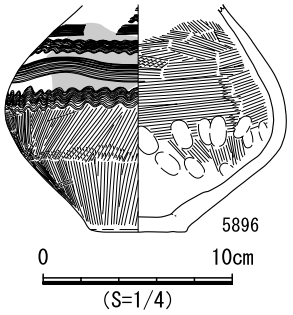


図 1683　SK06034 遺物実測図

SK06041（遺構：図 1685、遺物：図 1684）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、SK06033 掘削後にその底面で検出した。北側は SZ179 を切っていると判断したが、やや不明瞭であった。

形状　南北長約 1.7ｍで、東半分は調査区域外にあるが、全形は円形を呈する。深さは約 0.2ｍで、底面は広くやや凹凸があり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　２層に分層でき、中央が窪む堆積である。層界に凹凸が認められ、遺物が縦位で出土していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器 17 点、石器類１点が出土した。石器類１点は管玉（5897）であり、南壁沿いで、縦位の状態で出土した。なお、土器はいずれも細片であり図示していない。

出土遺物　5897 は管玉。上下端部を欠損しており、上端に研磨痕が残る。

時期　出土遺物から時期の推定は困難である。Ⅳ期の SZ179 と関連する可能性を考え、本節にて報告する。

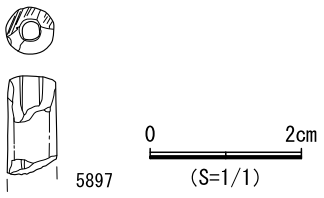


図 1684　SK06041 遺物実測図

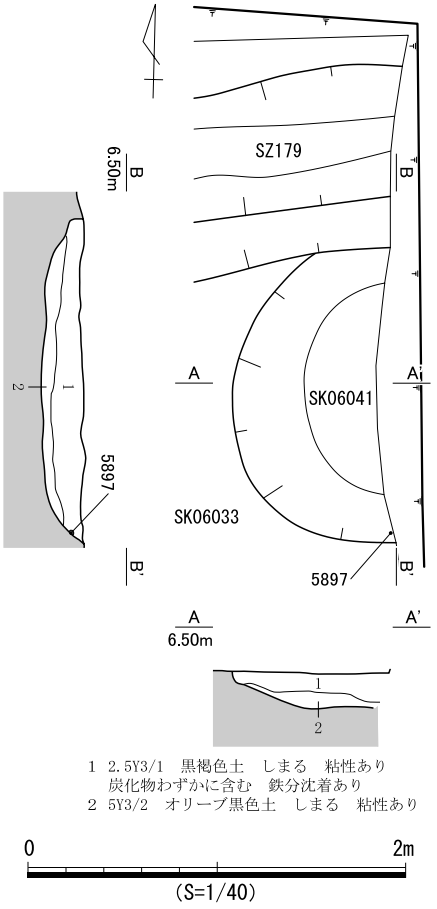


図 1685　SK06041 遺構図

SK06045（遺構：図 1687、遺物：図 1686）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、平面形は明瞭であった。なお、SZ180 を切る。

形状　長軸長約 2.5ｍの不整楕円形を呈する。深さは約 0.5ｍで、底面は若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。壁面の傾斜は緩やかで、東面に一段の平坦面を有する。

埋土　２層に分層した。上層から下層にかけて漸移的に変化し、上層に炭化物やブロック土がわずかに混入する。

遺物出土状況　埋土中から土器 165 点、石器類２点が出土した。出土土器の多くはⅣ期のもので、わずかにⅠ期のものが含まれる。

出土遺物　5898 はⅣ期甕 A2 類。口縁部が短く屈折し、端部にはタタキを加える。摩耗が著しいため、器面調整痕は確認できない。

時期　Ⅳ期の SZ180 を切るが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。

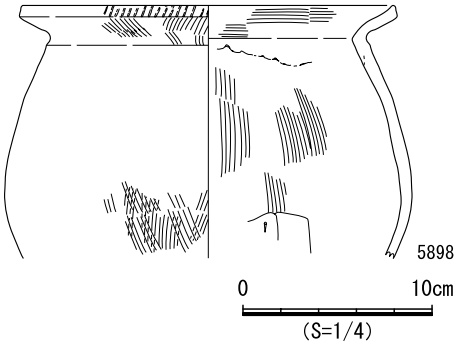


図 1686　SK06045 遺物実測図

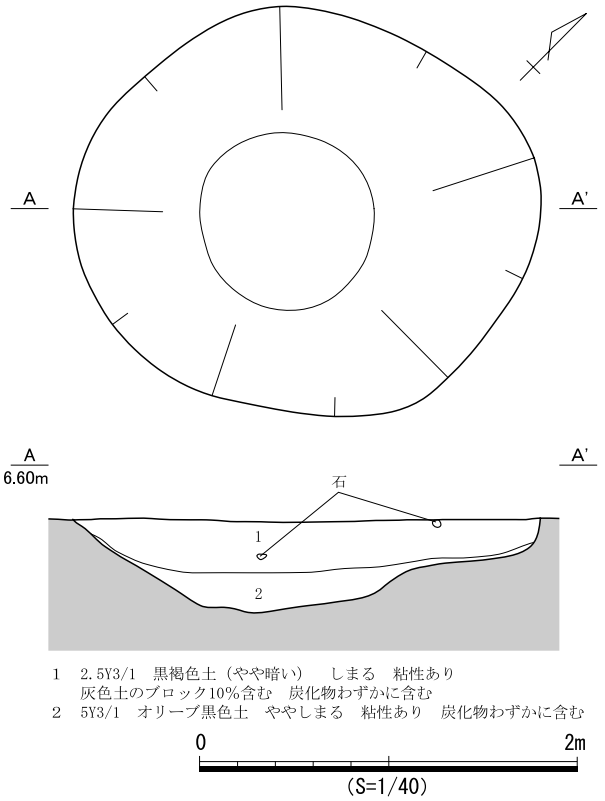


図 1687　SK06045 遺構図

SK06168（遺構：図 1688、遺物：図 1689）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側は調査区域外にのび、SK06164 底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状　南北長約 1.3ｍの不整楕円形を呈する。深さは約 0.4ｍで、底面中央付近が最も深い。底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的緩やかで幾つかの平坦面を有する。

埋土　６層に分層した。中央が窪む堆積であり、埋土全体に炭が含まれている。壁面沿いには崩落土と考えられるブロック土がわずかに堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

遺物出土状況　埋土中から土器 216 点が散在して出土した。出土土器の時期はほぼⅣ期にまとまっており、他時期の土器がほとんど認められない。

出土遺物　5899 はⅣ期壺 A2 類。胴部に直線文及び波状文を施文する。5900、5901 はⅣ期甕 A2 類。ともに大型品で口縁部が短く外反する。端部下端にはキザミを加え、頸部には突帯を貼付した上に刺突を加える。5900 は胴部に右下がり斜め方向にハケ調整を行い、後にタタキを施す。口縁端部にも一部タタキが認められる。5901 の胴部は、タタキの後にハケ調整を施す。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

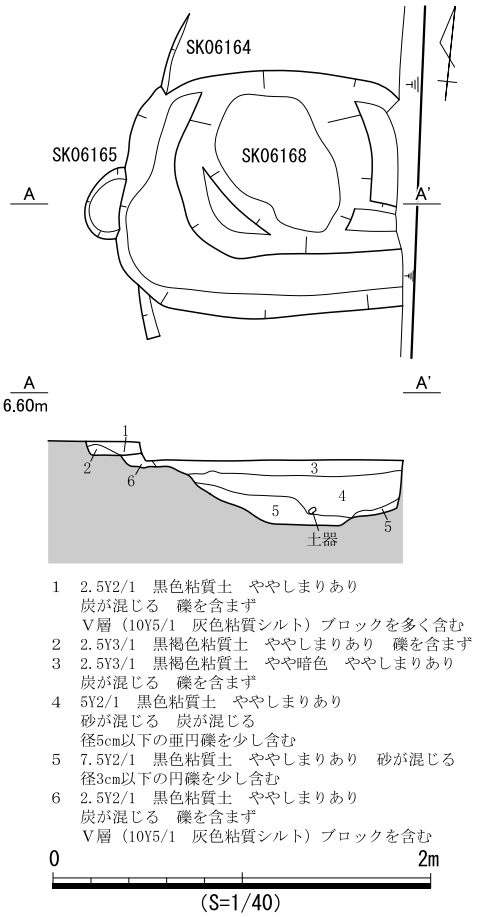


図 1688　SK06168 遺構図

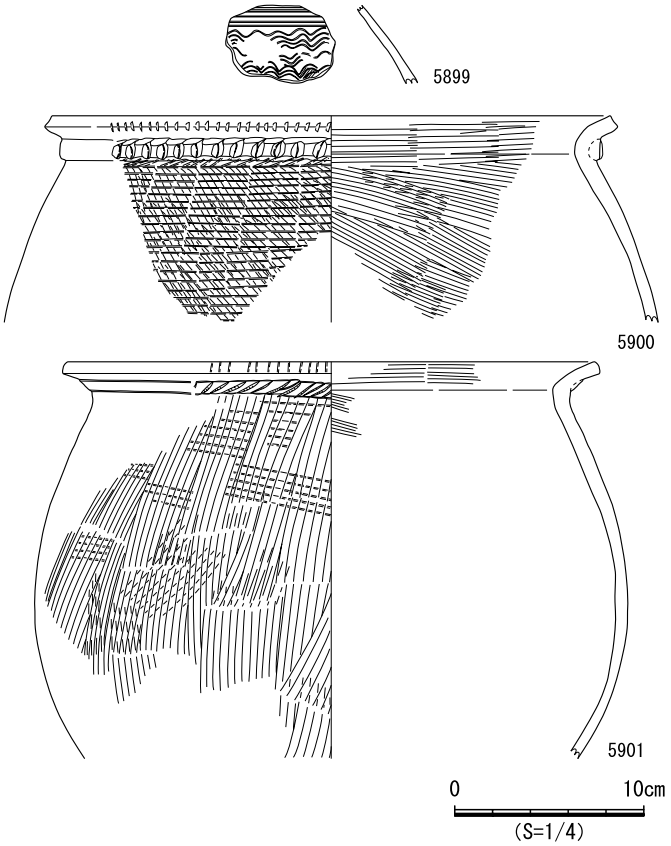


図 1689　SK06168 遺物実測図

SK06287（遺構：図 1690、遺物：図 1691）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SZ219 の周溝底面において黒色土が楕円形状にまとまる部分を検出し、大型の土坑と判断した。平面形は明瞭であった。

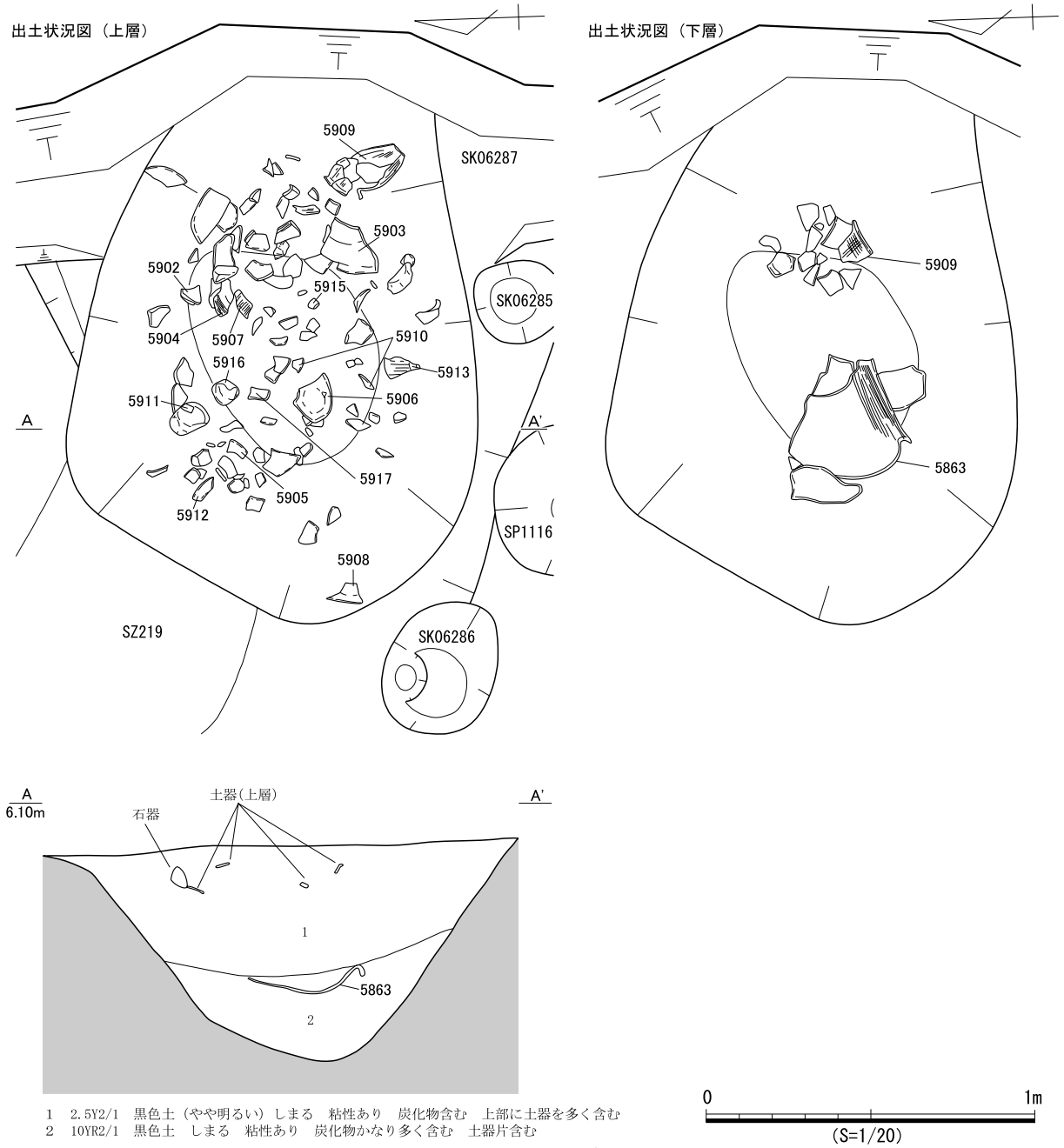
形状　長軸長約 1.6 m以上の不整楕円形を呈する。深さは約 0.7 mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。中央が窪む堆積で、全体に炭化物を多く含むことから、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器 360 点、石器類３点が出土した。遺物は埋土全体から散在して出土したが、上層のものは概ね横位で出土し、層界付近にてSZ219 出土土器と接合関係のあるⅣ期甕（5863）が横位で出土した。出土土器はほぼⅣ期のものであり、Ⅶ期の小型壺は混入と考えられる。

出土遺物　5902 はⅣ期壺 A1 類。口縁部が屈曲してわずかに内傾し、端部はやや丸みをもつ。口縁部外面には顕著な凹線を２条施文し、５条からなる直線文が認められる。胴部上半には細かいハケ調整が施される。5903 ～ 5906 はいずれもⅣ期壺 B2 類。口縁部が屈曲して直立し、端部には顕著な平坦面を形成する。5906 以外は外面に数条の凹線を施文し、頸部にはハケ調整を施す。5903、5906 は大型品である。5903 は頸部にやや乱雑な直線文が認められる。5904 は、端部形成時の輪積み痕が残る。5905 は端部が内面にやや肥厚する。5906 は胴部、底部にハケ目が残る。5907 はⅣ期壺Ｃ類。頸部が緩やかに外反して長く立ち上がり、口縁部が強く外反する。端部を下方に拡張し、やや外傾する平坦面を明瞭に形成する。平坦面上には３条の凹線を施文し、その上から複合クシによる縦位の直線文を

部分的に施文する。口縁部内面には扇形文を全面に施文し、２個１対の瘤状突起を３箇所に配置する。頸部と胴部の境には突帯を貼付し、ナデによって尖らせる。突帯直上にはやや雑ながら、振り幅の小さい波状文を施文し、突帯下方には直線文と波状文を交互に施文する。5908はⅦ期壺G2b類。口縁部の屈曲は弱く、わずかに外傾する。端部を丸くおさめ、外面には端部直下にのみ多条沈線が認められる。5909～5912はⅣ期甕A2類。5909はほぼ完存する資料で、胴部はなだらかに膨らむ。底面にもわずかなハケ目が認められる。5910、5911は口縁端部下端にタタキを加える。5912は器面の摩耗が著しい。5913～5915はいずれもⅣ期甕Ａ類底部。底部直上からほぼ垂直に胴部が立ち上がり、胴部は器壁が薄く、縦位のハケ調整を施す。内面にはケズリが認められる。5916はⅠ期遠賀川系土器の壺底部。5917はⅠ期遠賀川系土器の鉢。口縁部が外反して頸部直下に削り出し段を形成する。



1　2.5Y2/1　黒色土（やや明るい）しまる　粘性あり　炭化物含む　上部に土器を多く含む
2　10YR2/1　黒色土　しまる　粘性あり　炭化物かなり多く含む　土器片含む

図 1690　SK06287 遺構図

時期　Ⅳ期のSZ219に切られるが、出土遺物の時期からⅣ期と考えられる。SZ219出土土器（5863）との接合関係により、平面形を誤認した可能性がある。

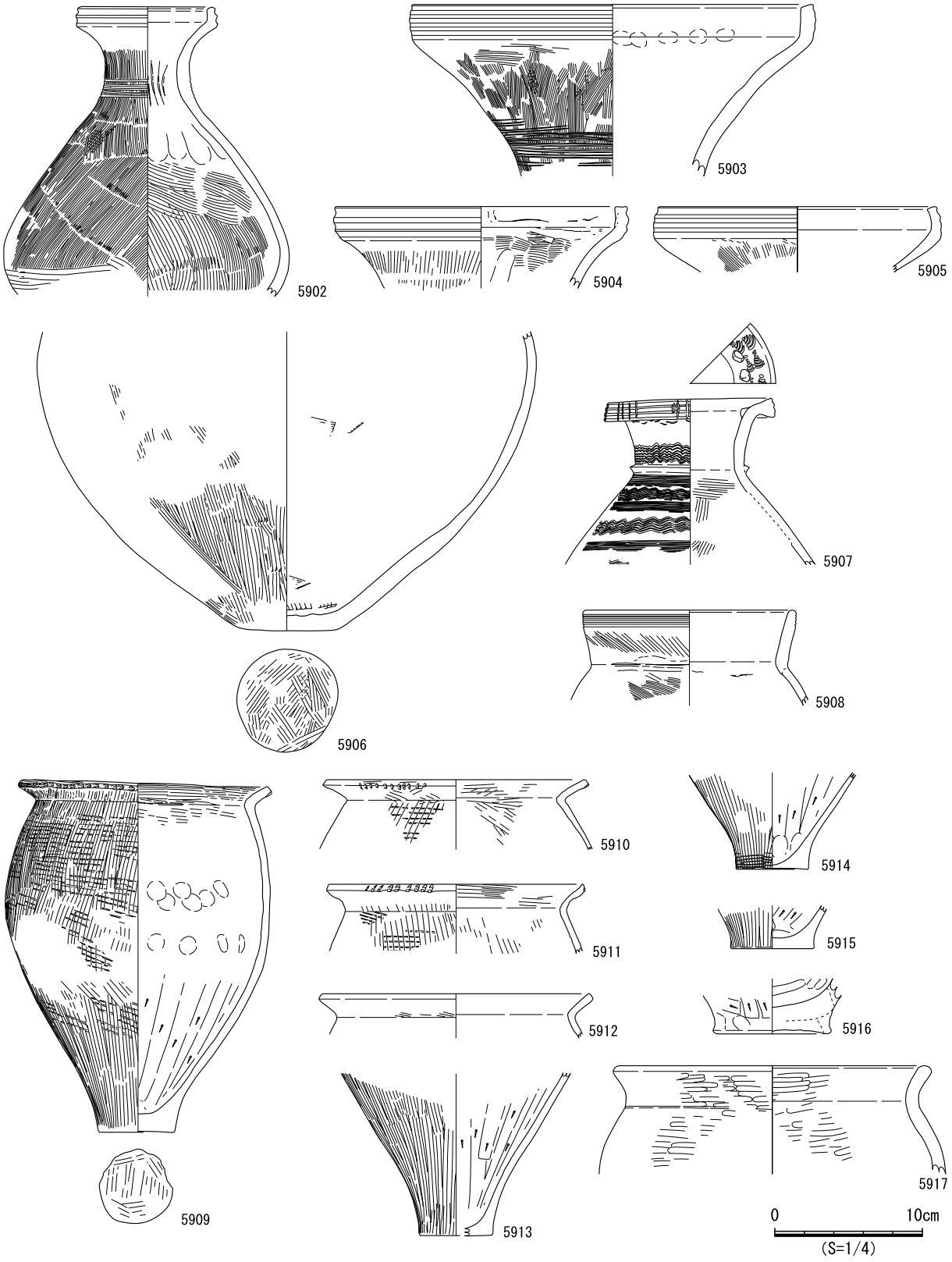


図 1691　SK06287 遺物実測図

SK06547（遺構：図1692、遺物：図1693）

検出状況　東部中央南寄りの、SZ189南東溝の東側に位置する。SD2130底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状　長軸長約1.2ｍの不整楕円形を呈する。深さは約0.2ｍで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　３層に分層した。３層は壁面沿いに堆積し、ブロック土が混入することから崩落土と考えられる。２層はブロック土の混入が多く、崩落土か人為堆積かの区別ができない。

遺物出土状況　埋土中から土器31点が出土した。出土土器はいずれもⅣ期に属し、中央南寄りで壺Ａ類（5919）が口縁部を南に向けて、北端で壺Ａ類（5918）の胴部片が横位で出土した。

出土遺物　5918はⅣ期壺Ａ類。胴部は無文で、下半が強く張り出す。5919はⅣ期壺Ａ2類。口縁部が袋状を呈し、内湾する。端部直下には凹線が４条認められ、下方には斜位の刺突文を３帯施文する。凹線上には数条の縦位の沈線が認められる。頸部には複数の沈線を施し、胴部に至る。5920はⅣ期甕Ａ2類。口縁部が屈曲するが、磨滅が著しい。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

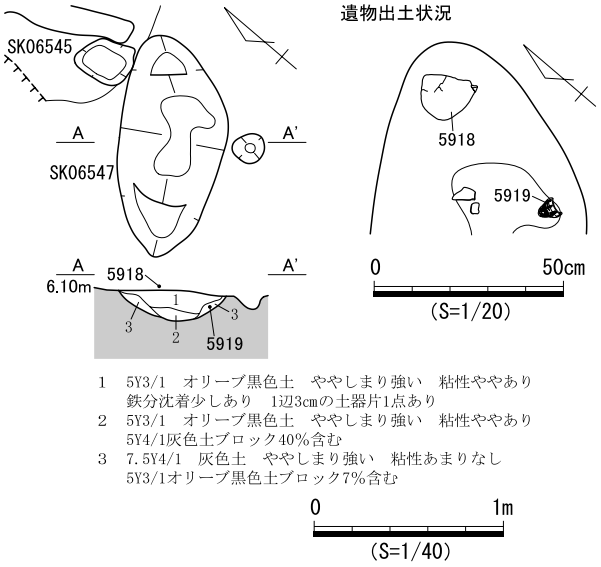


図1692　SK06547遺構図

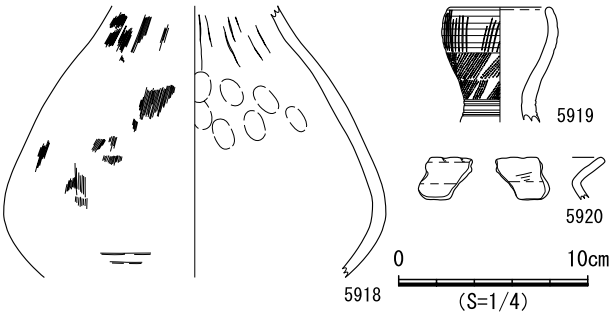


図1693　SK06547遺物実測図

SK06554（遺構：図1694、遺物：図1695）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SK06354底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状　長軸長約0.3ｍの不整楕円形を呈する。深さは約0.2ｍであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土　３層に分層した。ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器19点が出土した。出土土器はいずれもⅣ期に属する。

出土遺物　5921、5922ともにⅣ期壺Ｈ類。黒褐色の胎土が特徴的である。5921は、やや幅広の直線文帯が２帯認められる。5922には横位の直線文帯とその上方に波状文らしき文様が認められ、同じ工具によって施文される。

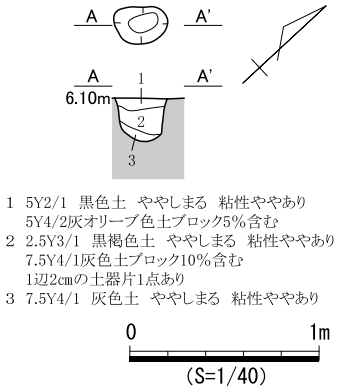


図1694　SK06554遺構図

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSK06354に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

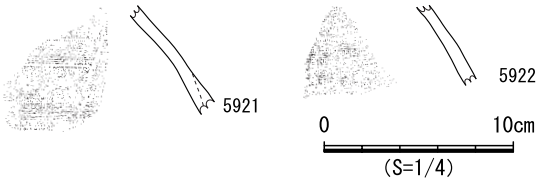


図 1695　SK06554 遺物実測図

SK06558（遺構：図 1697、遺物：図 1696）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。SK06354底面で検出し、平面形は明瞭であった。

形状　長軸長約0.8ｍの不整楕円形を呈する。深さは約0.1ｍであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。全体的にブロック土が混入しており、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器４点が出土した。いずれも小片である。

出土遺物　5923はⅣ期壺Ｈ類。胴部に横位の直線文帯が３帯認められる。

時期　出土遺物は少ないが、SK06554と同様の検出状況であることと出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

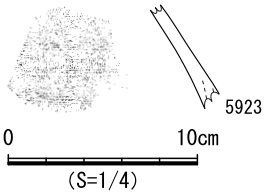


図 1696　SK06558 遺物実測図

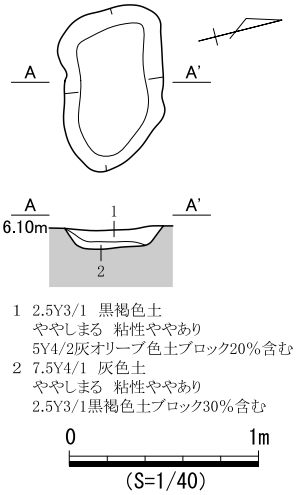


図 1697　SK06558 遺構図

SK06584（遺構：図 1698、遺物：図 1699）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域南に位置する。北側は撹乱により失われ、南側と東側は調査区域外にのびる。周辺はⅣ層の堆積がほとんど確認できず、Ⅰ層除去後にⅤ層表出面で検出した。な

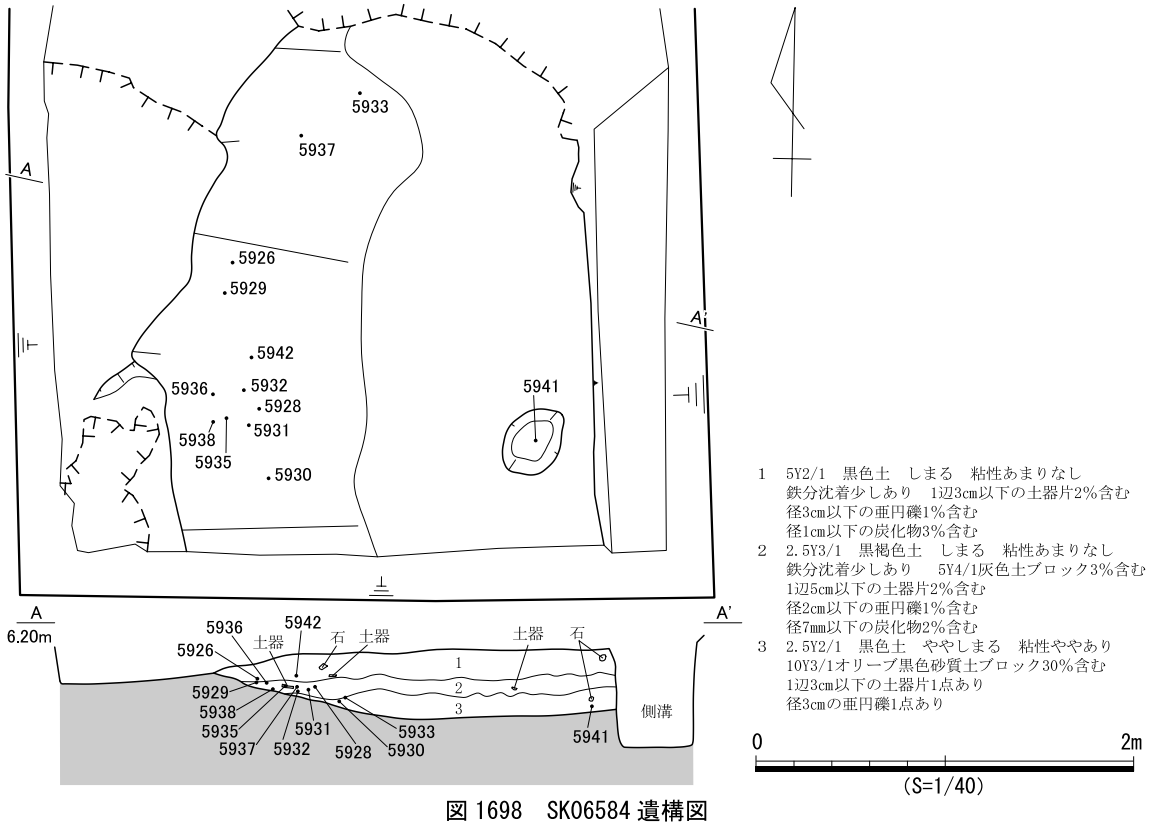


図 1698　SK06584 遺構図

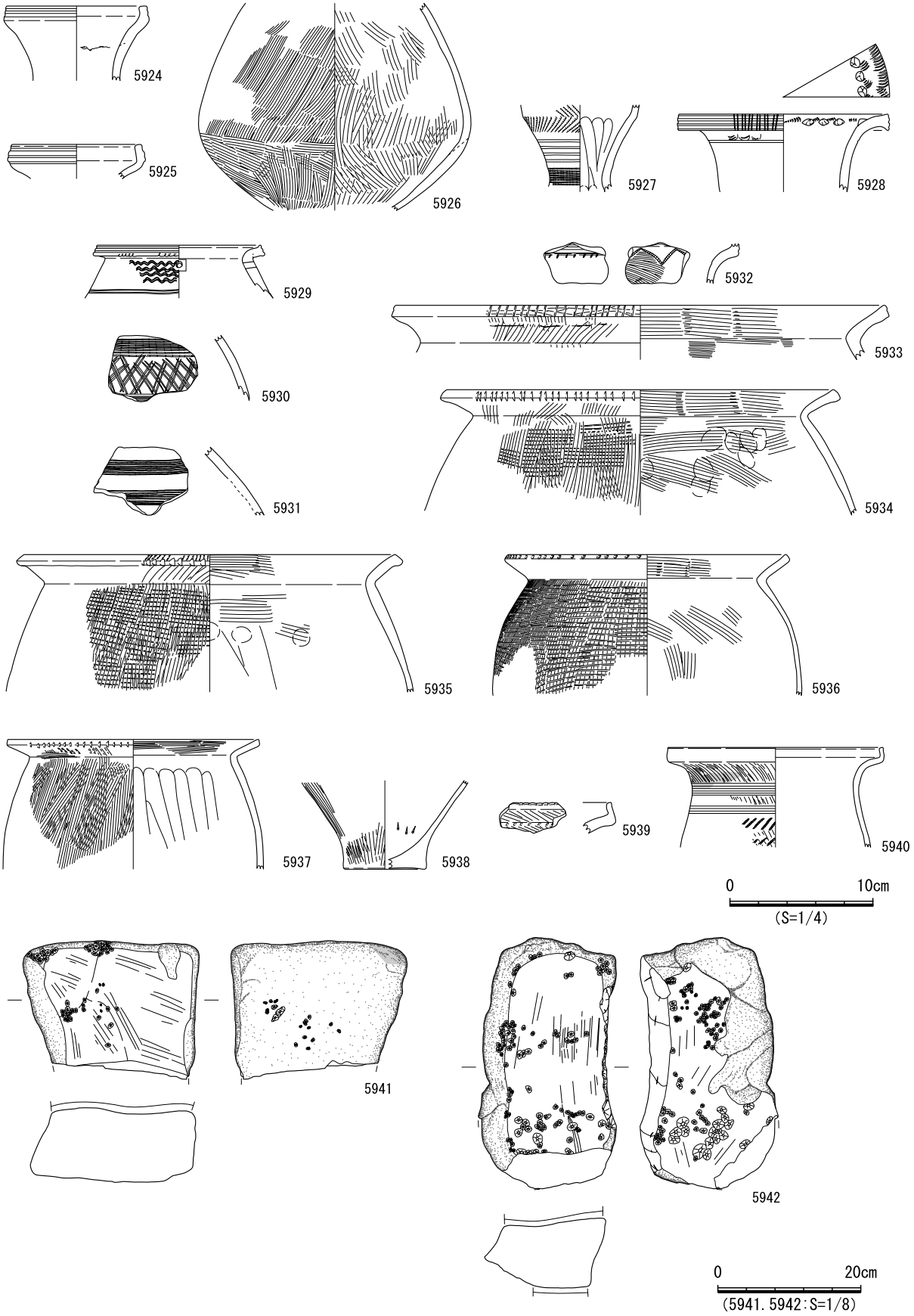


図 1699　SK06584 遺物実測図

お、平面形は不明瞭であった。

形状　全形や規模は不明である。最深部は深さ約0.4ｍで、底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　３層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土が混入し層界の凹凸も認められることから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器1,527点、石器類８点が出土した。出土土器はⅣ期～Ⅶ期に属するが、大半はⅣ期の土器でありⅤ期以降のものは混入と考えられる。土器の多くは遺構の周縁部から出土しており、土器とともに砥石（5942）が出土した。また、中央の浅い凹みからも砥石（5941）が出土した。

出土遺物　5924～5926はいずれもⅣ期壺A1類。5924、5925は口縁部が屈曲してわずかに内湾し、端部には平坦面を持つ。端部外面には２～３条の凹線を施文する。5926は全面にハケ調整を施し、胴部の最大径部が強く屈曲する。5927はⅣ期壺A2類。頸部には廉状文が認められ、胴部にかけて直線文、羽状文を施文する。5928はⅣ期壺Ｃ類。口縁部が外反し、端部を下方に拡張する。内面にはクシ状工具による扇形文を施文し、内面には３個もしくは４個１組の瘤状突起を加飾する。端部には凹線を３条施文し、端部の凹線上から、２組の複合クシによる縦位の直線文を複数個所に施文する。5929はⅣ期壺Ｆ類。口縁部が短く外反する無頸壺で、平坦に仕上げた端部には凹線を施文し、下端には刺突を加える。屈曲部直下には振り幅の小さい波状文を施文し、その波状文帯に穿孔が認められる。波状文以下は横位のタタキの後にハケ調整を施す。5930はⅣ期壺。胴部上半に廉状文を施文し、下方に２条１組の複合クシによる斜格子文が認められる。さらに下方には直線文が認められる。5931はⅣ期壺Ａ類。胴部上半に廉状文帯が２帯認められる。5932はⅥ期～Ⅶ期壺Ｋ類。口縁部が大きく外反し、屈曲して直立する。内面には大振りの山形文を施文し、端部下端にはキザミを加える。5933～5937はいずれもⅣ期甕A2類。いずれも口縁部が短く屈曲する。5933は器壁が厚い大型品で、端部の平坦面にタタキが残る。内外面ともに粗いハケ目が顕著に残る。5934～5936は器形が酷似する。平坦な端部下端にタタキが残り、胴部には横位のタタキの後に縦位のハケ調整を施す。5937は端部下端にタタキが残る。5938はⅣ期甕Ａ類底部。5939、5940はともにⅣ期甕B2類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部外面には刺突を加える。5940の頸部には複数の直線文帯が認められる。5941、5942は砥石。いずれも自然面が残る大型の亜円礫を素材としており、表裏の扁平な面を主に砥面として利用しており、敲打痕も確認できる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SK07284（遺構：図1700、遺物：図1701）

検出状況　東部中央北寄りに位置し、SK07286底面で検出した土坑であり、平面形は明瞭であった。SK07286底面を少し掘りすぎたために、隣接するSK07285との新旧関係は不明であり、SK07285と同一遺構の可能性もある。

形状　長軸長約0.6ｍの東西に長い不整楕円形を呈する。深さは0.1ｍ未満と浅く、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　単層である。ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器37点、石器類３点が散在して出土した。出土土器はいずれも細片で

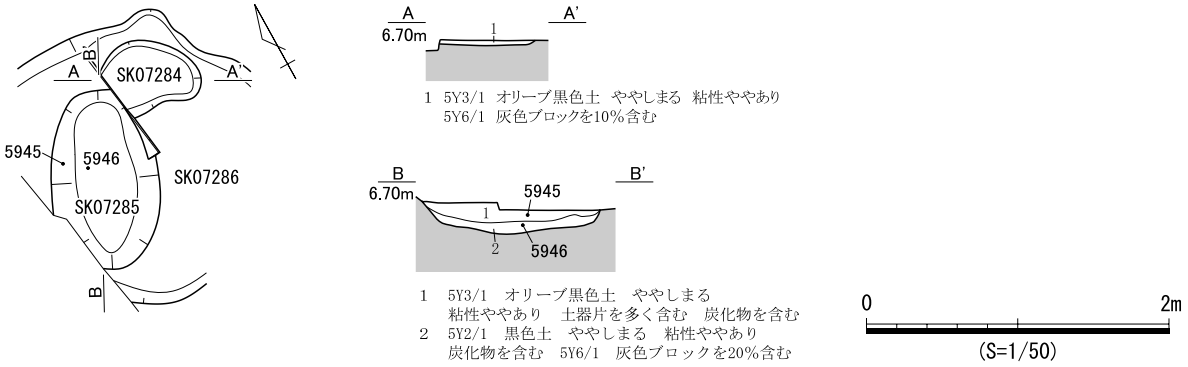


図 1700　SK07284・SK07285 遺構図

あり、時期の特定が困難である。

出土遺物　5943は叩石である。長楕円礫が中央付近で割れており、その折損部と下端に敲打痕が残り、下端の敲打痕は石材先端の周縁部に認められる。

時期　出土遺物から時期の言及は困難だが、検出状況がSK07285と類似していたことからⅣ期と考える。

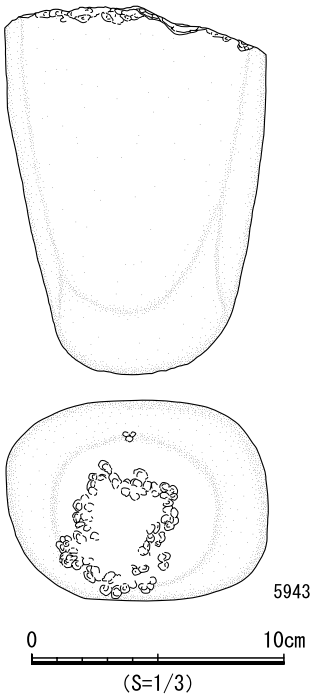


図 1701　SK07284 遺物実測図

SK07285（遺構：図 1700、遺物：図 1702）

検出状況　東部中央北寄りに位置し、SK07286底面で検出した土坑であり、平面形は明瞭であった。なお、検出面ですでに土器片が出土しており、先述したようにSK07284と同一遺構の可能性もある。

形状　長軸長約1.2ｍの、北東から南西方向に長い不整楕円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。中央が窪む堆積であり、上層に炭化物を含み、下層にブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器55点が出土した。検出面及び上層と下層の層界付近での出土が目立つ。出土土器の大半はⅣ期に属する。

出土遺物　5944はⅣ期壺Ａ類。頸部に直線文帯が３帯認められる。5945はⅣ期壺Ｃ類。平底で厚手の底部から、胴部が緩やかに開いて立ち上がる。5946はⅣ期甕A2類。口縁部が緩やかに屈曲し、端部は面取りしてタタキを加える。頸部内外面にハケ調整が認められる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

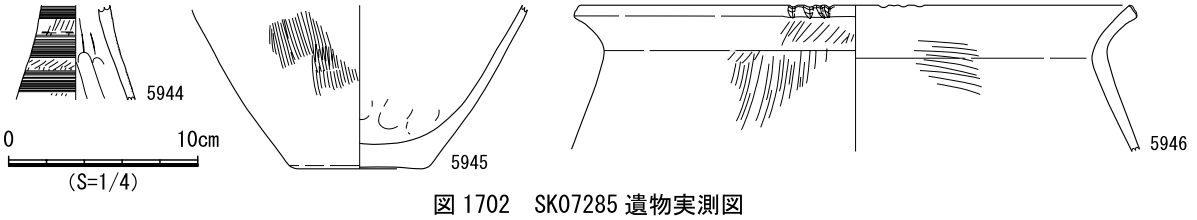


図 1702　SK07285 遺物実測図

第３節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

東部域の弥生時代後期から古墳時代前期（Ⅴ期～Ⅸ期）の遺構として、竪穴住居跡108軒、掘立柱建物跡３棟、柵跡３基、単独柱穴15基、炉跡１基、溝状遺構53条、土坑83基、水田跡21筆について、以下に報告する。

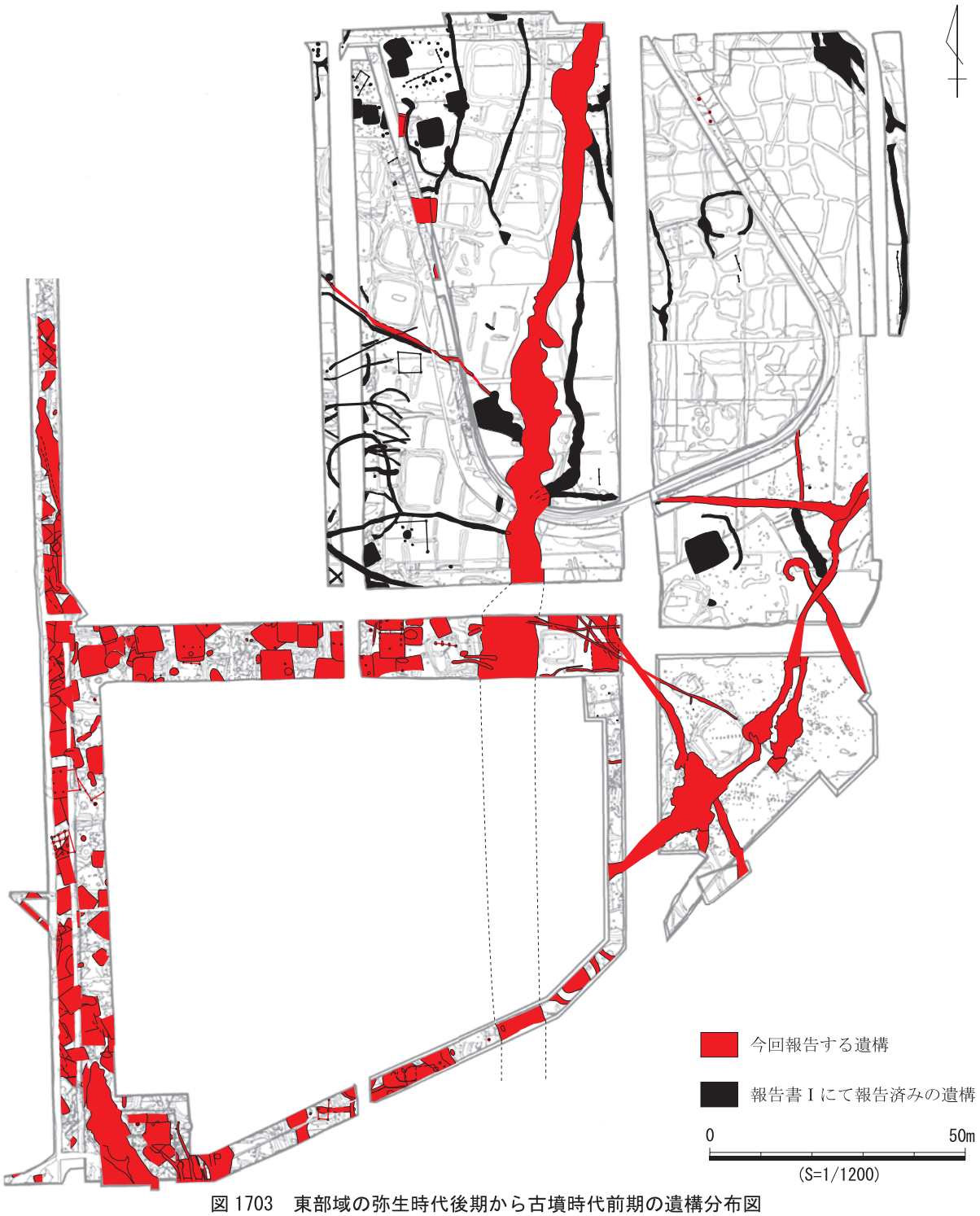


図 1703　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構分布図

１　建物跡・柵跡

東部域では西側において建物跡が高い密度で分布する。特に竪穴住居跡は西部域から連続する範囲に密集して分布しており、５軒以上の竪穴住居跡が重複していることが珍しくない。以下、(1)竪穴住居跡、(2)掘立柱建物跡、(3)柵跡の順に記載する。

図 1704　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図（１）

図 1705　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図（２）

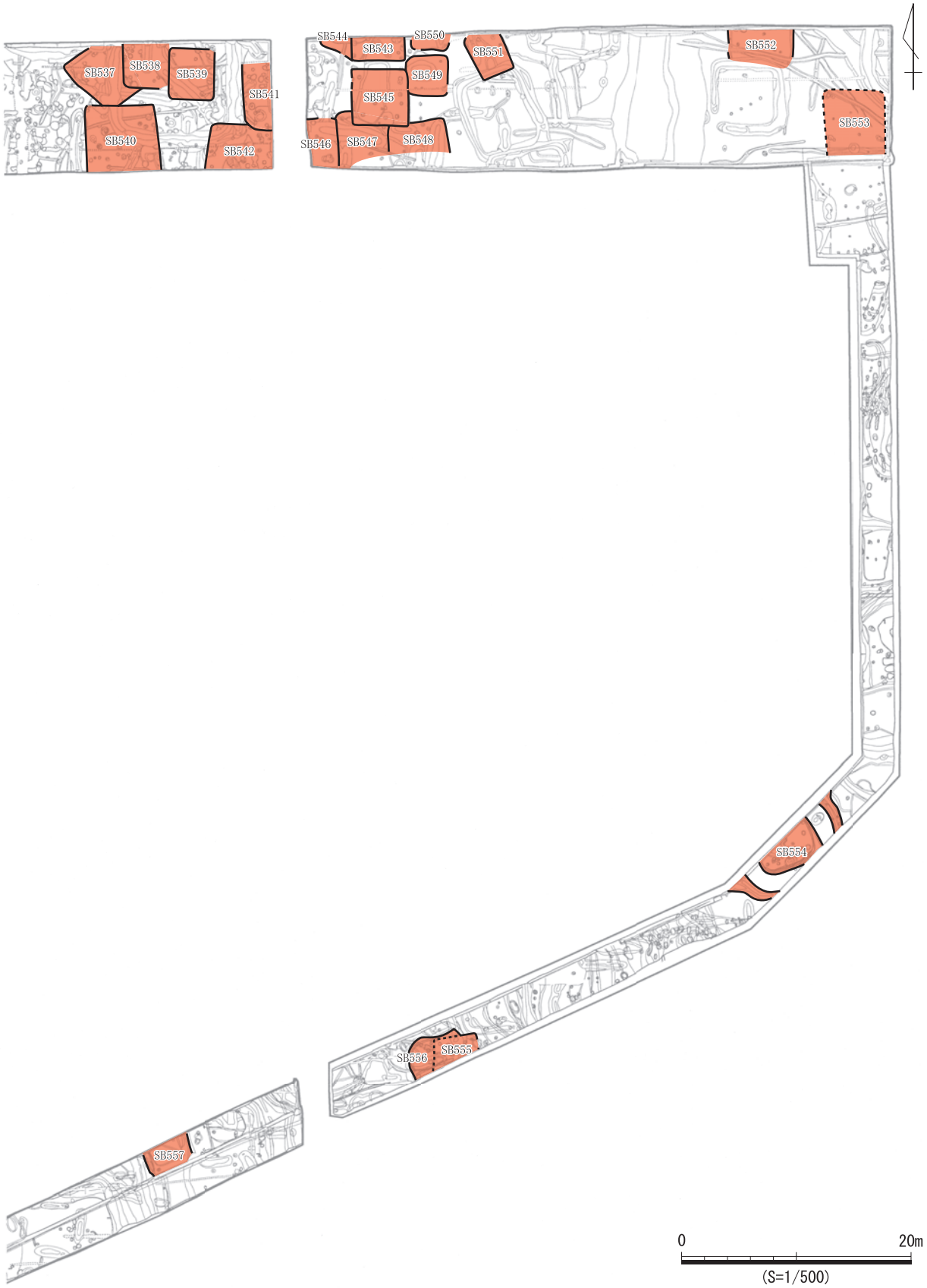


図 1706　東部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図（３）

(1)　竪穴住居跡

SB114（遺構：図 1707、遺物：図 1708）

検出状況　東部中央北寄りの竪穴住居が密集する場所に位置し、東半分は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みである。本遺構が位置する上面の遺物包含層中には炭化物や小土器片が多く出土したが、遺構を確認したのはＶ層上面であった。東側でSD0562とSD0566を切り、西側の大半は撹乱により失われている。

形状　規模は不明であるが隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

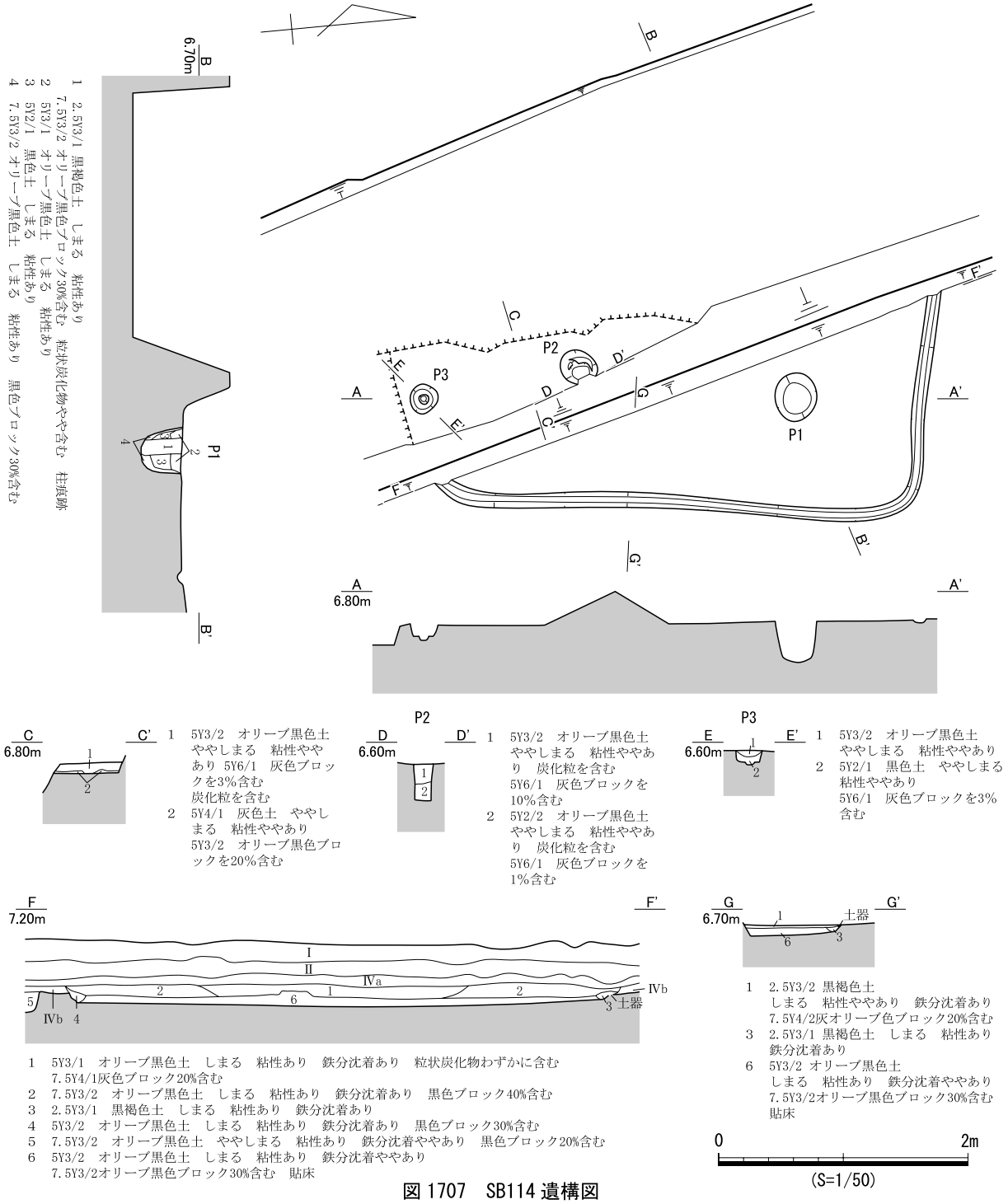


図 1707　SB114 遺構図

埋土　今回報告する範囲では２層に分層し、貼床（整地土）は確認できなかった。上下層ともにブロック土が混入し、上層にて遺物包含層から連続すると考えられる炭化物を確認した。

床面　『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』では「床面はほぼ平坦で、硬化が著しく貼床が全面に及んでいた。」と記載されているが、今回報告する範囲では埋土２層上面で遺構及び硬化面が確認できなかったため、Ｖ層上面を床面と認識した。床面では小穴２基を確認し、そのうちP2は掘形が深く、壁面の傾斜はほぼ垂直であった。また、P3の底面では柱当たりの可能性がある円形の窪みを確認した。平面的な位置関係と掘形の深さから、P1とP2が柱穴と考えられる。なお、焼土は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器58点が出土したが、小穴からは出土しなかった。

出土遺物　5947はＶ期～Ⅵ期甕A2b類。口縁部が屈曲して端部が直立する。端部には平坦面を形成し、外面には刺突を加える。

時期　『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』で検討したように、遺構の重複関係からⅥ期後半と考えられる。

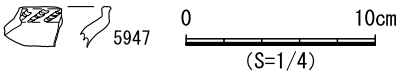


図 1708　SB114 遺物実測図

SB116（遺構：図 1709・1710）

検出状況　東部中央北寄りの竪穴住居が密集する場所に位置し、東側と西側は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ｉ』にて報告済みである。07_42地点の調査結果からⅣ層中での遺構検出を心掛けたが、結果として全体

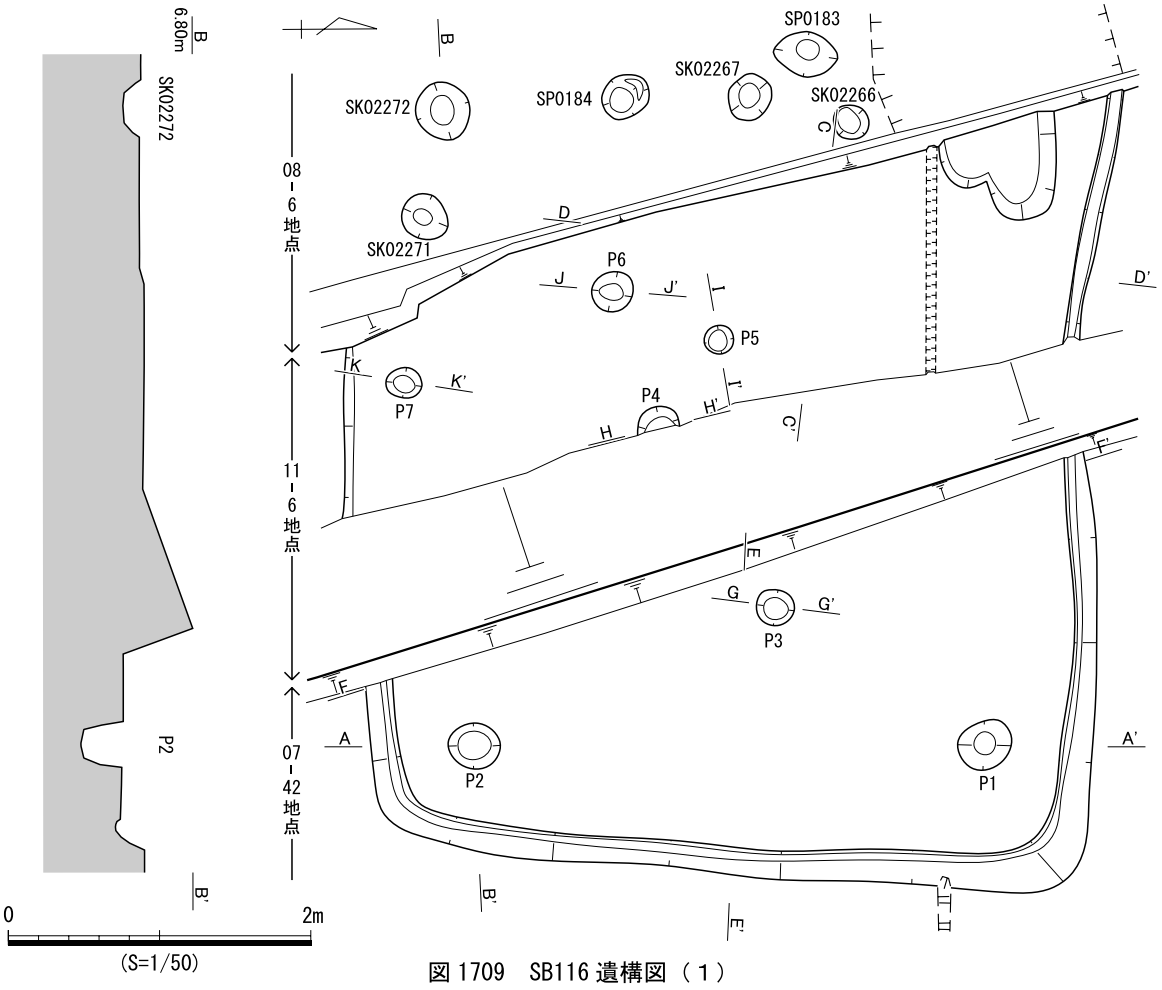


図 1709　SB116 遺構図（１）

的にⅤ層上面まで下げてから平面形を検出した。また、検出時にはすでに壁溝が見えていた。

形状　南北長約5.0ｍであり、東西の規模は不明である。北壁沿いの壁溝の平面形から、東西に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。

埋土　今回報告する範囲は検出時にすでに床面が見えており、埋土の様相は不明である。

床面　ほぼ全面にブロック土を多く含む貼床土（整地土）を確認した。床面上では小穴３基（P4～P6）を検出し、貼床除去後に１基（P7）を検出した。しかし、いずれも掘形が浅いため柱穴とは考えにくく、平面的な位置関係からP1、P2、SK02272（もしくはSK02271）が柱穴と考えられる。このため、掘形は08_6地点まで及んでいた可能性がある。なお、焼土は確認できなかった。

遺物出土状況　貼床土から土器49点、壁溝から土器１点、土坑から土器２点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』で検討したように、周辺の遺構の状況からⅥ期と考えられる。

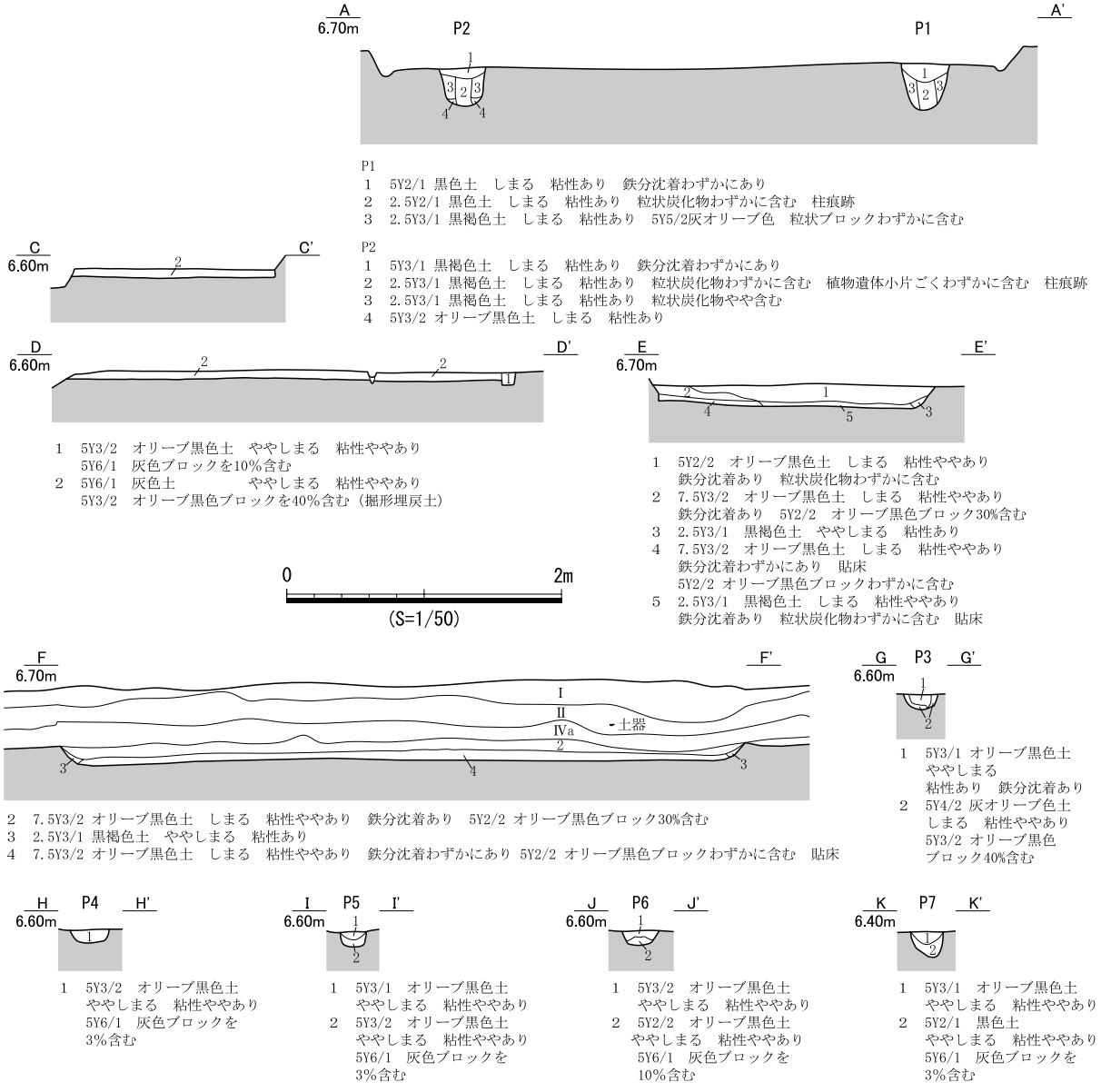


図 1710　SB116 遺構図（２）

SB455（遺構：図1712、遺物：図1711）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。南側はSB458に切られ、東側でSB456を切っている。周辺遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であり、遺構検出が困難であった。また、床面の遺構も不明瞭で、SB456の壁溝を先行して掘削してしまった。

形状　南東辺と北東辺を検出し、東隅が直角気味に屈折することから、全体形は方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　３層に分層した。いずれの層にもブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて、撹乱下で検出したP1、P5、P6を含む小穴を12基検出し、そのうちP1、P2、P11では土層断面で柱痕跡を確認でき、平面的な位置関係からP1とP2が柱穴と考えられる。また、P3は東西に長い長軸長0.90ｍ、短軸長0.56ｍの楕円形を呈する小穴である。底面が丸みを帯び、埋土中にブロック土の混入が多く認められることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。なお、焼土と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器365点、小穴から土器105点、石器類１点が出土した。小穴のうち、P2から土師器片が比較的多く出土している。出土土器の時期はⅥ期～Ⅶ期が多く、P12からはⅥ期～Ⅶ期の甕脚部（5948）が出土した。

出土遺物　5948はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。脚裾部がわずかに内湾する。5949はⅤ期～Ⅶ期甕Ｆ類。外面にタタキ痕が明瞭に残る。5950はRF。縦長剥片の一側面に微細な剥離が認められる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

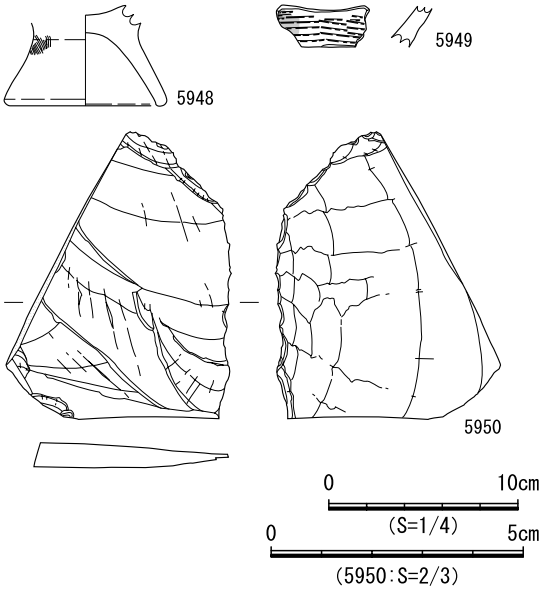


図1711　SB455遺物実測図

SB456（遺構：図1713）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側でSB455を切り、東側でSB457とSK05399に切られる。検出面ですでに床面と壁溝を確認できた。

形状　壁溝の新旧関係から本遺構の平面形は北西－南東に長い長方形から方形へ変化したと考えられる。しかし、いずれも北西－南東長約2.7ｍ～3.5ｍ、南西－北東長約2.6ｍ～2.8ｍと小規模である。

埋土　検出時に床面がみえており、土層図３層は掘形埋土である。掘形埋土はブロック土を含み、掘形底面は平坦であった。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴を３基、壁溝４条を検出した。小穴のうち、P1は土層断面で柱痕跡を確認できた。また、南東から南西の壁溝は造り替えられており、遺構の切り合い関係から外側が古く、内側が新しい。なお、焼土は確認できなかった。

遺物出土状況　掘形埋土中から土器51点、小穴から土器33点、壁溝から土器99点が出土した。埋土中の出土土器は細片が多く、時期が判別できるものはⅥ期～Ⅶ期である。壁溝からⅦ期末の高坏が出

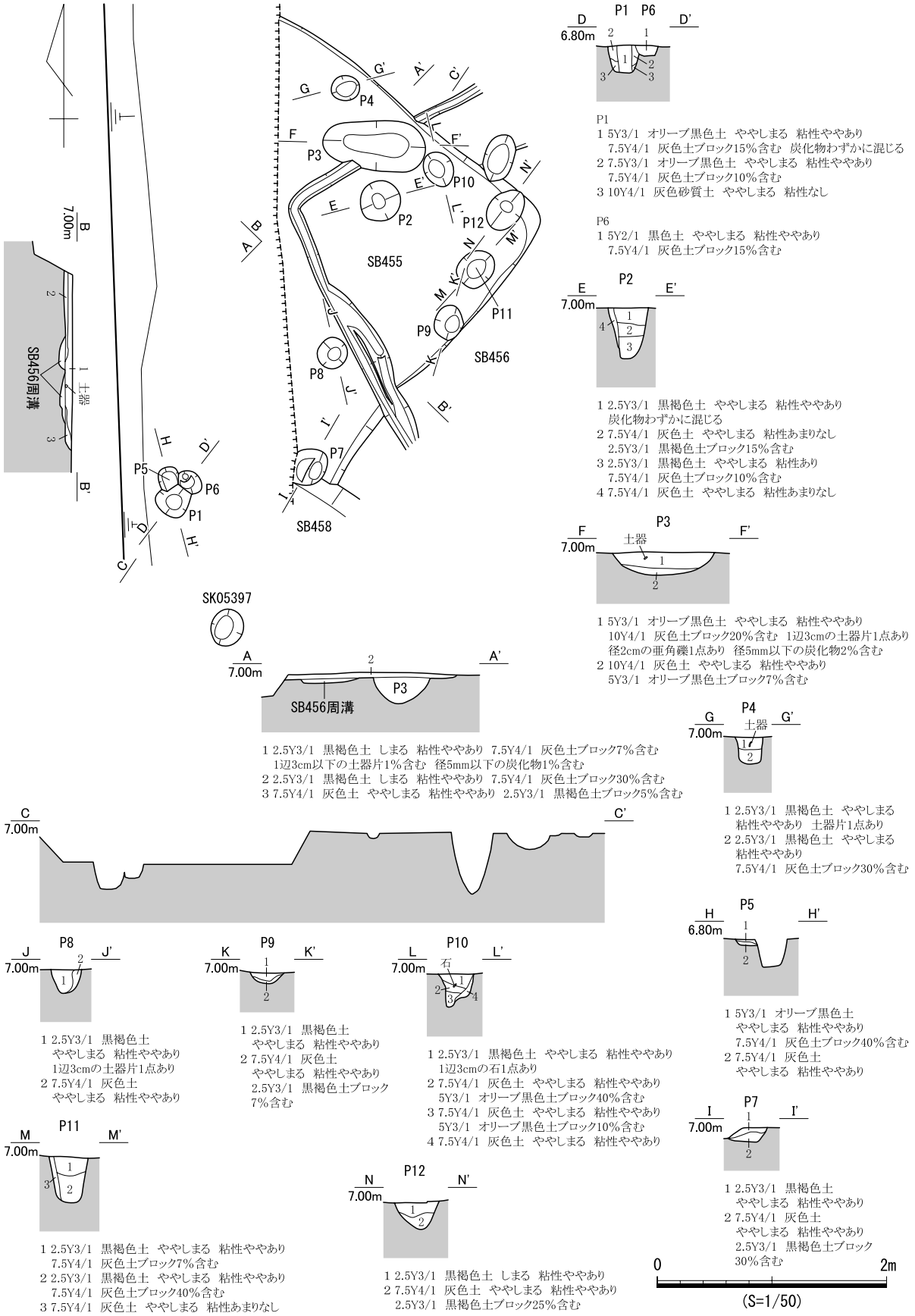


図 1712　SB455 遺構図

土しているが、いずれも細片であり、図示していない。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

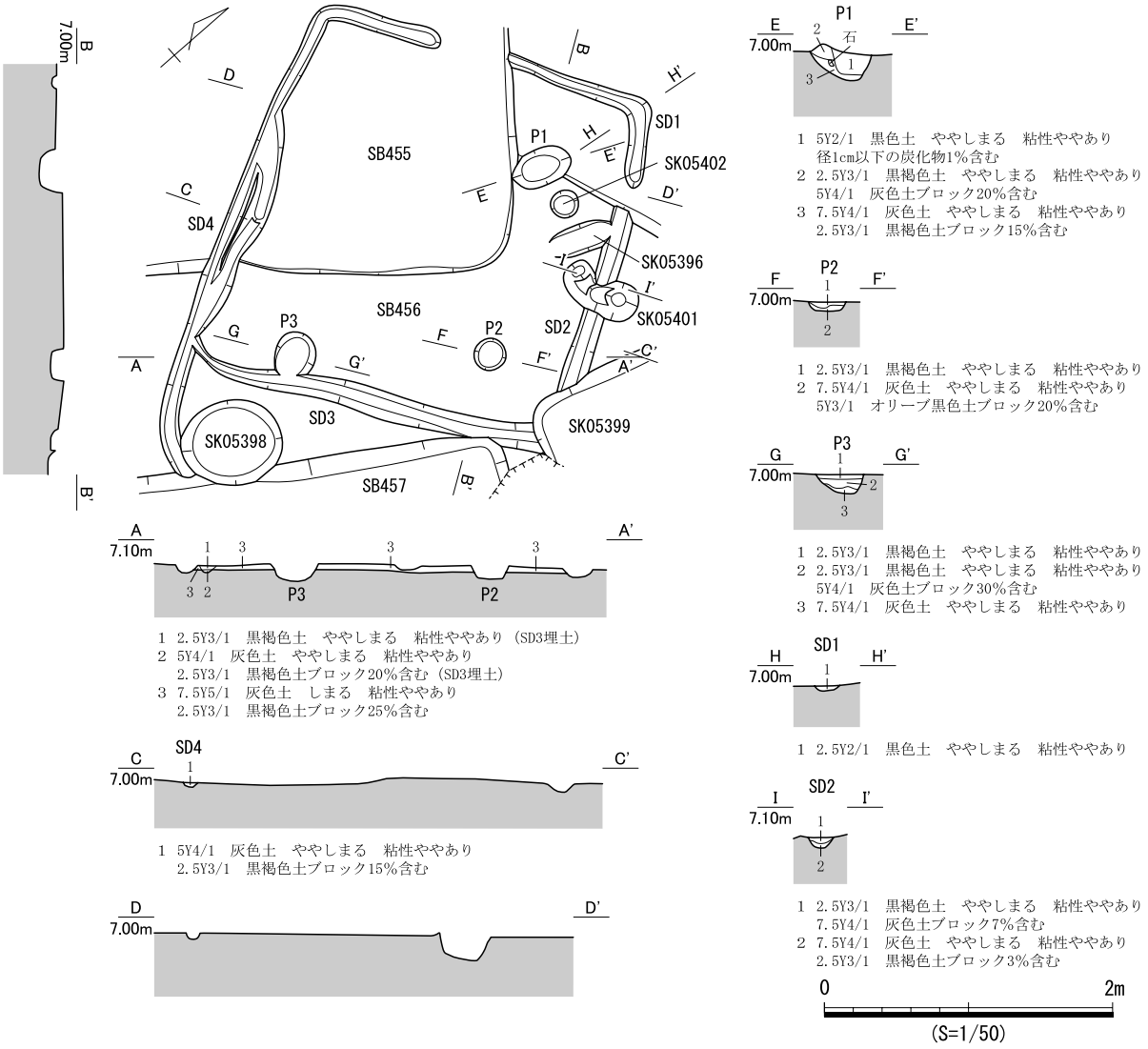


図 1713　SB456 遺構図

SB457（遺構：図 1714）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は撹乱により失われ、西隅をSB458に切られる。平面形は不明瞭であった。

形状　北東－南西長約3.1ｍで、方形を呈する。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土　２層に分層した。層界に凹凸があり、埋土中にブロック土の混入が多く認められることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を６基検出した。いずれも掘形が浅く、柱痕跡は確認できなかったが、P4～P6の３基は南西壁沿いに並んで検出した。

遺物出土状況　埋土中から土器283点、小穴から土器19点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものがあるものの、いずれも磨滅の進んだ細片であり、図示していない。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

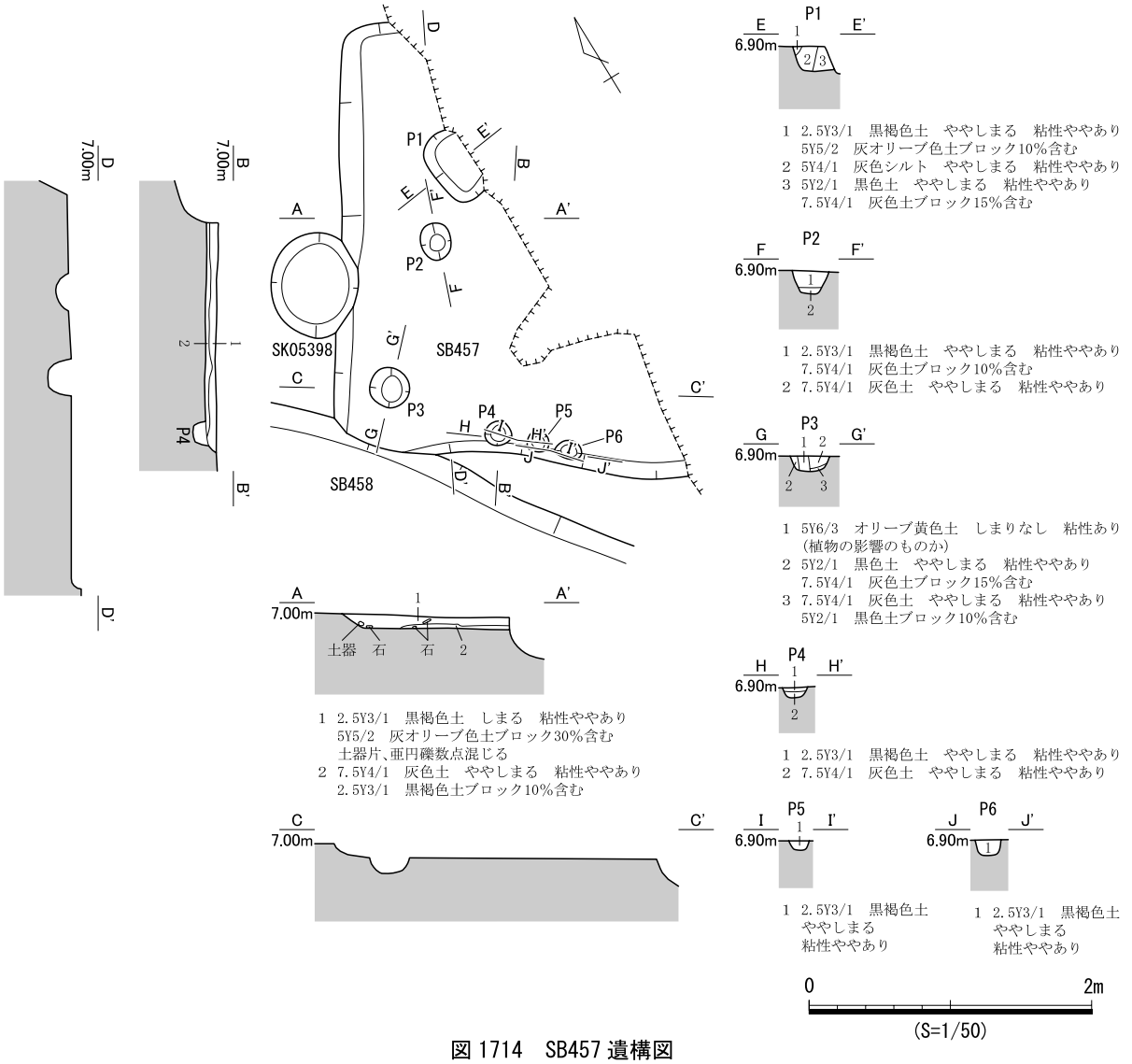


図 1714　SB457 遺構図

SB458（遺構：図 1715、遺物：図 1716）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。平面形は南東辺がやや不明瞭、北東辺が不明瞭であった。なお、P6、P7は撹乱下で検出した。

形状　南東辺と北東辺を検出し、東隅が直角気味に屈折することから、全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　３層に分層した。１・２層が覆土、３層が掘形埋土である。１層は亜円礫や亜角礫、炭化物などを含み、２層は住居周縁部のみで確認できた。いずれもブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴を８基と壁溝を確認した。小穴のうち、P4は土層断面で柱痕跡を確認した。また、P1、P3、P7は掘形が浅いものの、住居の四隅に位置し、壁面から約0.9ｍ内側にあることが共通することから、柱穴の可能性もある。壁溝は北東辺沿いのみに確認できた。平面形はやや湾曲し、掘形は浅い。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器872点、小穴から土器101点、壁溝から土器16点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。床面中央付近からはⅥ期高坏（5954）が出土した。また、

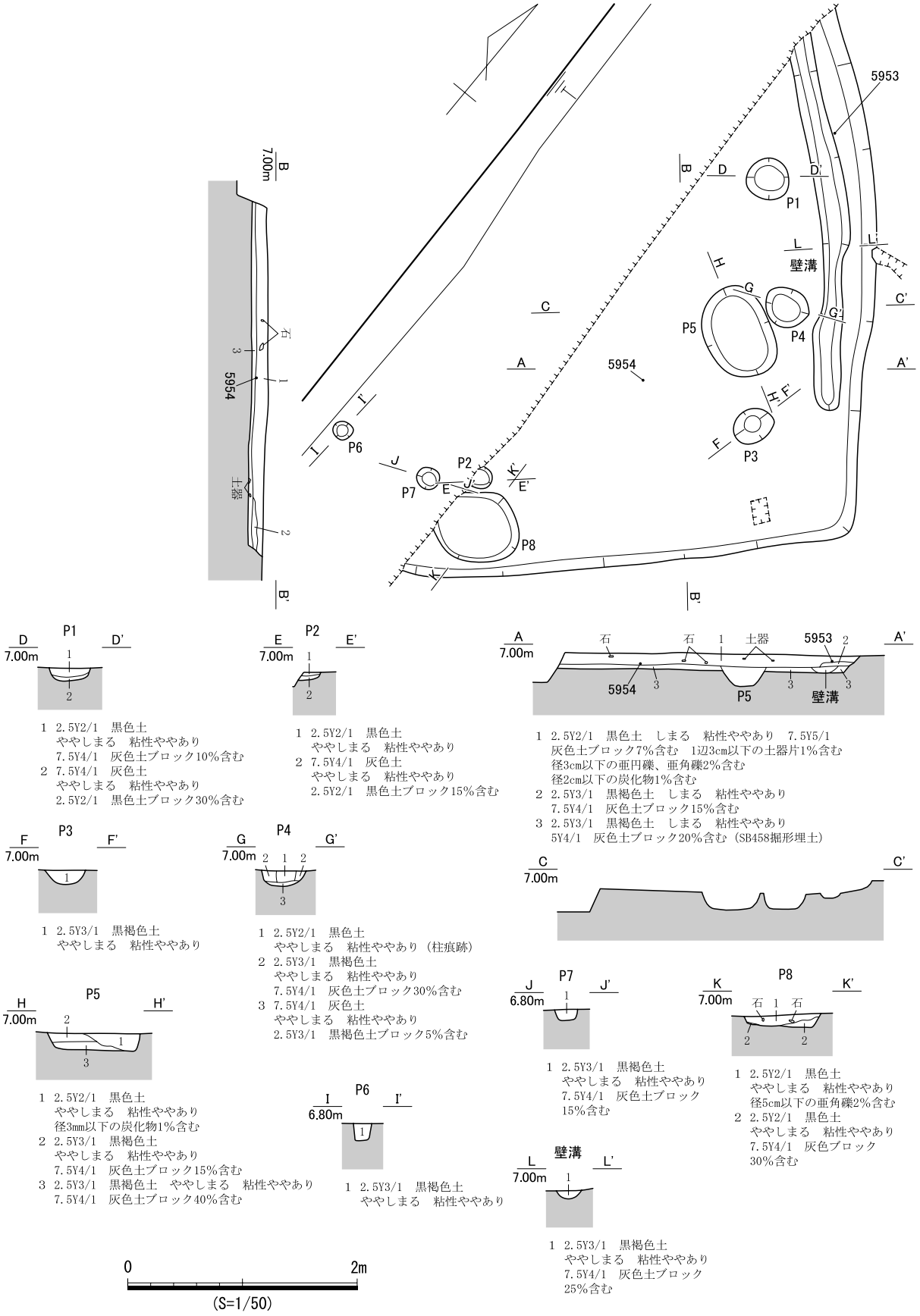


図 1715　SB458 遺構図

小穴からⅥ期～Ⅶ期の壺Ｊ類（5951）が出土した。

出土遺物　5951はⅥ期～Ⅶ期壺J1類。口縁部が短く直立気味に立ち、端部を尖らせる。5952はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。脚付甕を模して作ったミニチュアと考えられる。5953はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。坏部、脚部ともに大半を欠損する。5954はⅥ期高坏C3類。脚部には２孔１対の透孔を２方向に配置する。坏底部は平坦で、坏部は外方に開きながら立ち上がる。

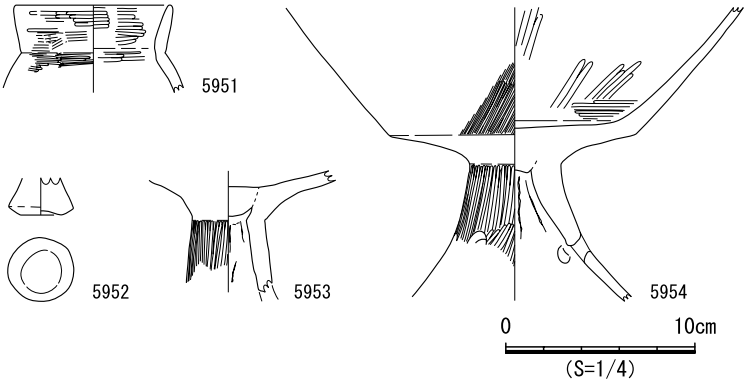


図 1716　SB458 遺物実測図

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB459（遺構：図 1717）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は撹乱により失われている。北東側はSB457に、北西側はSB458に切られている。平面形は不明瞭であった。

形状　南西辺と北東辺を検出した。両辺はほぼ平行し、その距離は約2.8ｍと小規模で、北西から南東に長い長方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

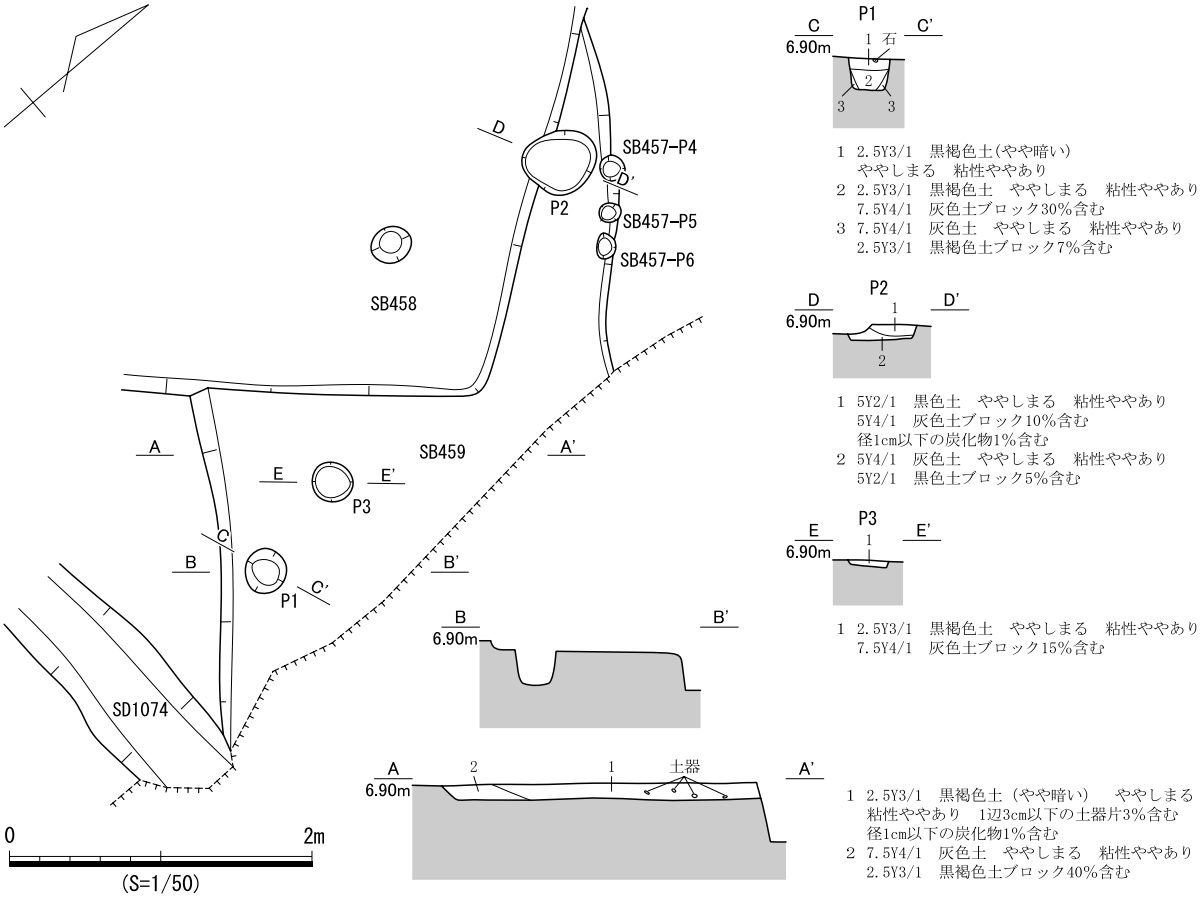


図 1717　SB459 遺構図

埋土　２層に分層した。下層は壁面沿いで確認でき、ブロック土の混入が多い。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、壁溝、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴を３基検出し、そのうちP1のみ掘形が深く、位置的にも本遺構の柱穴となる可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から土器282点、小穴から土器11点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが主体であり、わずかに縄文時代晩期の土器片が混入する。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB460（遺構：図1718）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、南側でSB461を切る。平面形はやや不明瞭で、検出面にて細かい土器片が出土した。平面形が方形を呈することと、整地土があること、西側の撹乱下で検出した土坑が本遺構に伴う可能性もあることから、竪穴住居跡と判断した。

形状　北東辺と南東辺のみしか検出していないが、東隅が直角気味に屈折することから、全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。１層は覆土であり、ブロック土の混入が目立つことから人為堆積と考えられる。２層は掘形埋土である。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて遺構は確認できなかったが、西側の撹乱下で検出したSK05442、SK05443は本遺構に伴う可能性もある。

遺物出土状況　埋土中から土器96点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多いものの、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物の時期はⅥ期～Ⅶ期であるが、Ⅶ期のSB461を切ることからⅦ期と考えられる。

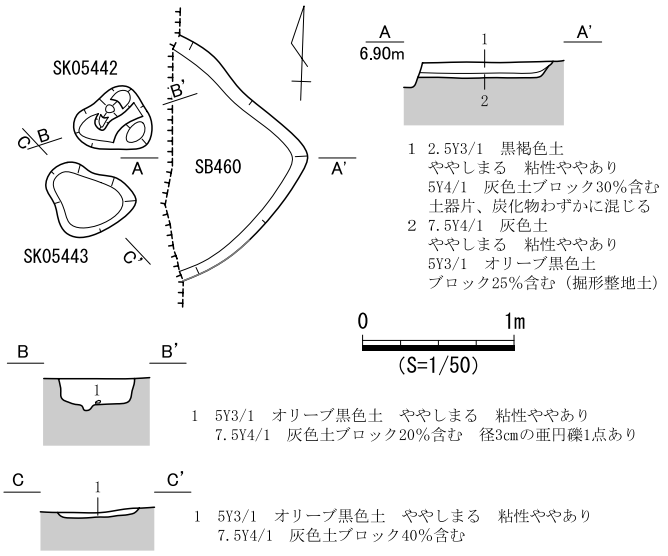


図1718　SB460遺構図

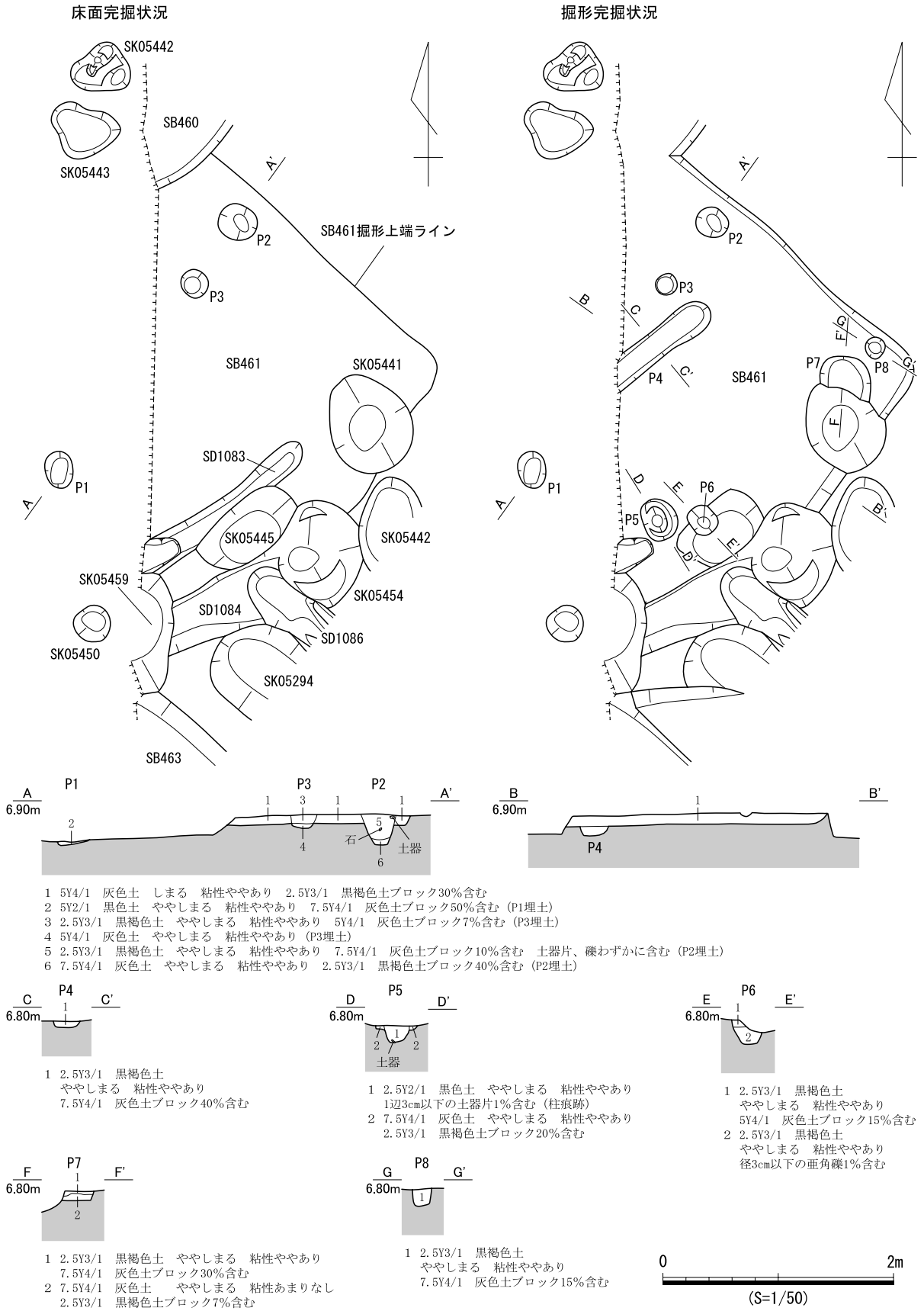
SB461（遺構：図1719、遺物：図1720）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、北側をSB460に、南側をSK05451やSD1084などの土坑や溝に切られる。遺物包含層（Ⅳ層）掘削後に、ブロック土が混入する土の広がりを方形に確認できたことから、竪穴住居跡の床面と認識した。

形状　遺構の北東辺と東隅しか検出できていないが、全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　検出時に床面がみえており、土層図１層は掘形埋土である。掘形埋土はブロック土を多く含む。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴を２基検出した。また、西側の撹乱下で



1　5Y4/1　灰色土　しまる　粘性ややあり　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック30%含む
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック50%含む（P1埋土）
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック7%含む（P3埋土）
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり（P3埋土）
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック10%含む　土器片、礫わずかに含む（P2埋土）
6　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック40%含む（P2埋土）

1　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1　灰色土ブロック40%含む

1　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
1辺3cm以下の土器片1%含む（柱痕跡）
2　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2.5Y3/1　黒褐色土ブロック20%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
5Y4/1　灰色土ブロック15%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径3cm以下の亜角礫1%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
2　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あまりなし
2.5Y3/1　黒褐色土ブロック7%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1　灰色土ブロック15%含む

図 1719　SB461 遺構図

検出したP1は、平面的な位置関係から本遺構に伴う遺構と判断した。いずれの小穴も柱痕跡を確認できていないが、P1とP3は住居北東辺に直交するライン上に位置することから、本遺構の柱穴の可能性もある。なお、炉跡と焼土は確認できなかった。

掘形　掘形底面では小穴を５基検出した。そのうちP5は土層断面で柱痕跡を確認したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　掘形埋土から土器133点、床面上の小穴から土器21点、掘形底面の小穴から土器42点が出土した。埋土中の出土土器は細片が多く、P7からⅦ期の甕D2類が出土した。

出土遺物　5955はⅦ期甕B3類。口縁部が短く立ち上がる。端部は外側につまみ出され、端部下端の粘土が下方にはみ出す。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

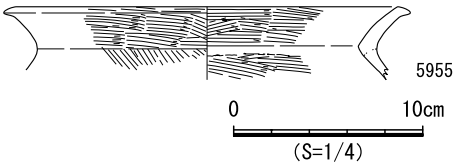


図 1720　SB461 遺物実測図

SB462（遺構：図 1721、遺物：図 1722）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側は撹乱により失われ、西側をSB464に、南側をSB465に切られる。平面形は不明瞭であった。

形状　遺構の西辺のみしか検出できていないが、西辺が直線的であるため全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

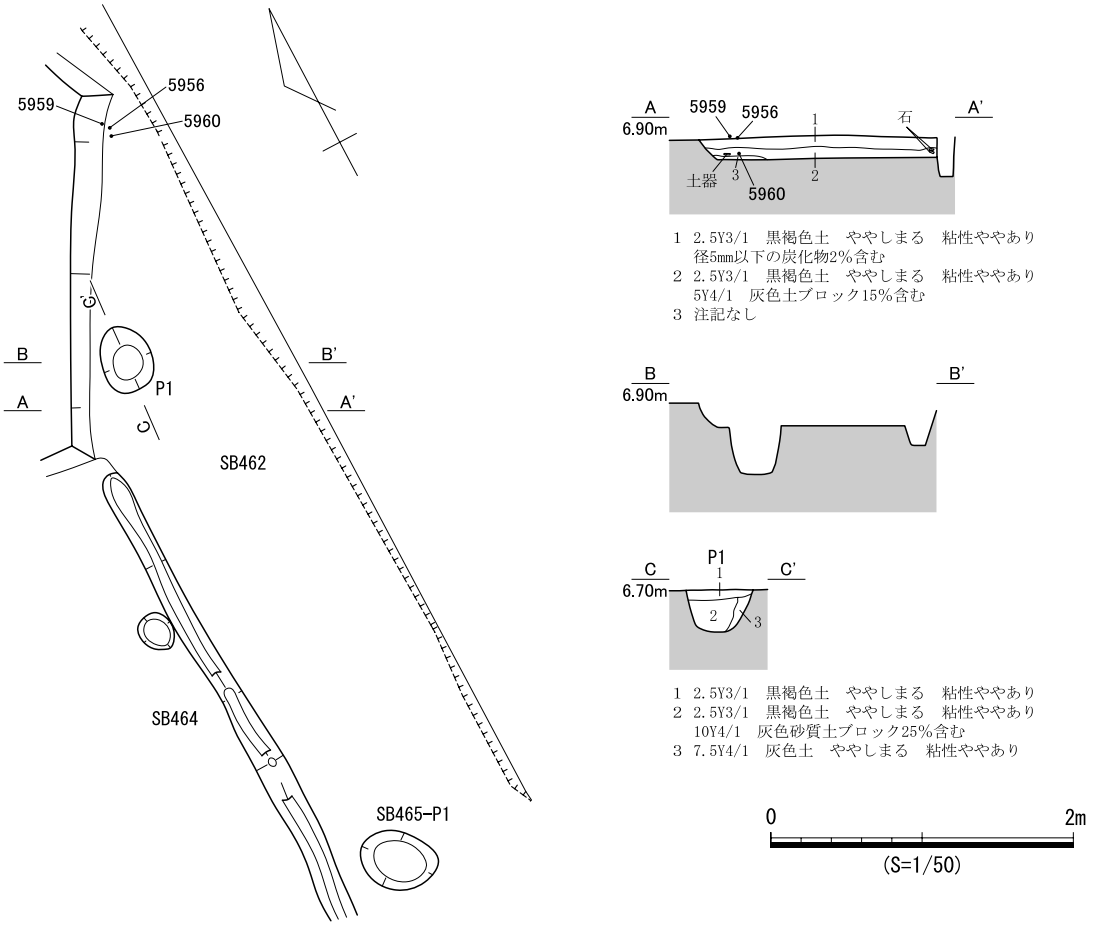


図 1721　SB462 遺構図

埋土　３層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上層に炭化物を含み、下層にブロック土の混入が認められる。３層は壁面沿いの堆積である。遺構の重複が著しいことや埋土中にブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上で小穴を１基検出した。P1は土層断面で柱痕跡を確認でき、底面付近で土器片が出土したものの、SB462の全体形が不明であるため、その性格は不明である。なお、SB464床面でP1に対応する小穴は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器1,151点、小穴から土器13点、石器類１点が出土した。住居北側では、床面からやや高い位置で残存状況が良好なⅦ期高坏Ｄ類（5959）が坏部内面を上にして出土した。また、完形のⅦ期壺Ｄ類（5956）もほぼ同じ位置で出土した。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多く、わずかにⅥ期のものが確認できる。

出土遺物　5956はⅦ期壺D3b類。小型品で口縁部が強く外反し、端部がわずかに屈曲する。胴部は扁平で、底部がわずかに突出する。5957はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部が短く立ち上がり、端部には強いナデが認められる。5958はⅦ期甕B4類。口縁部が短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。端部がわずかに内湾する。5959はⅦ期高坏D4類。坏部底径が小さく、口縁部が大きく開く。坏部の全形は皿状を呈する。内傾する端部と内面に多条沈線を施文する。内面の多条沈線間には３帯の山形文を施文する。文様帯最下段、坏底部にはわずかに段がある。5960はⅦ期高坏D5類。内傾する端部と内面に多条沈線を施文する。多条沈線間に連孤文を３帯施文する。連弧文は貝による施文である。

時期　Ⅶ期のSB464に切られるが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

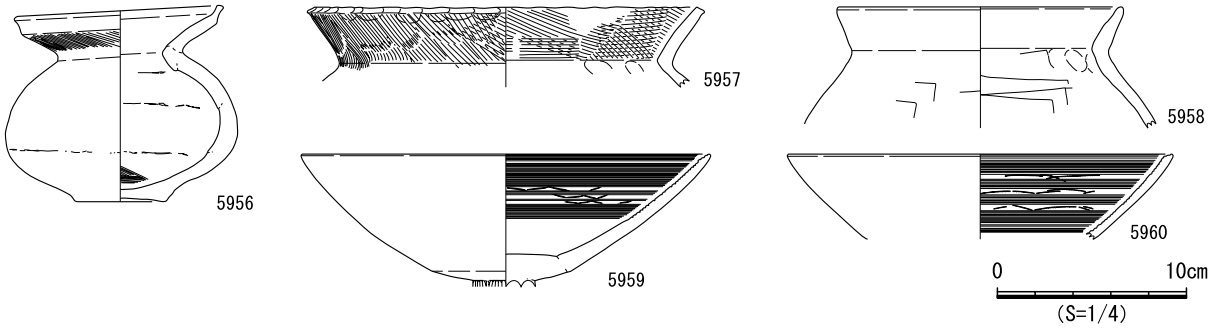


図 1722　SB462 遺物実測図

SB463（遺構：図 1723）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、遺構の大半は調査区域外にのびる。西側は撹乱により失われ、北側でSK05459に切られる。本遺構はSB464埋土上面で検出し、その平面形は不明瞭であった。

形状　遺構の北東辺と南東辺しか検出できていないが、全体形は隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　単層である。埋土中に炭化物や亜円礫、亜角礫を含み、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴を２基検出したが、いずれも柱痕跡を確認できず、その性格は不明である。なお、北東隅にて断面形が皿状を呈する浅い壁溝を検出した。

遺物出土状況　埋土中から土器285点、壁溝から土器３点が出土し、小穴内からは遺物が出土しなかった。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多いものの、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB464を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

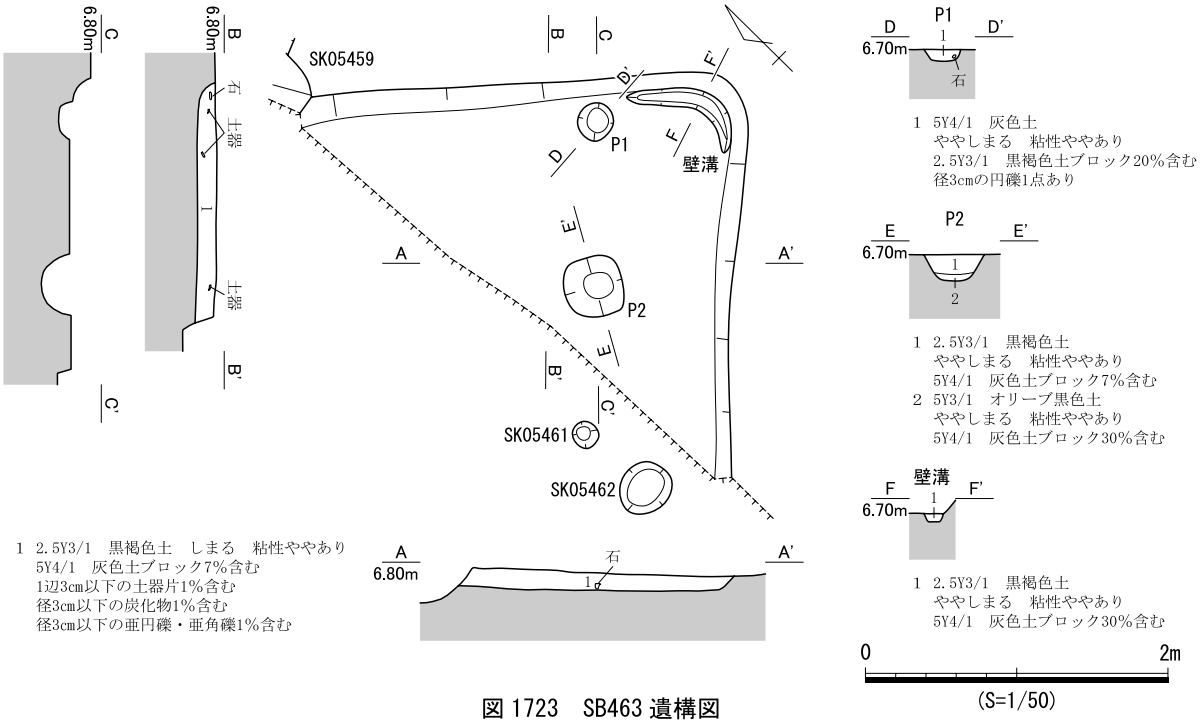


図 1723　SB463 遺構図

SB464（遺構：図 1724、遺物：図 1725）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、遺構の約半分は調査区域外にのびる。西側は撹乱により失われ、中央はSB463に、北壁はSK05456に切られている。また、北東側でSB462を切る。周辺遺構との重複が著しく、平面形はやや不明瞭であった。

形状　南北長約4.0ｍで、隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

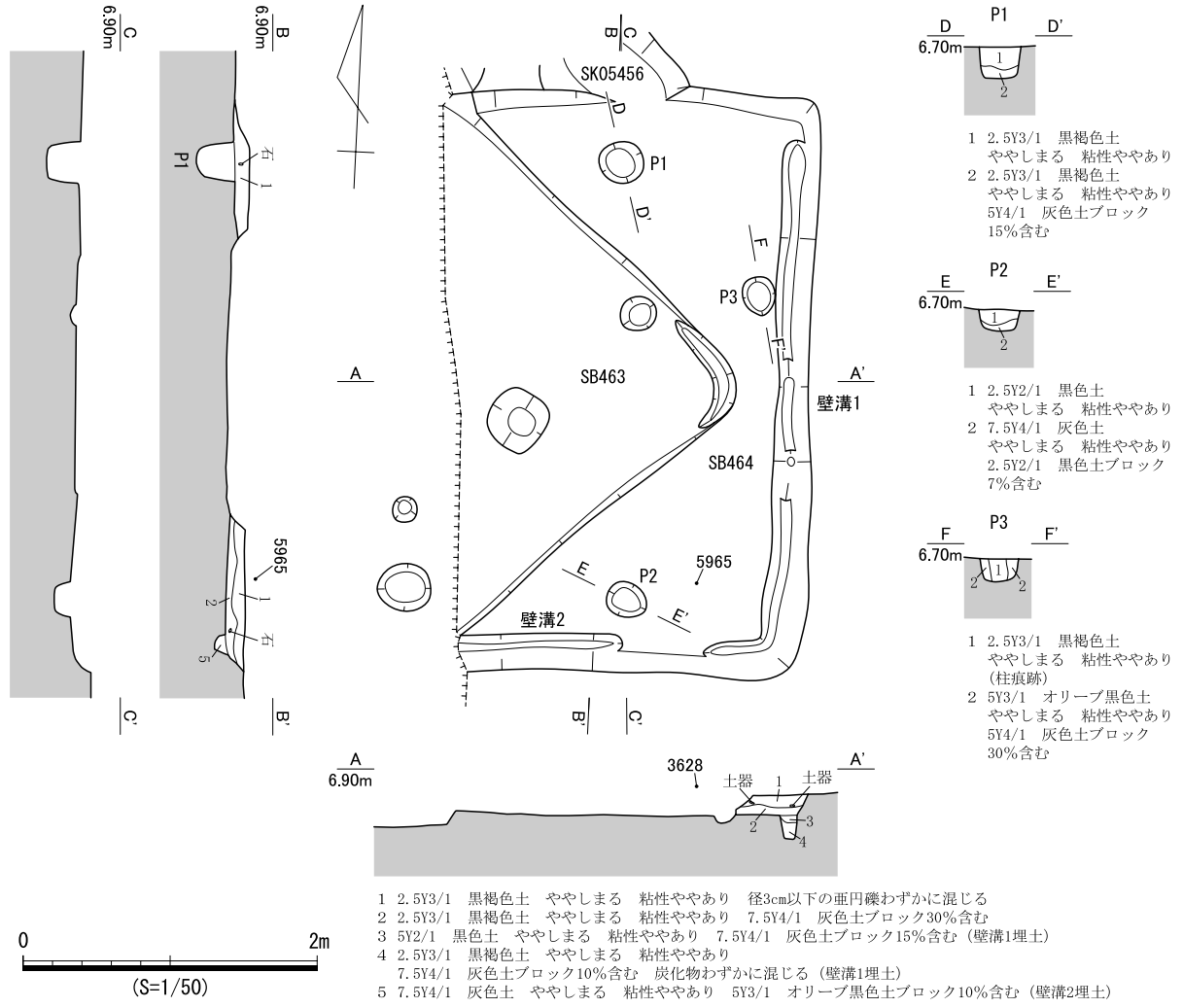
埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であるが層界に凹凸があり、下層はブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴３基と壁溝を検出した。そのうち、P1とP2は東壁面からいずれも約1.3ｍ西側に位置し、南北壁面からの距離もほぼ同じであるため、本遺構の柱穴と考えられる。また、P3では土層断面で柱痕跡を確認した。壁溝は東・南壁面沿いで確認し、その掘形は深く壁面も垂直に近いが、南壁沿いの壁溝は約0.5ｍの間が途切れている。

遺物出土状況　埋土中から土器572点、小穴から土器18点が出土した。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多く、検出面ではⅥ期～Ⅶ期の手焙り形土器（5965）がほぼ完形の状態で出土した。

出土遺物　5961はⅥ期～Ⅶ期甕Ｂ類。最大径は胴部上半にあたる。器面の摩耗が著しく、一部で表面が剥落する。内外面ともにケズリが認められる。5962はⅦ期甕D1b類。屈曲部から端部が強く外方に引き出される。外面には押し引きが認められる。5963はⅦ期高坏D4類。やや内傾する端部から内面に多条沈線を施文し、多条沈線間に小振りの山形文を３帯加える。5964はⅦ期高坏G3b類。坏底部の平坦面から口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はほぼ直立する。端部直下にのみ多条沈線

が認められる。5965はⅥ期～Ⅶ期手焙り形土器。覆部から胴部までほぼ完存する良好な資料である。覆部の口縁端部には粘土を貼り付け、強いナデによって平坦面を作り出す。覆部、胴部ともに、内外面に粗いハケ目が残り、接合部の胴部側には部分的に刺突文が残る。接合部直下には窪みを形成し、胴部に突帯は認められない。全体の形状とバランスは整っているものの、接合部の器面の調整がやや



1 2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径3cm以下の亜円礫わずかに混じる
2 2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む
3 5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック15%含む（壁溝1埋土）
4 2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1　灰色土ブロック10%含む　炭化物わずかに混じる（壁溝1埋土）
5 7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック10%含む（壁溝2埋土）

図 1724　SB464 遺構図

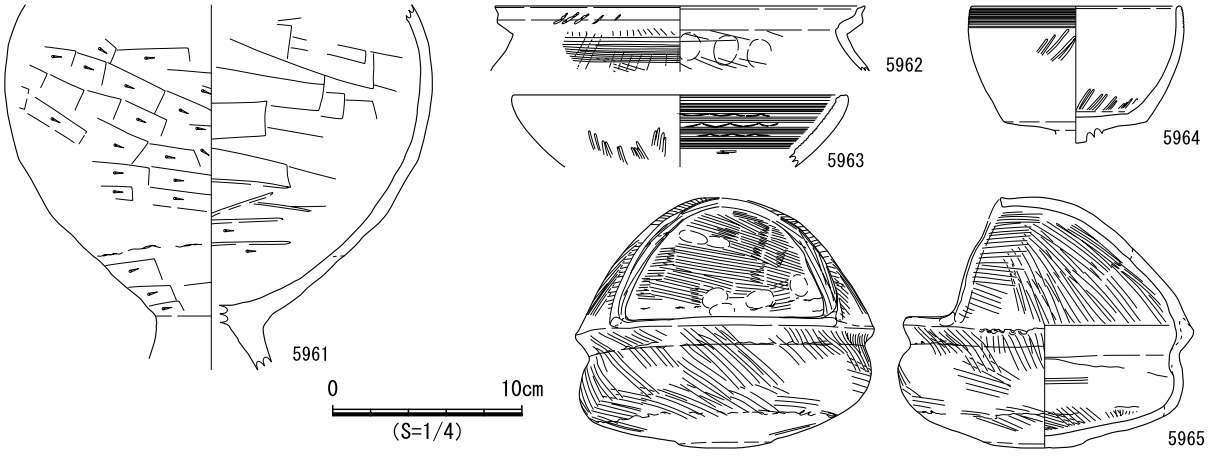


図 1725　SB464 遺物実測図

雑と考えられる。鉢Ａ類に覆部を付けた形で、刺突文が一部に残ることから、精製品とはいえない。

時期　Ⅶ期のSB462を切るが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

SB465（遺構：図1726、遺物：図1727）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、遺構の大半は調査区域外にのびる。遺構の北側をSB464に、南側をSB468に、中央をSK05463に切られている。平面形はやや不明瞭であった。

形状　北西辺と南西辺を検出したが、西隅をSB464に切られ、東側は調査区域外にのびるため、全体形は定かでない。しかし、およそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　３層に分層した。１・２層が覆土、３層が掘形埋土である。１層は炭化物をわずかに含み、２層はブロック土の混入が認められることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて炭化物や粘土の広がりがわずかに確認でき、小穴を１基検出した。P1の埋土は東側からの堆積が観察でき、底面で土師器片が横位で出土したが、遺構の性格は不明である。なお、焼土と壁溝、掘形底面の遺構は検出できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器295点、小穴から土器26点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものがあり、ややⅦ期のものが多く、P1からⅥ期～Ⅶ期壺Ｈ（5967）が出土した。

出土遺物　5966はⅥ期～Ⅶ期壺Ｃ類。口縁部が外傾する。器壁が厚く、端部を丸くおさめる。5967はⅥ期～Ⅶ期壺Ｈ類。胴部外面には丁寧なミガキが認められる。やや下膨れ気味の形状を示す。5968はⅥ期～Ⅶ期甕Ａ4類。口縁部が短く開き、端部付近でやや内湾する。端部にはわずかながら平坦面をもつ。

時期　出土遺物の時期とⅦ期のSB464に切られることから、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

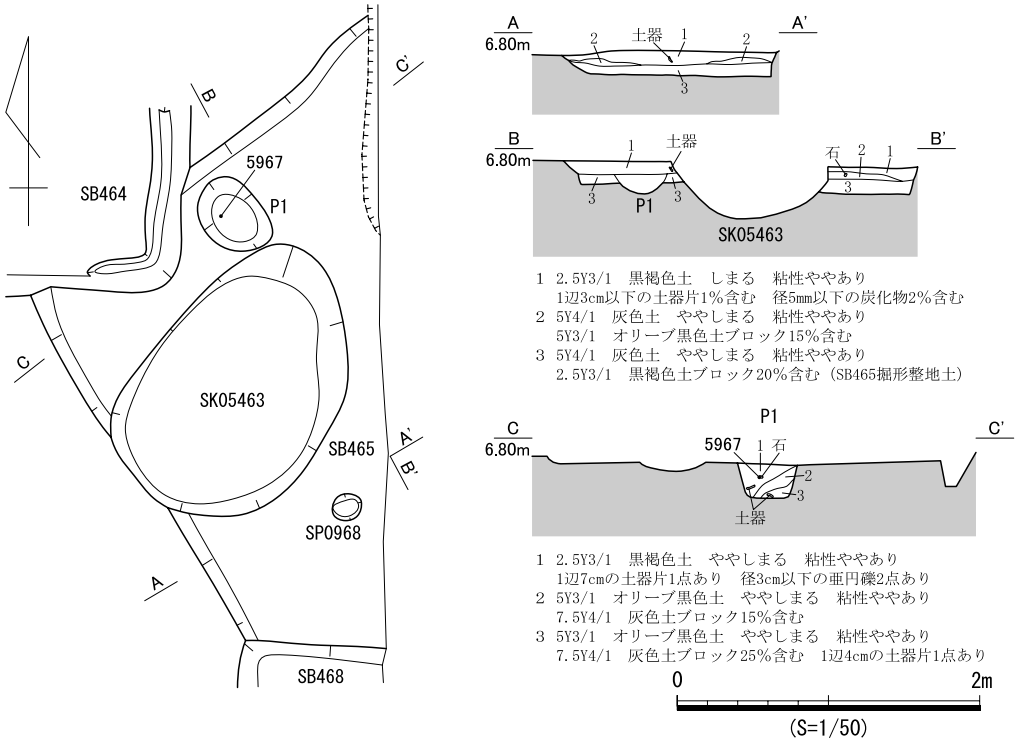


図1726　SB465遺構図

図 1727　SB465 遺物実測図

SB466（遺構：図 1729・1730、遺物：図 1728）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、東側は調査区域外へとのびている。本遺構は５棟の竪穴住居跡（SB467～SB471）やSD1090などに切られており、周辺の竪穴住居跡との新旧関係では最も古い遺構である。そのため、本遺構の埋土は削平されており、検出時にはすでに床面が見えていた。なお、平面形は南辺が明瞭であり、北辺はやや不明瞭であった。

形状　方形を呈し、北西隅部は丸くおさめている。規模は南北長7.48ｍを測り、当遺跡の竪穴住居跡としては規模が大きい。

床面　平坦であり、住居周縁部のみ幅広で溝状の貼床（整地土）がある。床面上にて小穴11基、溝１条、地床炉１基を検出した。小穴11基のうち土層断面等で柱痕跡を確認した遺構は４基（P2、P6、P7、P11）であり、その他に掘形が深い遺構としてP1とP8がある。当遺跡では竪穴住居跡の床面周縁に幅広の溝状掘形が巡る竪穴住居跡を数棟検出しており、そのほとんどが溝状掘形の隅部内側付近に柱穴を有することから、本遺構の柱穴はP1とP2の可能性がある。

また、床面中央では南北長約3.2ｍ、東西長約0.7ｍ～1.1ｍの範囲で炭化物の広がりを確認しており、その中央西寄りで地床炉を検出した。炭化物の広がりは上下２層に分層でき、炭化物は上層に多く含まれ、底面は平坦であった。また、炉跡は検出面において焼土粒が炭化物とともに散在して面的に広がっており、その底面は平坦であった。しかし、検出面、底面ともに被熱による硬化面は確認できなかった。なお、壁溝は確認できなかった。

掘形　住居周縁に幅約1.2ｍ～1.5ｍの溝状の掘形が掘削されている。その埋土は３～４層に分層でき、全体的にブロック土の混入が多く、上層（１～２層）に炭化物が面的に広がっていた。また、南溝の上層（１～２層）では粘土のまとまりが数箇所で確認できた。掘形底面は、北溝と西溝はほぼ平坦であるが、南溝は丸みを帯びて凹凸があり、南壁沿いに幅の狭い平坦面がある。また、西溝中央付近は幅約0.8ｍの範囲のみ底面が高くなっている。なお、掘形底面にて小穴２基（P3、P9）を検出した。

遺物出土状況　掘形埋土中から土器2,776点、床面上の小穴から土器276点、掘形底面の小穴から土器５点が出土した。床面上の小穴のうち、P13からは140点の土器が出土した。なお、地床炉からの出土遺物はなかった。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多く、Ⅰ期遠賀川系土器の細片も少量出土した。

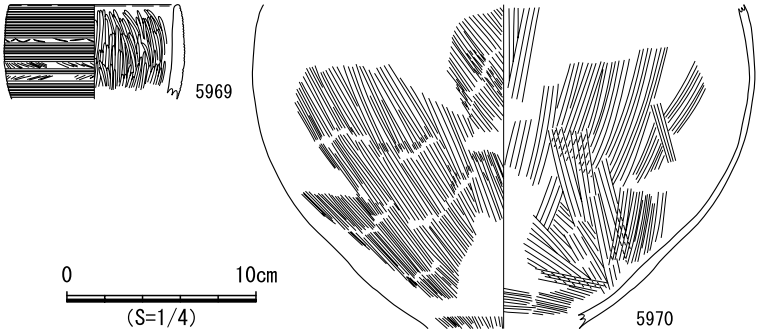


図 1728　SB466 遺物実測図

出土遺物　5969はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾気味で、端部が尖り気味となる。外面には多条沈線を

形文、刺突文を施文する。精緻な作りの資料である。5970はⅦ期甕Ｄ類。器壁の薄い胴部に縦方向のハケ目が残る。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

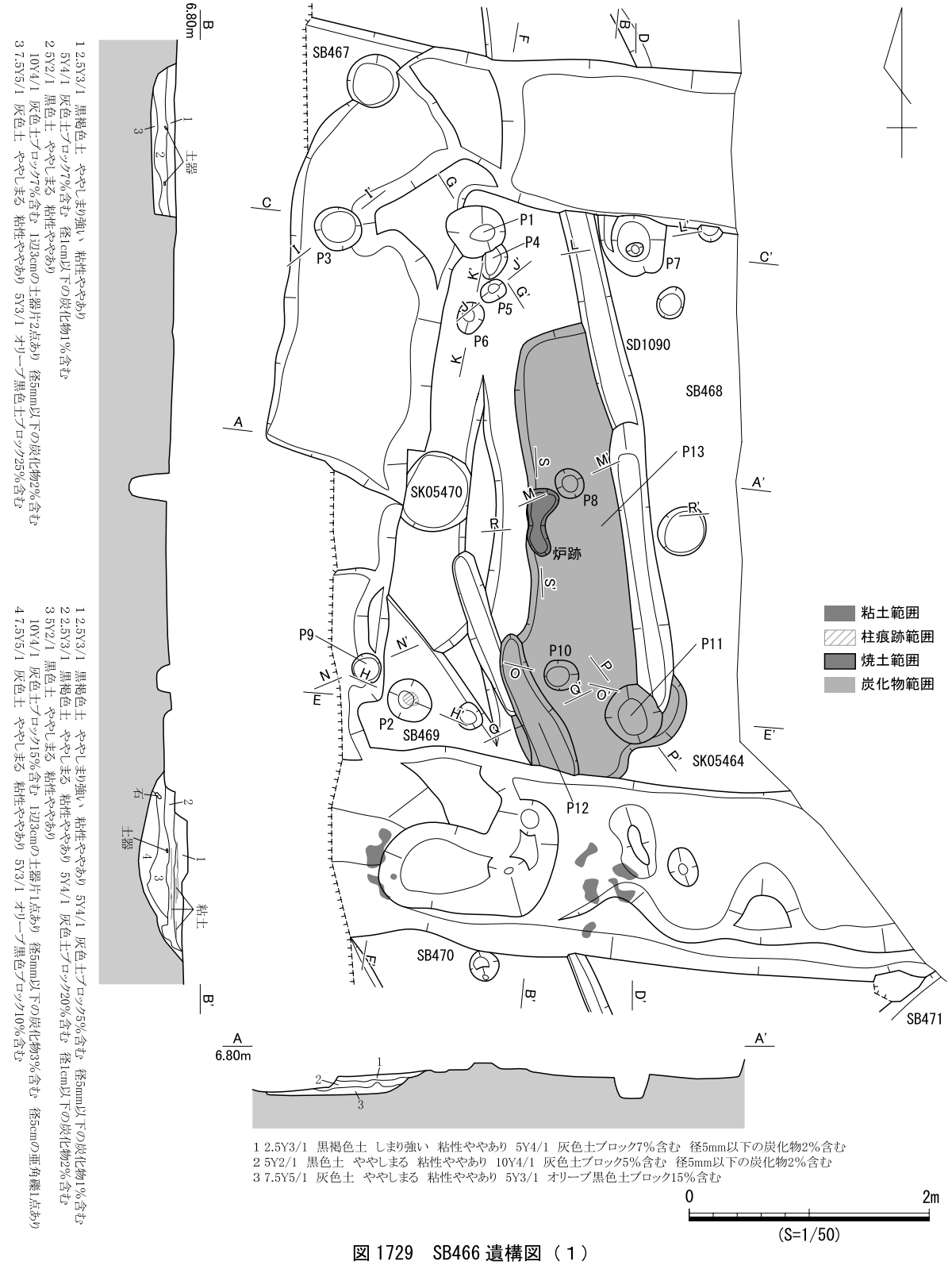


図 1729　SB466 遺構図（１）

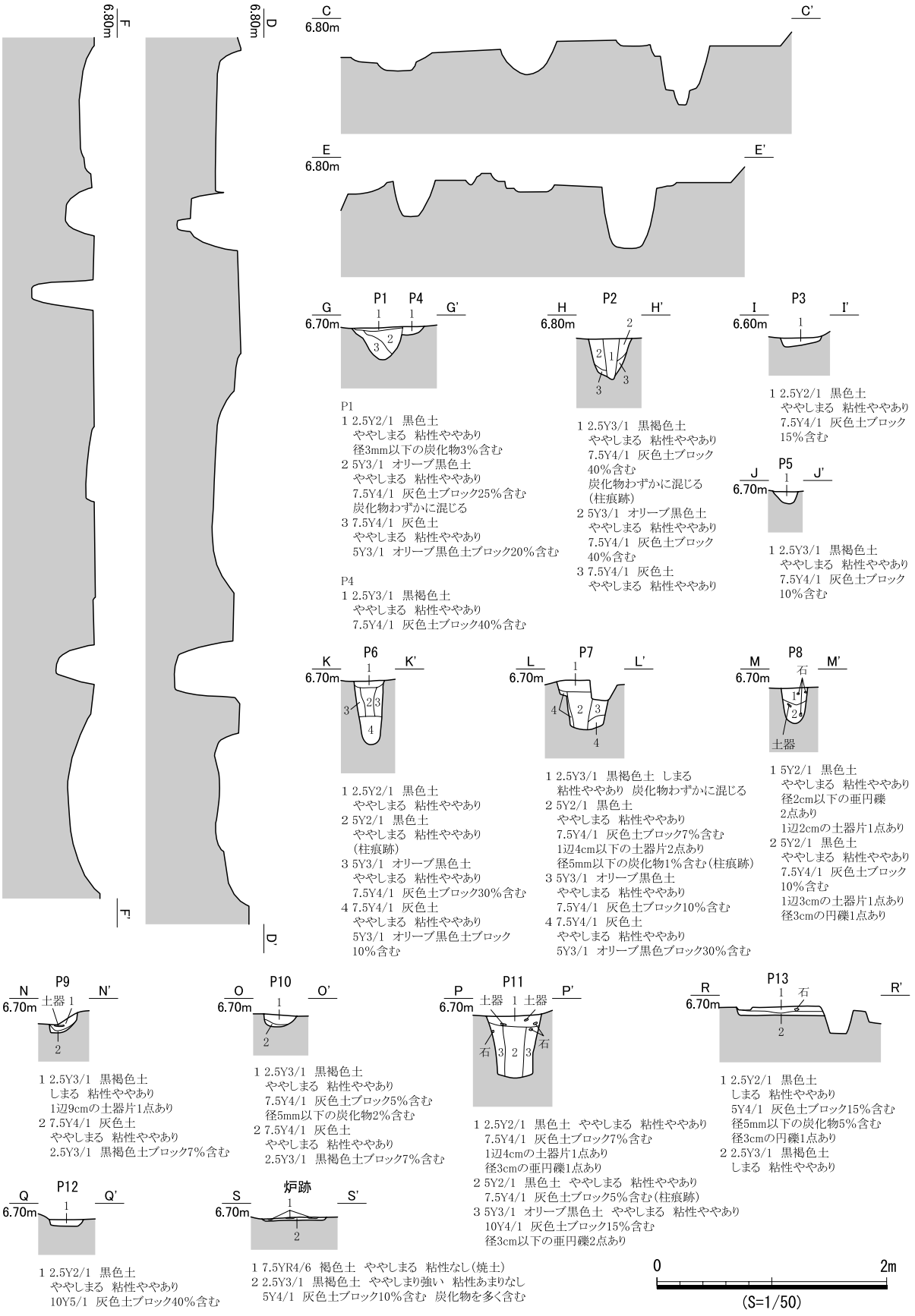


図 1730　SB466 遺構図（２）

SB467（遺構：図 1731）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、南側でSB466を切り、東側はSK05468に切られる。平面形は北辺が明瞭で、他はやや不明瞭であった。

形状　南北長約3.1ｍの方形を呈する。規模がやや小さいが、床面が平坦で立ち上がりが急傾斜であるため、竪穴住居跡とした。深さは約0.1ｍである。

埋土　単層であり、亜円礫と炭化物をわずかに含む。また、全体的にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて１基の小穴を検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器567点、小穴から土器37点が出土した。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多いものの、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅶ期のSB466を切るが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

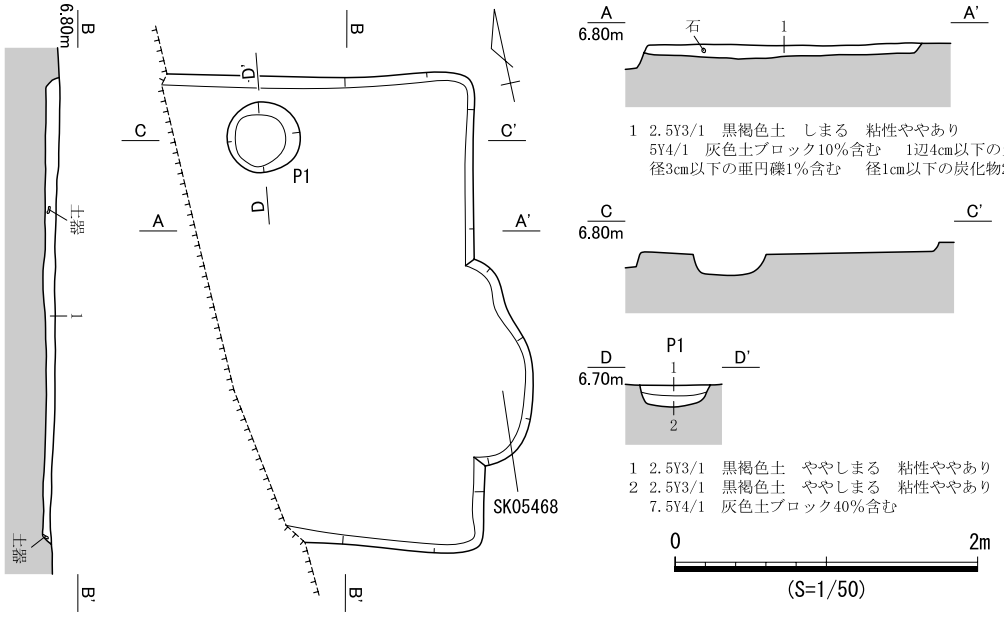


図 1731　SB467 遺構図

SB468（遺構：図 1732）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。遺構の大半は調査区域外にのび、SB466を切り、西壁沿いをSD1090に切られる。平面形は明瞭であった。

形状　南北長約5.4ｍで、隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　単層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴２基と壁溝を検出した。小穴はいずれも浅く、柱痕跡は確認できなかった。壁溝は掘形が深く、壁面はほぼ垂直であるが、西壁沿いの一部でしか確認できていない。

遺物出土状況　埋土中から土器281点、壁溝から土器13点、小穴から土器14点が出土した。埋土中の出土土器はⅦ期のものが多いものの、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅶ期のSB466を切るが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

SB469（遺構：図 1733）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、遺構の半分以上は調査区域外へとのびている。SB466 を切り、平面形は不明瞭であった。

形状　直線的にのびる北東辺と南東辺を検出したことから、方形を呈すると考えられる。深さは 0.1ｍ未満と浅く、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。北東辺沿いにはブロック土を含む土が堆積している。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて１基の小穴を検出したが、掘形が浅く単層であり、その性格は不明である。

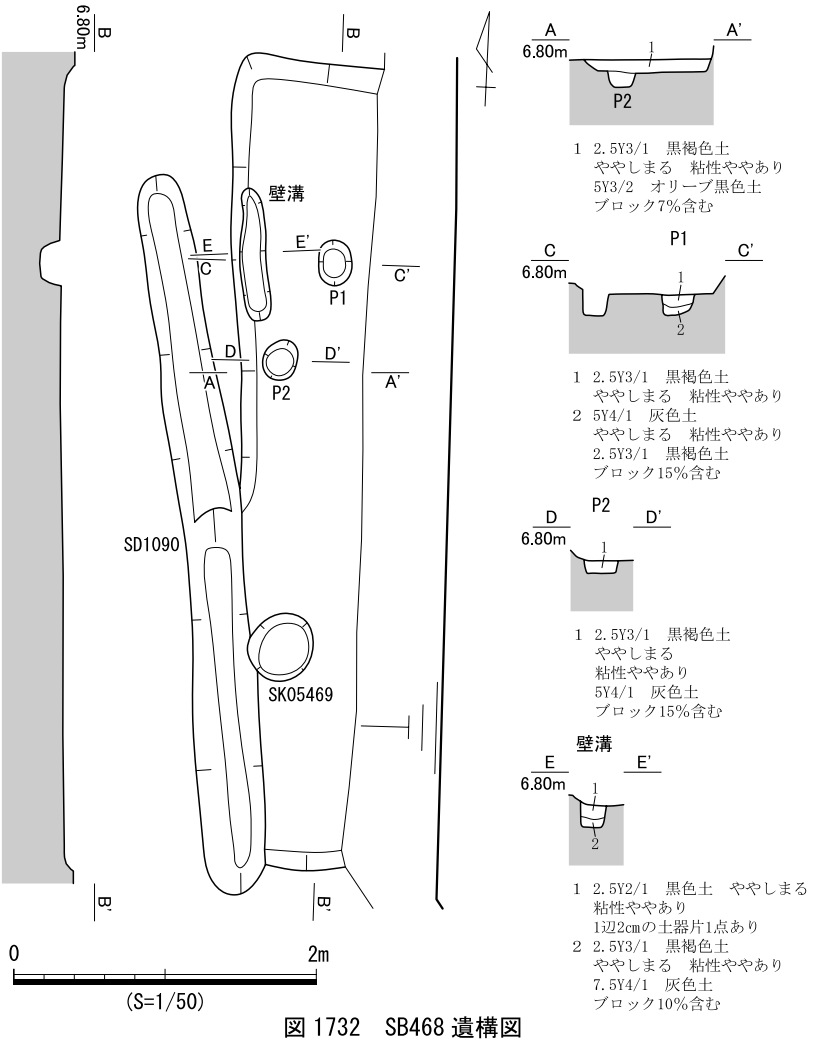


図 1732　SB468 遺構図

遺物出土状況　埋土中から土器 221 点、小穴から土器４点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多いものの、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物の時期はⅥ期～Ⅶ期であるが、Ⅶ期の SB466 を切ることからⅦ期と考えられる。

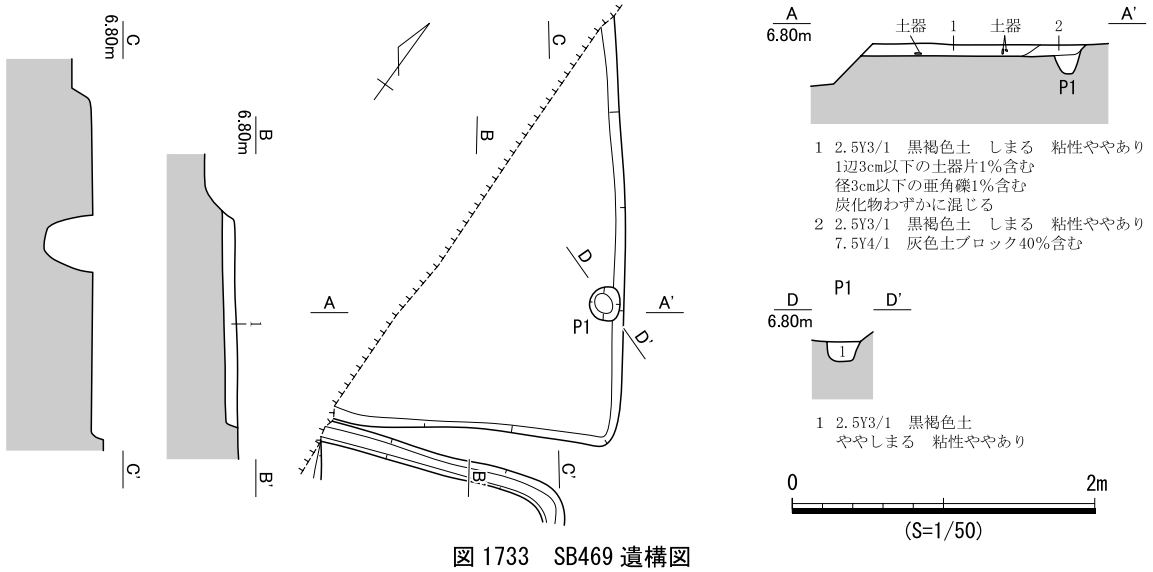


図 1733　SB469 遺構図

SB470（遺構：図 1734・1735、遺物：図 1736）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側と南側は撹乱により失われ、SB466 と SB471 を切っている。本遺構上面では、遺物包含層（Ⅳ層）掘削時に多量の土器と炭化物が出土し、その下で壁溝や小穴を検出したので、その面を床面と考えた。そのため、本遺構に伴う埋土は検出できていない。なお、壁溝の検出は比較的明瞭であった。

形状　壁溝の平面形から、南北長約 5.1 ｍの隅丸方形を呈していたと考えられる。掘形底面までの深さは 0.1 ｍ未満であり、壁面の傾斜は比較的急である。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴６基と壁溝を検出した。そのうち、P1 ～ P4 が柱穴であり、いずれも掘形が深く、壁面はほぼ垂直である。P1 と P2 はブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。一方、P3 と P4 は検出面及び土層断面で柱痕跡を明瞭に確認できた。以上のことから、これらの柱穴は P1・P2 よりも P3・P4 の方が新しいと考えられる。なお、P5 は底面が平坦で、

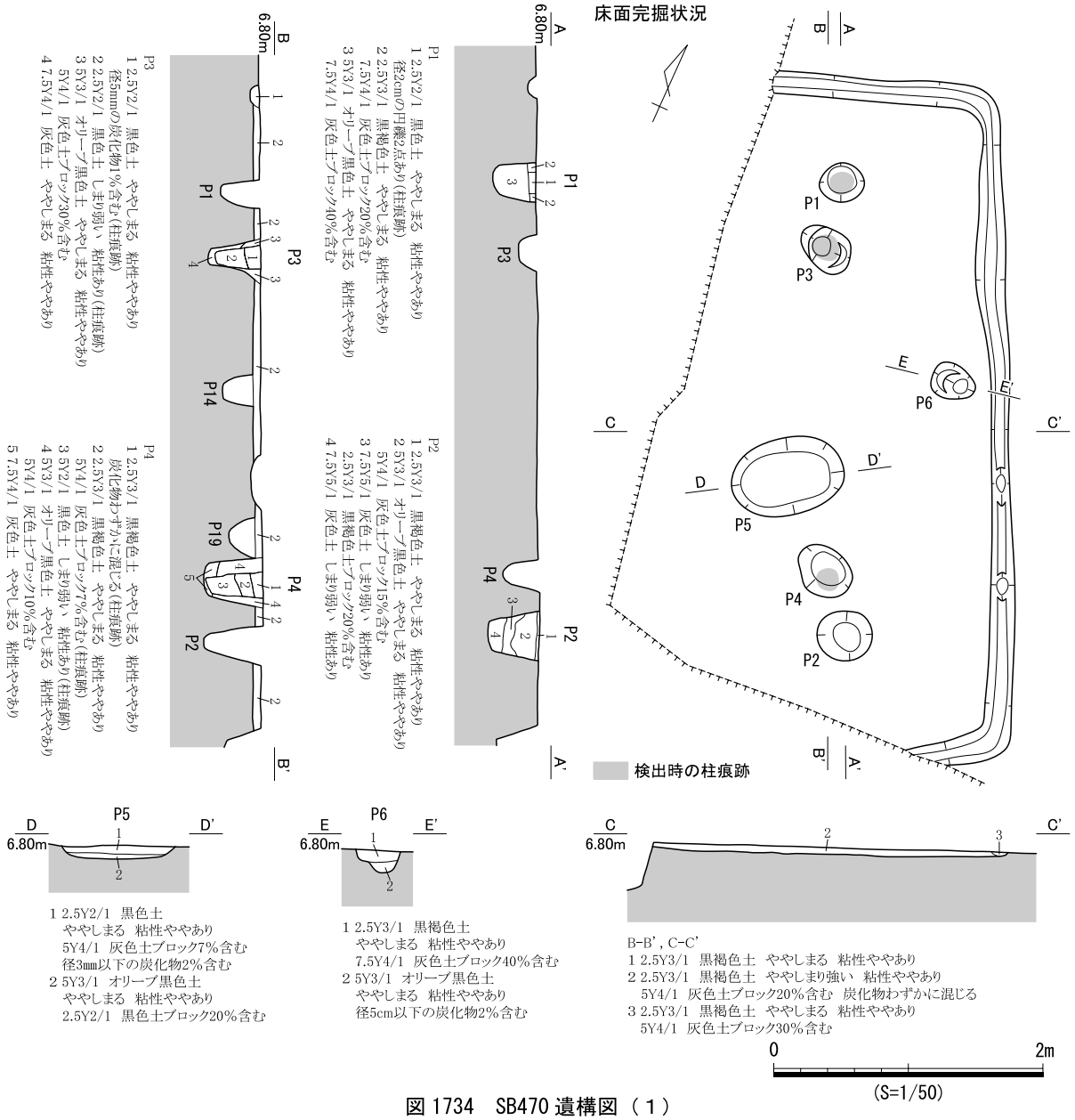


図 1734　SB470 遺構図（１）

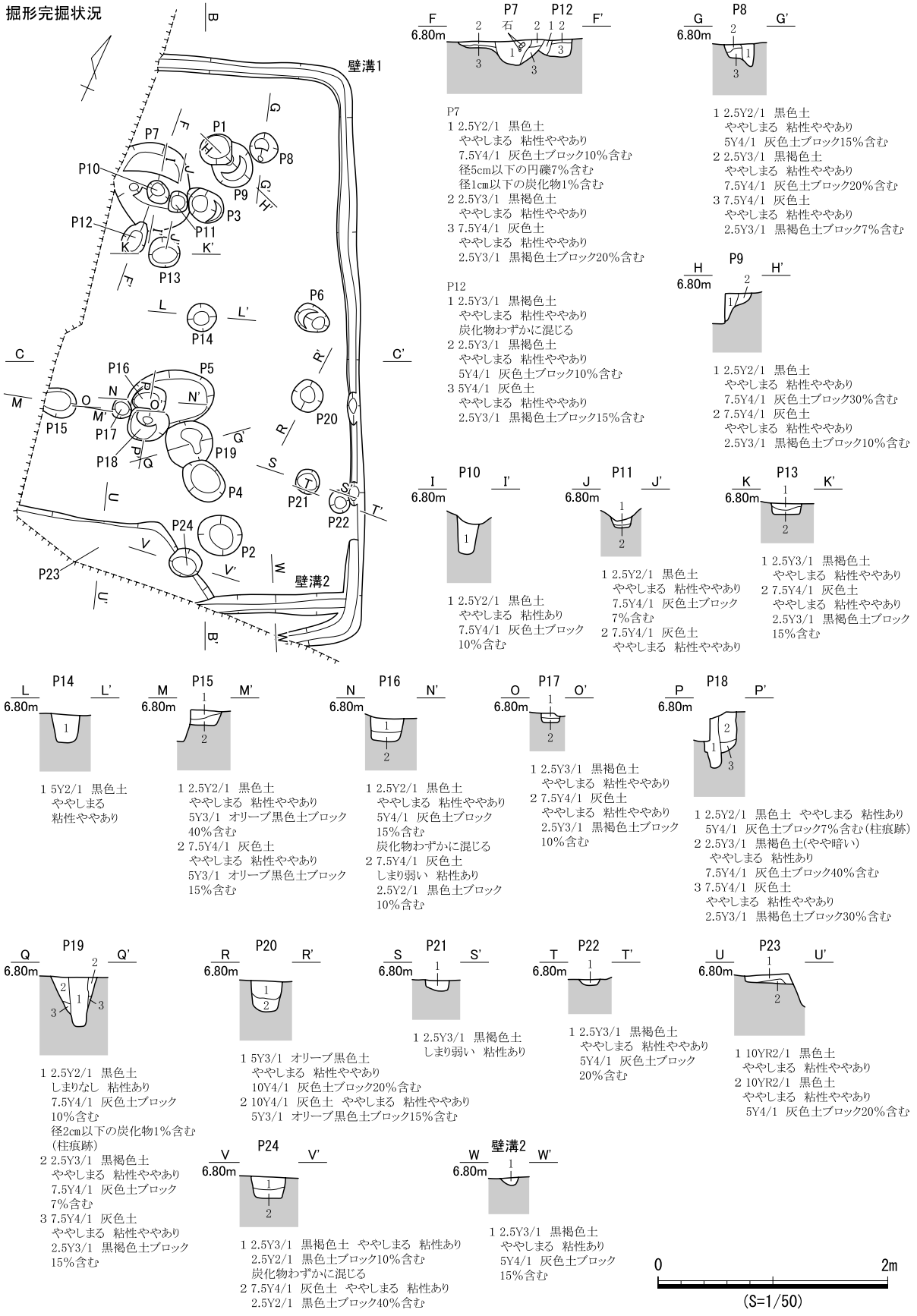


図 1735　SB470 遺構図（２）

立ち上がりが緩やかであり、上層に炭化物が含まれている。壁溝は検出できた範囲は全周しており、幅狭で浅く、断面形は皿状を呈する。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形　比較的浅く、埋土は単層でブロック土の混入が多い。掘形底面は平坦であり、小穴18基と溝１条を検出した。小穴のうち、P18とP19は土層断面で柱痕跡を確認でき、P18は柱当たりの底面から亜円礫が出土した。また、P7も柱穴であった可能性がある。壁溝２は東壁面に直交する方向にのびており、竪穴住居跡の建て替え前の壁溝である可能性もあるが、定かではない。

遺物出土状況　検出面及び掘形埋土中から土器469点、床面上の小穴から土器159点、石器類１点、壁溝から土器74点、掘形底面の小穴から土器241点、掘形底面の溝から土器10点が出土した。掘形底面の小穴では、P7とP23からの出土が目立つ。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、時期的にまとまりがある。一方、小穴出土土器は縄文時代晩期やⅤ期、Ⅶ期、Ⅷ期などに属し、時期幅がある。

出土遺物　5971はⅥ期～Ⅶ期壺A3類。口縁部内面には直線文を施文し、端部を上下に拡張する。端部上端内面には刺突を加え、外面には直線文を施文し、内面及び端部に赤彩を施す。5972はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部がヨコナデとともに屈曲して直立し、端部には顕著な平坦面を形成する。5973はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が外反する。端部付近で明瞭に屈曲し、つまみあげるように尖らせる。端部下端には刺突を加える。5974はⅦ期甕D2a類。屈曲する口縁部下段が外方に開き、上段は直立気味に立ち上がって端部が外へ拡張され、上面には凹面を形成する。5975はⅥ期～Ⅶ期甕Ｅ類。脚部が直線的に開く。5976はⅧ期甕。口縁部の屈曲が弱く、端部に平坦面は認められない。5977はⅥ期～Ⅶ期鉢A2類。口縁部が短く屈折して端部が明瞭に屈曲し、下端には刺突を加える。5978はⅤ期末高坏Ｂ類。透孔から下方が大きく外反し、端部に平坦面をもつ。5979はⅥ期～Ⅶ期高坏G3b類。口縁部が内湾し、端部直下の外面に多条沈線を施文する。5980はⅦ期高坏Ｃ類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔のある部位を境にさらに開く。

時期　出土遺物に時期差があるものの、Ⅶ期のSB466を切ることからⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

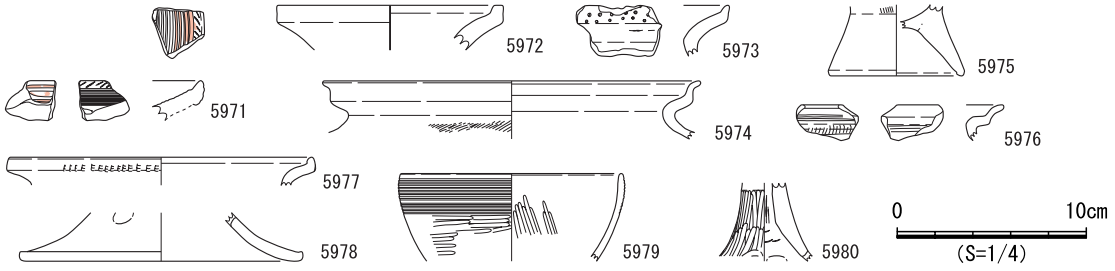


図 1736　SB470 遺物実測図

SB471（遺構：図 1737、遺物：図 1738）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側は撹乱により失われ、東側は調査区域外へとのびている。西側をSB470とSB472に切られており、平面形はやや不明瞭であった。

形状　遺構の北西辺のみしか検出できていないが、北西辺がほぼ直線的であるため全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。亜円礫や亜角礫、炭化物をわずかに含み、ブロック土も混入することから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて４基の小穴を検出し、そのうちP3は土層断面で柱痕跡を確認した。また、住居の全体形が定かでないものの、P1とP2は北壁から約1.3ｍ南側に位置しており、位置的に柱穴の可能性もある。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器206点、小穴から土器13点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅷ期の小片が多く、埋土上層ではⅧ期の甕Ｄ類が２個体出土している。また、小穴の出土土器はほぼⅦ

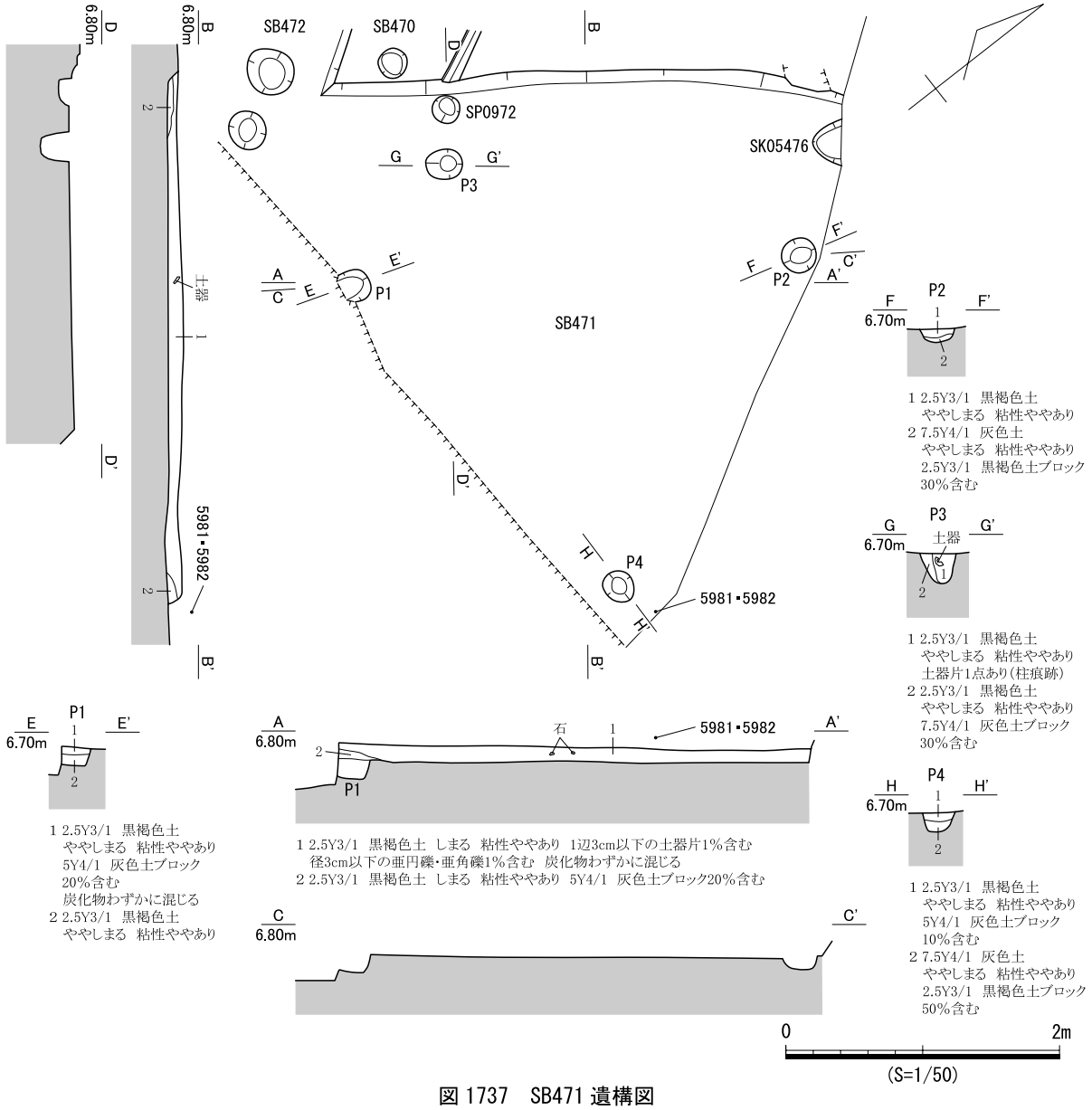


図 1737　SB471 遺構図

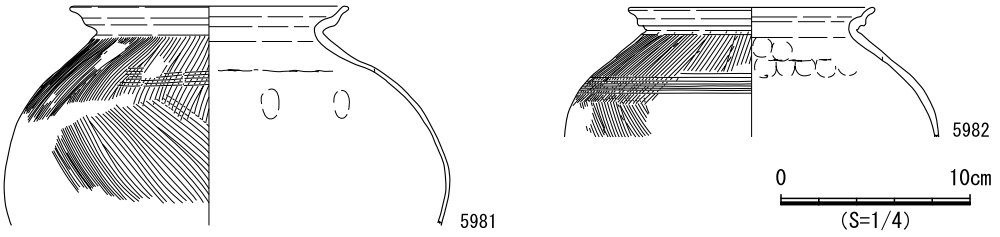


図 1738　SB471 遺物実測図

期にまとまる。

出土遺物　5981、5982はⅧ期甕Ｄ類。口縁部の屈曲が弱く、端部が外方に開く。胴部上方にヨコハケが認められる。

時期　出土遺物の時期とⅦ期のSB466を切ることから、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

SB472（遺構：図1739）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、南側と西側は撹乱により失われている。SB470掘形底面で検出し、SB471を切っており、その平面形はやや不明瞭であった。

形状　直線的にのびる北東辺のみしか検出していないが、全体形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　単層である。ブロック土の混入が多く、周辺の竪穴住居跡との重複が著しいことから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を３基確認し、そのうちP1とP3は土層断面で柱痕跡を確認した。しかし、本遺構の全体形が定かでないため、両遺構の性格は言及しがたい。

遺物出土状況　埋土中から土器25点、小穴から土器10点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが含まれるが、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物はⅥ期～Ⅶ期のものが含まれるが、重複関係にあるSB470とSB471がⅦ期～Ⅷ期であることから、本遺構もⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

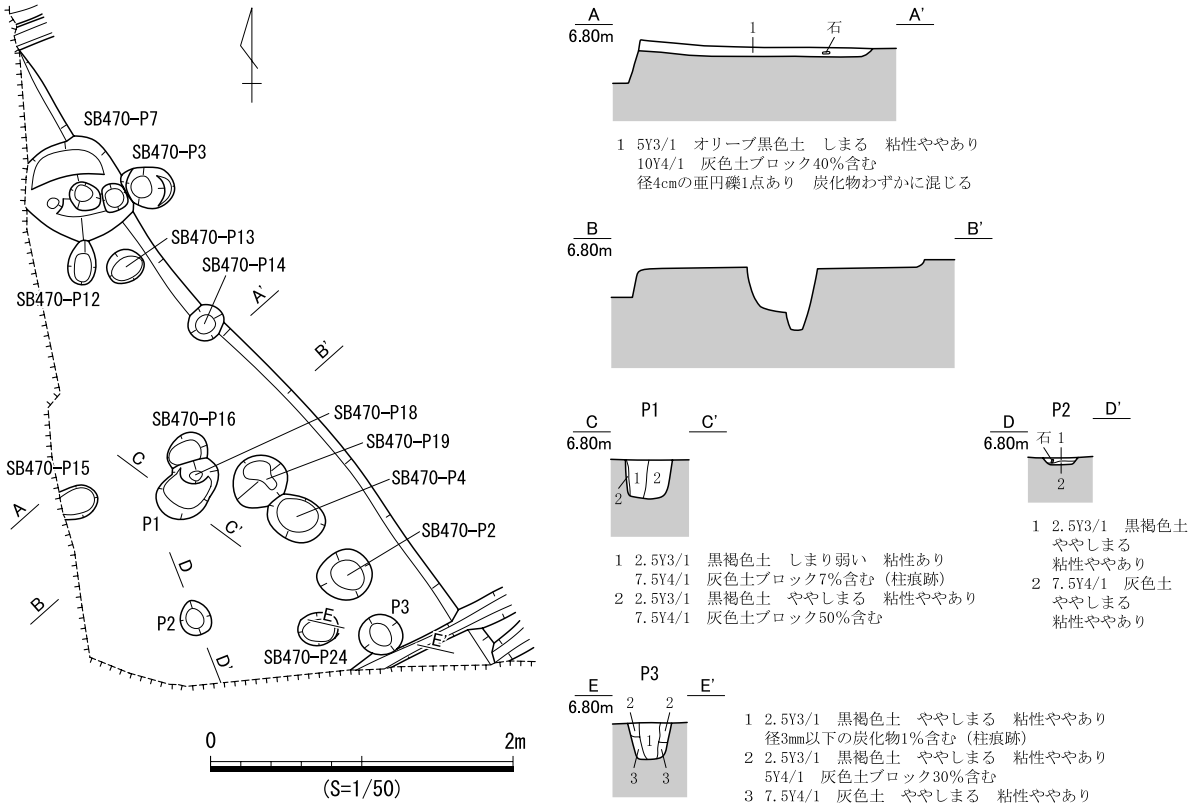


図1739　SB472遺構図